UVERworld表紙巻頭38P特集＋全員サービス企画!

音楽、人間マガジン バックステージ・パス

バックステージ・パス4月号 2017年2月27日発行・発売(毎月27日発行・発売)
第33巻第4号通巻467号 昭和61年8月2日第3種郵便物認可

BACKSTAGE B-PASS

2017 4

付録
両面ポスター
UVERworld
LiSA



表紙
巻頭特集
38P

UVERworld

「誰も見たことのない景色──史上最高23,000人動員の“男祭り”に密着!
撮り下ろし&ソロ・インタビューも」

バックカバー&巻末特集

LiSA

ニュー・シングル
「Catch the Moment」に
込めたLiSAのリアル

EXILE THE SECOND
SPYAIR
flumpool
大原櫻子
遊助
w-inds.
OLDCODEX
RIZE
the GazettE
Anly＋スキマスイッチ＝
04 Limited Sazabys
風男塾
蒼井翔太
and more



BACKSTAGE B-PASS CONTENTS

4
APRIL
2017
NO.374

表紙巻頭特集









付録 両面ポスター
UVERworld
LiSA

B-PASS4月号 表紙巻頭特集スペシャル UVERworld応募者全員サービス
UVERworld×B-PASS オリジナル・メモパッドを応募者すべての方へ
●本誌撮り下ろし写真、ロゴをデザインした特製メモ帳

表紙が観音開きのように2段階に開き、
中には4ブロックに分かれたメモ用紙を配置
サイズ:縦11cm×横8cm×厚さ1.5cm



※写真はイメージです。実際のデザインではありません。

ご応募お待ちしております!



応募方法

1口につき500円(消費税込み/送料・手数料として)で応募できます。
※払込手数料はお客様のご負担となりますので、ご了承ください。

▶郵便振替
この号に付属の郵便振替払込用紙1枚につき、1口応募できます。
必ず今月号P.144についている払込用紙(応募券になっています)をご使用ください。
❶本誌から払込用紙(応募券)をきれいに切り取ってください。
❷払込用紙(応募券)の※印がある箇所、住所・氏名(フリガナ)・電話番号(市外局番から書いてください)を略さずに正確に書いてください。記入はすべて黒か青のボールペンで書いてください。
❸払込取扱票(左側)と振替払込請求書兼受領書(右側)の間のミシン目は切り離さないでください。
❹代金の払込は、郵便局またはゆうちょ銀行直営店の窓口か郵便振替自動受付機で行なってください。別途払込手数料がかかります。電信振替での申し込みは無効になりますので、必ず現金で払い込んでください。
❺払込後は、「振替払込請求書兼受領証」を受け取り、商品がお手元に届くまで、大切に保管してください。この受領証が入金した証拠になります。

▶銀行での振込をご希望の方
❶必ずご自身のお名前(フルネーム)と連絡先を記入または入力し、下記口座へ一口応募につき500円をお振込ください。別途振込手数料がかかります。
銀行名:三井住友銀行　支店名:浅草橋支店
種別:普通預金　口座番号:7329660
口座名義:株式会社シンコーミュージック・エンタテイメント
❷銀行振込の明細(控え)と今月号P.144についている払込用紙を応募券とさせて頂きます。銀行振込して頂いた際の明細(控え)のコピーと、本誌付属の払込用紙に住所・お名前・電話番号を記入したものを同封して、〒101-8450 東京都千代田区神田錦町1-14-4F B-PASS編集部「B-PASS4月号 UVERworld全員サービス」係へお送りください。

▶応募締切
2017年3月31日(金)
※商品のお届けは2017年5月下旬よりお送りする予定です。地域によって、お届け時期が前後する場合がございますので、ご了承ください。

▶注意点
※現金、為替、切手などによる応募は無効となります。お受けできませんので、編集部に送らないようにお願いします。返却はできません。※記入もれ、間違い、締切日までに入金されていない場合は、申し込み不備として応募は無効になります。ご注意ください。※払込金額が多くても返金できません。※お届け先は日本国内に限ります。※応募が無効になった場合以外の応募後のキャンセルはできませんので、ご了承ください。※今回、ご記入頂くお客様の個人情報は、こちらの全員サービス送付目的以外では使用いたしません。

◇応募に関するお問い合わせ
B-PASS 全員サービス係 TEL 03-3292-2868(14時~18時/土日祝祭日のぞく)

BACKSTAGE B-PASS

BACKSTAGE B-PASS

CONTENTS

4

APRIL
2017
NO.374



056


062


070


076


086


094


166


172


Cover Artist
UVERworld
Back Cover Artist
LiSA
Cover & Back Cover Photo
平野タカシ(MEMENT)
Art Direction
鶴羽高章
Graphic Designers
桑名見智路、金子歩未(hive)
Editor in Chief
吉崎美也子
Deputy Editor
高橋波奈子
Editors
鈴木明日香
佐藤 恵

BACKSTAGE B-PASS













Nissy Entertainment 1st LIVE 1月22日（日） 神奈川・横浜アリーナ

［SET LIST］
01.SPACESHIP
02.Playing With Fire
03.Never Stop
04.SHADOWS
05.Aquarium
06.テレパシー
07.KISS&DIVE
08.まだ君は知らない MY PRETTIEST GIRL
09.Double Trouble
10.ワガママ
11.リクエスト曲
12.GIFT
13.DANCE DANCE DANCE
14.SUGAR
ENCORE
15.どうしようか?
16.ハプニング
17.My Luv

Nissy（西島隆弘）

昨年大阪城ホール2daysと東京・国立代々木競技場第一体育館2daysで行なった『Nissy Entertainment 1stLIVE』の追加公演を1月21日（土）22日（日）に横浜アリーナにて開催したNissy（西島隆弘）。エンターティナーとしての魅力に溢れた最終日のステージをレポート!

Text ⇒ 武市尚子

15時02分———。映画のような始まりから、そのSHOWの幕は開いた。まるでスクリーンの中から飛び出してきたかのような、空間を超えたステージ。オーディエンスは、"Nissy"というエンタテイナーが誘うエンターテイメントな世界へと、瞬時に引き込まれていった。移動式のステージとヴィジョンを使った大掛かりなステージで、1曲目に選んだ「SPACESHIP」をダイナミックに届けると、Nissyはアカペラで歌う様にオーディエンスに問いかけた。

「始めようか。It's show time.着いて来れるの? 着いて来れるの? 今日がラストだぜ!」唸りを入れた歌声でオーディエンスを煽っていく。「高く燃え上がれFire~!」Nissyが次の曲へと繋げるワードを長く伸ばした歌声で高い歌唱力を見せつけると、オーディエンスの掲げるペンライトが一斉に赤に変わりフロアを染めた。難易度の高いリズミカルさで華やかにステージを彩っていった「Playing With Fire」。ダンサーと共に、フロア中央まで伸びた長い花道を通り、サブステージへと移動すると、少しアンダーグラウンドな印象で攻めた前2曲とは世界観を変えた、キャッチーな印象の「Never Stop」でオーディエンスと掛け合いながらステージの上で歌い、そして舞った。

ステージが暗転すると、さらに景色は一変した。切ない旋律に目の前の景色がはっきりと塗り替えられていった「SHADOWS」。透明な光を使った、シンプルかつ美しい魅せ方と、Nissyの歌声が最高の形で響きわたるスローテンポの切なさを含んだ楽曲は、オーディエンスの心を一瞬にして引き寄せていった。間髪入れずに届けられた「Aquarium」では、アコースティックギターの転がる様な柔らかな音色の上に、そっと歌声を乗せる。花道に立つ1人の女性に向かって歌うも、その想いは彼女をすり抜けていく———。どこまでも切ない震える歌声。Nissyがそこで魅せたのは、"音楽的なライヴ"でありながらも、"ストーリーを魅せるための舞台"のような時間だった。"水"がとても印象的に用いられていたこの曲のショートPVを彷彿させ、花道の先端での、水が張られた演出の中でのパフォーマンスは、実に真に迫るものだった。

めまぐるしく場面が変わっていく、まさしくエンターテイメントなステージ。映像と現実の世界の境界線を見失ってしまうほど、それは素晴しく、見るものを惹き込んでいく不思議なパワーを宿したエンターテイメントであった。

少しのインターバルを置いたそのとき、真っ暗なフロアに大きな歓声が上がった。アリーナ最後列の位置にスポットが当たる。「テレパシー」を歌いながら、ゆっくりと高く迫り上っていくNissy。アンプラグドなその世界を大切に歌い上げていったのだった。

ライヴ中盤では、"LINE"や"チャット"をイメージした画面を使ってのオーディエンスとの交流が挟まれた。ライヴの流れを大きく変える転換時間を使ってのオーディエンスとの交流も、Nissy流のSHOWの在り方なのだ。

ヒョウ柄のブルゾンで届けた「KISS&DIVE」から始まった後半戦でも様々なエンターテイメントな形を提示してくれる。50'Sのノリを感じさせる「まだ君は知らない MY PRETTIEST GIRL」では、ミュージカルテイストにショーアップしていった。この曲の振り付けとなっている、ヒップをフリフリして踊るキュートなダンスを、会場全員のオーディエンスがNissyとダンサーたちと一緒に楽しむシーンは、アメリカナイズされたとても開放的な空間だった。

西島は、Nissyというエンタテイナーとして SHOWを引っ張り、オーディエンスにとっての憧れであり手の届かない場所にあるアーティスト像をしっかりと保ちながらも、自らの存在をオーディエンスのとことん近い位置に置いたステージを作り上げていく。

Nissyという存在は、エンターテイメントの世界と現実世界の境界線を操る魔法使いだ。彼が実際に今回のツアーでこうしたステージを作り上げるに至った根底には、"Nissy"という魔法使いが現実世界とエンターテイメントの世界を繋げる~という趣旨でこれまでに産み出されてきた数々の楽曲と映像作品が存在する。故に、オーディエンスは彼の世界に触れてきている上で、このステージを"エンターテイメント"として存分に楽しむことが出来るのである。それこそがNissyの狙い。Nissyの生み出したエンターテイメントは、表面上だけのモノではなく、持続しながら人間の心理をくすぐる深さが肝となっているのだ。

「Double Trouble」でダンススキルを見せつけたパフォーマンスを届け、続くドラマチックな「ワガママ」では、美しく伸びやかな歌声で惹き付け、【リクエスト楽曲コーナー】へと繋げていったNissy。ここでは、ファンの方からリクエストを募集したカバー曲を歌い、改めて聴き手に圧倒的な歌唱力と個性を印象づけたのだった。

チアリーダー姿で登場し、ダンスを伝授した後に「DANCE DANCE DANCE」を届け、ダンサーたちと圧巻のラインダンスを魅せ、アップライトが曲をリードする「SUGAR」へ。Nissyらしい SHOW要素の強いラストで本編を締めくくったのも彼なりのこだわりであったに違いない。Nissyという魔法使いと西島隆弘というアーティストが生み出す、世界にたった一つのエンターテイメントが、この先も多くの人を幸せに導くことを切に願う。 B

Nissy(西島隆弘) ⇒

ニッシー(ニシジマタカヒロ)。AAA西島隆弘のソロプロジェクト。今春に7枚目のシングルと1st LIVE DVDをリリース予定。3月26日に東京・国立代々木競技場第一体育館で行なわれる「TOKYO GIRLS MUSIC FES. 2017」では、ヘッドライナーを務める。


w o r l d
TAKUYA∞


彰
U V E R


w o r l d
克哉


U V E R
信人


誠果
w o r l d


真太郎
U V E R

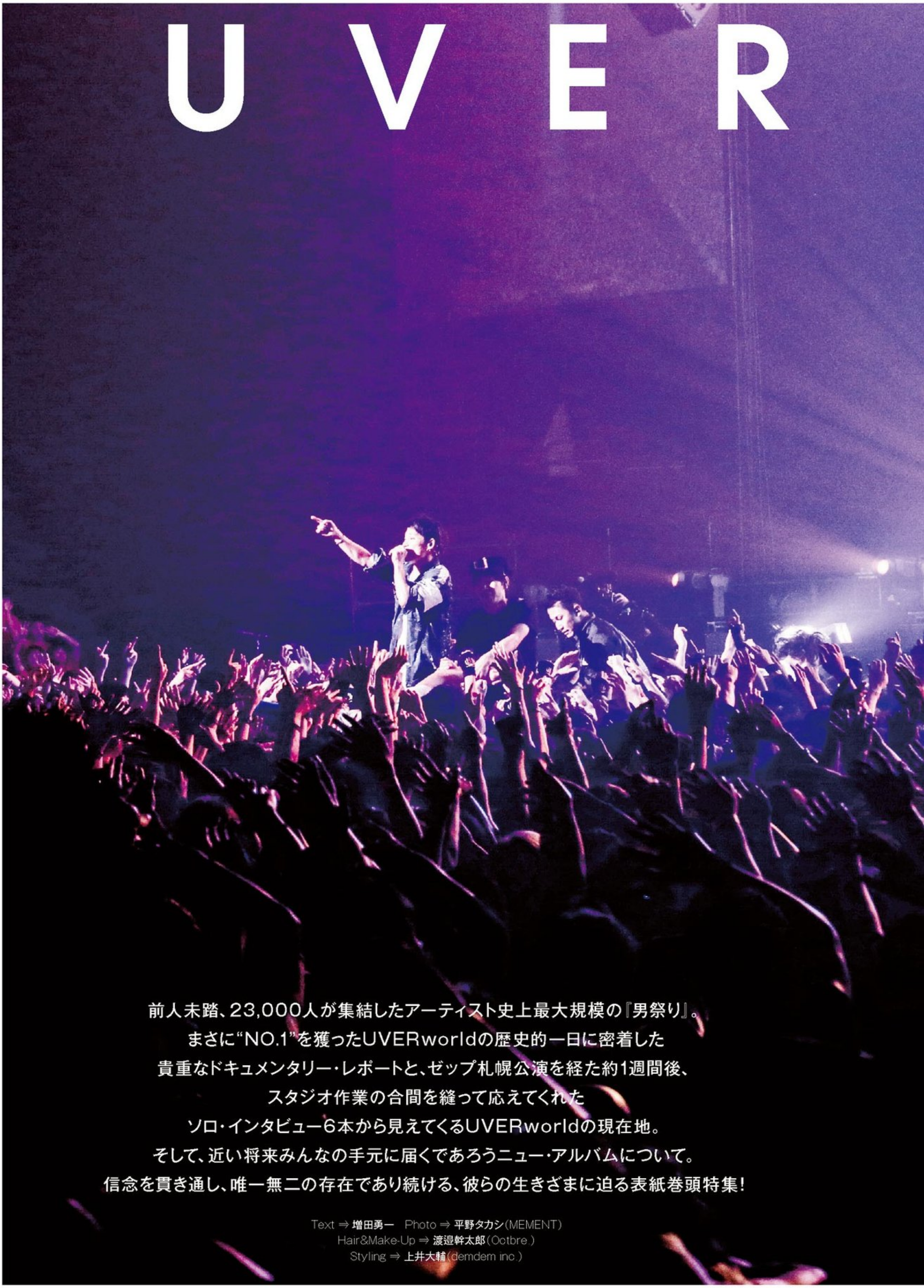


world

歴史的一夜、目撃。
そして、その先へ。

UVERworld KING'S PARADE 2017（男祭り）
2017.02.11 さいたまスーパーアリーナ

UVER



前人未踏、23,000人が集結したアーティスト史上最大規模の『男祭り』。
まさに“NO.1”を獲ったUVERworldの歴史的一日に密着した
貴重なドキュメンタリー・レポートと、ゼップ札幌公演を経た約1週間後、
スタジオ作業の合間を縫って応えてくれた
ソロ・インタビュー6本から見えてくるUVERworldの現在地。
そして、近い将来みんなの手元に届くであろうニュー・アルバムについて。
信念を貫き通し、唯一無二の存在であり続ける、彼らの生きざまに迫る表紙巻頭特集！

Text ⇒ 増田勇一　Photo ⇒ 平野タカシ(MEMENT)
Hair&Make-Up ⇒ 渡邉幹太郎(Octbre.)
Styling ⇒ 上井大輔(demdem inc.)



2月11日、午後1時20分。彰を乗せた車が、さいたまスーパーアリーナの駐車場に滑り込んできた。少し前に信人、克哉も到着していたし、真太郎と誠果の姿もバックステージの廊下で見かけた。これで全員集合ということになる。なにしろTAKUYA∞は昨夜、この会場に泊まり込んでいるのだから。

それから20分ほどを経た頃、信人と誠果、真太郎はステージ上にいた。サウンドチェックをしながら3人で「NO.1」を合わせている。それが「23ワード」に変わった頃、克哉がお立ち台の上でイヤモニを装着しながら、アリーナ内を見渡している。ステージ上からの風景は、改めて確認するまでもないもの。なにしろ彼らは昨夜もこの会場でライヴを行なっているのだ。ただ、違っているのは今夜が『男祭り』だということ。今夜はこの場が、男だけで埋め尽くされることになる。正確に言えば、そこに200人の女性たちが〝目撃者〟として含まれているわけだが。

克哉、彰のサウンドチェックも終わり、舞台監督の声がマイクを通して聞こえてくる。「皆さま、おはようございます。『男祭り』、よろしくお願いします」

ステージに炎が噴出する曲とタイミングについて注意が促されると、TAKUYA∞が不在のまま演奏が始まり、1曲を終えるごとに、各クルーがモニターの具合などを確認するために各メンバーの言葉に耳を傾けている。その場に充満する空気は穏やかなものだが、そこにいくぶん緊張感も混ざっている。

TAKUYA∞が姿を現わした。彼はアリーナを歩き、PA卓へ。あれこれと確認ごとを済ませた彼がステージ上に戻り、本番さながら



のリハーサルが始まったのは午後2時55分のことだった。最初に聴こえてきたのは「Don't Think. Feel」。その1曲を聴いただけで、すでに音響の状態がしっかりと整えられていることがわかる。

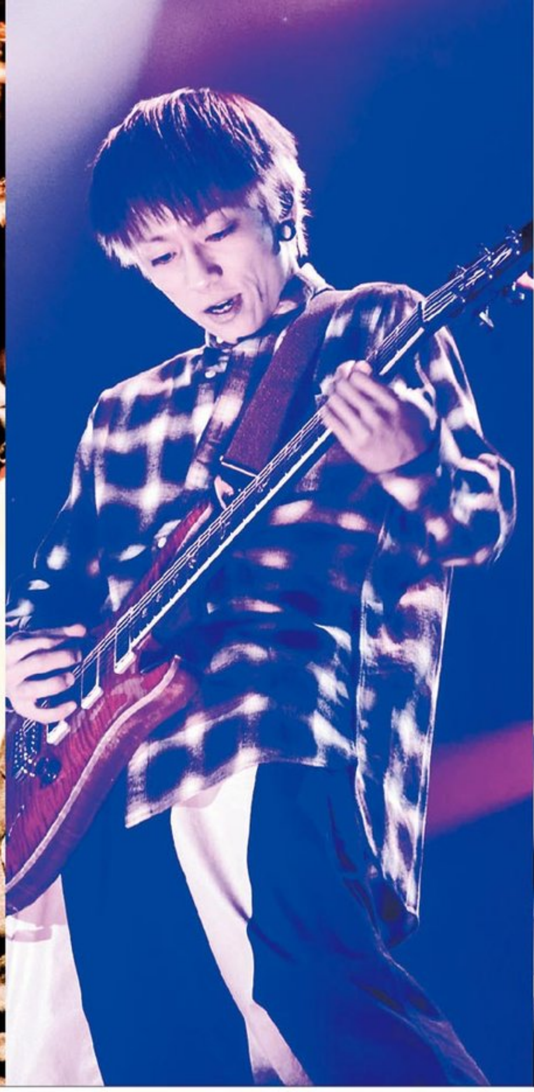
「あと何分？」

3曲ほどを続けざまに演奏したのち、TAKUYA∞のそんな声が聞こえてきた。公演当日の会場内でのリハーサルでは、もちろん全曲を通しで演奏するわけではない。そこで主にプレイされるのは、段取り上の確認が必要な曲、何かしらの不安材料が伴う曲（おそらく彼らにはほとんどそうしたものがないはずだが）くらいのもの。それらを演奏し終えると、最後にオープニングSEから1曲目への流れを確認して終わるというのが常だ。

しかしUVERworldの場合、この時間帯のうちにセットリストが変わることが多々ある。「6曲目にある〝CORE PRIDE〟を〝スパルタ〟の下へ」というTAKUYA∞の指令が飛んだ。さらにはある曲の前に「新曲のバラードをやろうと思ってるんで」という声も聞こえてきた。『男祭り』という暑苦しい場であえて新たなバラードを？ 彼が何を考えているのかが気にかかる。

リハーサルが終了し、メンバーたちがステージから姿を消したのは午後3時37分のことだった。開場まで、あと20分少々だ。

バックステージでの6人に、特に緊張した様子は見られない。克哉はMETALLICAのTシャツを着用。僕はたまたま2月に同バンドの取材で韓国公演を観ており、自然とその話になる。そんな時の彼のまなざしは、まさにロック少年のそのままのものだ。


信人は新しい衣装をまとい、その下に着用するロング丈のTシャツの袖を切るべきかどうかスタッフと相談中だ。その彼がマッサージ台で揉みほぐされている頃、ヘア&メイク中のTAKUYA∞は鏡を相手に喉のウォームアップをしている。これが開場時刻を少し過ぎた頃の、バックステージの日常的風景だ。

廊下で少しばかり、真太郎と話す。今回のように同じ会場での二夜公演となると、やはり第二夜のほうが良いことが多いのだという。「ただ、2日目は初日のダメージも残ってるんで、ステージに出ていくまでがしんどいんですよね」と顔を少しばかりしかめていた彼は、そこに「でも今日は、エンジンすぐかかるでしょう」と言葉を続け、ニヤリと笑った。当然だろう。なにしろ彼らがステージに出ていく頃には、場内が野郎どもの熱気で温まりきっているはずなのだ。

午後5時、すなわち開演30分前に、恒例の最終ミーティングが行なわれることがメンバー全員とすべてのスタッフに伝達される。その場で最終的なセットリストと、それに伴うさまざまな段取りが確認されるのだ。メンバーだけがわかっていても駄目なことも、スタッフだけがわかっていても充分ではないことも、ライヴ運営上にはたくさんある。こうした〝全員ミーティング〟という図を、僕は彼ら以外のライヴの舞台裏で目にしたことがない。相互確認の大切さというのもあるが、こうした場があることによってバンドとスタッフが同じ目線に立ち、一緒にひとつのものを作っていくという意識を共有できることになるのではないだろうか。UVERworldの魅力について語る時、共鳴や共感、共有といった言葉がキーワー











ドになってくることが多いが、それはバンドとファンの間だけのものではなく、スタッフ一人ひとりについても同じことなのだろう。

実際、セットリストが頻繁に変わるということは、それだけスタッフの仕事にも変化が生じるということ。毎晩同じ曲順でのライヴが繰り返されたほうが仕事的にもスムーズになるし、ライヴ自体の完成度も高めていきやすい。が、もちろんそこにはデメリットもある。克哉は「開演1分前に曲順が変わることもありますからね」と言って笑いながらも、次のように語っている。

「以前、曲順を決め込んでやっていたのが今では信じられないぐらいで。確かに同じセットリストでやることで流れが良くなっていく場合もあるけど、身体がその流れに慣れ過ぎてしまって、新鮮さが失われてしまうんです。そこで曲順がいきなり変わると、緊張感が得られるんで」

良いライヴを実践するためには余分な緊張は禁物だが、同時にある程度以上の緊張感は不可欠と言える。彼らはそのへんのちょうどいいさじ加減というのも心得ているのだろう。

17時から始まったミーティングは、滞りなく終了した。その最後、偶然にも誕生日を迎えた2人のスタッフを、バースデーケーキと合唱でお祝い。とても和やかな空気だ。

同じ頃、場内には早くも熱気が立ち込め始めていた。あちこちから「オイオイオイ！」という威勢のいい声が上がり、それに囃(はや)し立てられながらTシャツを脱ぎ捨てていく野郎どもがいる。これもまさに『男祭り』ならではの光景だ。しかもみんな、まだ開演前だというの











にえらく〝いい顔〟になっている。

アリーナ前方のブロック、最前列に陣取った2人組に声をかけてみた。このポジションをキープするのは大変だったんじゃないかと声を掛けてみると「ええ、まあ」との回答。同級生だという2人は、『男祭り』を観るのは今回が初めてなのだという。「UVERworld自体は何回も観てるんですけど、『男祭り』は今回が初めてで。やっぱ全員が男だし、今のうちからもうこんなに盛り上がってるから、正直、いざ始まったらどうなるんだろうっていう怖さがちょっとあります」と語るのは、17歳の遠山京太くん。UVERworldのどんなところに惹かれるのかと尋ねてみると「TAKUYA∞の言ってることがすごく心に響く。それがいちばんですね」という答えが返ってきた。彼はさらに「他のバンドはどうだかわからないけど、このバンドの場合はTAKUYA∞が体験してきたことが歌詞とか発言になってるじゃないですか。作り話じゃないというか。だからいっそう鋭く刺さってくるんですよね」と言葉を続けた。

一緒にいるのは、やはり17歳の片岡峻くん。彼もまた『男祭り』は初参加だという。「すごく楽しみです。UVERworldはとにかく単純にカッコいいっす。音楽も、他のバンドと違うことを言ってるところも」

開演定刻まで10分を切った頃、ステージ上にイベンターの担当者が登場する。いわゆる注意事項が堅苦しく伝えられるのかと思いきや、耳に飛び込んできたのは「日本一の『男祭り』、始まるぞ!」という声。客席から野太い歓喜の声が上がる。やつらはみんな〈理解のある大人〉が好きだし、同じ目の高さで語り









掛けてくる大人たちの言うことには耳を傾ける。そこで伝達されたのは①絶対に怪我すんな、②倒れてるやつがいたら声かけろ、③自分の面倒は自分で見ろ、というごく当たり前のことばかりだが、いちいち熱い歓声がわく。そしてもうひとつ告げられたのは6人のメンバー、192名のスタッフ、200名のカワイコちゃん（女性客）に加えて、2万3000人もの野郎どもがこの場に居合わせているという事実だった。「最後の最後までしっかり自分の目で見ろよ！ UVERworldに負けんなよ！」と発破をかけられた観衆は、これまででいちばんの大歓声でそれに答えた。

気が付けば、ステージ上のスクリーンのなかで開演までのカウントダウンが始まっている。なんだか自然と空気がそわそわしたものになってくる。数字が60秒を切ったあたりから観衆は声を重ねてカウントを始め、ついに午後5時30分、運命の瞬間が訪れた。BGMの音量が上がり、手拍子が自然発生する。すると場内は暗転。色とりどりの光がサーチライトのように交錯する。

まず聴こえてきたのは雷鳴のような真太郎のドラミング。絶妙のタイミングで5人がステージ上にポップアップするさまに唖然としていると、火花がスパークする。通算9回目となる過去最大規模の『男祭り』の幕開けを飾るのは「エミュー」だ。まだ世に公表されてから間もない曲であるにもかかわらず、誰ひとり乗り遅れていない。いや、もちろん僕には会場内すべてに目を配ることはできないし、こんなふうに断言するのは無責任かもしれないが、この曲がもはや新曲とは思えないほどの反応を得ていることは間違いない。

「全員まとめてかかってこい！」

TAKUYA∞の挑発に、野郎どもは喜んで乗ってくる。続いて炸裂したのは「Don't Think. Feel」だ。

「今日はとことん男同士、やっべえぶつかり合いしようぜ」

「スタンド、負けてんじゃねえぞ。でっかい声出せ！ 日本一、獲りにいこうぜ！」

歌詞だけでも充分過ぎるほど情報量が多いうえに、間奏や曲間にはTAKUYA∞の言葉が隙間を埋め尽くすように差し込まれてくる。3曲目の「Collide」でも場内の熱は高まっていく一方だ。それはバンドとオーディエンスの双方が熱いからでもあるのと同時に、楽曲そのものが的確な演奏と万全の音響によって身体に響いてくるからでもある。ぶっちゃけ、大型アリーナでのライヴに音の良さを期待することはあまりないが、このバンドならではのハイブリッドなバンド・サウンドが、きわめてクリアな音で聴こえてくる。

「俺たちの歴史的一夜が始まった。誰ひとり、置いていかねーぞ！」

まさにスタートの号令のような言葉に導かれて始まったのは「WE ARE GO」。ビートと誠果のサックスの絡みが気持ちいい。曲展開に同調しながら、ステージ上には炎が噴出。遠くから眺めているだけでも熱さが伝わってくる光景だ。さらに次なる「7th Trigger」を歌い終えると、TAKUYA∞は「半端じゃねえな、おい！」とオーディエンスを称賛し、「死ぬな！ 怪我すんな！ ありったけの情熱見せろよ！」と煽りまくる。その先に続いたのは真太郎のコンパクトなドラム・ソロと、









たっぷりのMC。「2017年のおまえらの一番の思い出にしてやるから」といった彼の言葉には、このバンドのファンに対する目線に、大人の包容力めいたものが伴いつつあることを感じさせられる。

　ライヴはその後も体感スピードを緩めることなく、しかも熱気を少しも冷ますことなく、プラス方向だけに進んでいく。ぶっちゃけ、この紙面上でその一部始終を追い続けることは不可能だ。なにしろ僕自身も、当初はステージを遠く正面から見渡せるスタンド席の好位置でメモを取りながら観覧していたはずなのに、気が付けば取材者特権でフロア前方の通路まで進み出て、両手を突き上げて観ていたのだ。だから実際にその場で何が起こったかについては、ここに掲載されている数々の写真やセットリスト、そして『男祭り』の終了から数日を経て行なわれた6人のインタビューから想像してみて欲しい。もちろん贔屓目抜きに見てもサイコーとしか言いようのないライヴだったことは間違いない。

　ちょっとだけ補足しておくと、リハーサルの時にTAKUYA∞は"新曲のバラード"をやるつもりがあると言っていたが、それは真っ赤な嘘で、「NO.1」の演奏終了後、彼は『男祭り』に相応しい珠玉のバラードを贈ると言いながら「君の好きなうた」を歌い始めたのだった。が、ほんの一節のみでそれは終わり、彼は「歌うわけねーだろ！　気持ち悪い顔して一緒に歌ってんじゃねーよ！」と野郎どもを一喝。「珠玉のバラードはこっちだ！」との言葉とともに見舞われたのは、バラードでもなんでもない「バーベル」だった。これをライヴ後半に効果的にぶちかますために、TAKUYA∞は信頼のおけるスタッフたちをも欺いていたというわけだ。

　また、ラスト・チューンの「7日目の決意」が着地点を迎えても熱の冷めない観衆に、彼らは最後の最後、予定外の「MONDO PIECE」でこの夜を締め括った。この曲のタイトルは関係者用のセットリストにも記されていないし、開演前の最終ミーティングの時にも挙がっていなかった。「7日目の決意」で広がった"肩組み大合唱"の輪は、当然のごとくこの曲でさらなる広がりを見せることになった。それから各々の挨拶を経て6人が去り、明くなった場内に終演のアナウンスが流れたのは、午後8時10分のことだった。

　バックステージへと戻る道すがら、僕はまた何人かの観客から話を聞いた。「どうだった？」と聞くと「最高でした！」と声を重ねていたのは20歳の2人組。丹波拓くんは、「これまでにも『男祭り』を2回ほど観てきたけど、今日は断然すごかった。セットリストの内容も、盛り上がりも。TAKUYA∞さんの言ってることにはすごく共感できるし」と言う。そして岡田昂士くんは、その共感についてもう少し具体的に語ってくれた。「人生でいろいろとうまくいかないことがあるんですけど、TAKUYA∞さんの歌とか言葉を心の糧にして、強くなれたというか。最後に彼らのライヴを観たのが、大学受験でいろいろあった頃で。僕は現役の頃に落ちてるんですけど、浪人中には家庭の事情とかもいろいろあって。だけど実はちょうど昨日、合格発表があって、めでたく合格することができて。こうしてまたUVERworldを観てみて、なんか自分もあの頃より成長できてるんじゃないかと実感できたんです。もちろんそういったことを抜きにしても、めちゃくちゃ楽しかったですけど」








Set List

01. エミュー
02. Don't Think.Feel
03. Collide
04. WE ARE GO
05. 7th Trigger
06. Forever Young feat. UVERworld
07. KINJITO
08. Fight For Liberty
09. 一滴の影響
10. ALL ALONE
11. 23ワード
12. NO.1
13. バーベル
14. over the stoic
15. スパルタ
16. CORE PRIDE
17. PRAYING RUN
18. ナノ・セカンド
19. 零HERE ~ SE ~
20. IMPACT
21. LONE WOLF
22. 7日目の決意
23. MONDO PIECE











続いて話を聞いたのも、偶然にも同じく20歳の2人組だった。浅見宏希くんは、これまで『男祭り』をDVDでしか観てこなかったそうだが、先ほどまで夢中になって観ていたライヴを振り返りながら「最高に気持ち良かったっす。予想してた以上に熱くてヤバかったですね。このバンドに惹かれるのはやっぱり、ライヴの時のメンバーと観客の一体感とか、MCとか。もちろん曲自体もいいけど、とにかくライヴですよね。歌詞にも共感できるし、それに引っ張られる部分もすごくある」と興奮冷めやらぬ表情で語っていた。そして、「言葉にできないぐらいすごかった」と言うのは石原聡一郎くん。言葉にできないとは言いながらも、彼は次のように発言を続けていた。

「UVERworldに対して本気な人たちがこんなにもたくさん集まって。自分がその2万3000人のうちの1人になれたのは、ホントに奇跡的なことなんじゃないかと思えました。ホントにいい時間だった。UVERworldは他のバンドにはないものを持ってると思うし、彼らの抱えてる思いというのが、ひしひしと伝わってくる。そこに自分も共感・共鳴できてるから嬉しいんです」

帰路につくファンの一人ひとりが、その表情に満足感を浮かべていた。僕のような立場の人間が何かを書くことよりも、彼らがこうして本気の共感を口にすることのほうが、ずっと意義深いんじゃないだろうか。この『男祭り』の素晴らしさを広めようという使命感に駆られた若い世代も、きっとこの場にはいたに違いない。そんななかから次の『男祭り』のレポートの書き手が登場したら面白いのに、など思わずにいられない筆者であった。B





TAKUYA∞

Vocal

パッションで盛り上げていくというところはどんなライヴであれ
基本的に変わらないけど、『男祭り』の場合は、
あいつらとの一対一の喧嘩ぐらいの感じ。勝手にそうなるんです



■まだ記憶に新しい『男祭り』について振り返ってみたいと思います。あの日の成果には、満足していますか？

「そうですね。あの日だけをとってみれば満足というか。あまりにも圧巻な景色が広がっていて、自分でもそれに意識を持っていかれて〝すげえ！〟と思わされる瞬間があるぐらいだったんで。だけど同時に、それをすごいと感じるということは、この〝次〟に到達するまでは結構しんどそうだぞ、とも思いました。初めてやった『男祭り』は300人で、その次が2000人。正確に言うと、2500人のキャパの会場でチケットが500枚余ったんですけど（笑）。で、そこに来てくれた1人が4人連れて来てくれたから2年後には武道館がやれた。その時のお客さんがさらに1人ずつ連れてきてくれたから、今回のスーパーアリーナが満員になった。その人たちがまたもう1人ずつ連れてきてくれれば東京ドームでできるはずなんですけど……どうなんですかね。今回も前日から会場に泊まって、そんなことばかり考えてたんです（笑）。2万3000人というのはすごい数だけど、確か埼玉県の人口って700万人以上なんですよ。東京都は1400万人近い。住民票を移してへん人もいっぱいおるやろうから、実際はもっといるはずで（笑）。〝そのうちの何割が来てるんだ？〟と考えたら、これで満足してたらアカンなと思えてくる。自分らの存在すら知らん人がたくさんいると思うと、まだまだ先は長いぞ、と。だからこそ逆に、まだまだやりようがあるとも思えるわけですけど」

■人口を基準に考える人というのもめずらしいと思いますけどね（笑）。しかしとにかく現時点での満足には至った、と。TAKUYA∞さん自身は『男祭り』の特別さをどんなところにいちばん感じていますか？

「男だけ、ということ。単純にそこですよね。空気からして違ってくるし、通常のライヴと同じ部分のほうが少ない気がするくらいで。そこにいるオーディエンスの気持ちも違うはずだし、俺らの迎え方も違う。なんかもう〝闘いに行く〟という感じですね。ちょっといつもより戦闘モードになる」

■通常のライヴや『女祭り』では、戦闘モードではないということですか？

「違いますね。いい夜にしたいなあとはもちろん思いますけど。パッションで盛り上げていくというところはどんなライヴであれ基本的に変わらないけど、『男祭り』の場合は、あいつらとの一対一の喧嘩ぐらいの感じで。そんなふうにモードを切り替えるというんじゃなく、勝手にそうなるんです」

■男限定、女限定のライヴをやる時、大概は〝客席にいるのが同性だけならもっと遠慮なく行ききれるよね？〟というのが理由としてあるはず。だけどこのバンドにとっての『男祭り』は、もはやそういったものとは次元の違うものになっていると思うんです。

「うん。〝異性の目を気にせずに行けるでしょ？〟というのとは全然違うところに行ってますね。当初はもう単純に、お客さんの9割以上が女の子だったことに違和感をおぼえて、そこで〝男どもだけのライヴをやったらどんな感じになるのか？〟というのを見てみたいというところから始まっていて。それをやった時に果たしてどれだけの男が集まるのかというのを、自分たちでも知りたかったし」

■モタモタしてる野郎どものケツを叩きたかった、ということでもあったわけですよね？

「そうですね。面白いのは街でファンの男の子に声をかけられる時って、この1年はたいがい〝『男祭り』に行きます！〟って言われてきたことで。そうやってアピールしたいものになってるんでしょうね」

■『男祭り』があることによって、初めてこのバンドを観る機会を得た野郎どもも少なくないはず。実際、ライヴ当日にはファンの声もいくつか拾ってみたんですけど、そのなかにもそういう人たちがいました。で、彼らにこのバンドに思い入れを抱く理由を尋ねてみると、申し合わせたかのように〝メッセージや言葉への共感〟という答えが返って来て。おそらく2万3000人の大半はそういう人たちなんだろうと思うんです。

「それは自信にも繋がりますね。元々、〝他人の目を気にせず、誰に何を言われようが自分のメッセージを放っていく〟ということを腹括ってやってきて。賛否の否のほうも結構あるだろうなと思いながら発信してきたわけだけど、それだけ賛同してくれてるやつらがいるんだと思うと、より心強いというか、自分のこのスタイルを貫いていこうと思える」

■変な話、彼らが共感しなくなった時のことが心配になったりはしませんか？

「いや、まったく」

■一方的に投げているものが共感を集めるのはすごく素敵なことだと思うんですけど、それがいつしか〝共感を得やすそうなものを投げる〟ようになることがあると思うんですよ。

「ああ、確かに。でも俺の場合、今の自分が発信するものについて〝ここがいいよね〟と言われてる部分を伸ばしていこうとか、思ってないんですよ。MCをもっと良くしていこうとも考えてない。今のこの状態が、自分としてのいちばんいい頃合いだと思ってるんです。そこで発信するものに対しては賛否両論あっていい。まわりの言うことに左右されず、ブレずに放っていく――そういう自分の信念を今一度確かめたようなところもあります」

■共感を得られるというのは心強くもあるし、嬉しいことでもある。だけど同時に〝もうちょっと純粋に音楽として見てくれない？〟と思うこともあるんじゃないですか？

「無きにしも非ずですね、それは傾向として。今はまったくそんなふうには思わないんですけどね。そういうふうに思うということは、もっと音楽そのものを鍛える必要がある、ということだから。音楽としてより純粋な部分を強めていきたい、というのは実際あるんですよ。それは、メッセージをより確実に伝えたいからでもあるし」

■なるほど。音楽とメッセージが一体になっていてこそこのバンド、ということでもあるわけですね。ところで先程、公演前夜からさいたまスーパーアリーナに泊まり込んでいたという話が出ましたよね。そういった習慣は、これから先も続くんでしょうか？

「おそらく……続いてしまいそうですね（笑）。たとえば普通に生活していて、読みたい本を読む時間がなくて、そのためだけに電車に乗る人とかいる。そういう話を聞いたことがあって、その気持ちがめちゃくちゃ理解できたんですね。日常生活のなかにはいろんなものがあるし、いろんな楽しみがあり過ぎて、スマホをいじったり人と話したりしている間に時間が過

ぎていってしまう。そこで読書のための時間を確保するためだけ電車に乗る、というのはすごくわかる。俺も実は、新幹線での3時間とかがめっちゃ好きなんです。〈さて、あそこで何をしようか?〉ということになる。家にいるとテレビやインターネットを見ているうちに時間が過ぎてしまうけど、その時間は違う使い方ができるから。ライヴの前に会場に泊まり込むのにも、同じようなところがあるんです。家にいて公演当日を待っている間にも、いろんなことが飛び込んでくる。だけどライヴ会場にこもることによって、そういったすべてを遮断することができて。そこにいる間はずっと次の日のことだけ考えられるから……。だから気合いを入れ直すまでもなく、自然にライヴのモードに入っていけるんですよね。自分のなかで完全にイメージもできてるから、緊張もなくなるし」

■イメージ・トレーニングどころの次元ではなく、あらかじめそれによって自分が会場と一体化してしまうというか。

「うん。いわばライヴが先に始まってくれてるみたいな感じで」

■つまり無音のオープニングSEが、前の夜から続いているわけですね。しかもTAKUYA∞さんの場合、その間に例によって走りに行くわけですよね、先日もステージ上で言っていましたけど。

「もうみんなそのことを知ってるから、『男祭り』の前夜は外で43人待ってたんです(笑)。あのMCは真実です。ヤバいっすよ」

■まるで深夜マラソン部(笑)。

「ははは! めちゃめちゃカオスでしたよ。外に出た途端、俺はまずみんなに〝話しかけんなよ〟と言ったんです。〝俺より速く10キロ走ったやつか、俺について来れたやつとしか喋らへんから。近隣の人には絶対迷惑かけるなよ〟と。それで徐々に脱落者も出てくるわけですけど、ずっと40人ぐらいの男の足音と息遣いだけが聞こえてるわけです(笑)」



■あの日のMCによると、TAKUYA∞さんよりも速いツワモノがいたんですよね?

「36分で走り切ったやつがいましたね。バケモンですよ(笑)」

■先程、『男祭り』では戦闘モードになるという発言がありましたけど、彼も彼できっと〝打倒! TAKUYA∞〟という気持ちでそこに臨んでいたんでしょうね。

「そうそう。そういうやつばっかり集まってくるのが『男祭り』なんですよ。で、そのいちばん速かったやつとは走り終えてから話をしたんだけど、彼は野球で大学まで行った21歳で、来年就職する、と。野球の道は諦めて、新しい夢を見つけて、毎日それが上手くいきますようにって考えながら走ってる、と。しかもその日が走り始めて536日目(笑)。彼は〝PRAYING RUN〟をライヴで聴くたびに泣き崩れてしまうっていうんです。なんか俺、その気持ちがわかり過ぎて」

■あの曲を聴いた時、彼はきっと〝これは俺の歌だ!〟と感じたんでしょうね。そしておそらく、一人ひとりにそういう曲がある。だからこそ、UVERworldのライヴはこんなにも熱くなるんだと思います。

「うん。だからこそ、これからもメッセージを発信し続けます。もちろん今作ってる次のアルバムでも。それが自分たちの強みだし、このバンドのあるべき姿だから」 B



彰

Guitar

ニュー・アルバムについては、その作品の先にあるもののための着火台というか、"次はこうしよう"という感覚になれるものにしたいですね、自分たち的には

■まずは記憶に新しいところから『男祭り』について。彰さんだけは最後の挨拶も、通常モードのままでしたね。

「観に来てくれた友達とかからは〝らしくて良かったよ〟って言われましたけど」

■ライヴ中のテンションも、通常通りだったんですか？

「いや、実際のライヴ中はちょっと違ってましたね。普段のライヴよりも、ほんの少しですけど攻撃的になるというか、音の出し方とかも。ガツガツいく感じですかね（笑）。やっぱりお客さんから来るパワーとかもすごいし、それに応えていこうとするとそうなるというか。やっぱり『男祭り』は違いますね。こんなこと言ったら女の人たちには叱られるかもしれないけど（笑）。男はガツガツ来る感じというのがあるし、あとは……正直、ちょっとクサいというのもある（笑）。特に後半になると。あんなにデカい会場でもやっぱり匂いって漂ってくるものなんですね（笑）」

■なにしろ、あれだけの人数の汗の匂いが充満することになるわけですからね。

「もちろん『女祭り』の時もみんな汗だくになってるわけですけどね。同性ばかりに囲まれていれば照れる必要もないし、ある意味、女の人たちが男になる瞬間が見られるようなところもあるというか。だから『女祭り』というのも、べつにキャピキャピしてるわけじゃないんです」

■なるほど。『男祭り』では、フロアにひしめいている野郎どもの姿に、かつてライヴハウスに通っていた頃の自分を思い出したりすることもあるんじゃないですか？

「そうですね。やっぱ一緒に熱唱しながら人の上に乗ったり、そんな状況やのに泣きそうになってるお客さんもいたり。そんな男子の様子を見てたら〝ああ、俺も昔、ハイスタとかのライヴでこんな感じやったな〟という気持ちになりますよね。肩組んだりまではしてなかったけど（笑）。だからみんなすごいな、と思うんです。すごい風景やなって」

■あの〝肩組み大合唱〟は他では見られない光景だと思いますよ。実際、ここまで来るというか、実現させなければならないことのひとつになってきますよね。

「どうなんですかね。まさか誠果さんがMCでそれを言うとは思わなかったですけど。〝お前が言うんかい！〟って突っ込みそうになった（笑）。〝言っちゃった！〟と思いましたね、正直。でも、記録という意味ではそれをやれたら最高なんですけど、僕はその前にもう一回ぐらい純粋にドーム・クラスのライヴをやりたいですね。『男祭り』とかそういう括りではなしに。東京ドームも京セラドームも……失敗というわけじゃ全然なかったけど」

■というか、どちらも成功だったと思います。

「バンド的には大成功だったと思うんです。でもやっぱ、個人的には二本とも〝ああ、終わってしまった！〟って感じやったんです、ライヴが終わった瞬間。ちょっと悔いが残るライヴを二回ともしてしまってる。そういった意味では、あのクラスの会場でもう一回できるのであれば、『男祭り』とかそういったイベントごとではなく、通常ライヴというのをまずやりたいというのがあって」

■その後悔というのは、どんな種類の……？

「うーん。あくまで個人としてのものなんですけど、平常心であれなかったというか。とにかく普通でいようと思ってたんですね。僕、基本的にライヴの時って緊張とか全然しないんです、特に最近は。だけどドームの時は、ちょっと浮き足立ってたというか、身体に変な力が入ってしまってたというか。そういうことがあって、全部を出し切れずに終わってしまった感じがあって」

■普段はもう全然、緊張しないんですか？

「全然ですね。ワクワクする気持ちとかは当然あるんですけど。元々はそれなりに緊張してたと思うけど、日に日にそれがなくなってきましたね。緊張してもしょうがない、と思うようになってからは。なるべくフラットな気持ちで本番を迎えようって心掛けるようになってからは、大丈夫になってきて」

■過度の緊張を防ぐための方法とかって、何かあるんでしょうか？

「普段しっかりやる、とかじゃないですかね。だってステージに立った途端にいきなりカッコ良くなれるわけでもないし。だから、普段の生活をしっかりするしかない」

■確かに10回挑んで2回しか成功しない程度のことが、たった1回の本番で成功する可能性はとても低い。それを普段から10回成功させられる自分にならなければいけない、ということですよね、それは。

「そうです、そうです。普通にしてれば大丈夫、みたいな状態まで持っていけてれば」

■だけども難なく普通にできるはずのことが、緊張ゆえにできなかったりすることがある。

「そうなんですよ。東京ドームの時は〝初ドーム〟だったし、そこに行く以前にアリーナ・クラスのライヴもまだ数えるほどしかやったことがない状況だったから、ある意味しょうがなかったと思うんです。ただ、京セラに関しては、ツアーを何本も重ねて自信も身につけてきたなかでのライヴだったのに、〝あれっ？〟ということになって。だからこそもう一回、チャレンジしたいんです。自分自身あの頃よりも確実に成長してると思うし」

■そのドーム公演を実現させるうえでも、次のアルバムというのはすごく大事な鍵になってくるような気がするんです。

「次なのか、次の次なのか……。でも、どちらにしてもニュー・アルバムについては、その作品の先にあるもののための着火台というか、〝次はこうしよう〟という感覚になれるものにしたいですね、自分たち的には」

■つまり次回のアルバムは、次々回のアルバムのためのものであるということですか？

「まあ、そうですね。これまでも常にそうだったと思うし。アルバム1枚作り終えたら、なんかそこで一旦、その時期に自分たちが作りたい音楽の〝旬〟が終わるじゃないですか。そこで出し切るわけで。だからこそ次にまた新しいものを探せる切っ掛けになる。だから……ホントに正直に言うと、アルバムはさっさと完成させたいです（笑）。〝終わらせたい！〟という気持ちがある。去年の僕は、なんか迷路に入り込んでしまってたけど。まあ、毎度のことではあるんですけどね。毎回、迷路の時期というのはあるんです。だけど去年はだいぶ深いところまで迷い込んでしまって。そうやって僕、定期的に病んじゃうんですよ、やっぱ（笑）。音楽を作ること、ギターを弾くことについて考え



過ぎてしまって」

■先月号のインタビューでも「考え過ぎてしまっていた」、「斬新なものを作らねばという強迫観念のようなものがあった」みたいな発言がありました。でも結果、そういった流れを経て、遠回りをして戻ってきた結果が「一滴の影響」だった、と。その遠回りのプロセスというのがきっと大切なんでしょうね。

「うん。それは確かだし自分でもわかってるんですけど、ホントに辛くなりますね（笑）。まあ正直、まだ完全には迷路から抜け切れてはいないと思うんですね。ある意味、バンドで一から作るという基本形に戻る、という選択肢を見つけただけのことで。だからといってこの先、ずっとそういうやり方だけで曲を作っていくわけにもいかないから」

■確かな方法論について確信を持てたなら、それだけで押し切っていくことも間違いではないと思うんです。だけど、まだまだ他の道も試してみたいところがあるわけですか？

「そうですね。たとえば、〝一滴の影響〟ができあがって、その1ヵ月後ぐらいに僕は『男祭り』のSEを作ってたわけなんですよ。もちろん全部打ち込みで。で、〝やっぱりこれはこれでアリだよなあ〟と思ったわけです。自ら機械に向かって音を作り上げていくのも、自分にとっては有効なやり方というか、やっぱり好きだし」

■しかも今後、まだ試したことのない方法論に挑むこともあるかもしれない。

「もちろん。そこで自分のやり方というのを限定したくないというのがあるんで」

■果てしない道程が続いていく感じですね。しかし、アルバムの完成予想図というのはもう見えているはずですよね？

「そうですね。実を言えば、さらにその次のことにもすでに手を付け始めてたりするところがあるんで、早く完成させせときたいというのが本音だったりもしますし（笑）。アルバム完成、という区切りが必要なんです」

■それがないと次の学年に進めない、みたいなことなのかもしれませんね。同時にこれからのUVERworldの音楽には〝進化〟だけではなく〝深化〟もより求められることになるんじゃないかという気もします。これだけの歴史を持ったバンドならではの。

「実はそういう話もよくするんです。ありがちなのは、音数を減らしてシンプルにしていくことだったりしますよね。だけど僕らの場合はライヴでのあの爆発する感じというのがとにかく好きなんで、〝引き算による深化〟は難しいんじゃないか、と。シンプルでカッコいい曲を作ることはできても、それをいざ、そのままの形でクルーの前でやった時、あの地震みたいな揺れを感じることができるのか……。僕は、違うんじゃないかと思っていて。あのちょっと異様な盛り上がりの空間をお客さんは求めて来てるはずだし、あれが当たり前になってきてる。だからこそ変わらなきゃいけない部分もあるはずなんだけど……。そこは悩みどころではありますね。でも、ちょっと考えてみると〝LONE WOLF〟にしろ〝ALL ALONE〟にしろ、深化の兆しが感じられる曲もあるし、両方を形にできたらいいなと思いますね」

■そしてその先には、次のドーム公演が見えてくるのかもしれません。

「早く悔いを消して、克服したいですね。だからこそ……そのためにも普段をしっかり生きるだけです！」

克哉

Guitar

どこかで通じ合えてる気が勝手にしてるんです。
それがいい意味で勘違いでもいいと思えるぐらい、
『男祭り』というのは素敵な場所やと思う



■いろいろな規模や形でのライヴが続いていますよね。日々、楽しんでいますか？

「本当にそれが生活の一部になってる気がしますね。前々からそう言ってきたけど、それがより濃いものになってきてるというか。制作とライヴの繰り返しの日々にどっぷり浸かってるわけですけど、それが心地好いんです。以前はモードの切り替えみたいなことがもっと下手で、スイッチを切り替えるみたいにして制作とライヴを分けようとしてたけど、今はむしろ〝なんかこのやり方こそ俺らっぽいな〟と思えていて。日々が充実してるからこそ、そう思えるんだろうけど。だから〝明日はライヴやで〟ということになっても、そこで慌てて切り替えようともしないというか」

■よいしょ、と切り替える感じではなく、勝手に切り替わっていくようになっている。

「まだ完璧にはできてないけど、それが普通になってきてますね。昔はそれが苦痛というか、うまくできない自分に対してイライラしてたりもしたんです。だけど今は逆にこっちのほうがフラストレーションが溜まらないというか。ずっと制作に専念してると、身体を動かしたくなるもんじゃないですか。家でじっとしてると〝走りにでも行くか〟という気分になる。そういう感覚でスタジオから抜け出してライヴに向かえるようなところがある。もちろんそこまで軽いもんじゃないけど（笑）」

■運動部と文化部での活動を、うまく両立できているというか（笑）。

「そうそう。体育の時間と勉強の時間、どっちもしっかりできてる、みたいな（笑）」

■実際には音楽活動が〝生活の一部〟じゃなくて〝生活の大部分〟になっていますよね。

「ええ、まあ。家は寝に帰るだけの場所になってますからね（笑）。だけど、何かができた時の喜びとかライヴを成功させた時の感覚というのは、他には代えがたいものだし、忘れたくないものだし、そのためにやってるというか。みんなに喜んでもらいたいし、自分自身もしっかり感動したい。そうやって動いてると自分のアンテナみたいなものが研ぎ澄まされてくる実感があって……だからこそ休むのが怖くもなってくる。正月にはちょっと休ませてもらったんだけど、最後のほうは〝なんかヤバいな。俺、大丈夫？〟みたいな感じになってしまって（笑）。もちろんその間も身体は動かしてたし、音楽も聴いてたけど、あまりに普段が濃過ぎるもんやから（笑）。いつも12時間ぐらい浸かってる音楽に1〜2時間しか向き合わないような日が続くと、なんか不安になってきてしまって。感覚が鈍ってしまうんじゃないかな、とか。自分の性格上、それは生きていて絶対に伴うものなんです。常に〝まだ足りてない〟という感覚がある。だけど自分ではそれが向上心だと思ってるし、その感覚を忘れたくないと思ってるんで」

■自分に物足りなさを感じるからこそ〝もっと！〟という気持ちになれるわけですよね。さて、ここで先日の『男祭り』の話を。ついに来るべきところまで来ちゃった感じですよね、規模的な意味においても。

「これで現時点での日本一（男性限定ライヴでの動員記録）は獲れたわけで。それは純粋に嬉しいですね、やっぱり」

■『男祭り』の特別さというのを、どこにいちばん感じていますか？

「ライバルっていう意識をもって挑むところかな、メンバーを含めた全員が。闘いに挑む、という感覚ではありますね。全員が〝お前らに負けるか！〟って思ってる。しかもホンマに男くさいというか人間味に溢れてるというか。もちろん全員が本当の仲間というわけじゃないし、なかには揉めてるやつもいるかもしれないけど（笑）、そこで〝でも結局はみんな男やろ？〟という繋がった部分を実感できるところがある。そこで〝男同士、これからも頑張っていこうな！〟みたいな気持ちになれるんです。これは男尊女卑みたいなのとは違うんやけど、やっぱり男が支えていくべきものというのはあると思うし、男が強くなかったら誰も守れへんと思うしね。なんかステージ上でも、ふとそういう思いが湧いてくることがあるんです。もちろん普段のライヴでもそれはあるし『女祭り』でもそれは同じこと。だけど実際問題、女の子の気持ちというのは、おそらく僕には2％ぐらいしかわからへんと思うんですよ（笑）」

■ゼロではないことが大事なのかも（笑）。

「でも、この先もずっと2％やと思うんです。だけど男の気持ちは98％わかる気がする。なんとなくの感じで言うと（笑）。どこかで通じ合えてる気が勝手にしてるんです。それがいい意味で勘違いでもいいと思えるぐらい、『男祭り』というのは素敵な場所やと思う」

■女子の気持ちの98％がわからないからこそ、そこに歩み寄ろうとするのではなく？

「それをわかろうとする野郎どもの祭りというか。女の子の気持ちをちょっとでもわかろうとするため、彼女たちを守っていくためにやるのが『女祭り』ではなくむしろ『男祭り』なのかな、と。そんな感じが、ちょっと自分のなかではしていて」

■ちゃんと男であろうじゃないか、という気持ちを男同士の場で確認し合うというか。

「うん。守りたいものをしっかり守る、みたいな気持ちとかね。ずっと持っておきたいブレないものの存在に、そういう場で気付けたりとか、〝自分の器をデカくしていくためには何が必要なのか？〟みたいなことを考えさせられたりとか。僕は音楽でしか社会に出てない人間だから、そこでしか気付けないところがあるわけですよね。人と話をしてて気付かされることというのもあるけど、基本的には音楽活動を通じていろんなことを学ばされてきたこの十数年やったわけで。だからライヴもまた〝気付き〟のための場所だし、普段の生活のなかでは気付けないことが、そこにはたくさんあるから」

■学校や会社では教えてくれないことをライヴから教わってきた、というか。

「まさに。今の自分が持っておかないといけないもの、まだまだ足りないもの……。そういったものについて、ホンマにあの場で気付けるところがあるんですよね。それについて具体的に言葉にしてしまうとチープになってしまうからやめておくけど（笑）。たとえば次のライヴで〝あ、なんか変わったな、あいつ〟って見せつけられるようでありたいわけですよ。そうしていかないといけないとも思うし」

■気付きの場であると同時に、学び取ったものを提示する場でもあるわけですよね、ステージは。同時に最近のライヴを観ていて思うのは、皆さんの目線が以前よりも大人の包容力みたいなものを持つようになってきていること。オーディエンスの大半にとっての〝人

生の先輩〟でもあるわけで、それは当然のことだとも思うんですけど。

「自分たちの感受性が高まってきてることが、そういうふうに出てるのかもしれない。でも、そうあってこそ人間的というか、人から人に伝わるものが出てくるというか。結局、僕たちが出せるのは音でしかない。ただ、メッセージの送り手はTAKUYA∞ではあるけど、あいつの言葉はUVERworldを代表してのものだと100%胸を張って言えるので。だからあいつが1人で発信してるわけじゃなく、6人でしっかりとひとつの塊として投げつけるという感覚。そこで僕自身の感情も音に乗せて……みたいな言い方はちょっとサブいですけど(笑)」

■というか、そこで感情を乗せようと意識しなくても、勝手にそれが滲み出てしまうはずだということですよね?

「そうそう、勝手にね。そうやって自分でも盛り上がってしまってるというか(笑)。そういう曲しかやってないし」

■10年前の曲だろうと最新シングルだろうと未発表曲だろうと、そこは同じ気持ちで取り組めているわけですよね?

「そうですね。ちょっと前に昔の曲ばかりのツアーをやったじゃないですか。あの時に気付けたこともたくさんあった。昔の一生懸命さや闇雲さが、当時の自分のフレーズひとつからわかったり、そこで〝やっぱりいいなあ〟と素直に思えたり」

■過去の曲について恥じるのではなく、そんなふうに思えるというのは素敵なことだと思います。そして気になるのは、待望感の募っている次のアルバムについてなんですが。

「出しますよ、もちろん。なんか、曲作りのハードルがいい意味で上がっちゃってますけど、それをちゃんとクリアしたものを届けます。2年後とかじゃなく近いうちに(笑)。これはライヴとも重なってくるところですけど、TAKUYA∞の発するメッセージに伴う感情を搔き立てる音使いとか、そういったものをより意識するようになってきていて。だから歌詞と音楽がいっそう密接なものになると思う。音とメッセージが合わさってひとつの音楽になったものというか、その双方の関係性がより濃いものになっていくんじゃないかな。しかも僕ら自身、こうして日々培ってきたものというのがあるし、5年前にはやりたくてもできなかったことが、今はできたりもする。出したい音をしっかり具現化するノウハウも身についてるし、そういったところでイラつくこともない。同時にやっぱり新鮮さも求め続けてるし、だからこそいろんなものを吸収して、そのうえでUVERworldとしてアウトプットできるようじゃないと。ありがたいことに、僕らはそれができる環境に身を置かせてもらってるわけで、そういうことをしっかりしていかないとバチが当たるというか(笑)。実際、いいものができあがった時、いいライヴをやれた時の快感をすでに知ってしまっているから、それを引き続き追い求めていくしかないというのもあるわけですけど」

■そうしていくことで、日常の大半を占めている音楽生活がさらに充実していく。

「うん。同時に僕には、UVERworldに育ててもらってるという感覚があるんです。だからある意味、UVERworldに恩返しをしていかなきゃいけないと思ってるし」 B



信人

Bass

自分らのやってることがおかしなことではないって
日頃から思ってるんです。音楽を通じてメッセージを届けることとか。
だけど、それがここまでの数を引き寄せるまでになったか、と



■2月14日のお誕生日、おめでとうございました。同日の札幌でのバースデー・ライヴ、いかがでしたか?

「いやあ、刺激があり過ぎました。忘れたくない、忘れたいライヴになりました（笑）。あったかいといえばあったかいけども、公開処刑といえば公開処刑でした（笑）。イジりも含めてね。ちゃんとそれも愛として受け止めてますけど。ライヴ中にね、マイクが来たんですよ。今はMCじゃないですというタイミングでね。その時は、〝もっと来いよ!〟みたいな感じで煽れたんですけど、最後、まさかの本編終わりで、全員はけた後に〝はい、どうぞ〟みたいなことになって」

■さすがに心の準備ができてませんでした?

「ええ。〝今日はありがとう。忘れられない日になりました。飛行機も飛んで良かった!〟みたいなこと言って。そこで終われればいいんですけど、違うんですよ。そうやって言い終わるたびに〝からの〜?〟みたいなのがずっと続いて（笑）。それをね、他のメンバー全員、サーッと帰ってステージ袖のところで笑いながら眺めてるんです（笑）。そういうのに対応しきれない自分の不甲斐なさというのもあるわけですけど。辛かったっす。それが延々続いて、全然締まらへんっていう」

■まあでも、うまく締まればいいというわけでもないですから、そういうのは。

「もうね、全部言ってしまったんですよ、僕の思ってること。さすがに2回同じこと言うわけにもいかないじゃないですか。それでネタも尽きて、あとはもう〝うちの母ちゃんがね〜〟みたいな世間話になってしまって（笑）」

■心中お察しいたします（笑）。そんなライヴもあれば『男祭り』もあり、さまざまな形でのライヴが続いてきました。それぞれ違うものとして楽しんでいる感じですか?

「全会場、気持ちは変えずに、というつもりではいるんです。規模の大小とかで変わるものでもないし。基本、そうやってブレずに1本1本やっていくことが何かに繋がっていくと思ってるから。だけど『男祭り』だけは、久しぶりにコントロールできにくい日になりましたね。元来、あがり症というかそっち方面のタイプではあるけど、さすがにこれだけ場数も踏んできてるからビビらなくなったし、人の数に持っていかれるようなこともなくなってるんですね、ある程度。だけどあの日は、すごく引っ張られたというか、吸い寄せられるものがあって。ステージには自然体で上がれたけど、そのぶん余計に吸い取られるっていうか。やっぱり一緒になってワーッと盛り上がるだけではパンクみたいになってしまうし、こっちはじっくりと腰を落ち着けて、ちゃんと音を聴かせて、雰囲気も作っていかなきゃいけない。あんなデカい会場やからこそ、こっちから乗せてやらないと駄目だと思ってたんですけど、やっぱり持っていかれるというか。そうならないよう楽屋では意識してたんですけど、いざステージに出てしまうと、気付けば持っていかれてる。もちろんそれで演奏がおろそかになるようなことはないけど、やっぱり普段と比べると集中できてなかった」

■それほどまでに2万3,000人の野郎どもの吸引力にはすさまじいものがあった、と。

「でしたねー。『男祭り』っていう強い命題の下に男どもが集まってるわけじゃないですか。そこである種の使命感みたいなもんをみんな勝手に持ってたんでしょうね。〝半端ない大声上げるぞ!〟とかそういった。あの場に集まった全員にそういう意識があったんだと思う。日頃のライヴって、ちょっと違うじゃないですか。目一杯盛り上がりたい人もいれば、落ち着いて冷静に楽しみたい人も来てるわけで」

■ええ。だけど『男祭り』では、あらかじめすべての観客が〝半端ないもの〟を作り上げようという意識を持っている。

「そうそうそう。開演前から、勝手に〝オイオイオイ!〟って盛り上がっとるし（笑）。その興奮を冷めさせたくはないしね。そこに僕らが出ていくことで、その熱量がマックスになるようにしたかったし。しかもいざ出て行ってみれば、目の前ばかりじゃなく横も上も後ろのほうもすごいことになってるわけで、ただただ持っていかれるような感じではあった。だから正直、結構疲れましたね（笑）」

■しかし、来るところまで来た感じですよね。最初は地元の滋賀のライヴハウスで始まった『男祭り』が、この規模にまで膨れ上がって。

「すごいですよね。まさかっすよ。自分らのやってることがおかしなことではないって日頃から思ってるんです。音楽を通じてメッセージを届けることとか。だけど、それがここまでの数を引き寄せるまでになったか、と」

■人数もすごいですけど、それ以上に〝濃さ〟がすごいと思うんです。〝人気バンドが男限定をやってこれだけ集まりました〟という数字の問題ではなく、これだけ大規模になっても濃密さがちっとも薄まらないところが。

「それも感じるんですよ。熱量が普通じゃないというか。さっきも言ったように開場から30分ぐらい経った頃から〝オイオイオイ!〟というのが始まって。僕らはそれを部屋のモニター越しに見てたわけです。これってすごいことやな、と思いながら」

■囃し立てるようにしながら、順番にTシャツを脱いで裸になっていったり。往年のX JAPANのライヴを思い出しましたよ。

「求める気持ちの強さという意味では、まさにそっち系の空気でしたよね。昔からXみたいなカリスマ性のあるバンドは好きでよく聴いてたけど、自分たちはそういうタイプではないじゃないですか。だけど、そうやって開演前から盛り上がってるやつらがいてくれてる。なんかすごくないですか? そこまで惚れさせるって（笑）。観客だった頃の自分も、そこまで熱くなったことはなかったんですよ。毎日聴いてコピーに没頭したりはしてたけど、あそこまでのことはできてなかった」

■UVERworldがみんなをここまで熱くさせる理由ってどこにあるんでしょうね?

「わかんないんですよね。〝日頃寂しいやつらが多いんかな?〟とか思いはしますけど。人に弱音を吐けへんやつとか、人付き合いが下手なやつとか」

■つまりは、吐き出したいものをたくさん抱えた人たちが集まっていた。おそらくそれは、通常のライヴでも同じことでしょうが。

「そうそう。なんか今の時代ってユルいのかなって勝手に解釈してたけど、実はそうでもないというか。いい意味で昭和っぽい熱さを持ったやつらがいるのかなって思う（笑）」

■そんな熱いやつらが心待ちにしているのが、ニュー・アルバムです。ステージ上で約束していた通り、今年は出るんですよね?

「出ます！　これは言い切っておきます」

■完成予想図はすでに描けていますか？

「見えてきましたね。数曲揉んでみたところで、新しく入ってきたアイデアに取り組んでみたり、さらにまた揉み直してみたり」

■このバンドの曲作りにおいては、その〝揉み〟の行程が大事なんですよね。

「常にそれに時間がかかりますね。揉んでいくうちにまるで違う曲になったり。もはやそれが、自分らのスタイルです（笑）。アルバム自体は……幅広さは元からやから、むちゃくちゃ幅広いという感じではないかもしれへんけど、1曲1曲が地に足着いてるというか。めっちゃ新しい試みが詰まってるというよりは、地に足の着いたアルバムという感じですね。もちろん相変わらずメッセージ性が強くて。まず、そこが大事なんです。サウンド面については、無理やり新しい世界にいくというよりかは、ごく自然に今の自分らにとっての旬を基準にやってるというか。僕ら意外と、曲単位での発想なんですよ。メンバーの誰かが〝これ面白いな〟と思う何かがあると、その曲は進んでいくことが多い。だけど何をもって面白いとするかというところでの解釈や価値観は、各々ちょっとずつ違うんで。〝これは斬新やな〟と思ったものに対して、他のメンバーから〝古くない？〟って声が聞こえてくることもあるし。だけど揉んでいくうちに、ちゃんとメンバー全員が〝これ、いいよな〟って言うところに落ち着くというか」

■バンドにとっての地に足の着いた状態というのは、そういうことを言うのかもしれませんね。時流に寄り添おうとするのでもなく、まわりの声に惑わされることもなく、全員が納得する地点に到達できている。



「そうそう。変な話、プロデューサーとかそういった立場の人に〝こういう曲のこういうところは、こうじゃなきゃ駄目なんだ〟みたいなことを言われても、よくわからないし。〝それが常識なのかもしれないけど、なんかカッコ良くないなあ〟と思わされたり。もちろんそれが曲に本当にハマればそれでいいんですけど、〝そうじゃなきゃ駄目〟というのはちょっと理解できないというか」

■べつに世の中の平均値に合わせた音楽を作ろうとしているわけじゃないですもんね。だから、そうあるべきなんだと思いますよ。

「ですよね！　セオリー通りに曲を作ろうとすれば、すぐにできると思うんです。だけどそうじゃないから時間もかかるし、ハードルも高くなってくる。言葉としてちょっと変ですけど、なんか不感症みたいになってくる部分というのもあるし。何を聴いても刺激を感じひん、みたいな。だからこそ揉む作業に時間がかかるし、迷いもするんです。だけどそうやって悩める余地があるということは、新しいものが出てくる可能性があるってことだし、選択肢が多いのも自分たちからアイデアがどんどん出てくるからこそだし。そこで自分たちを信じてやっていけば、まだまだ大丈夫なはずやって思うから」

■しかも、もしも制作に煮詰まってホントにバンドがフリーズしそうになったなら、ライヴをやって自分たちの頭をほぐせばいい。

「ホンマにそうです。手詰まってくると〝もうアカン、ライヴしよ！〟ってことになる（笑）。だから制作とライヴ、両方必要なんです。カッコいいものを生み出していくためには、その両輪が回ってないと駄目なんです」 B

誠果

Saxophone/Manipulator

みんなのベクトルすべてがこっちに向かってくる。
その圧力がすごかったですよ。でも、“それには負けへんぞ”というか
“倍にして返してやるぞ！”ぐらいの気持ちがありました



■『男祭り』のステージ上での挨拶で、次なる目標として東京ドームの名前を口にしたのは誠果さんだけでしたね。

「ね（笑）。〝誠果だけやで、そんなこと言ってたの〟とかみんなに言われて（笑）。でも、そこが目標であるのは事実なんで、〝勝手に言うなよ！〟みたいに誰かに叱られたというわけでもなく（笑）。しかし、今思い出してみてもすごい光景でしたね」

■想像を超えるものでしたか？

「もう言葉にし難いですよね。なんか……語弊があるかもしれないけど『ウォーキング・デッド』みたいでした（笑）」

■ファンをゾンビ扱いしちゃ駄目です（笑）。

「でもなんか、誰もが何かを求めて俺たちに手を差し伸べてくるわけで。みんなのベクトルすべてがこっちに向かってくる。その圧力がすごかったですよ。でも、〝それには負けへんぞ〟というか〝倍にして返してやるぞ！〟ぐらいの気持ちがありましたね。〝おまえら、俺たちについてこい！〟みたいなテンションで臨んだから、その勢いに流されることはなかったけど……例えば前回、横浜アリーナでの『男祭り』の時は、メンバーもお客さんもお互いギリギリのところで踏みとどまってるところがあったと思うんですよ。もうちょっとで息切れして倒れそうなところを、気合いでどうにかしてる、みたいな。どっちも爪先で立ってるような感じ、というか（笑）。でも今回はメンバー全員、地に足が着いてたというか。足の裏が全部地に着いた状態で、今の自分らをしっかり表現できたんじゃないかな」

■横浜アリーナでの攻防戦が免疫になっていたのもあるでしょうし、それ以降の経過のなかでバンドがより強くなってきたからこそなんでしょうね、それは。

「そうですね。横浜で免疫ができてたことは大きいですけど、それ以上に、そこからさいたまスーパーアリーナに向かって準備を整えてきたことが大きかったと思う。それはもう体力的なことだったりとか、演奏面でのことだったりとか、自分たちのライヴのあり方みたいな部分だとか。いろんなことについて、この『男祭り』に照準を合わせて準備してきた——少なくとも俺自身はそんな気がしてるんですね。だからこそ全員が地に足を着けて、みんなから押し寄せてくるものを全部受け止めたうえで倍返しすることができたんじゃないかな、という気がします」

■ある意味、今なりの自然体であれた。

「そうです、そうです。ちゃんと今現在のライヴができた。しかも、ギリギリじゃなくて」

■『男祭り』だからといって、極端にライヴの内容が違うわけではない。だけどやっぱり気持ちって違うものなんですか？

「違います。実際、２００人の女の子たちがいたわけですけど、いつもと比率が全然違うじゃないですか。どこを見ても男ばっかりで。そうなってくると……言い方が難しいんですけど、いい意味でテキトーでいいというか。たとえば本来説明すべきことが1から10まであった時、女の子には全部説明したいし、省略するにしても、たとえば奇数の項目だけは説明するとか（笑）、そういう感じになると思うんですね。というのも、あとで〝なんで？〟と言われたくないから（笑）。でも男に対しては、〝説明せんでもわかるだろ？〟というか、〝わからなくてもいいや〟ぐらいの感じであれるというか。そういう部分があるんですよね。根本だけわかってくれてりゃどうでもいい、というか。『男祭り』の安くないチケットを買ってやって来るということは、それだけでもう根本をわかってるということじゃないですか。そこから先はお前の解釈で行け、みたいな。もちろん女の子たちのなかにも説明を必要としない人はいると思うけど、やっぱり同性のほうが意思の疎通がしやすいし」

■というか、もっとシンプルに言い換えると〝女性にはやさしく接したい〟ということなのかも。

「うん。言ってしまえばそういうことです。だけど男だけの場合は、通常通りの男女半々のライヴよりも省略していい部分が出てくるから、よりガチンコになりやすいというか」

■たとえば付き合っているかどうかは別として、女性と2人で食事に行くのと、男2人でメシ食いに行くのって違うじゃないですか。そういうのと似ているのかもしれない。

「ああ、うん。女の子と一緒だと、どうしてもいいカッコするというか、カッコつくようにするじゃないですか。男同士のほうが気遣いをしなくてもいいというか、もっと単純に言うと馬鹿になれるというか」

■そして結局、男は女性の前ではカッコつけてしまう動物だということでもある（笑）。

「そうそうそう。でもね、それをしない男はいないと思う。これを読んだ人のなかにも〝いや、俺は普通やけどな〟みたいなことを言う人はいるだろうけど、そう言ってること自体がカッコつけだし（笑）。やっぱり、か弱き者がいたら守らなきゃいけないという男としての使命みたいなものもあるし、たとえばスタンディングの客席が荒れたりしたら〝おまえ、女の子もおるんやから気い付けろや〟ということになる。だけど男だけなら、そういうところに気を配る気にもならないし。もちろん同時に、〝女の子だけで2万３０００人のライヴをやったらどうなるんだろう？〟というのもあるんですけどね」

■それもいつか是非。しかし『男祭り』を東京ドームで開催することも、もはや夢物語ではなくなってきましたね。

「ネクスト・ステージはそこですよね、やっぱり。もちろんそれがいつできるかは全然わからないですけど、少なくとも俺自身としては、もう今からそこに向けて、小さいことでもいいから何かを始めていきたいなとは思ってます。横浜アリーナでやった後に、さいたまに向けて準備をしてきた時と同じように。そのために何をすべきなのかって考えることが、まずは第一段階なのかもしれないし。そういったものを自分のなかで掲げながらそこまでの1本1本のライヴをしていくのと、ただ単に日々のライヴをやっていくのとでは、全然違うと思うんですよ。変な話、筋トレする時も、どんなところにどんな筋肉をつけたいかをイメージしてトレーニングするのと、ただなんとなく筋トレするのとでは、同じメニューをこなして同じ食生活をしていても仕上がりが違ってくる。意識ひとつで微妙に変わってくるっていうんです。それと同じように、やっぱりイメージすることが大事で。たとえば仮に2年後にドームでやるんだとしたら、その時に自分がどうなっていたいか、どんなふうであるべきかを考える。そういった意識のもとでその日に向かっていくのと、ただその日が来るのを待ってるの



とでは、ものすごく大きな差があると思うんです」

■確かに。そして確実に言えるのは、このバンドが〝次〟の段階に進んでいくうえで重要なのが、次のアルバムだということです。

「間違いないですね。ずいぶんお待たせしてますけど(笑)。どうしても、こだわり過ぎちゃうんですよね。考え過ぎてしまったり。〝いろいろ試してみた挙げ句、結局使わなかった〟というパターン、このバンドには結構多いです(笑)。だけど、そういうプロセスも必要なんじゃないかな、と思う。その回り道があったからこそ、より自信をもって正解だと思えるようになる、というか」

■〝これ、いいじゃん〟というものが出てきたあとで、〝本当にいいのか？〟という疑いが出てくることがある。そういったハードルを何度も飛び越えてきたものであれば、より堂々とそれを突き詰めることができる、と？

「そうです。〝他にもっといい選択肢があったんじゃないか？〟という思いを残しながら進めてしまうのは、ほぼ妥協に等しいわけで。自信をもって自分たちのものを世に出すという意味では、やっぱりそうやって疑うことが必要で。みんなそれぞれ自分のセンスというのを信じてやってると思うんですけど、これだけいろんなものが音楽の世界に出つくしてるなかで、ある意味、その出つくしたもの同士の組み合わせによって新しい音楽を作ろうとしてるわけじゃないですか。だからホントに宝探しみたいなもんで、とにかく一回掘ってみることが大事になってくる。すでにあるものを求めてるわけではないので」

■地表にあるものだけを組み合わせていたら、どんどん資源はなくなってしまう。だからこそ掘り続けていかなければならない、と？

「うん。もちろん掘ってみたけど何も出てこなかった、ということも多々あるんですけど、そこで〝あそこはもうとことん掘ったから、もう掘らんでいい〟という答えは出るわけで、何も出てこなくても無駄じゃない」

■その掘る作業に時間をかけられることも、このバンドにとっては重要なわけですよね。今現在のような〝出したいものを、出したい時に出す〟というスタンスが維持できていないと、なかなかそれに時間を費やすことは難しくなってくるわけで。

「実際、掘らなくても作ることはできるんです。締め切りに間に合わせることも、きっとできる。でもこのバンドには、今みたいなやり方がいちばん似合ってるんじゃないかな」

■たとえシングル1枚しか出ていないような年があろうとも？

「ははは！　正直、みんなを待たせていて申し訳ないという気持ちはあります。でも、だからといって自分たちが心底納得できてないもの、疑いを持ったままのものを出してしまうのは、ちょっと違うと思う。それだったら、俺らじゃなくていいじゃないですか。確かに俺自身、アイデアを投げられてそれを投げ返すのに、時間がかかるほうなんです。だけど自分で納得したものを投げ返したいし、〝とりあえずこんなの入れといたけど〟というのと、心から〝これしかないと思う〟と言って渡した音源とでは、やっぱり相手への響き方も違ってくると思う。そこでもっと自分自身がいい答えを投げられるように、俺も俺なりに学び続けているんです」 B

次のアルバムは間違いなくヤバいものになる。待たせてきたぶん、
てんこ盛りになると思う。振れ幅の広さは相変わらずだし、
しかも奥行きとか深みとか、そういったものもプラスされてきた感じで

真太郎

Drums



■今年も年明け早々から、さまざまなライヴが続いてきましたよね。しかも例によって、制作も同時進行というめまぐるしさで。

「いろんな趣向のライヴが入り乱れてる感じで。ただ、ツアーという感覚はあんまりなくて〝単発が続いてるな〟という感じですね。年末まで続いたアリーナ・ツアーが終わったところで、自分のなかでは一段落という感じがあったので。身体も気持ちもリフレッシュして日々のライヴや作業に臨めています」

■そんななか、『男祭り』が開催されました。読者の興味も〝そこで何があったのか?〟に集中してるんじゃないかと思うんです。

「いやー、すごかった。その一言ですね」

■一言で済ませないでくださいよ。

「ははは！　やっぱ、あの熱量ですよね。こうして回を重ねてもまったく薄れていかないというか。僕のなかでは『男祭り』って、どんだけ大きくなっても〝原点に戻る〟みたいな感覚があるんです。第一回の『男祭り』は滋賀のB-FLATでやったわけなんですね。300人キャパのライヴハウスで。あれが根本にあって、その時の面白さを、会場が大きくなってもずっと維持できてるというか」

■そこは『男祭り』の根源であると同時にバンドの原点にも近いわけですよね？

「ですね。とはいえそこで〝原点に立ち戻る〟とかそういうことを難しく考えてるわけではなくて。むしろ〝笑いながらライヴするってこういうことなんや〟というのを思い出すんです。まさにB-FLATでやった時はそうだった。なんかもう、演奏できひんぐらいに面白過ぎた。それこそバンドを始めた頃は、ガラッガラのB-FLATでやってたわけです。ただ、もちろん人気のあるバンドがやれば、そこはパンパンに詰まって凄まじいことになる。そういう状況に憧れて日々やってたわけですけど、結局、そこまでは行き着くことのないまま僕らは東京に出てきて。で、のちにそこに戻ってライヴをやった時、もちろん男女一緒のライヴでもパンパンだったけど、自分にとって馴染みのある景色というのは『男祭り』のほうやったんですよ。それを目にした時に、当時の夢が叶った、というのがあった。ライヴハウスならではの熱さや高揚感もあったし、天井からは水が滴ってきたし。いつかこういうライヴを、と思ってたものを実際やれたことが嬉しかったし、楽しかった。しかもね、〝何が起きてるんだ？〟みたいな空気があるんですよ、お客さんの側にも。状況を把握できてない、というか。僕ら自身にも〝こんなふうになればいいな〟というのはあったけど、実際にはそれ以上のものがそこにあって。お客さんの側からすれば、まずはフロアがパンパンでキツいというのがあるんだけど、それがだんだん〝楽しい〟に変わっていくのがステージから見ていてわかるわけです。それが面白かったんですよ」

■みんなが困惑する様子が面白かった、と？

「うん。最初のうちは〝頭の上に足が落ちてきた！〟とか怒ってたりするんだけど（笑）。最初は本来あるべきライヴのマナーみたいなものを持ち込んで来てるんやろうけど、途中から〝ああ、これはいつものとは違うんや〟とわかって吹っ切れていくわけですよね。それが伝わってきたし、終わった時にはみんなすべてを受け入れて笑ってたし。しかもその状況というのは、僕らが提供したものというよりは、お客さんと一緒に作り上げたもの。そういう意味では、その時からまったく変わってないんですよ、『男祭り』は。ZEPPでやった時もそうだったし、武道館とか横浜アリーナとか、今回のスーパーアリーナでもそうだった。最初からそこにあったエネルギーみたいなものが、規模が大きくなるにつれて薄れていくんじゃなく、塊のまま大きくなってきてる感じがしましたね」

■ええ。だからこそ客席から観ていて僕も思ったんです。〝これを一度味わったらもうやめられないだろうな〟と。

「ホンマにそう。しかもそれはバンド側だけの気持ちじゃないと思うんですよ。だからこんなに一気に2万3000人にまで膨れ上がることになったわけで。この業界、CDを売ったりお客さんを増やしていくために、いろんな宣伝の手法があると思うんですけど、『男祭り』に関しては口コミの力というのをすごく感じるんですよね。観に来て楽しかったやつが友達に声かけて、みたいなところで最初は終わってたわけですよ。ただ、こうして回を重ねながら、そういった声がここまで広がってきたということは、やっぱりお客さんの側も相当楽しいんだろうし、思い切り発散できる場というのを求めてるんだろうな、と。そういう場がここにあるってことが、口コミで広まった結果だと思うんです。べつにライヴ自体が特殊なわけじゃないし、他のライヴと比べて極端に内容が違うわけでもないし」

■男限定にするとライヴ自体が荒れる、ということが想定されがちですけど、実際にはそればかりではないんですよね。こうした場が設けられたことで、初めてライヴに足を運ぶことができた男子がいたりとか。

「年齢層も結構バラバラだったと思うんです。普段来れない……お父さんなのかな？」

■それ、僕じゃないですよね？

「いやいや（笑）。40代ぐらいの人の姿が最前のほうにもあったし、〝まだまだ若いもんには負けへんぞ！〟みたいなのも感じるし。正直、照明のせいもあって客席の細かいところまではよく見えないから、具体的にどんなことになってるのかまではわからないけど、その場のエネルギーというのが塊でこっちに飛んできてるから。なんとも言えない感覚ですね、ホンマに。友達とかも何人か観に来てくれたんやけど、普段やったら関係者席みたいなところで観てる人たちでも〝いや、俺は前に行きたい！〟って。終演後、そいつらの顔にも達成感みたいなものがあるわけですよ。ある意味、戦友みたいな。喉が渇いてたまらなかったとか、他の客にどこを蹴られたとか言ってるんだけど、そういう話を実に楽しそうにしていて（笑）。それがまさに『男祭り』の醍醐味というか。なんかみんな、いい顔してましたね。フロアにいた連中同士で、ずーっと語ってましたよ。〝あの曲で俺、もうヤバかった！〟みたいなことを（笑）。そういう人がいっぱいいただろうと思う」

■ええ。帰り道に話の尽きないライヴって、いいですよね！

「うん。いいライヴを客席から観て、何かを共有して帰るというのもいいんだろうけど、『男祭り』はむしろ体感型、体験型というか」

■ある種のアトラクションなんですね。

「そういうことなんやろうな、と思いました」

■次は東京ドームで『男祭り』を、という話も聞こえてきましたよね。ここまでくると、も

はやそれも夢ではないというか。ただし女子たちからは「いいな～」という声が聞こえてきそうですけども。

「ねー（笑）」

■ステージを去る間際の挨拶の時も、真太郎さんは「これができるのは女子クルーのおかげです！」と言ってましたよね。

「すげー気を遣いましたよ、俺（笑）。ただね、『男祭り』ができるってことは、『女祭り』も絶対できるんですよ。さいたまスーパーアリーナでも、東京ドームでも。そこはわかってるし、『女祭り』ならではの良さというのもあるしね。ただ、何かを共有できることをいっそう実感できるというか、理解できるのが、自分らにとっては『男祭り』なんです。変な話、自分らには女子高の感覚というのはわからへんし（笑）、溶け込むようにわかり合えるのは、どうしても男同士だったりする。そこはわかってもらえると嬉しいですね」

■そして、東京ドームでの『男祭り』開催よりも前に実現させなければならないのが、ニュー・アルバムの発表です。今年は、間違いなく出るんですよね？

「……（微笑）」

■なんですか、その表情は！

「いやぁ、気付けばもう2月も後半やな、と（笑）。アルバム制作についてはね、登山に例えるなら実はもう7合目ぐらいまで来てるんです。……いや、6合目かな。というのも、アルバムを目掛けてすべてを進めてきたところに、またちょっと違った面白い話が飛び込んできたりもしてるんで」

■当初の計画通りではないものが？

「うん。そういったものもいくつかあるので。ただ、それも上手く追い風にしていきたいし、次のアルバムは間違いなくヤバいものになると思いますよ。待たせてきたぶん、てんこ盛りになると思う。振れ幅の広さは相変わらずだし、しかも奥行きとか深みとか、そういったものもプラスされてきた感じで。俯瞰で眺めてみた時に、自分でもそう感じるんです。休まず、ずっと11年やってきただけのことはあるな、と。そういった今の自分たちならではのものが出た1枚になるんじゃないかな」

■「一滴の影響」や「エミュー」の良さも、アルバムへの期待感に拍車をかけています。ファンの期待度も相当上がっているはずで。

「新曲を録り終わるたび、〝これはちゃんと自分たちの目指した理想に適ってるのかな？〟と思わされるんです。〝これでいいのかな？〟って。だけどそれが発売されて、まれに自分たちでも不意にコンビニとかCMで流れてるのを耳にしたりすると、〝やっぱ、いいなあ！〟と思わされるんですよね（笑）」

■曲が立派に独り歩きをしていることに、そういう時に気付かされたりするわけですね？

「うん。自分たちの手を離れていくと、実はその曲が思ってたよりも先を進んでたりすることがある。〝一滴の影響〟にも〝エミュー〟にもそういうところがありますね。もう独り歩きできてるし、立派なもんやな、と（笑）」

■アルバム完成に向けて、心配は何もなさそうですね。

「うん。ただ（急に小声になり）スケジュール……だけが（笑）」

■スケジュールにもきっと勝てるはずです、今のUVERworldならば！（笑） Ⓑ



w o r l d

23,000人もの男Crewに埋め尽くされたさいたまスーパーアリーナ。
誰も見たことのない景色を、彼らは現実のものにしてしまった。
ただ、彼らはそこに留まることを良しとはしない。
すでにあの記念すべき夜は、愛し誇るべきひとつの糧となり、
足は地をしっかりと踏みしめ、視線はその先を見つめている。
TAKUYA∞が放つメッセージと6人が生み出す新たなサウンドが
私達の元に届く日を楽しみに待ちたいと思う。



初回生産限定盤



通常盤

30th Single
一滴の影響
2017.02.01 Release
初回生産限定盤 CD+DVD ¥1,575（tax out）
通常盤 CD ¥1,204（tax out）

01. 一滴の影響
02. エミュー
03. Forever Young（feat. UVERworld）





U V E R

UVERworld
Special Cover Original Print Present

ついに日本一を獲った2.11の“男祭り”。参戦された2万3000人+200人のCrew、そして直に目撃できなかったCrewの皆さんも、本特集を楽しんでいただけましたでしょうか？　ひとつの山を越えた6人それぞれの気持ちをどうしても知りたくて、恐怖の突貫日程で取材を敢行させて頂きました。大ボリュームになってしまいましたが、少しずつ読んでいってもらえると幸いです。そして、皆様からのたくさんの感想をお待ちしております！
恒例の表紙オリジナル・プリントを3名様にプレゼント。ご希望の方は、P.198にある応募券をハガキに貼り、〒&住所、氏名、年齢、電話番号、特集の感想、ご意見なども明記の上、〈〒101-8450 東京都千代田区神田錦町1-14 -4F B-PASS「UVERworld表紙プリント係」〉まで、ご応募ください（3月27日当日消印有効）。当選者は4月27日発売のB-PASS6月号当欄にて発表させて頂きます。

UVERworld ⇒
ウーバーワールド。滋賀県出身の6人組バンド。'05年7月、1stシングル「D-tecnoLife」でメジャー・デビュー。30枚目となる最新シングル「一滴の影響」はTVアニメ『青の祓魔師 京都不浄王篇』オープニング・テーマとしてオンエア中。現在、「UVERworld LIVE HOUSE TOUR 2017」真っ最中。

Costume ⇒
ADONUST_TEL:03-5456-5821／Iroquois HEAD SHOP_TEL:03-3791-5033／SHELLAC DAIKANYAMA_TEL:03-5459-2180／GEM PROJECTOR_TEL:03-6418-7910／DIESEL JAPAN_TEL:0120-55-1978



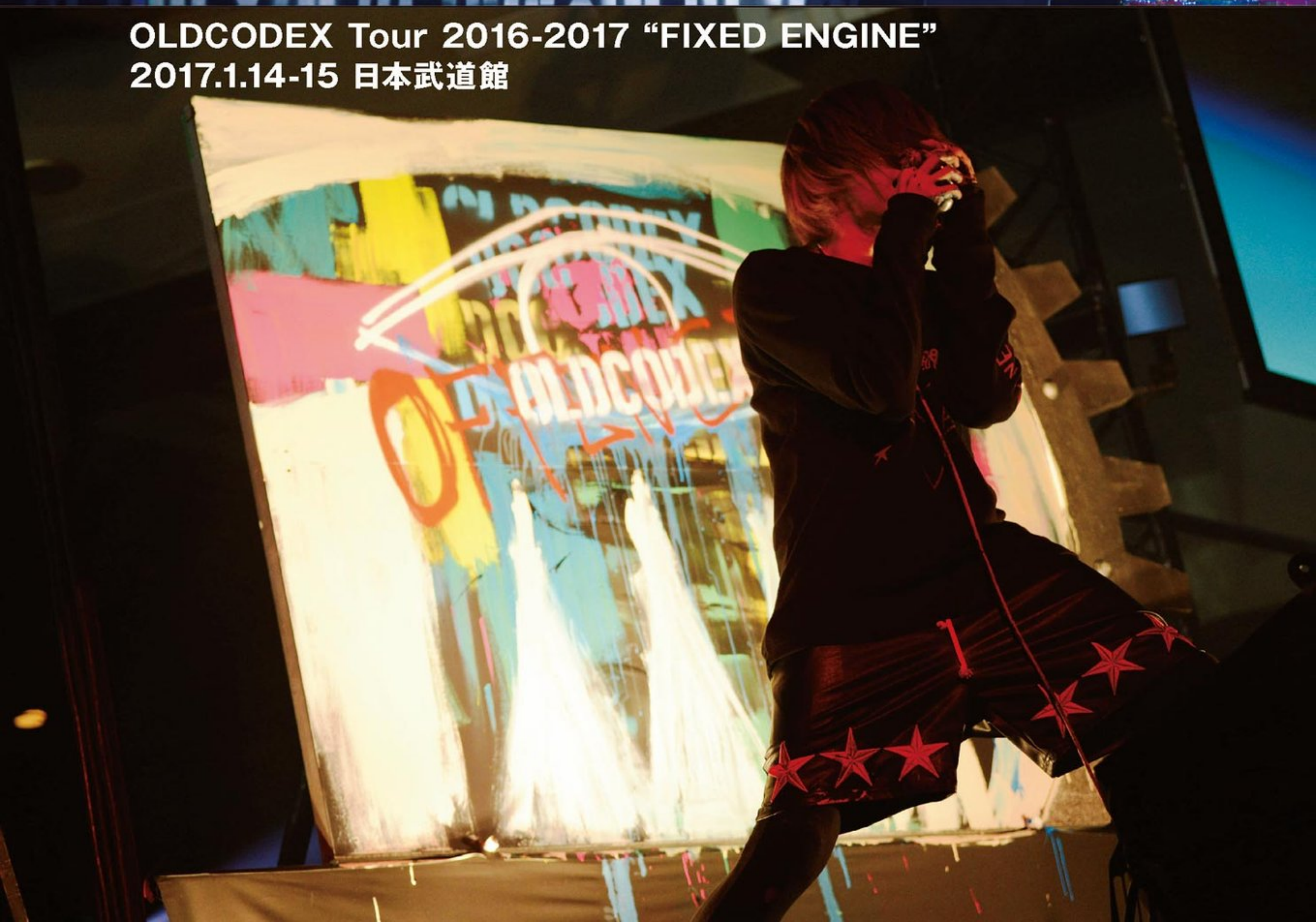
初のシングルコレクションアルバムを掲げ、
昨年9月からスタートしたホールツアー
『OLDCODEX Tour 2016-2017
"FIXED ENGINE"』が、
1月14、15日の日本武道館でファイナルを迎えた。
そのステージで2人は何を感じ、
ツアーを通して何を掴んだのか。
ライヴレポートとアフターインタビューの
2本立てで迫る。

Text ⇒ 大西智之
Photo ⇒ 達川範一、MASA



OLDCODEX

OLDCODEX Tour 2016-2017 "FIXED ENGINE"
2017.1.14-15 日本武道館



LIVE REPORT



両手でマイクを握り歌うTa_2、“follow you”というフレーズに合わせ、YORKE.が1階、2階席をグルっと指差す。そのYORKE.が上手のカンバスに描き出したのは、誇り高く風になびく旗だった

日本武道館の1階入口に掲げられたツアータイトルの看板、その下には“OLDCODEX”と描かれた幕が吊してある。

そこにあるペンキの一粒ひと粒は、2016年9月からスタートした初のホールツアー『OLDCODEX Tour 2016-2017 “FIXED ENGINE”』の各会場で、「Milestone」の演奏が鳴る中、YORKE.が描いてきたものだ。つまり、ツアー1本かけて描いた作品である。それは、この1月14日、15日の武道館2daysを象徴していた。彼ら自身3年連続3回目にあたる今回の武道館ワンマンは、単発ではなく初のツアーファイナルであり、ここまでの土地で手にしてきたもの、描いてきたドラマが2日間のライヴになる、そういう公演である。

＊

巨大なステージにそびえるのは、YORKE.の手によりペイントされた複数枚の歯車だ。そこにはツアーで使われていたものと、新しく追加されたものがある。真ん中に陣取る10mほどの高さの2枚の歯車は新たに制作されたもので、歯車の命でもある外周の凸部分には欠けている箇所もある。それはまるで不完全な自分の姿だ、そう思う。

これが精密機械なら、または精密な社会でなら欠けた歯車は、役に立たない。全体を動かす役目を担うパーツにはなれない。しかし、OLDCODEXの音楽にあっては別の話だ。

客電が消え暗闇に包まれる。セット上部にレーザーが走り、ツアータイトルとバンド名を描き出していく。大量のスモークが吹き出す中、ギギッ、ギギッ……ドーン!と足下を揺るがす音をたて、真ん中に陣取っていた2枚のギアが噛み合い、回り出した。スモークが薄くなるとステージ上にはすでにメンバーが立っている。すかさずサポートメンバーの大村真司がエッジの立ったギターリフをぶち鳴らし、ドラムのRyoとベースの中村泰造が鋭いリズムを吐き出す。オープニングは、武道館のために演奏曲目に追加された「HEAVEN」。かつてメンバーが抜けて2人になったOLDCODEXが、曲提供&プロデュースという形でINORANの手を借り、再スタートした曲だ。Ta_2のヴォーカルが聴く者の理性を噛みちぎる勢いで迫ってくる。YORKE.はステージを走り回り、コーラスをしては煽り、跳ね叫ぶ会場全体にドクドクと燃料を注いで回る。間髪入れずに繰り出されるスピードナンバーは「flag on the hill」。両手でマイクを握り歌うTa_2、“follow you”というフレーズに合わせ、YORKE.が1階、2階席をグルっと指差す。そのYORKE.が上手のカンバスに描き出したのは、誇り高く風になびく旗だった。

Ta_2が、天に向かって宣言する。

「来たぞー!　東京ファイナル!」

その後も、「Meteor Train」までのオープニング5曲は、一切休憩なしの、速くハードな曲の連射だ。天井が高く、広大な武道館に、オーディエンスたちの汗が気化し靄となって、白く漂い始めた。

そんな中、武道館2日目の公演の4曲目、「Feed A」でひとつのストーリーが始まっていた。この曲のエンディングで、上手カンバスに仕込んだマスキングテープを、YORKE.が脚立から飛び降りながら剥がし、カンバスいっぱいの“A”を浮き上がらせる。そのパフォーマンスを、ツアー中も、昨夜もやっていた。しかしこの日、「Feed A」でテープは剥がされることがないまま、ライヴは進んでいく。ツアーファイナルに向けて、何かが動き始めている。

武道館で加わった「Calling」。スローで重いバンドサウンドに、己の姿と対峙する凛とした歌が乗る。その歌は“願い”と“心の叫び”が宿っている。YORKE.が下手ウイングのカンバスと向き合い、筆を走らせる。描き出したのは、左の翼。それは、色合いが明るく、希望を孕んで羽ばたいているように見えた。

「OLDCODEXだから見せられるアートっていうものをここからはお見せします」

Ta_2のMCに導かれた「Lantana」から、ステージの照明の光量はグッと落ち、YORKE.が描くアートを効果的に浮き立たせていく。武道館のために用意された「bund」では、YORKE.が上手ウイングのカンバスに向き合い、今度は右の翼を描く。翼の中に描かれていく大きな瞳。曲がクレッシェンドしていく中、YORKE.がその瞳にスプレーを吹き続け、ペンキが一筋の涙となって零れ落ちる。この翼は悲しみを背負ってそれでも飛ぼうとしているんだ、と思えた。

「[Blue]」では、照明が作り出す薄明かりが、下手カンバスにYORKE.が描き出す青い空に浮かぶ細い月だけを照らしている。暗闇の中でTa_2が静けさをまとった歌で、月だけが浮かぶ景色を拡げていく。その歌は激情へと変わり、溢れる生命力を得る……視覚が捉える一幅の絵と、聴覚に届く音楽がひとつの世界を見せる。

「[Blue]」で完成した繊細な細い月も、「Aching Horns」で加筆され雄雄しい角（つの）に変わる、対となる上手のカンバスには、赤を基調とした角が描かれる。しかしそれは、ツアー中とも、武道館1日目とも色合いが違う。さらにYORKE.はそのカンバスに星を描き加える。これも新たな試みだ。この「Feed A」から並行して進んでいた新たなストーリーは、「Anthem」で帰結する。シングルコレクションアルバム『Fixed Engine』に収録されているこの新曲は、サウンド的にOLDCODEXのこれまでと現在、そしてこれからのボーダーに位置する作りで、歌詞にも過去のシングル曲で使った言葉を散りばめた1曲だ。そんな曲のラストでYORKE.は、「Feed A」で残したマスキングテープを剥がし、上手カンバスいっぱいに“A”の文字を生み出した。それは、このツアーで過去のあらゆる時間の曲を演奏し、その都度、2人が向き合ってきたそれぞれの時間とそこに留っていた感情の残滓に、ひとつの区切りをつけた場面に思えた。

この「Anthem」の先、「WALK」からは、ツアーが終わるという感慨と、突き抜けたハッピーさが混ざった時間だった。Ta_2の歌は時に感情に揺れ、YORKE.のステップは軽やかだ。観客は二度と訪れない時間と楽しみを噛みしめながら、声を重ねる。

そんなライヴの最後を飾ったのは「Eyes in chase」、ボトムにラウドさと強さが存在し、その上をセンスフルで自由なメロディが鳴る、OLDCODEXの未来に繋がる音楽だった。

これから彼らはいよいよYORKE.とTa_2の手による詞曲のみで構成するニュー・アルバムの制作に向かう。このツアーファイナルで過去を昇華した2人が生み落とすその作品には、未来を突き進むOLDCODEXが強く投影されていくはずだ。そう確信した。 B









Ta_2 vocal

INTERVIEW AFTER LIVE

よく自分たちを知ることができたツアーだったよね。だから嫌なこともいいことも、これまでの道に詰まってたんだな、って思えたし、そういう意味で我が振りを見直す時間だった（Ta_2）

■2日間の日本武道館公演で、心に鮮明に残っているのはどんなことでしょうか？

Ta_2「セットがデカかった、ことですね」

YORKE.「まったく俺と同じだね（笑）。自分の中でもステージセットがインパクトあったな。あれは、武道館で新しく追加するパーツだけで作ったから、仮組の時に完成形を見てないんですよ。過去の2回の武道館は照明も合わせて仮組の段階で完成予想図をみんなで見たんですけど。3回目だし、今回はツアーファイナルだったからね。武道館の2日間だけのために作って、それもよかったね」

■当日会場入りしてからも、YORKE.さんは、ギリギリまで見ないでいましたよね。初めて完成形を見たのはリハですか。

YORKE.「そうだね。俺、リハにはやるぞ！っていうモードに切り替えていくんだけど、いい気合いを舞台からもらった気がしたね」

■Ta_2さんもセットの大きさが鮮明に残っている、と。

Ta_2「それで本番、ステージ狭いなという感じがしてしまって（笑）」

YORKE.「それ思った。武道館なのにライヴハウスくらい。Zeppみたいだった！」

Ta_2「リキッドルームくらいな感覚だったかも」

■セットに奥行きがあったし、バンドのスペースが狭かったんですね（笑）。

Ta_2「でも、この感じ、悪くないな、って。小バコのライヴハウスでやってる時に近いし、メンバーみんな近いね、みたいな」

■客席から見ていると、ライヴハウスの良さと、ホールの空間の広さが混在しているようでした。過去の2回はリフターがあったり、ロボット的に動くカンバスがあったりしたのに対してセットは大きいけどシンプルで。

YORKE.「やってみて、どっちもありだな、と思ったな。今回は、ツアーファイナルという意味もあって、シンプルにしたけど、動く演出だったりもその時のテーマに沿えばアリで。ただ、Ta_2とも言ってたんだけど、ロックは真ん中で完結しているのが絶対カッコイイよ、って」

■動くところもありつつ、キメとか要所で、ドラムを全員が見ている瞬間とか、広いから余計にギュッとなってる感がありました。

YORKE.「ロックバンドの一番カッコイイ瞬間だよね」

Ta_2「不変だよね。向き合って演奏し合ったり、メンバーが集まったりっていうのはロック史の中で繰り返されてきたことでさ」

■ホールに踏み出してライヴを繰り返してきた経験を持って、武道館を迎えるというのは、感覚が違いました？

YORKE.「確実に違う。表現の幅が違うね」

Ta_2「うん。それに今回、最初のホールツアーで、あえてライヴハウスも混在させたから、大変だったけど、それで得られたもの、自分たちに入ってきたものが大きかった。無理してでも最初にこれをやってよかったね、ってYORKE.とも話していて。バンドとしてタフになり方が大きかったし。バンドの骨組みとか素体を作っているような。その上に筋肉だったり神経が通るから、まず骨を強くしなきゃね、みたいな。このふたりはよく骨折っちゃうし（笑）」

YORKE.「ハハハ、フィジカルもメンタルも鍛えなきゃね。あと、この数年〝キャパがホールだからやろう〟って言われてきて、でも、ライヴハ









ウスでしかやりたくねぇと、ツッパッてきた時間が愛おしいし、それが良かったな、と今思うんですよ。ホールでのロックのライヴで〝楽しい〟っていうものを俺らは観たことがなかったし、知らなかったんですよね。そんな2人がホールに進むのに、考える時間になったし、向き合い方が中途半端じゃない中でホールのステージに上がれた。結果、今回やってみて、確実にライヴハウスとは違うけど、お客さんの楽しみ方を観たから、全然アリだったな、ってなれたしね」

■ライヴハウスではグシャッと音圧で押していた音も、ホールではより立体的に細部まで聴こえる。そこで今、どういう音を聴かせたいかに向き合ってきたツアーでしたね。

Ta_2「うん。あらゆる音楽が好きな自分が、目指す音楽に対してどんな手札を出したいかが見えた」

■そして、YORKE.さんはツアーを通して「Milestone」のイントロで1枚の幕に色を重ねてきたわけですが、そのアートが武道館の入口で迎えてくれました。

YORKE.「ツアー初日のMCでお客さんに〝ここに沢山の色がついてファイナルでどういう色になっていくか。このツアーで染まったOLDCODEXをまた観にきてほしい〟って言ったことを思い出してたんだよね。それを入口に飾った。こういうアプローチは、他のバンドだったら素材がないからできないし、OLDCODEXならではのウェルカムボードって感じになったんじゃないかな」

■はい（笑）。あと、その「Milestone」を含む「Lantana」から「Aching Horns」までのブロックは、魅せ方にこだわっていましたね。

YORKE.「Ta_2が異様にこだわってた（笑）」

Ta_2「ここはとにかくYORKE.を際立たせたかったから。そのためだけの演出にしたくて。武道館公演の当日にも、照明スタッフさんにいろいろお願いしました。キーになる人物ってどのバンドにもいて、そのメンバーが目立つパフォーマンスってライヴの中で必要だと思うんですよ。ウチらは、俺もヴォーカルとして立っているし、でも、それ以上に視覚的に強く訴えるのってYORKE.の存在なんですよね。他のバンドにはねぇだろ、っていう一番のカードだから。そこを綺麗に見せないでどうする、みたいな。ラッピング盛りますよ、って感じで、デコってライティングするからちょっと待ってろ、って（笑）」

■デコレーションとは逆の意味になるかもですが、あの演出が引き算であったことが美しいな、と思ったんですね。Ta_2さんには照明を当てない、YORKE.さんのほうも最小限の光で見せるっていう。

Ta_2「そうそう！」

■で、YORKE.さんのアートと見せつつ、照明が当たらないTa_2さんの歌声がまとう静けさだったりが、凄味があった。

Ta_2「そう、それもやりたかったの。俺は自分に照明が当たってない中、スゲェ集中して歌えるし。で、俺の姿が映らない分、オーディエンスの聴覚は声にいってるから。それは〝声のプロであるヴォーカル〟っていう他のヴォーカリストと違う側面を持っているからこそのアプローチで。俺はMCの地声の良さと、暗がりになった時の声の抜けは誰よりいいと思ってるから（笑）」

■絵で描かれた世界に流れる声、っていうのはOLDCODEXを感じる瞬間ですよね。

Ta_2「あれが本当のOLDCODEXじゃないか、と思う！」

■歌う姿を含め、いろんな要素を求めてる人がいるから、うん、とは言えないけど（笑）。核のひとつとなるものだ、と思わされました。

Ta_2「照明が明るい時にバンド全員で前に行ったり、ステージ中央で塊になっている姿で騒がせたり、楽しませたりするし。暗くなれば、YORKE.の絵がスポットを浴びて、それ以外の者の存在は、出す音だけという瞬間って、ミュージシャンの、ヴォーカルの真骨頂でもあるしね。ひとつの公演でこれだけの落差が付くバンドって他にいないと思うし、それをよりしっかり伝えたかったんですよ」

■武道館2日目には、「Feed A」のラストで外すはずだった〝A〟のマスキングテープを外し忘れた、ということもありました。

YORKE.「あれは完全に忘れた（笑）。スタッフの〝あっ〟って顔で気づいたの。で、その彼女に、〝「Anthem」が待ってます〟って言われて。俺もそれはわかってたんだけど、ツアー中、一番近くでサポートしてくれていたスタッフに言われた時にスイッチが入った。そこからは、ツアーではなかった新しいストーリーを描くわけだから、燃えたね」

■アルバム『Fixed Engine』の中でも、「Anthem」は新曲で、〝OLDCODEXの過去現在と未来〟を繋ぐ曲でもあった。そこに〝A〟の見せ場がいくっていうのがドラマティックでした。

YORKE.「そうだよね（笑）。予定調和じゃないほうが絶対面白くて。そういうのに強いことを自分がよくわかっているしね」

Ta_2「バンドならではの、ハプニングを奇跡に変えるっていうね。ウチらってそういうのに恵まれてる（笑）。大雪に降られたり、去年の武道館では、ハードディスクがトラブって同期が止まる、とかさ。Ryoが親指をスライスしたり（笑）。そういう神様に好かれてんだなと思うし、タフになるよね。で、そんな時にその人柄が伝わったり、いいほうに転ばせられるのっていいよね」

YORKE.「今後生きていく上でも大事だよね。ピンチをいいほうに絶対転ばせなきゃいけない時に真価を試されると思う。絶対うまくいくことばかりじゃないから。それをどううまくポジティブに人に伝えるか、っていうのが俺の仕事だな、って強く感じているね」

■アクシデントが新しいアートになっていくというのもありますよね。

YORKE.「ライヴはその連続ですからね」

■『FIXED ENGINE』と、タイトルを大文字にして進んできたツアーでしたが、武道館が終わった時点で、過去のそれぞれの時間と向き合うものだったのか、アルバム『Fixed Engine』の先が見えたものだったのか、どちらでしたか？

YORKE.「このツアーは、怪我した分の2公演が3月末にまだ残っているんだけど、これはリフレッシュして、って感じで思っているし、武道館で決着がつけられたっていうのは感じているのね。そこで俺にとっては、この先が見えるものでしかなかった。ただ、ツアー全体で、〝過去にどれだけ俺たちこだわってたんだろう〟ということも体の外に出せた気がしたね。Ta_2と一緒にそれができた。〝HEAVEN〟から









武道館でのライヴは始まって、曲の背景にあるいろんなことを思い出すんですよ。〝Cold hands〟は、MV撮影で空港の滑走路を3人で歩いたシーンが忘れられないわけ。寒かったし、俺はメンバーになってすぐだったし。そういうシーンは絶対記憶に残っていくんだけど、前はネガティブに捉えてたものも、もう大丈夫だな、って思えるようになった。この先も恐らくネガティブなことも起きる、でも乗り越え方が前とは変わってくるだろうな。これは俺らの人生、お互い〝個〟としての人生にもいい財産になるもので、それを自分たちで手にした感じがした。武道館での〝カタルリズム〟は今までで一番気持ち良かったかもしれないね」

■「カタルリズム」をやった、本編の「WALK」から最後に行くブロックはピースな感じでしたね。しかも、「カタルリズム」は、当時、2人になる兆しがすでにあって、それでYORKE.さんが作詞をした曲ですしね。

YORKE.「そういう曲の背景を飛び越えたんですよね。〝カタルリズム〟は、最後俺、Ta_2のヴォーカルに乗っかって、〝bling back~〟って声出すじゃん？　あの武道館の瞬間、これは2人の曲だな、と完全に思って気持ち良くやれた。彼の作った曲だし、ずっとR.O.Nくんの影がチラついていた。でもいい意味で昇華できたというか。ありがとうございます、そして忘れないよ、ってね」

■気持ちに区切りがついたんでしょうね。

YORKE.「シングルコレクションアルバムのツアーということで、強制的に振り返ってきて。ツアーを通して、過去を振り返り過ぎて心が痛いことが多かった。途中で、俺もTa_2もイラついている時があったし。見たくないのに掘り返して、みたいな作業は、そんなにしなくていいものだよね。前を見たほうがいいじゃん！ってメッセージをOLDCODEXは出しているしさ。でも、今回過去を自分たちの背中にもう1回乗せてみて、武道館でボンって放り投げた感じがしてね、この先もっと音楽を作りたいな、と純粋に思えたから。過去にこだわってるものをパッケージするんじゃなく、早く新しいものを作ろうというモードに入った」

Ta_2「よく自分たちを知ることができたツアーだったよね。だから嫌なこともいいこともこれまでの道に詰まってたんだな、って思えたし、そういう意味で我が振りを見直す時間だった。その分、ストレスは多かったんだけど、それは自分の原動力にしかならないから」

YORKE.「原動力に変えるまでが大変じゃなかった？　もう嫌だ、またかみたいな（笑）」

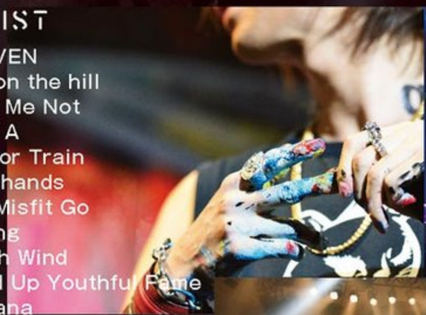
Ta_2「それはあった（笑）。でもツアーファイナルを迎えて、それをバン！と出せたから。自分たちをよく知れた」

YORKE.「そうだね。今は、もっと自分も周りの人も好きになっていて。だって、出会いと別れは生きていれば繰り返すんだから。気持ちよく出会って、別れていこうよ、っていう気持ちにしっかりとなれたな」

■わだかまりが残っていたら、いい別れではないですしね。解消されたから、最後はあんなにハッピーな空気だったのかもですね。

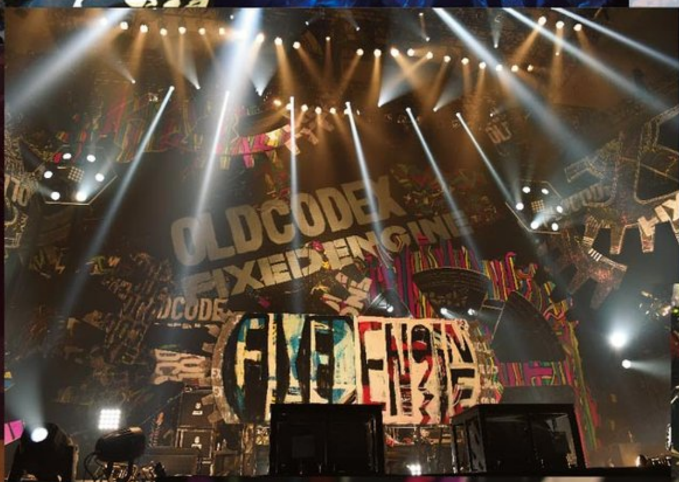
Ta_2「そうそう。だから武道館のアンコールの最後を、〝Eyes in chase〟でと決めていたし。あれって自分たちは早く先に行きてぇっていう感覚の表われでもあるんです。改めて考えると、本当に振り返りの時間が終わりました、っていう感覚が大きいね」

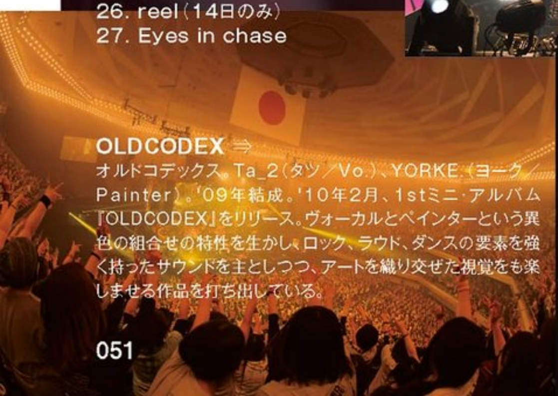
Ⓑ















SET LIST

01. HEAVEN
02. flag on the hill
03. Lead Me Not
04. Feed A
05. Meteor Train
06. Cold hands
07. The Misfit Go
08. Calling
09. Harsh Wind
10. Dried Up Youthful Fame
11. Lantana
12. Milestone
13. bund
14. 〔Blue〕
15. Aching Horns
16. Deal with
17. The Experience
18. Scribble, and Beyond
19. Anthem
20. WALK
21. night flight
22. Landscape
23. カタルリズム
24. Rage on

ENCORE

25. kick out
26. reel（14日のみ）
27. Eyes in chase

OLDCODEX ⇒
オルドコデックス。Ta_2（タツ／Vo.）、YORKE.（ヨーク／Painter）。'09年結成。'10年2月、1stミニ・アルバム『OLDCODEX』をリリース。ヴォーカルとペインターという異色の組合せの特性を生かし、ロック、ラウド、ダンスの要素を強く持ったサウンドを主としつつ、アートを織り交ぜた視覚をも楽しませる作品を打ち出している。



IKE Vo.

SPYAIR



UZ G.

SPYAIR ARENA TOUR 2016-2017「真冬の大サーカス」
2017.1.21 東京・国立代々木競技場第一体育館

SPYAIR史上初の国立代々木競技場第一体育館2デイズは、“サーカス”をテーマに掲げ、
年末から開催してきたアリーナツアーのファイナル！　冒頭の華やかで煌びやかな演出から始まり、
IKEとUZのフライングや爆笑アニマルムービーからのバトルチューン、
和やかなトーク＆アコースティックコーナー等、アリーナクラスならではの
見事なエンターテイメントで楽しませてくれた夢の一夜をレポート！

Text ⇒ 大西智之



MOMIKEN B.



KENTA Dr.

1月21日、国立代々木競技場第一体育館に入ると、どでかいセットがある。サーカステントをモチーフにしたそれは、天井部が尖った三角屋根になっている。

〝SPYAIR ARENA TOUR 2016-2017『真冬の大サーカス』〟。2016年年末から5公演のアリーナツアーに彼らが掲げたタイトルだ。そして今夜は、SPYAIR史上初の代々木競技場第一体育館でのワンマンライヴ。2daysの2日目であり、ツアーファイナルでもある。

ステージの左右に延びたウイング。ステージの真ん中からアリーナ席を突っ切って花道が延び、その先端は〝T〟字型になり、ステージと並行する形で左右に通路が伸びている。ステージ奥の壁一面と上手(かみて)、下手(しもて)のウイング上部には極大なスクリーンがあった。そして、会場の上部&後方までビッチリと埋めつくす観客全員の手首には、集中制御のライトが仕込まれたリストバンド、PIXBOMが付けられている。

開演時間になると、ステージ、ウイング、花道にカラフルな衣装を着た大人数のパフォーマーが現われる。客電が落とされ暗闇が訪れた場内に開演を告げるブザーが鳴り響き、ドラムセットについたKENTAがリズムを叩き出す。燕尾服にシルクハット、タイトなグローブをはめた手にステッキを持ったIKEが、ビシッと光沢感のあるベストとジャケットを着たUZとMOMIKENが、パフォーマーで溢れるセンターステージに登場し、演奏する。1曲目はこのツアーのテーマ曲、「C!RCUS」だ。KENTAとMOMIKENが深みのあるビートを生み出す、UZが華やかで少し大

人びたフレーズを弾き、ホーンと共にカラフルに彩る。IKEがウキウキとした歌を弾(はじ)ませる。オーディエンスがつけるPIXBOMがブルー、レッドと色を変えながら光を発し、一人ひとりがキラキラしたエンタテイメント空間の一部となる。ティンパニロールから、すかさず放たれるのは、「EZ Going♬」の軽やかなリズムである。楽しみの音の粒が、いたるところでハジける。SPYAIRがイメージしたサーカスを、参加するすべての人の体の芯まで浸透させていった。

パフォーマーが去り、メインステージにいるのは、ジャケットを脱いだフロント3人と、KENTA、そしてサポートギタリストのtasuku、キーボーディストの高藤大樹。KENTAが大きなリズムを打ち鳴らし、「アイム・ア・ビリーバー」が始まる。KENTA&MOMIKENによる芯のあるリズムが会場の距離感を奪う、UZのギターがアンサンブルに奥行きを与え、IKEのヴォーカルが瑞々しくも力強いメッセージをガツンと打ち込んでくる。音楽に宿る、無敵感が体を高揚させていく。

「代々木、遊ぼうぜ！」、IKEの一言を合図に始まった「現状ディストラクション」ではヘビー&スピーディなロックが響き渡る。生命力を燃焼させて熱を生むヴォーカルが突き刺さる。オーディエンスが声の限り歌っている。今、ここにあるのはSPYAIRの人間性剥き出しの音楽だけだ。

オープニング2曲で、サーカスの雰囲気にどっぷりと観客を漬け、その後はとことん音楽で勝負する。熱くさせる。楽しみの軸にあるのは、演奏と歌とメッセージ。それは演出を加えようが、削ごうが変わることはない。バリエーションに富み、カラフルな彼らのロック1曲1曲こそが、心躍らせるサーカスの演目そ

















Set List

01. C!RCUS
02. EZ Going♬
03. アイム・ア・ビリーバー
04. Last Moment
05. 現状ディストラクション
06. Rock'n Roll
07. JUST ONE LIFE
08. 新曲
09. サクラミツツキ
10. Be with
11. WENDY ～It's You～
12. OVERLOAD
13. Trust your anthem
14. Supersonic
15. 4 LIFE
16. ファイアスターター
17. RAGE OF DUST
18. ジャパニケーション
19. イマジネーション
20. THIS IS HOW WE ROCK

encore

21. 虹
22. サムライハート（Some Like It Hot!!）

SPYAIR ⇒
スパイエアー。IKE（Vo.）、UZ（G. & Prog.）、MOMIKEN（B.）、KENTA（Dr.）。愛知県出身。'05年結成。'10年8月、シングル「LIAR」でメジャー・デビュー。'17年3月29日にニュー・シングル「Be With」がリリースされる。また、夏恒例野外ライヴ『JUST LIKE THIS 2017』が7月29日、富士急ハイランド・コニファーフォレストにて開催決定。

のものというわけだ。

そして、とびきりの演目も用意されていた。5公演すべてに1曲ずつ異なる新曲を彼らは準備していたのだ。

「昨日はしっとりしたのをやったんだけど、今日はひと味違う曲だよね」というIKEの言葉を受け、UZが説明する。

「今日は一番派手な曲。ファイナルに相応しいというか、ドカンドカン！いって、超ハデでイェイ！みたいな」

しゃべりはちょっとグダグダだけれど、口でうまく説明できないからこそ彼らは音楽をやる。打ち鳴らされたのは、前へ進む力と希望の光が鋭く差す、ビカビカの1曲。踏ん張ってきた人生を肯定し、力に変えて、デカイ世界へと行き着く力を与えてくれるナンバーだと感じた。

新曲の余韻を味わうざわめきが残る場内に暗闇が訪れ、1本の光がUZを浮かび上がらせる。シンセの音色とそっと鳴らされるシンバルの細やかなフレーズ、その中心でUZが奏でるギターの旋律は泣いていて、大切で柔らかな記憶を刺激し掘り起こす。そしてそのギターは「サクラミツツキ」のフレーズへと変わる。IKEの歌が、春の夜に孤独を抱えながらも欠けた月をひとり探す人を描き、琴線を撫でていく。スクリーンではサクラの花びらが舞い、場内では無数のピンクの光が揺れていた。

昨日やったという、しっとりした曲が「Be with」というタイトルで、次作のシングルとなることをIKEが告げる（3月29日リリース）。そして彼は続ける。「今日も演奏させていただきたいと思います」。ピアノとストリングスの響きにIKEの素直な歌が乗る。それはスローで温かな幸福がたゆたう曲だ。アコギが足す人の体温、丁寧に紡がれるKENTAのドラムとMOMIKENが奏でるベースの丸い音が、長く時を過ごしたいと願う大切な人への気持ちを運んでくる。その感情の高まりをUZのギターが盛り上げていく。それに呼応してIKEの愛おしさがこぼれる歌が力を帯び、代々木競技場第一体育館いっぱいに広がっていった。

MOMIKENひとりがステージに立っている。雷鳴のような音が轟き、彼がリズムを刻み始める。手首では、PIXBOMがリズムに合わせて点滅する。そこにKENTAが参戦し、ベースとドラム、観客の手元の照明によるセッションが展開していく。サポートミュージシャンも加わり、音と音の会話が曲のうねりとなっていった。と、そこにサイレンが鳴り響き、照明が会場中を赤に染める。「OVERLOAD」のスリリングな演奏が響くなか、ステージセット上部から、IKEとUZがワイヤーアクションにより、フライングで登場。IKEはヘッドセットマイクで歌い、UZはギターをストロークしながら、花道の先端まで宙を飛んでくる。その姿勢がやたらとスタイリッシュに決まっていてニクいくらいだ。そして、恒例化しつつある、彼らの夏の野外ライヴ『JUST LIKE THIS』でもSPYAIRというバンドが、エンタテイメント性をラクに飲み込む存在だと重々知らされてきただけに、飛び道具的な演出にもっと！とワクワクしている自分に気づく。彼らの魂は本当に柔軟だ。スクリーンに本格的なネイチャードキュメンタリーが映し出されたと思えば、本物のパンダの映像に「みんなからすごく大事にされてるなぁって感じますね」とIKEがアフレコ、狼に「常に時代が俺を求めている気がしますね」とUZが言葉を当てる。縄張り争いからディスり合いの果てに勃発したのは、パンダの着ぐるみを着て花道に現われたIKEと、ギターを置いた狼の着ぐるみ姿のUZとの、ヴォーカルVSラップバトルだ。曲は「Trust your anthem」である。ユーモアたっぷりの見てくれに反して、鋭いラップと流麗なヴォーカル、鋼のように研ぎ澄まされたサウンドが交錯し、激ヤバな音楽を展開する。観客のテンションを煽り立てる。そして加速度を増したライヴは、視覚と聴覚から刺激を連射する。

IKEがステージを去り、UZが歌う「4LIFE」では、シンプルなロックバンドの成り立ちが新鮮で、そこで紡がれる離れた友を思う気持ちが、発表当時とは別のニュアンスでストレートに届いてくる。幾本もの火柱が上がった「RAGE OF DUST」では、タフなサウンドを牽引するスネアの響きと、ベースの存在感に心が釘付けになる。「ジャパニケーション」で花道に進み出て、その先端でヘッドバンキングをかました、IKE、UZ、MOMIKEN。その直後のUZがスクリーンに映し出されると、彼のVシェイプのギターのヘッドには、小さなくす玉が吊されていた。IKEが紐をひっぱっても割れないという茶目っ気を底上げするハプニングを経て、UZが強引に割って出てきたのは、お約束化しつつある「次はイマジネーションだよ～♥」と書かれた垂れ幕。花道に横付けされたトロッコに乗り込んだ3人は、「イマジネーション」を演奏し、歌いながらアリーナを巡る。

炸裂するエンタテイメント、楽しみに満ちた時間にも終演が来る。ステージに戻ったIKEが客席に一言一言語りかける。

「これからもしっかり胸を張ってロックバンドをやっていきます。ロックバンドをやることって何か知ってる？　ライヴやって、音源出して、みんなと音を使って遊ぶこと、ただそれだけ。俺は人生を賭けて、このSPYAIRというロックバンドをやり続けていこうと思います。俺たちは昔から何も変わってない、馬鹿なロックバンドだ。ラストに残した曲はその真髄、気持ちを込めた曲です」

IKEが言うその曲は、「THIS IS HOW WE ROCK」である。UZがブチ鳴らすストロングなギターリフが響く。〝THIS IS HOW WE ROCK〟、IKEが観客が歌う。シンプルなリズムがガッツリと曲のボトムを支える。ロックバンドとしての〝誇り〟を掲げて鳴るその音楽は、空間が広がった分だけ、共に歌い心を通わせた人の数だけ、デカくタフに轟く響きを持っていた。

＊

すべての演奏が終わったステージでIKEが、今年も7月29日に、富士急ハイランド・コニファーフォレストで『JUST LIKE THIS 2017』を開催することを告げる。その場所でも、動員数が増えた分だけタフになったSPYAIRのロックが聴けることだろう。それは、彼らが掲げる東京ドームまで続いていく。今夜、それだけの懐の深さとパワーを秘めていることを示したし、もちろん4人はバンドとして、ミュージシャンとして成長する余力も残しているのだから。B



2017年、第1弾となるシングル「ラストコール」が3月15日にリリースされる。
映画『サクラダリセット』主題歌として書き下ろした表題曲を筆頭に、Vo.山村隆太、G.阪井一生にロングインタビュー。
山村が出演中の月9ドラマや、5月に行なわれる武道館ライヴについてなど、旬な話題を含め、じっくり語ってもらった。

Text ⇒ 宮本英夫

■もうね、欠かさず観てますよ。月9（ドラマ『突然ですが、明日結婚します』）を。

隆太「その話はいいです（笑）」

■いや、しますよ（笑）。そもそも、俳優をやろうと決めた理由は何だったんですか。

隆太「やりたかったんですよ。ここ1年ぐらい話をしていて、オーディションに行ったこともありました。30代から苦手なものを始めようという意識があって、今まで自分が好きなことや、得意なことばかりやってきたので、そうじゃないことをやるほうが、生きてて面白いなという好奇心ですね。マラソンもそうですけど、演技もそうで、挑戦してみて、無理なら無理でいいし。自信はなかったけど、でもやってみると楽しいですね。セリフひとつとっても、裏にある感情とか、たとえば〝嫌い〟という言葉でも、〝好き〟という思いを持って言えば、全然変わって聞こえるし。言葉の奥行きというものを、作詞をしてる身としては、もっと考えなきゃいけないなと思いましたね」

■なるほど。音楽と演技はつながっている。

隆太「そうですね。これで何も得ずにいたら、もったいないので」

■バンドとしては、山村隆太の挑戦を、全面的にバックアップしている？

一生「いいんじゃないですか。人気出るし」

■アハハ。それはまた率直な。

一生「そこはでかいですよ」

隆太「一生のツイッター、フォロワーが増えてるしな」

一生「まったくflumpoolファンじゃない人が、この人のツイートは面白いって、フォロワーがどんどん増えてる。この絡んでる人、面白いって（笑）」



■でも最初は、びっくりしたんじゃないですか。「俳優やる」って。

一生「いや、最初、うれしそうに言ってきたんですよ。急に〝山村さんと呼べ〟って」

隆太「（笑）〝ナミダリセット〟のレコーディングの時だな」

一生「〝月9や〟って、ドヤ顔で。あのドヤ感はすごかった」

隆太「そんな顔してないわ！（笑）」

一生「元気も、なんだかんだ、観てると思うよ。〝絶対観ない〟とか言っておいて、たぶんこっそり観てる」

隆太「かわいいとこ、あるからな。めっちゃ内容を知ってる（笑）」

一生「僕も最初は、どこに茶々入れようかな？って、仕事みたいにツイッター片手にやってたんですよ。でも最近、観ながら、自分がちょっとキュンキュンしてるのが嫌になるんですけど」

隆太「ハハハ（笑）」

一生「観始めると、面白くなってくるんですよ。こんな近い奴が、気持ち悪い標準語で演技してて（笑）。でもなんか〝わかるな〟みたいな、キュンキュンしてて」

隆太「感情移入してる（笑）」

■ドラマの展開がこれからどうなるのか、楽しみです。では音楽の話に行きますか。ニュー・シングル「ラストコール」は、カウントダウン・ライヴでやってましたね。カップリングも含めて、あの時点では完成していたということ？

一生「そうですね。できてました」

■これは映画『サクラダリセット』の、前編と後編を通しての主題歌ということで。

大事なのは“今”であって、今まで忘れてきたものも、忘れられないものも全部ひっくるめて、今に価値を見つけること。過去を否定するんじゃなくて、そこに新しい価値を足していく

一生「初めに言われたのは、爽快で、スケール感があって、ストリングスが効いたような曲を、ということだったので。flumpoolはストリングスを使う曲も多いし、それが武器とも思うし。でも逆にそれをメインにした曲もあんまりないなと思ったので、ストリングスをメインに作ってみようかなと思いました。アレンジ自体は、キャッチーで爽快なんですけど」

■テンポはゆっくりだけど、ビートが強い。

一生「でもメロディは感情的。いい意味で、アレンジとのギャップ感を考えながら作りましたね」

■何曲か出して、決めてもらったんですか。

一生「サビが違うとか、何パターンか出しました。でも方向性は、最初から決まってました」

■そういえば、1年くらい前にお邪魔した一生さんのプライベート・スタジオ。あれから、機材は進歩したのかな。

隆太「だいぶ変わったよな」

一生「サウンド&レコーディングという雑誌の企画で、毎月機材を買って、作業部屋をレベルアップさせようというのをやってるんですけど」

■いい企画じゃないですか。

一生「でも全部自腹なんですよ（笑）。しかも値段も教えてくれない。この間もマイクを何本か選んでもらって、聴き比べたんですけど、むっちゃ怖いんですよ。高いのはわかってるんで。判断するのも、これはめっちゃいい音するけど、めっちゃ高いんじゃないか？って、逆に余計なことを考えるんですよ。あれは怖い」

隆太「なんで教えてくれないの？」

一生「わからん。ゲームみたいになってる。値段で考えるな、音で感じろ、みたいな。完全に値段で考えてるんですけど（笑）」

■アハハ。ダメじゃん！

一生「結局、〝まだスティングしか使ってない〟とかいう、日本にはまだ入ってないというマイクを買うことになって。めっちゃ高くてビビりましたけど。まあでも、おかげで環境はだいぶ進化しました。音も良くなってきたし、やりやすくなって、楽しくなってきましたね」

■今回の「ラストコール」も、その恩恵が生かされていると。隆太さん、曲の第一印象は？

隆太「すごくいいなと思いました。映画の最後に流れるということもあって、イントロのインパクトや、AメロやBメロのシリアスな部分や、でもどこかメロディに色気があって、大人になったflumpoolを感じたり。それは、歌でも色濃く出したいと思った部分なんですけど。サビはいろいろ変わりましたけど、最初からいいと思いました」

一生「大人っぽいのは、確かにそうかも」

■歌詞は、原作のストーリーを読んで書いたもの？

隆太「そうですね。大変でした」

■かなり複雑なストーリーというか、要素の多い作品だと思うので。その中から、どんなキーワードを選んだのか。

隆太「〝忘れない〟というのが、ひとつのキーワードでしたね。主人公は、忘れられない過去を持っているんですけど、自分自身にも忘れられないことはたくさんあるし、過去を美化したり修正したり、ごまかしながら生きてきてると思うんですよ。人間は、すべてを背負っては生きていけないと思うので。それは悪い記憶もそうですけど、いい記憶もそうで、たとえば今僕はバンドで音楽をやってますけど、始めた当初の衝動とまったく同じものが今もあるか？というと、違うと思うので。当時見ていた夢と、今見ている夢とでは、どこかでつじつまを合わせてきたところがあると思うし。嫌な過去を忘れたいのはもちろんですけど、いい過去としての自分の夢も、どこかで変えてきたような気がするんですよ」

■はい。なるほど。

隆太「そこで、〝忘れない〟ということはすごく大切だと思うんですね。〝こういうふうになりたい〟と思っていたあの頃の自分が、そのまま今もいたら、どういうふうに考えるだろう？とか。忘れることも大切だけど、過去の自分が夢見た瞬間や、情熱や、そういうものをどれだけ持てているか？というと、やっぱり持ててないと思うんですよ。じゃあどうするんだ？という時に、大事なのは〝今〟であって、今まで忘れてきたものも、忘れられないものも全部ひっくるめて、今に価値を見つけること。過去を否定するんじゃなくて、そこに新しい価値を足していくこと。という意味で、今以上に間違ったとして、常に強く自分を前に進めていく気持ちが大切だなと思ったんで、そういう気持ちをこの歌詞から感じ取ってほしいと思って書きました」

■そして結果的には、〝未来への願い〟という、ポジティブなメッセージになっている。

隆太「そうですね。今歌っているのは、明日のためだと思うし。明日の自分のために、今以上に求めていくという気持ちが、今の自分にとってすごく大切だなと思います」

■自分の歌ですね。映画の主題歌ではあるけれど。

New Single
ラストコール
2017.03.15 Release
初回盤 CD+DVD ¥2,000（tax out）
通常盤 CD ¥1200（tax out）


初回盤


通常盤

01. **ラストコール**
02. **ナミダリセット**
03. **キズナキズ**
初回盤 BONUS TRACK
（from flumpool COUNTDOWN LIVE 2016→2017「FOR ROOTS」～シロテン・フィールズ・フォーエバー～）
04. **花になれ**
05. **MW ～Dear Mr. & Ms. ピカレスク～**
06. **大切なものは君以外に見当たらなくて**
通常盤
04. **ラストコール**（Instrumental）
05. **ナミダリセット**（Instrumental）
06. **キズナキズ**（Instrumental）

隆太「そうなんですよ。映画の世界観に合わせて、ひとつのテーマに絞ることもできたんですけど、この曲はそうじゃなくて、自分の気持ちを映画の世界観に寄せていこうと。主人公と自分の気持ちとの共通点を探して、それを伝えられたら、自分たちが歌う意味があると思ったので」

■ちなみに「ラストコール」というタイトルは、どこから？

隆太「これは一生が考えました」
一生「僕のつけた仮タイトルだったんですよ。なんとなくテーマから連想して」
隆太「そのまま提出したら、映画のプロデューサーがすごく気に入ってくれた。過去に戻って、もう一度未来を始める時の言葉として、〝ラストコール〟というのはぴったりだって」
一生「奇跡が起きました」

■カウントダウン・ライヴで初披露した時に、生で聴きましたけど。すごくライヴ映えする曲だなあと。スケールが大きくて。

隆太「良かったですね。カウントダウンというのも、1年の最後の日だし、次の年につなげる日という意味でも良かったと思います。〝ムーンライト・トリップ〟と〝ラストコール〟を2曲並べてやったんですけど、そこがライヴの中心でもあったので。すごく映えましたね」

■そして、カップリングでもう1曲。「ナミダリセット」は、映画『サクラダリセット』の、後編のほうのエンディング・テーマ曲。これは同時に作っていた？

一生「まず、〝ラストコール〟を作ってからですね。ふわっと、聞いてはいたんですよ。〝後編の曲も頼まれるかも〟って。それで、〝ラストコール〟を作ってから、こっちも作り始めました」

■こっちは「ラストコール」よりはもっとスローで、正統派のバラードになってます。

一生「久しぶりに、じっくりとメロディを考えました。『EGG』（前アルバム）もそうですけど、最近はずっとチャレンジしてきている中で、シンプルなきれいなメロディを作ってみたいと思って。ピアノと歌だけで成り立つようなものにしたくて、作っていきました。最後に、子供の声でコーラスが入ってるんですけど、それは映画のほうの要望もあって入れてみました。やってみて、すごくハマりましたね。久しぶりに、ザ・バラードができた気がします」

■確かに。久しぶりな気がする。

一生「最近、バラードって作ったっけ？」
隆太「バラードは久しぶりかも」
一生「こういうJ-POPなバラードは、久しぶりに作ったかもしれない」

■初期の頃は、けっこう多かったですけどね。「Over the rain ～ひかりの橋～」とか。

一生「そんな感じの、シンプルでわかりやすいバラードですね。最近は洋楽をモチーフにした曲が多かったんですけど、そういうものはまったくなしに、ザ・日本という感じ。日本人の気持ちに浸透していくだろうという楽曲を作りました」

■この曲は、最初に聴いた時の印象は？

隆太「いいと思いましたよ。映画のプロデューサーの方も、安心感があると言っていたし。物語が終わって、一段落した感じがすごく出てるんで。居酒屋で飲んだ後の、味噌汁みたいな」

■そのたとえはどうかな（笑）。

隆太「ちょっと違いますけど（笑）。あったかくて、ほっこりするような。日本人で良かったと思えるような、安心感のある曲になるんだろうなと思いましたね。flumpoolの根っこの部分には、メロディの良さと、歌謡曲的な情緒が、すごく詰まっているので。いい曲だなと思いました」

■この歌詞も、映画の世界観に寄り添うように？

隆太「そうですね。〝涙〟というキーワードがあって、後編では、主人公のケイが流す涙がすごく意味を持ってきたりするので。涙を流す瞬間って、たとえば友達が泣いていたり、恋人が泣いていたり、親が泣いていたり、そういうシーンってずっと胸に残るじゃないですか。その涙をぬぐうことであったり、大切にすることであったり、そのためにみんな生きている。映画の中の咲良田の街でも、争いやいろんなことが起こるんですけど、僕らの周りでも起こるじゃないですか。誰もが、自分や、家族や、友達を守るために生きている中で、いろんなことが起こるけど、でも誰も間違ってはいなくて。その正しさというのは、矛盾しているようですけど、〝それが人間だよね〟って、笑って言えたらいいなというか」

■ああ。なるほど。

隆太「人を傷つけるのも人だし、人を守るのも人だし。その矛盾というものを、歌にできたらいいなと思って書きました」

■ここにも〝未来〟というワードが出てくるんですね。やはり「ラストコール」と「ナミダリセット」は、つながった世界観を持ってると思います。

隆太「そうですね。そこは、作品に寄り添いたいなと思いました」

■映画、楽しみにしてます。特に、最後がどうなるのか、めっちゃ興味あります。

隆太「それは、言えないです（笑）。この映画は、悪者がいないのが、面白いと思うんですよ。みんなが誰かを守ろうとして、人を傷つけることはあるけど、悪者というのはいない。こういう争いを描く物語って、悪がいて、それと戦うというものが多いと思うんですけど、そういうシーンはなくて。でも自分の信念を貫くために、それぞれがぶつかり合って、物語が進んでいくんですけど。でも、最後はたぶん、ほっこりすると思いますよ」

■ああ、それはいいですね。

隆太「争いがないのが、いいと思います。監督も言ってましたけど、この映画の登場人物は、みんなが優しいんだって。その根っこには、自分の大切な人を守りたいという、当たり前の感覚があって、それに基づいて毎日を生きている。それで最後はどうなるのか？というのは、お楽しみにということで」

■みなさん、ぜひ劇場でご覧ください。そして、このシングルにはもう1曲入ってます。「NHKみんなのうた」で、2～3月度にオンエアされている「キズナキズ」。

隆太「オンエア、観た？」

一生「観た。『魔女の宅急便』みたいな感じだった。いや、違うな、『千と千尋の神隠し』？」

隆太「全然違うよ（笑）。何をもとに言ってるの」

一生「引っ越して、どうのこうのみたいな。…『となりのトトロ』や！」

隆太「ああ（笑）。ちょっと田舎っぽい感じで」

■アニメなんですね。この曲は、最初から「みんなのうた」で流れることを意識して作ったもの？

一生「なんとなく、モチーフはあったんですよね。〝みんなのうた〟の話をいただいて、それをしっかり曲にしてみようと思いました。バンドとしては、今はこういうモードではないんですけど、みんなが歌いやすいものを作れたらいいなと。いい意味で、引っかかりが少ないというか。そのぶんアレンジでは、ハネた感じのグルーヴにして、ちょっと凝って作ってみました。久しぶりにこういう曲を作って、面白かったですね」

■それはさっきの「ナミダリセット」の、王道J-POPバラードを作る感覚と似ている？

一生「ちょっと違いますね。ストリート・ライヴをしていた頃に、作っていた曲の感じというか」

■ああ。なるほど。でも今聴くと、新鮮ですよ。

一生「そうですね。今はいろんな曲を作っているので、これじゃなきゃダメとか、そういうことを考えないようにしてます。こういう曲も含めて、いろいろチャレンジしていきたいですね」

■これは、歌詞を書く時には、「みんなのうた」的な世界観を意識して？

隆太「もう完全にそうですね。2～3月に流れることが決まっていたので、卒業シーズンの、〝出会いと別れ〟ということをテーマにして書きました。自分も小学校、中学校、高校と、いろんな卒業があって、出会いと別れを経験してきて、未だにつながっている絆もありますし。何が大事なのかというと、歌詞の通りなんですけど、悲しい別れがあっても、その傷跡が、人と人とをつなげてくれてるんだなと思うんですね。そっちのほうが、自分には強く残っているというか。自分の傷を自分以上に知ってくれてる人もいて、そういう人には絆をすごく感じますね」

■はい。

隆太「絆というと、抽象的な言葉で、あまり簡単に使いたくはないんですけど。このシーズンだからこそ、深く掘り下げたいなと思って、書きました」

■絆と、傷で、「キズナキズ」。実感があって、イメージの広がる言葉です。

隆太「カップリングになるのが、もったいないなと思いますね。それぐらい、好きな曲です」

一生「カップリングでしょ。どう考えても」

隆太「いや、こういう曲がいいんだって」

■隆太さんに一票（笑）。いい曲ですよ。

一生「最近わかったことがあって。デモを作る時に、英語で歌える曲と、日本語でしか歌えない曲があるんだけど、これは日本語でしか歌えなかった」

隆太「そういうことでしょ。日本の歌謡曲ということで」

一生「〝ラストコール〟は英語で歌えるけど、〝ナミダリセット〟と〝キズナキズ〟は英語では無理。この2曲は、日本語でノリで歌詞を載せて歌ってました」

隆太「〝大切なものは君以外に見当たらなくて〟も、デモは英語だった」

一生「そうそう。符割りが変わって来る」

隆太「日本人なんだから、日本語で歌えや」

一生「そうなんだけどね。最近日本語が多いよ」

■わかりました。2017年のスタートにふさわしい、濃いシングルだと思います。そしてこのあと、5月には久しぶりに日本武道館2DAYSがありますね。まだ、内容については考えていないかもしれないけれど。

隆太「考えてますよ」

■スペクタクルになるのか、シンプルになるのか。どっちになりそうですか？

隆太「どっちもありますね。極力シンプルにするという、『EGG』ツアーから貫いていることは変えずに、それだけじゃないものを見せたいというか。どこまでできるかわからないけど、もうちょっと、足したいなと思ってます。バンドとしての骨太感は、変わらずに追求しつつ、もう一回ライヴのイメージを作り直すような……タイトルの〝flumpool 8th tour Beginning Special「Re:image」〟というのも、〝flumpoolのライヴってこんな感じでしょ？〟というイメージが、自分たちの中でも定着化しているところがあるので。それを壊すのは簡単ですけど、新しいものを追加して、古いものに新しいイメージをつけていくことをしたいので。ライヴの新しい価値、新しい見方を提示しようと思ってます」

■楽しみです。

隆太「武道館は、三度目なので。これまでの武道館とはまったく違うものにしたいので、会場の使い方も含めて」

■初日が〝～ラストコール～〟、2日目が〝～ナミダリセット～〟と、サブタイトルも変えているので。たぶんセットリストも変わるのかな？と。

隆太「両日来てください（笑）」 B



flumpool ⇒
フランプール。'07年1月結成。'08年10月に配信シングル「花になれ」でメジャー・デビュー。'15年3月16日に4thアルバム『EGG』をリリース。'17年5月20日、21日に武道館2daysライヴを開催。現在、山村隆太は1月スタートのフジテレビ系 月9ドラマ『突然ですが、明日結婚します』に出演中。



大原櫻子
ひらり

昨年6月の2ndアルバム『V(ビバ)』ぶりのリリース。
6thシングル「ひらり」が3月8日に届けられます。
桜の季節に、ちょっぴり切なく、優しく寄り添う名バラードが生まれました。
彼女の思い出も重ねながら、今作についてと、まさしく“春”なお話を。

Text ⇒ 前原雅子　Photo ⇒ 山本さちこ　Hair & Make-Up ⇒ 八戸亜季子　Styling ⇒ 佐藤和佳



■2ndアルバム『V(ビバ)』のツアーが終わってからのことをうかがえますか。ツアー後、まずは舞台があったんですよね。

「武道館2daysが終わって、次の次の次の日くらいから舞台の稽古が始まったんですけど。演出家がフランスの方で、みんなで作品を作っていくような舞台だったんですね。なので、なんか稽古というよりワークショップみたいな感じで始まって、12月から1月末まで舞台をやっていました」

■その舞台は大変でしたか。

「もぉ大変〜〜。前回の『地球ゴージャス』が肉体的にも精神的にも、けっこうきついものがあって。初舞台で、しかも64公演ありましたから。それで鍛えられたせいか、まだ、なんとか大丈夫でしたけど。ただ、どの舞台もそうかもしれないですけど、ホント正解がなさすぎて……。しっくりくる芝居をしても正解じゃないし、しっくりこない芝居は正解じゃないのかっていうと、そういうことでもないし、みたいな。すごくこう……日本の演劇にはないような感覚が今回はカンパニー全体にあって、ちょっと不思議な感じでした。でも武道館を経験して、ちょっと日本にはないような変わったお芝居に挑戦させていただいた結果、すごく相互作用があるなって改めて思いましたね」

■歌と芝居との相互作用?

「はい。自分自身の精神的なバランスが、両方あることによって保たれてるような気がしました。たとえば武道館でのライヴは、何千人っていう人に見守られて歌って、自分からエネルギーを出していくというものだったりするけど、舞台はキャスト陣とのコミュニケーション、キャッチボールがないとできないことで。仲間がいて助け合える、自我をなくして作品を作っていくというものだから。そこがちょっと歌と舞台の違うところなのかなって、改めて思いましたね」

■するとシングル制作だったわけですね。

「そうですけど、ちょっと落ち着いてからの制作だったので。しかもこの曲をもらったのは1年半くらい前のことなんです。いつかの桜のシーズンに出せたらいいねって言っていて。私の名前も大原櫻子だし大事な曲にしたいなぁって。今回、映画『チア☆ダン〜女子高生がチアダンスで全米制覇しちゃったホントの話〜』の主題歌に決まったので、リリースすることになったんです」

■この曲を初めて聴いたときのこと、覚えていますか?

「亀田(誠治)さんの〝櫻子ちゃんには桜の歌が書きたかったので〟というメッセージとともに、初めて聴かせていただいたんですけど。切ないなぁって思いながらも、優しくてあったかいなぁって感覚もすごくありましたね。なんていうんでしょう……、大人の目線から、なんかこう学生時代の青春の思い出を振り返るような歌だなぁって思いました」



切ないなぁって思いながらも、優しくてあったかいなぁって感覚もすごくありましたね

■聴いていると、〝卒業〟みたいなことが頭をよぎりますね。

「私も思い出しました。本当に私自身の母校にぴったりな曲だなって。校庭に桜の木もあったし、写真を撮ったりふざけあったりしたし。友達との、いつもと同じやりとりが切ないっていうのが、まんま実体験としてあったので。それでレコーディングの前日に母校に行ってみたんです。実際に母校を歩いて、一歩一歩噛み締めながら思い出を身体に染み込ませてからレコーディングしようって思って」

■差し支えなければ、どんな学校だったか教えていただけますか。

「一貫教育の学校だったんです。だからもう思い入れが深いという次元じゃないんですよね。とにかく幼稚園から毎年毎年、ずっと同じ場所で同じ景色を見ていたので。先生とかも、気軽に会えるし。幼稚園の先生にもすぐ会えちゃう(笑)」

■歌詞のように、同じ景色を見ていながら、自分が変わると景色が違って見えることもありましたか。

「それこそレコーディングの前日に行って教室を見たとき、〝あれっ?! こんな小っちゃかったっけ?〟って思いました。今とそんなに身長も変わんないのに、よくこんな小っちゃい椅子に座って勉強してたなって(笑)。それはすごく思いましたね。あとは部活も見に行ったの






で、いろいろ思いました」

■例えばどんなことを？

「中1から水泳部でクロールをやっていたんですけど。学校行く前に早起きをして家の周りを走ったり、生活が部活中心に回っていたんですね。も～ぉ部活命みたいなところがあって。なんでそんな頑張れてたんだろうなぁって思うくらいだったんです。水泳選手になりたいわけでも、泳いだからって何かがもらえるわけでもないのに、なんかものすごく一生懸命頑張ってて。でも、こうして社会に出てお仕事させていただくようになると、何かをやって結果が生まれるっていうことが当たり前になってくるじゃないですか。だけど、久しぶりに学校に行ったとき、あぁ私、泳ぐことがただ単に好きだったんだなぁって。それだけで続けられてたんだなぁって思ったんですよね」

■もちろん今も好きだからやっていることではあるけれども。

「そうですね。だけどお仕事は求められて、やらせていただいているものだと思うので。でも部活は求められてるわけじゃないから。求められてないのにやる、そのがむしゃらさ、ひたむきさってすごい宝石だったなぁ、ホントにやっててよかったなぁって思ったんです。なんか今になって、いろいろ考えさせられることでもあって。……だから、いいきっかけでした、この曲は」

■ヴォーカル録りはどうでした？

「みんなと一緒に卒業ソングとしても歌える曲なので、ぜひいろんな方に歌ってもらえたら嬉しいなと思う半面、難しいな……って思いながら歌っていました。すごくゆったりした、メロディもそんなに難しい曲じゃないので、普通に歌ってくださいって言われたら、普通に歌えちゃう曲なんですね。でもだからこそ中身を埋めないと、作品としてどうなんだろうっていう思いがすごくあって。そこはやらなきゃいけないことだと思うので、私自身のなかではすっごい難しい曲でした」



■特にどのあたりが難しかったですか。

「……サビよりもAメロ、Bメロとか。あんまり他の楽器の音とかが聴こえてこない部分なので、声で勝負するじゃないですけど、そういう静かなときにどういう風に声で表現したらいいんだろうとか、すごく考えましたね。例えば〝切ないぃぃぃ～～〟っていうところで、〝い〟が切れるまでにどれだけ切なさを込められるんだろう、とか」

■中低音から高音になるまで声が滑らかに繋がっていく感じが、とっても綺麗ですね。

「嬉しいです。でも私、あんまり〝ここ、裏声にして〟とか考えて歌ってないんです。高い音が出ないから声が勝手に裏声になるみたいな、ちょっと身体まかせみたいな。そんな感覚で歌ってるところがあるかもしれないです」

■そして2曲目の「青い季節」は映画『チア☆ダン』の挿入歌で。これはちょっと爽快な感じの曲ですね。

「この曲の歌詞は、映画で主演をしている広瀬すずさんと一緒にイメージを考えていったんです。映画を撮影してどうだったかっていう想いと、広瀬すずとして青春時代をどう捉えているかっていう話を電話で1時間くらい話して。それをまとめて書いたものを、作詞をお願いした、いしわたり（淳治）さんに渡して、みたいな感じで歌詞ができました」

■そのほうが映画にも沿った、いい感じのものになると思って？

「やっぱり実感が欲しいので。自分で歌詞を書いてる人は当たり前ですけど、書いたものに実感があるじゃないですか。でも私の場合は歌詞を書いていただいてるので、実感がないと歌えないかなと。それは今回に限らずいつも、なるべく実感を持ちたいと思っているんですね。イメージを考えるということを二人でやったというのは、今回が初めてで。すっごい真面目な話になっちゃったりして、それも含めて楽しかったです」

■二人で話したことが、具体的に歌詞のなかに入っていたりするのですか。

「入ってます。特に〝明日が見えないのは 今が眩しいから 輝き過ぎてる この瞬間だけ見つめて〟っていうところには、すずからの発言の要素が入っていますし。〝はじける汗の雫 一粒の涙を 笑顔の奥 隠しながら〟には、私がすずを見たときの想いが入っているなぁと思いましたし。この曲では自分のことというより、彼女のことを考えたときに思ったことを連ねていったんですけど。でもそこに自分と共感しているものがあったのかなぁとも思いますね」

■3曲目の「Coming Soon!!!」と4曲目の「Realize」はリズムの感じが、とっても気持ちいいですね。

「この2曲は聴いた瞬間〝好きー！　絶対入れたーい！〟と思ったんです。なんかこう歌いやすいし、耳に入りやすいメロディだったので。もうサビを聴いて、惚れましたね、両方とも。カラオケで歌いたいな～、ライヴでやりたいな～って。〝Realize〟はなんか可愛いなぁっていう曲だったし、思わず手拍子したくなるライヴに似合う曲だったので。ブラスの感じもすごくよかったし」

■「Realize」はコーラスがすごくないですか？

「あぁ～、そうかも。そのせいか音に厚みも出て華やかな感じがありますよね」

■コーラスを録るのは好きですか。

「……ぅぅー。苦手です。自分の身体に一回取り入れれば好きなんですけど、〝じゃ、さくちゃん、この音やってみようか〟って言われると、〝はぁ………、ちょっと待って……〟ってなる。でもこの曲はリズムが跳ねてる感じもあるのでルンルン！って感じ、しますね」

■「Coming Soon!!!」の男の子目線の歌詞も可愛いですね。

「これはかなり具体的にテーマとかをお伝えして書いていただきました。男の子目線での告白の歌にしたかったので。学校で例えるなら、〝教室の隅っこでメガネかけてガリガリ勉強してる子が、実はすごい熱い想いを抱いてるっていう設定でお願いします〟って。なんか恋愛下手な男の子がよかったんですよね。〝絶対届かないだろうけど、俺、こんなふうに想ってんだよ〟っていうのって絶対可愛いなと思って」

今年もこのあと、作品とかお仕事で、
さらにアタックできたらいいなぁって思っていますね



6th Single
ひらり
2017.03.08 Release
初回盤A CD+DVD ¥1,500（tax out）
初回盤B CD+DVD ¥1,500（tax out）
通常盤 CD ¥1,200（tax out）


初回盤A


初回盤B


通常盤

01. ひらり
02. 青い季節
03. Coming Soon!!!
04. Realize
05. ひらり（instrumental）
06. 青い季節（instrumental）
07. Coming Soon!!!（instrumental）
08. Realize（instrumental）

■今回のシングルは、始まりこそゆったりしたバラードですけど、ラストに向けて。

「どんどんどんどんテンポがあがっていきますよねぇ。歌のテーマ的にも、夢だったり、未来だったり。頑張れーっていう応援だったり、すごくいろんな要素があって。でもやっぱり表題曲がこういうバラードっていうのは、なんか自分らしいかなって思いました」

■そうですか？

「……楽しいことは大好きなんですけど、けっこう真面目に生きていきたいタイプかも、みたいな。そういうとこが出てるかなぁ……、わかんないですけど」

■基本的にちゃんとやっていきたいほう？

「はい、そうなんです。だから、ほ～んとに自分のバランスを取るのが難しくて。でもそのバランスが取れたとき、すごく楽しいなって思う」

■きちんと一つずつ積み上げて。

「そうなんですよね～」

■そうだと、歌に芝居に学生にっていろいろあるから、実際大変じゃないですか。

「そう、忘れがちですけど学校もあるんですよ、こないだ試験も終わったところで（笑）。でも去年はツアーもあって、初舞台もあって、プライベートでもすごくいろいろ吸収できたので。今年もこのあと、作品とかお仕事で、さらにアタックできたらいいなぁって思っていますね」

■これだけ忙しいなか、プライベートで遊びに行く時間なんてあるんですか。

「全～然ありますよ。よくそう言われるんですけど、ちゃんと遊んでます（笑）」 B



大原櫻子 ⇒
おおはらさくらこ。'96年1月10日生まれ。東京都出身。'14年11月、1stシングル「サンキュー。」でソロデビュー。'15年3月に1stアルバム『HAPPY』を、16年6月に2ndアルバム『V（ビバ）』をリリースした。

Sakurako in Spring

桜もピンクももちろんお似合い。
そんな櫻子ちゃんの春トーク♪

■春は好きですか?
「好きです、四季のなかで一番落ち着くし、なんかこう気持ちが改まるかなぁ。花粉がなければもっと好きです」
■予防策は何かしています?
「特別なことはしてないんですけど、とりあえず花粉に効くらしい飲むヨーグルトを飲んでます」
■花粉症だとお花見は辛いですね。
「いや、桜は毎年見に行ってます。けど、いわゆるレジャーシートを敷いてっていうお花見はしたことがなくて。今年はやりたいですね。食べ物を持ち寄って」
■20歳過ぎたから、花見酒もね。
「あ〜、最高〜! いいなぁ。絶対やりた〜い」
■これまでは散歩がてらにお桜見?
「そうです、そうです。桜の花自体は大好きで。枝垂桜も好きですし、普通の桜も好きですね。特に桜って、一斉に咲いて一斉に散ってくところが、ねぇ。散ってる姿も本当に綺麗じゃないですか。私、散る瞬間が一番好きかな。ふわぁ〜って散ってるのを見ると、ほんとに泣けるくらい美しいって思いますね」
■まさに「ひらり」じゃないですか。
「……わっ、本当だ! "ひらり"ですね。あの、わざとじゃないですよ（笑）」
■大原さんのなかでの桜は、その母校の校庭の桜のイメージが強いですか?
「強いですね。1本だけ大っきな桜があって。それをずっと見て育ったので」
■その桜に、卒業式や入学式の思い出が重なっていたりも?
「高校の卒業式は、仮装パーティーみたいな感じだったんですよ。私はシンデレラの格好をして出ました。一応、ドレスは正装じゃないですか。だから無難かなぁって（笑）。だけどドレスを持ってなくて。そしたら友達がシンデレラのドレスを貸してくれて」
■どんな格好をしてもいいんですか。
「全っ然OKです」
■ハロウィンみたいに?
「もうハロウィンよりすごいんじゃないかっていう。本当にすごいんですよ。ラプンツェルの格好で廊下にビヤーって引きずるくらい長い髪の毛にして、それで校長先生から卒業証書もらったりしてる子もいましたから。ふざけ過ぎじゃない?っていうくらいに」
■でも咎められない。
「全然。おめでと〜とか言われてました」
■ちょっと面白い学校ですね。
「変わった学校でしたね」
■中学校の卒業式はどうでしたか。
「……覚えてないですね。というか一貫教育の学校なんで卒業式とか、あんまりないんですよ。同じ敷地内に校舎があるし、高校生になっても友達変わらないし」
■制服がちょっと変わるくらい?
「それもリボンの色が変わるくらい」
■じゃ入学式も、そんなにドキドキではなかったり。
「そうなんです。だから華々しかったのは、たぶん幼稚園のときだと思う。でも入園式のこととかまったく覚えてないので。かといって、そのあとの入学タイミングは普通に"おはよー!"って言い合う感じだったので」
■ところで、バレンタインの時期ですけど、チョコを作ったりします?
「手作りチョコ、小学生のときから毎年作ってます。中学高校のときも女子校だったので女友達で交換するが当たり前だったし」
■お父さんには?
「あげますよ〜、余ってるやつを。"あ、ごめん、失敗したから、はい!"って。でも小1か小2ぐらいの頃に初めて一人で買い物に行って、お父さんにキットカットを買ったんですね。で、"いっつもお仕事お疲れ様、大好き。これからも頑張ってね"みたいな手紙を書いていっしょに置いて寝たんですよ。そしたら翌日、"昨日、お父さん泣いちゃったよー"ってお母さんに言われて。しかも最近になって判明したんですけど、そのパッケージと手紙、取ってあったんですよ、お父さん! もう、えっ……。えぇ……! へぇ———!と思いました（笑）」 B

遊助

流れ

前作「凛」に続き、沖縄感のある温かいサウンドに乗って、歌われる優しい1曲「流れ」が22枚目のシングルとして3月8日にリリースされます。届けられる楽曲はゆったりモードですが、彼の日々や制作意欲はかなり前のめりなようで(笑)。そんな遊助の〝流れ〟について聞きました。

Text ⇒ 山口哲生





■シングル「流れ」が3月8日にリリース。これが2017年一発目の作品になるわけですが、年末年始にゆっくりしたり、リフレッシュできたりしました？

「いや、お正月にちょこっとだけ横須賀に帰ったりはしたけど、それも一瞬だけだったからなぁ。もう一泊もせずに」

■日帰り……！

「でも、ほんとにそれぐらいだね。どこかにのんびりと旅行に行ったわけでもなく、もう今年に入ってからすぐにフルで働いております！」

■じゃあ、三が日終わりぐらいから。

「うん。最近までアルバムをずっと作ってたし、あとはドラマが入ったりもしてたし。だから、結果的に家にいるときも、曲を作んなきゃいけないとか、セリフ覚えなきゃいけないとか」

■なかなかハードですね……。

「せやねぇ……」

■もうちょっとゆっくりしたかったですか？

「いや！　今年は頑張ろうと思ってたから、逆にそうやって提示していただいたほうがいい。忙しいほうが、やってるぜ！っていう気持ちになれるし、時間がない！ってなったほうが、曲を作るときにイメージが降りてくることが多くなったりするのね。時間に余裕があって、まぁいっかみたいな感じでのんびりしちゃってると、何にもインプットしようとしなくなっちゃうし、頭だったり、細胞だったりが制作モードにならないから、逆にいろんな仕事をやってるほうがいい。その分、時間を有効的に使おうって思うから」

■スイッチを入れっぱなしにしておいたほうが、逆にラクというか。

「ラクだね。俺、休んだら本気でダメ人間になっちゃうと思うから」

■なるほど。シングルのお話にいこうと思うんですが、今回の「流れ」はもう去年に制作されていたんですか？

「いや、〝流れ〟は今年に入ってからだけど、カップリングの3曲は去年の秋ぐらいにはもうできてた。今回のシングルはアルバムと同時に制作してたんだけど、なんなら、一番最後に出来たのが今回の〝流れ〟です」

■まさに録って出しな、最新曲なんですね。たくさんの曲がある中から「流れ」をシングルにチョイスした理由というと？　前シングルの「凛」も沖縄感があって、今回もその雰囲気に汲んだものになっていますが。

「そこはたまたまだね。のんびりって言ったら変だけど、落ち着いてゆっくり聴いてほしいなって思ったときに、やっぱりどうしても思い浮かんだのが宮古島だったから。なんか、ふわぁ～っとした春風がそよそよ流れていて、それを感じられるような曲を作ろうっていうのがあって。そのなかで〝大丈夫だよ〟っていうメッセージを込めたら、結果的にこんな感じになったんだけど」

■「凛」もゆっくり聴けるものをとのことでしたけど、モード的にはそういうものを求めていたんですかね。

「いや、そうでもないよ。アルバムには激しい曲もあるから」

■実はアルバム曲を数曲ちらっと聴かせてもらっていまして。今回のシングルはゆったりとした優しい優等生な感じですけど、まぁはっちゃけたものから、オシャレなものまでいろいろあって。

遊助



「はい。今度ちらっとじゃなくてガッツリ聴いてね?」

■もちろんです！　楽しみにしてますので。

「でも、"流れ"は、最初は今の形と全然違ってたのよ。一回全部破棄されちゃって」

■破棄!?

「うん。破棄。アルバムはこういう感じにして、シングルはこういう感じのものにしようって、曲をそれぞれ振り分けてたときに、シングルはこういう感じがいいんじゃない?っていう、スタッフからのオススメがあって。それを書き始めたんだけど、作ったら作ったでダメ出しされて、(スタッフを見て)あの人に」

■こうじゃないんだよね、と。

「そう(笑)」

■元々はどんな内容だったんですか?　ラブソングとか?

「なんか、ラブソングでもないんだけど、自分のヒストリーというか、物語を書いてたら、リアルになりすぎちゃって。俺としても、書いてる途中でなんか違うなって思ってはいたんだけど、それはそれで一生懸命書いてたの。じっくりと、手塩にかけて作ってたんだけど、最終的にやっぱ違うよね?って俺も思って。それでもう、手を合わせて、いってらっしゃい……みたいな」

■成仏してくださいと(笑)。一旦全部破棄したのが今年だったんですか?

「うん。なんなら2~3週間前(取材は2月中旬に行ないました)。もうレコーディングスタジオ押さえちゃってるのに、まだ何もできてないけど、これどうする……?っていうところから始めたんだけど、思い浮かんだら早かったね。2時間ぐらいで書けたんだっけな」

■それは、パーソナルだったものを、もっと普遍的にというか、そういう感じで?

「そうそう。みんなに当てはまるような」

■トラックも変えたんですか?

「いや、変えてない。トラックはこのまんま。だからすごい変な感じなんだよ。自分の中でいろんな肉付けして完全に決めちゃってたから、それをまず一回無にしなきゃいけない作業から始めなきゃいけなかったし、そこが大変で。でも、あれはあれで良い歌詞だったんだけどなぁ……」

■その歌詞って、この先なんらかの形で出てきたりしないんですか?

「一生出てきません!」

音楽って、耳で聴いた音から、自分の目の前にその景色を想像したりとかするけど、そうやってその人が作った世界を膨らませてほしいし、そうやってその人の曲にしてほしい

■残念……。気になりますけどね。そこまでしっかり作りこんだものとなると。形になった歌詞としては、「耳でこちらを見て」っていうフレーズが印象的でした。

「おっ！　嬉しいことを言ってくれるやないか！　これはライヴをやってて、耳で見ている人がいるなとか、目で聴いている人がいるなって思ったから出てきたんだけど。音楽って、耳で聴いた音から、自分の目の前にその景色を想像したりとかするけど、そうやってその人が作った世界を膨らませてほしいし、そうやってその人の曲にしてほしいっていうのもあったね」

■あとは「三日月のように 楽しみに 笑おうぜ」というところも、個人的に三日月って切ないイメージがあるので、それが「笑う」というのもおもしろいなと思って。

「なんか三日月って口みたいじゃん」

■ああ！　そっか！　笑って口角があがってる感じ。

「そうそう。楽しそうだなと思って」

■なるほど。そもそもですけど、「流れ」っていうタイトル自体、すごくインパクトがあったんですが、これはどういうところから?

「これは、時の流れっていう意味もあるんだけど……俺は流されることがあんまり悪いことだと思っていなくて。その流れの中で、人間はどう受け止めていくのか?っていうほうが大事だと思ってるから」

■確かに、流れって重要ですけど、良く思われないこともありますもんね。流されてばかりで自分がない、みたいな。

「うん。で、時間ってみんな平等に流れていくんだけど、そういう中で、今が楽しくなる言葉ってなんだろうって思うと、明日よりも今日のほうが若いし、今日よりも明日のほうが、経験値が高いわけじゃん。そう考えられたら、今日はもっとこれをやってみようかなと思えるし、明日の俺はもっと強くなってるんだって思えれば、明日が楽しみになるし。そうやって捉え方を少しでもポジティブな方向にできないかなと思って、このタイトルにしました」

■そういったメッセージを優しく語りかけるイメージが「流れ」にはありますけど、カップリングの「まだあるから」も、曲調は力強いものの、すごく優しい感じがあって。そもそも「まだあるから」っていう言葉のテンションがすごくいいですよね。

「おぉー」

■聴いている人にエールを送っているんですけど、その力強さが「大丈夫」よりも強いし、「負けるな」よりも優しいというか。その塩梅がすごくいいし、遊助さんらしい言葉だなと思って。

「ありがとうございます」

■「まだあるから」って、日常でよく使っている言葉でもあるんですか?

「それもあるかもなぁ。それこそ野球やってた頃に、点を取られても、"まだあるから大丈夫"って言ってたと思う。別に今終わるわけじゃないんだし、結果的に勝てばいい話なわけじゃん。それが仕事なのか、ライバルになのか、病気なのかはわからないけど、最後に笑えればいいんだから。そのためにやれることは全然まだあるんだからっていう。"え、まだあるよ?"っていうことってすごく素敵だなと思って」

■そうですよね。なんか、最近すごく思うんですけど、今の世の中の風潮として、ひとつ間違えただけで人生アウトになっちゃうところがあると思うんですよ。

「あぁ。なんか最近のニュースって暗いよね」

■ですよね。

編集「確かに〝一発アウト感〟はありますよね。やっちゃったらもう終わりっていう」

「ね？　ここ1、2年ってなんかそういうのすごくない？」

■怖いですよね。

「怖いよね？」

■言うても、人間なんて誰だって失敗のひとつやふたつぐらいするのに。

「ほんとだよ。運転免許だっていきなり免取りしないのに」

■点数制ですもんね。

「そうそう。もちろん飲酒運転とか、とんでもないことしたらダメだよ？　でも、誰だってスピード出しちゃうときはあるし、シートベルトを締め忘れちゃったり、停止の標識が見えなかったりとかさ。あるじゃん、そういうのって。そこは人生においてもだけど。でも、免許は何年かしたら点数は戻るじゃん。戻んないもんね？」

■そうなんですよ。でも、そういう風潮に対して、「まだあるから」ってすごく良い言葉だなと思ったんですよね。もし失敗してしまったときに「まだあるから」って言ってもらえるのってすごく救われるし、そういう風潮があることで、行動することをためらってしまう人も多いと思うんですけど、その背中を押してもらえる感じがあるし。

「なるほどなぁ。でも、なんでこうなったのかね。ネットのせい？」

■そこはあると思いますね。

編集「今って知らなくていいことまで知らされちゃうところもありますからね。昔は知らないことは知らないままでしたけど」

「ね？　知らないことっていいことじゃん。もちろん知って、それを知識にしていくことは大事なことなんだけど。でも、今は指一本ですぐにいろんな情報が入っちゃうから……今度そういう曲作ってみようかな」

■是非是非。楽しみにしてます。他の曲についてもお聞きしたいんですが、「2＝1＋1」はストリングスが印象的なミディアムナンバーで、別れてしまった男女の物語が歌詞になっていますけど、同じくタイトルにすごく引っかかったというか、ハッとさせられました。1＋1＝2の順番を並べ換えるだけで、ものすごく切なくなるし、かといってこれが現実でもあるし。

「うん。今までは1＋1＝2だったんだけど、別れたことで2－1＝1になったというよりは、2＝1＋1だなと思って。結局イコールではあるんだけど、何かが変わっているというか。別れてしまったとしても、それはここからまたひとりひとりの人生が始まっただけであって、これでよかったんだっていう気持ちがあるっていう」

■ちなみに、このタイトルってどう読むんですか？

「それすげえ聞かれる。作ったときにもスタッフからすごい聞かれたから。でもね、これはもうみんなで決めてほしい！」

編集「でも、こういうのルビを入れたくなっちゃうんですけど……」

「もうそういうのなし！　みんなで決めて！」

■じゃあ、ご自由にということで。

スタッフ「一応、〝にはいちたすいち〟で登録したよ」

「えっ?!」

遊・助

22th Single
流れ
2017.03.08 Release

初回盤A CD+DVD ¥1,713（tax out）
初回盤B CD+DVD ¥1,713（tax out）
通常盤 CD ¥1,204（tax out）



初回盤A



初回盤B



通常盤

01. 流れ
02. 2=1+1
03. Only One
04. 流れ-Instrumental-（初回盤A·B）
04. まだあるから（通常盤）

遊助 ⇒
ゆうすけ。'79年4月18日生まれ。O型。横須賀市出身。俳優・上地雄輔が"遊助"として、'09年3月11日にシングル「ひまわり」でCDデビュー。'16年4月に6thアルバム『あの‥こっからが楽しんですケド。』を、11月に21stシングル「凛」をリリースした。

スタッフ「そう言ったじゃん（笑）」

■了解しました（笑）。あと、もう一曲の「Only One」はビートの跳ねる感じが、背中を力強く押すわけでもなく、かといってさするわけでもない、この程よいテンションがいいなと思って。このメッセージは、曲からインスパイアされて出てきました？

「うん。そう考えると、今回って〝背中ポン曲〟が多いよね」

■そうなんですよ。なので、そういうモードなのかなと思って。

「でも、そこは本当にたまたまだよ。アルバムはコース料理みたいに作っていくけど、シングルはこの料理！　この料理！って、いろんな曲を作っていって、それをガッチャンコさせる感じだから。もちろん、ある程度バランスは考えるけど、今回はこの4曲っていう感じ」

■なるほど。アルバムのお話が何度か出てきましたけど、こちらはもうほぼ完成していると。

「うん。大体。なんならもう、それ以外の曲もポンポンポンポンできてるよ」

■それこそスイッチ入ってますか。

「うん。すごいよ、今。こういう曲がやりたい、ああいう曲もやりたいって、とにかくもう作りたい作りたい！ってなってる」

■そうなってくると、もうスイッチというか、ゾーンってやつですね。集中力が異常なまでに研ぎ澄まされているっていう。

「まさしく今ゾーンだね。もうね、アルバムはとにかくめちゃくちゃいいから！　早く聴いてほしい」

■アルバムのお話は、また改めてゆっくりお聞きしますので、よろしくお願いします！ B



遊助タイム

流れ→時間の流れ→遊助タイムということで、遊助流の時間の使い方を聞いてみました。有効活用にも程がある??

■“忙しいほうが時間を有効的に使おうと思える”というお話がありましたけど、そのために心がけていることとかあります?
「なんだろ……予定を入れることかな。無理にでも予定を入れて、絶対に動かなきゃいけない状態を作っちゃう。俺、休みの日も絶対に予定を決めるの」
■誰かとご飯に行くとか?
「うん。何時から何時まで曲を作って、1時間ランニングして、今度のツアーでこれをやりたいから、習い事に行って、とか」
■それ、休みじゃないですよね……?
「それは休みなの、俺の中で。予定はなんでもいいんだけどね。お店を予約するとか、美容院とか、歯医者とか」
■その予定を前日に決めたり?
「当日に決める。たとえば、美容院が18時からってなったら、18時までどこで何をするか決めちゃう。ここまで行くのに30分でしょ?って全部逆算して」
■すべて決め込んじゃうんですね。
「極端な話で言うと、俺、この日までに何kg痩せるとかも決めるよ。1時間空いてるから、これぐらいの速さであそこまで走ったら0.7kgは減るなとか。それで測ると、ほとんどズレてないの。0.1kgまでわかるから。歩いたりジャンプすると、今、何kgだなってわかる」
■すごすぎますよ、それ。
「あと、みんなで飲んででも、今日は何時までって一回決めるね。ダラダラとわけのわからない話をするよりも、よっしゃ、あと1時間こっからめちゃくちゃバカみたいに飲もう! ヨーイドン! 乾杯! みたいな」
■それ、飲み会というか完全にスポーツですよ(笑)。遊助さんって、キッチリしているところもあると思ってましたけど、ゆったりというか、なんくるないさぁ精神みたいなものあるなと思ってたんですが。
「あるある。あるよ、そこは。気質としては、のほほ〜んとしてるんだけど、立場上、いろんな確認をしなきゃいけなかったりして、環境上せっかちになっちゃったところはあって。それに、飲みだって、今日は22時まで!って自分で言いながら、結局0時になっちゃったり、朝までいっちゃうときもあるから(苦笑)」
■状況によって変わりますしね。
「そうそう。でも、一回は誓っとくね。今日はここまで!って」
■沖縄とか行ったらもう、ダラーっとします? それともそこでも予定決めます?
「決める。おばあちゃん家に昼に行って、夕方までダラダラする、とか。ダラダラする時間を先に決めちゃう。よし、ここから2時間ダラッダラになってやろう!みたいな。そっちのほうが、ダラダラしてても楽しいんだよ。2時間ダラダラするとして、1時間過ぎても、まだ1時間もダラダラできるっていう」
■なるほど(笑)。時間をキッチリ決めてる生活って、もうどれぐらい続いてます?
「もう10年以上経つかな。何も予定がなくて、1日中家でダラっとしてる日ってないかも。それやっちゃったら超後悔しそうだし」
■でも、自己嫌悪含めて、そこに浸っちゃうときもあったりしません? うわぁ、やっちゃったなぁ……って思いながらも、こんな日もたまには、っていう。
「それもすげえわかるんだけど、俺、何かしてないと本当にダメ人間になっちゃうと思うんだよね(苦笑)。そこはもう、自分の性格をよくわかってるから」 Ⓑ

EXILE THE SECOND

BORN TO BE WILD

昨年本格再始動を果たし、自身初となる全国アリーナツアーを開催中のEXILE THE SECONDが
待望の2nd Album『BORN TO BE WILD』を3月1日にリリースする。
今ツアーに向けて作られた“シングル三部作”や最新シングル「SUPER FLY」も含む
ベスト盤ともいえる充実の一枚についての各自の想い、
さらには開催中のアリーナツアーでの手応えを、6人にじっくりと語ってもらった。

Text ⇒ 斉藤 碧　Photo ⇒ 後藤倫人
Make-Up ⇒ 千絵(H.M.C／AKIRA、橘ケンチ、黒木啓司、TETSUYA)、大木利保(H.M.T TOKYO／NESMITH、SHOKICHI)
Styling ⇒ 葛西“JUMBO”克哉



■現在は、昨年10月からスタートした単独ツアー『EXILE THE SECOND LIVE TOUR 2016・2017〝WILD WILD WARRIORS〟』の真っ最中。今の手応えはいかがですか?

NESMITH「去年の10月から始まって、ありがたいことにどんどん追加公演が発表されています。今まではEXILEとしてドームやスタジアムといったスケールの大きな会場でライヴをしていたのですが、今、このタイミングでEXILE THE SECONDとしてアリーナツアーを行なうことで、たとえば、EXILEのライヴでは体感したことのない悲鳴に近いような歓声が沸いたり(笑)。新しい発見や刺激がまだあるんだと、改めて感じました。初日の新潟であの悲鳴を聞いた時は本当にビックリしました」

■私も2月2日の横浜アリーナ公演を拝見させていただいたんですが、オープニングからものすごい悲鳴が上がって驚きました。でも、あれだけセクシーな姿を見せつけられたら悲鳴も上がりますよ、それは(笑)。

橘ケンチ「(笑)。今回はEXILE THE SECONDとして、この6人で0からセルフプロデュースでライヴを作っていったんですが、限られた条件の中でどう魅せるか?ということに重点を置いて考えていきました。絶対に妥協はしたくなかったので、とにかく試行錯誤しながら自分達が納得できる形を目指していきました。女性ダンサーを交えてのパフォーマンスだったり、トライする部分が多いライヴだったので、実際、新潟の初日で想像以上の歓声をいただけた時はホッとしました。しかも、ライヴを重ねていくにつ

EXILE THE SECOND ⇒
エグザイル・ザ・セカンド。橘ケンチ、黒木啓司、EXILE TETSUYA、EXILE AKIRA、EXILE NESMITH、EXILE SHOKICHI。'12年シングル「THINK 'BOUT IT!」でデビュー。'16年10月より、初の単独ツアー「EXILE THE SECOND LIVE TOUR 2016-2017 "WILD WILD WARRIORS"」を開催中。

2nd Album
BORN TO BE WILD
2017.03.01 Release
CD+3DVD+スマプラ・ムービー ¥6,980(tax out)
CD+3Blu-ray+スマプラ・ムービー ¥7,980(tax out)
CD+DVD+スマプラミュージック&ムービー ¥3,980(tax out)
CD+Blu-ray+スマプラミュージック&ムービー ¥4,980(tax out)
CD+スマプラミュージック ¥2,800(tax out)



[CD]
01 SUPER FLY
02 YEAH!! YEAH!! YEAH!!
03 Break It Down
04 24/7 Cruisin' feat. LL BROTHERS
05 Shut up!! Shut up!! Shut up!!
06 Dirty Secret Remix feat. AKLO
07 Shelly
08 Mo Bounce feat. Far East Movement
09 Going Crazy
10 Beautiful Angel
11 Because I Love You
12 RAY
13 Step into my party
14 WILD WILD WILD
[DVD/Blu-ray]
EXILE THE SECOND LIVE TOUR 2016-2017 "WILD WILD WARRIORS"
Music Videoなど



ツアー中ではありますけど、もうすでに次の展開が楽しみです。再々追加公演も発表されて、今までなかなか行けていなかった場所にも行けることになったので、この先も楽しみにしていていただけたら

れて、客観的に自分達のストロングポイントを自覚できるようになりましたし、それを踏まえて、『SUPER FLY』（2月22日リリース）という今の自分達にハマる曲も発表できるので、すごく良い流れで進めているなと思います」

■昨年リリースされた3部作の曲を中心に、WILD・SEXY・PARTYの3要素がバランス良く配置されたライヴで、そのどれもが違和感なくEXILE THE SECONDらしいというか。みなさん、すごく自信を持ってステージに立ってらっしゃるなと感じました。

黒木啓司「それは自分でも感じています。パフォーマンスだけでなく、音楽性についても、他のアーティストや三代目のバンドメンバーの方々から、『（音楽的に）面白いね』って声をかけてもらったり。ダンスチューンだけだと、EXILE TRIBEの中だけでも似たような音楽はあるんですが、EXILE THE SECONDならではの音楽を確立できていると思うので、レベル高い音楽で勝負できてよかったなと、ライヴをしながら改めて思っています」

SHOKICHI「今までのセオリーから外れた自由なライヴができていると思いますし、その中でEXILE THE SECONDの新たな強みがたくさん生まれてきている。それがこうやってアルバム（『BORN TO BE WILD』）に繋がって、このアルバムが次のツアーに繋がって……どんどんワクワクする方向に展開していっていると思います」

■自由なライヴと言えば、まだツアー中なので詳しくは書けませんが、各メンバーにフィーチャーしたパートもありましたよね。

SHOKICHI「あえて個人のカラーを意識したわけではないんです。でも、もともと本格始動に至るまでにメンバー各々が培ってきたものもあるので、そのパワーを発揮するタイミングが、このツアーだったんだな、と」

TETSUYA「確かに、このツアーを通して、メンバーそれぞれがその第一歩を踏み出せているなと思います。と同時に、ライヴ全体としては、タイトル通り、WILDなセットとWILDなパフォーマンスでWILDにみなさんを巻き込めているツアー。アリーナも一体感が生まれやすい規模感なので、良いタイミングに良い規模感でこういうライヴをやれていることがすごく嬉しいです」

AKIRA「初めての単独ツアーということで、0から1を生み出す作業はすごく大変だったんですけど、ライヴを重ねるごとに自分達のカラーや目指すべき方向がよりハッキリしてきたなと思いますし、EXILE THE SECONDにしかできないラインも掴めたので、個人的には、今はワクワクしかないですね！ ツアー中ではありますけど、もうすでに次の展開が楽しみです。再々追加公演も発表されて、今までなかなか行けていなかった場所にも行けることになったので、この先も楽しみにしていていただけたらと思います」

■そんな中、3月1日には待望のニュー・アルバム『BORN TO BE WILD』がリリースされます。リード曲は、シングルとして先行リリースされた「SUPER FLY」ですが、この曲についてはいかがですか？

NESMITH「この曲はツアーでも披露したんですけど、僕らの振付をやってくださっている、世界的コレオグラファーのショーン・エバリストがアイデアを提案してくれて、ライヴでも趣向を凝らした演出になっています。今までの楽曲も個性の強い曲ばかりなんですけど、この曲も、ライヴを観に来てくれた友人に『最後の♪Super Super Super flyっていうフレーズがキャッチーですごく耳に残る』と言ってもらえました。こういう80年代のファンクミュージックは、ど真ん中の世代ではないものの、自分達も掘って聴いていたりしたので、今度は僕らというフィルターを通して聴いてもらえたら」

SHOKICHI「たとえばシュガーヒル・ギャングの『Rapper's Delight』をオマージュしていたり、大人になった自分達だからこそできる遊びも曲の中にはたくさん盛り込んである。キャッチーなんですけど、じっくり聴くと深い楽曲になっています」

■MVもリリースに先駆けてYouTubeで公開になっていましたね。ミュージカルを観ているような世界観で面白かったです。

橘ケンチ「そうですね。そういう世界観に凝りたかったので、ブロードウェイっぽいテイストも入れつつ……。メンバーそれぞれをアーティストっぽく立つように見せるには？というところを、監督と一緒に試行錯誤しながら作った結果、良い形で仕上がった。それに、なによりもものすごく楽しい撮影だったんです。外国人エキストラの方々が盛り上げてくれたり、みんなで一緒になって楽しく踊れたので、その雰囲気が映像からも伝わると思います」

AKIRA「この曲は、テレビでの見せ方だったり、ライヴでの見せ方だったり、場所によっていろんな見せ方ができるので、すごくパフォーマンスし甲斐のある曲だなと思いますね。ちなみに、さっきツアーでのパフォーマンスが独特という話がありましたけど、これには、もともとアンダーグラウンドで活動していた僕らがそこから『SUPER FLY』していく……という裏設定があるらしいです（同笑）」

■ということですが、歌詞を書いたSHOKICHIさんの中では、そういう設定は？（笑）

SHOKICHI「ありましたね（笑）」

TETSUYA「あったんだ（笑）」

SHOKICHI「（笑）。ダブル……、というかトリプルミーニングくらいある『SUPER FLY』なので（笑）。でも、この曲に限らず、アルバムに収録されている楽曲はどれも一見ラブソングに見えるように作っているんですけど、いろいろと伏線を張って、ダブル、トリプルミーニングを隠しているような書き方をしているので、自分なりの解釈で自由に聴いていただけたら」

黒木啓司「そう考えると、この年だからあの（MVでの）スーツを着こなせたんだと思うし、いろんな音楽をやってきたからこそ、今

こういう楽曲に辿り着いたんだと思う。ちょうど今年の頭に〝今年はEXILE THE SECONDとしてヒット曲と出会いたい〟と思っていたので、この曲をキッカケに〝SUPER FLY〟できたら……羽ばたけたらいいなと思います（笑）」

■では、「SUPER FLY」以外で、みなさんのイチオシ曲を教えてください。

TETSUYA「僕のイチオシは〝Shut up!! Shut up!! Shut up!!〟ですね。昨年リリースしたシングル3部作の第2弾の曲なんですけど、第1弾の〝YEAH!! YEAH!! YEAH!!〟の後に何をお届けしようかと考えている時に、今の時代の流れや多すぎる情報量の中で自分をいかに輝かせるために何をチョイスするのか？それは自分次第だという、メッセージ性の強いこの曲と出会えて。すごく良いタイミングだったなと思います。それに、僕らのルーツでもあるHIP HOP色の強いトラックで、踊り甲斐のある曲でもあるし、AKIRAが加入する直前の楽曲ということで、いろいろなことを考えた上でのMV撮影だったので、とくに思い入れの強い楽曲ですね」

SHOKICHI「僕は〝Step into my party〟ですね。EXILE THE SECONDのアルバムのイメージは結構ゴリゴリで肉厚なイメージがあるんですけど、この曲は男性が働く女性に向けて歌っているような内容になっていて、アルバム収録曲の中では一番キラキラした仕上がりになっています」

■たしかに、今まではキラキラというよりギラギラした印象があったので、新鮮でした（笑）。

SHOKICHI「（笑）。もちろん、その中にもいろんな側面はあるんですが、この曲ではEXILE THE SECONDの新たな一面を提示できていると思います」

黒木啓司「僕は〝24/7 Cruisin' feat. LL BROTHERS〟。この曲はLL BROTHERSさんとのコラボ曲なんですけど、僕が小学6年生くらいの時にダンス甲子園を観て、LL BROTHERSさんの〝LL BROTHERS〟というシングルを買って、そこでダンスと出会ったんです。時間が経って、昔憧れていた人達と今、一緒にモノ作りができているということが本当に嬉しくて……ぜひ聴いていただきたい1曲ですね」

橘ケンチ「コラボ曲という意味では、Far East Movementと共作した〝Mo Bounce feat. Far East Movement〟もオススメです。彼らとは以前、〝ASOBO!〟という曲も一緒に作ったんですけど、世代も僕らとほぼ一緒で感覚がすごく近いので、彼らと一緒に作る時は自分達の好きなテイストをに忠実に作れるような気がしていて。今回は、90年代のニュージャックスウィングのような曲でお客さんと盛り上がりたいという僕らのアイデアをもとに彼らがトラックを作ってくれました。そこにSHOKICHIが作詞をして出来あがって。EXILEでいうところの〝WON'T BE LONG〟のような存在になるんじゃないかと思うので、ライヴでパフォーマンスするのが楽しみです」

■AKIRAさん、NESMITHさんはいかがですか？

AKIRA「僕は〝Because I Love You〟ですね（即答）」

SHOKICHI「CMでのAKIRAさんのイメージがついてますからね（笑）」

AKIRA「まぁね（笑）。これはStevie Bのカバーなんですけど、タフでワイルドなイメージだけでなく、バラードもしっかりお届けできるのがEXILE THE SECONDなので。こういったSHOKICHIとネっさん（NESMITH）の甘い歌声も、このアルバムの聴きどころだと思います」

NESMITH「僕は〝YEAH!! YEAH!! YEAH!!〟。本格始動1発目の曲であり、EXILE THE SECONDの原点といっても過言ではない曲。音楽性も方向性もここからすべて始まったと思う。MVにもEXILE TRIBEのメンバー達がたくさん出てくれて、曲調もたくさんの人に聴いてもらえる楽しい曲だと思うので、イチオシです」

橘ケンチ「（NESMITH作詞の）〝Beautiful Angel〟はいいの？（笑）」

NESMITH「それは、各自じっくり聴いていただければ（笑）」

■個人的には、この曲を聴いて〝NESMITHさんはロマンチストなんだなぁ〟と思いましたけど。

NESMITH「（照）。歌だから歌えるような歌詞ですね（笑）。タイトルは、もともとデモをいただいた時についていた歌詞の中に〝Beautiful Angel〟とあって。このフレーズが聴き馴染みがよかったので活かしつつ、そこに向けたストーリーを自分なりに書いていきました」

■実際、ライヴで歌っているところも想像しながら制作していたんですか？

NESMITH「そうですね。そういう画もイメージしながら書きました」

橘ケンチ「ライヴはいつも念頭にありますね。前作の3部作を作った時も、テーマはありながら〝ライヴのここで使いたい曲〟というのを逆算して考えながら制作していましたし、今回のアルバムも半分が新録曲なんですけど、〝今後またツアーがあったら、こんな曲があるといいかもしれない〟という発想で曲のフレーバーを決めていきました。その結果、半分は今までの曲、もう半分はこれから未来へ向けてののびしろのある曲になったので、今後の展開を楽しみにしながら聴いていただけたらと思います」

■ある種、EXILE THE SECOND入門編のようなアルバムですよね。

橘ケンチ「入門編であり、集大成的な要素もあり。本格始動をしてから1年近く経ってのアルバムリリースなんですが、それよりも前からみんなEXILEとして活動をしていて、ここ10年近くの6人の歴史もバックグラウンドにあった上での作品。ベスト盤のような1枚になったと思います」

黒木啓司「本当にバラエティーに富んだアルバムになったので、この曲達をこれから大切に育てていきたい。加えて、今年は2～3枚シングルを出したいですし、来年の計画まではすでにできているので、今後も地に足をつけてEXILE THE SECONDのエンターテインメントを追求していこうと思います」


EXILE NESMITH
Vocal & Performer


橘ケンチ
Performer


EXILE TETSUYA
Performer

黒木啓司
Performer




EXILE SHOKICHI
Vocal & Performer


EXILE AKIRA
Performer

w-inds.

INVISIBLE



前作『Blue Blood』から約2年ぶりとなる12枚目のオリジナル・フル・アルバム『INVISIBLE』が、3月15日にリリースされる。慶太セルフプロデュースの「We Don't Need To Talk Anymore」などのシングル曲や、それぞれが作詞を手掛けた各ソロ曲を含む13曲について、制作秘話を聞いた。

Text ⇒ 武市尚子　Photo ⇒ 後藤倫人　Hair & Make-Up ⇒ 大妻浩一郎（KOKOSCHKA）　Styling ⇒ 齋藤英明



16年目にして広がるw-inds.の個性を感じてもらえるアルバムに
なったと思うので、ツアーも楽しみにしてほしいです

千葉
涼平

RYOHEI CHIBA



真剣に聴いても最高だし、フェスにもデートにも海とか草原とかにも似合うアルバムになったんじゃないかなって思う

橘 慶太

KEITA TACHIBANA



慶太「今日はどういったご用件で？（笑）」
■今日はですね、こういった商品（w-inds.12thアルバム『INVISIBLE』）をお持ち致しましたんですが。
龍一「あぁ、我が社の新商品ですね！」
■ええ。是非とも、この商品がいかに素晴しいかを語っていただこうかと。
龍一「喜んで！　是非とも！」
涼平「あははは。何、この始まり！（笑）」
慶太「他にない始まりだよ、絶対！（笑）　で、我が社の自信作、聴いて頂けました？」
■もちろん。今回ダンスアルバムだとお聞きしていたので、実際聴いてみて、想像と違って驚いて。〝4つ打ち〟〝EDM〟な感じかと思ったら、すごくアンニュイな感じで。
慶太「ダンス＝〝4つ打ち〟〝EDM〟っていう時代でもないからね」
■激しい感じかと思ったから真逆で驚いた。〝これがダンスアルバム!?〟って、ちょっと概念を覆されたというか。
慶太「きっとそう思って聴く人が多いだろうね。たしかにダンス＝〝4つ打ち〟〝EDM〟っていう時代もあったからね」
龍一「でも、今回の僕らのアルバムは違うね」
慶太「そう。全体的にテンポもそんなに速くないし、心地良い感じでしょ。大人な感じというかね。今のダンスの主流はフューチャーベースっていうジャンルが一番で、HIP HOPアーティストもダンスグループもそこを取り入れて心地良く踊るっていうのが流行ってる。ゴリゴリに踊るっていう感じではなくなってるんだよね」
■まさに、このアルバム全体が心地良いイメージだもんね。慶太作曲の「Players」しか激しい曲がなかった印象。
慶太「まさにそう。〝Players〟は、ニューディスコっていうジャンルをイメージして作った曲。分かりやすく言うとEDMとディスコの融合っていう感じ」
■シンセがテクノっぽくもあるよね。
慶太「そう！　ディスコの頃のアナログのシンセを加工したんだけど、それをEDMの加工の仕方をして太くしてあるの。曲自体の作り方もそうだし、サウンドも昔のアナログなディスコ感とEDMを掛け合わせたんだよね。全体をアンニュイなイメージのアルバムにしたかったんだけど、1曲くらいは激しいのも入れたいなと思って意識して作った1曲が〝Players〟なんだよね」
■〝今のw-inds.〟を象徴するアルバムになった感じだね。こういうスタイルのアルバムにしようというのは、3人一致の意見なの？
龍一「去年からシングルとして作ってリリースしてきた楽曲たちの仕上がりもそうだし、w-inds.としての方向性は3人が同じ方向を向いているなって思っていたので、今回のアルバムのスタイルが決まったときは、喜ばしかったというかね。パフォーマンスも含め、今のw-inds.のスタイルに誇りを持ててるというかね。まさに、今言ってくれたみたいに、〝今のw-inds.〟の形を詰め込めたアルバムになったんじゃないかなって思う」
涼平「90年代のニュージャックスイングのテイストを用いた〝Boom Word Up〟や、トロピカルハウスを取り入れた〝Backstage〟や、慶太が初めてw-inds.をセルフプロデュースした〝We Don't Need To Talk Anymore〟という、アルバムまでのシングルの流れも、



自然と〝こういうアルバムにしよう〟っていうところに繋がっていってたんだと思う。僕ら3人もスタッフも全員が同じ意識で向き合っていたなと」

慶太「チルアウトダンスミュージックとかインディダンスミュージックとか、トロピカルハウスとか、フューチャーベースとかっていう流れを組んだアルバムを作りたいというのは、前回のシングルあたりからは考えてたんで。2015年にリリースした前アルバム『Blue Blood』もすごくいい1枚になったなと思っていたんだけど、それ以上に行くには、いい意味で、もっと古くさく行かないといけないなと思って。でも、そこに行き過ぎるとw-inds.らしくないなって思ったりもしたし、いろいろと3人で考えたんですよ。w-inds.としては、世界のダンスミュージックの先端や流行も取り入れて自分たちの個性に落とし込んでいきたいというのがあるから、そこにも目を向けてみつつ、自分たちの世界を広げていこうということで、視野を広げてアルバム制作に向き合っていったってい う」

■なるほどね。今回のアルバムは、w-inds.が提示したい音楽の形であるんだね。

慶太「そう。今ね、自分が曲を作る上でも聴くにも、いちばん〝聴きやすい〟というのがテーマで。曲を作る上でもいちばんにそこを意識してる。どこでも聴ける音楽というかね。真剣に聴いても最高だし、フェスにもデートにも海とか草原とかにも似合うアルバムになったんじゃないかなって思う。心地いい音楽ってね、どこで聴いても似合うんだよね」

涼平「たしかに、今回のアルバムはどこで聴いても似合うよね。自然の中で聴けるってデカイよね。今回のアルバムって、すごい幸せ感に包まれるというか」

慶太「EDMは森に似合わないからね（笑）」

涼平「そうそう（笑）。聴いてて気になっちゃうっていうかね（笑）。BGMにならないんだよね。BGMになるかならないかって、すごく大きいんだと思う。そういう意味で、今回のアルバムはBGMにしてもらえるアルバムでもあると思うんだよね」

慶太「そう。万能だよね」

■今回、それぞれのソロ曲が入るのも特徴的だよね。

龍一「そう。グループ史上初だからね。3人それぞれの個性があって面白いよ。今回13曲入るんだけど、10曲が出揃って、レコーディングもほぼ終わるくらいの段階で、ソロ曲を選んでったの。だから、アルバムの流れも掴めてたし、そこもなんとなく意識しつつ、それぞれが今やりたい音楽を選んでいったんだよね。僕が選んだ曲は、ちょっとラップが入ってたりするんだけど、リリカルというか、リリックらしいリリックが入ってる。ポエムというよりかは、生々しい歌詞のほうがいいかなと思って、僕はそうしたんですけどね。自分がなんとなくなイメージを伝えた楽曲を何曲かもらって、その中からこの曲を選んだんだけど、同時に2人にも〝龍一候補曲〟として送ってもらってたのね。そしたら、慶太は僕が選んだこの曲をめちゃめちゃ褒めてたらしく。作曲した人と友達になりたいって言ってたんだって（笑）」

慶太「めちゃくちゃいい曲だなと思ったし、構成が素晴しいと思ったの。他の曲はイントロで消しちゃったくらい！」

■いや、一応最後まで聴いてあげて（笑）。でも、



“今のw-inds.”の形を詰め込めた
アルバムになったんじゃないかなって思う

緒方龍一
RYUICHI OGATA



その気持ちは分かるけどね。それくらいイントロって大事だからね。

慶太「そう！　イントロが入ってこないとサビまで待てないんだよね（笑）」

■分かる。それぞれのソロ曲は海外の作曲家さんの作品だけど、自分で書かなかった意図はあったの？

慶太「そこはバランスかな。なんとなくそっちのほうがアルバムとしてのバランスがいいなと思ったから」

■そこまで考えられてのことだったんだね。龍一の歌詞はw-inds.の足跡を感じさせるものだったけど、とにかく曲も歌詞も意外だったなぁ。龍一がこうくるとは！って思った。

涼平「そうだね。自分の発想の中にはなかったから、龍一くんっぽいなって思った」

慶太「でもね、とにかくw-inds.愛の強い龍一くんらしい歌詞だと思う。ファンの人が歌詞読んだら納得すると思う」

龍一「ラップゆえにストレートに言えた言葉だったんじゃないかなって思う。応援してくれる人の想いでもあるんじゃないかなって。そういう気持ちも込めてタイトルを〝ORIGINAL LOVE〟にしましたね。今回ね、ソロ曲は、本当にそれぞれの個性が出てると思うよ。涼平曲はホントに美しいからね。涼平くんにピッタリな1曲」

慶太「そう。涼平くんの甘い声にはピッタリ。声の成分が存分に出てるよね」

涼平「甘切ない曲。最初にそれぞれの曲をどういうテイストにしようか、っていう話し合いをしたんだけど、僕の曲は〝甘切ない系〟がいいっていうのは、3人一致してた」

■また涼平が恋の歌詞って意外で！

慶太「そう！　気になるでしょ！　そこに応えるかのように甘く切ないからね。一番求めていた形になってると思うよ」

龍一「発表してからファンの人たちの反響がすごいの！　涼平はプライベートが謎めいてるからね。本当に涼平くんっぽいよ」

涼平「綺麗な曲だったのもあって、歌詞も綺麗でストレートな言葉で、〝究極の愛〟を書きましたね。究極の愛っていうテーマだけが先に決まったのもあって、そこに落とし込むのに時間がかかって。歌詞という短さの中で状況を説明するのが本当に難しかった。1行目と最後が大事だと思ったから、すごく時間がかかった。改めて慶太はすごいなって思ったよ。今回のソロ曲の歌詞も本当にすごい。でも、今回の慶太曲は新しさを感じたかな。歌詞もちょっといつもと違う気がした」

慶太「僕の歌詞は失恋。完全にフィクションなんだけどね。全部日本語で書こうと思って意識して書いた1曲。本当はタイトルも日本語にしたかったくらいなんだけど、13曲並んだときに日本語が入るのが嫌で英語にしたの。歌詞にもタイトルの英語しか入ってない感じ。曲は、ドラムが入っていない、わりとポップなバラードなんだけど、個人的に暗い曲に暗い歌詞を乗せるのが好きじゃないから、こういう曲調に敢えて失恋の歌詞を乗せてみたんです。あと、今回〝TABOO〟って曲も歌詞を書いたんだけど、これも早かった。これは、友達を好きになっちゃう歌詞なんだけど、〝もう友達と思えない〟っていうフレーズがメロによって自然と思い浮かんで、そこから広げていったんだよね」

龍一「いやぁ、俺はね、個人的に今回〝TABO

O〟の歌詞がいちばん好きかも。メロと歌詞のハマまりがすごく良かったんだよね。でも、改めて思うけど、今回、ソロ曲をやれたことで、w-inds.にとっての幅を広げられた気がする。トライできて良かったなって」

慶太「2人が書いた歌詞も歌も人間っぽくてすごくいいんだよ。っていうかね、涼平くんも龍一くんも、ソロいらないって言ってたんだから、最初！　かなり説得して2人の重い腰を上げさせたんだよ！（笑）　特に、千葉（涼平）なんてもぉ～！」

涼平「あははは。椅子がお尻にくっついちゃって上がんなくて上がんなくて（笑）」

龍一「巨木は抜くの大変だからね（笑）。15年間やってこなかったことをやらせようとするのは大変だって（笑）。根っこ生えちゃって大変だったよ（笑）」

涼平「根っこ深くて（笑）」

慶太「だいたいね、この2人、ライヴでのソロコーナーでも嫌がってたくらいだからね！　今回ソロ入れようって提案したら、最初2人に〝いや、俺はメインを支えることに生き甲斐を感じてるから〟って断られて、え!?　そうなの!?ってビックリして。この世の中ね、アイドルの子たちはメインになりたくて必死にそこを勝ち取ろうと頑張ってるわけじゃないですか。なのにこの2人は」

龍一「いや、それはね、メインの大変さをいつも見てるからだよ。辛さを知ってるから」

涼平「そう。慶太の大変さは重々知ってるからね。だからそこを支えることが自分たちの役目だって思ってるから。僕ね、昔、占い師さんみたいな人に見てもらったときに、〝貴方は1.5列目だったり、メインを支えることで輝ける人です〟って言われたことがあって、あ、やっぱり俺、間違ってなかったんだって思ったの。だからw-inds.は上手く成り立ってるんだなって、その言葉で確信に変わったんだよね」

慶太「余計なこと言うなソイツ！（笑）　俺はね、自分がメインだなんて思ってないの。3人でこそw-inds.なんだから。だけど、涼平くんと龍一くんが歌うことでw-inds.の武器が増えると思ったからね」

龍一「そう！　慶太はね、武器って言ってくれたんだよ。w-inds.のためなんだって」

涼平「それを武器と言ってくれるのかい？と。その言葉は嬉しかったね。でも、本当に武器になれるのかな？って不安もあって」

龍一「そう！　俺なんて15年間ずっと樋だったからね、役割が。そういうスタンスで15年間やってきてるから、そこを武器にしてくれって言われても戸惑うよね。そこが不安なんだけどっていう」

涼平「そう。そこが不安の種なのにっていう（笑）。でも、慶太の強い想いと後押しがあって、なんとかね。この先、武器になっていけたらいいなとは思うけどね」

龍一「涼平の曲も慶太の曲も、w-inds.としての新しさを感じるんだけど、それがw-inds.の楽曲としての振り幅を広げる楽曲になったなって思う。それぞれがそれぞれの言葉で歌うというのも、新たなw-inds.となったなって。本当に楽しみにしてほしいですよ。我が社の新商品！」

涼平「あははは。最初の振りに戻ったね！」

慶太「『INVISIBLE』というのは〝目に見えない〟という意味もあるんだけど、音楽って目に見えるものではないし、僕が最近よく音楽を作る上で使ってるインヴィンシブルリミッターがあったりもして、その響きもいいなと思ったし、今回はコンセプトアルバムとかでもないから、13曲すべてに当てハマる言葉ってないなと思って、響きがいい単語を選んだって感じ。とにかく今回は〝気持ちのいい音楽をやりたい〟っていう気持ちで作ったアルバムでもあったんで、メッセージを強く持たせたタイトルは必要ないなと思って。そこはね、永遠の自分の中のテーマでもあるのかも。音楽は気持ち良く聴けることに意味があると思っているから、自分には、〝自分たちの音楽で世界を変えてやる！〟っていう〝どうしても伝えたい熱い思い〟みたいなのが逆になくて。昔はそういう自分の考えに悩んだこともあったのね。でも、音楽の楽しみ方って人それぞれでいいのかなって思えてから、すごく自分たちらしく音楽をやれるようになってきたというか。そういう意味も込め、タイトルを『INVISIBLE』にしました。是非、お試しください。我が社の新商品（笑）」

龍一「ライヴも楽しみだよね～。夏くらいにはツアーができたらいいな」

慶太「その際にはソロコーナーを1人30分くらいずつね」

涼平「あれ？　増えてね？」

慶太「あははは。騙し騙しどんどん2人を巻込んでいくっていう戦略（笑）」

龍一「ということで、我が社の新商品、是非ともお試しください（笑）」

涼平「気に入ったね、それ（笑）。でも、本当に16年目にして広がるw-inds.の個性を感じてもらえるアルバムになったと思うので、ツアーも楽しみにしてほしいですね」 B

New Album

INVISIBLE

2017.03.15 Release

初回盤A 2CD+Blu-ray ￥4,630（tax out）
初回盤B CD+DVD ￥3,565（tax out）
通常盤 CD ￥2,778（tax out）



初回盤A



初回盤B



通常盤

[CD]
01. Boom Word Up
02. Come Back to Bed
03. Complicated
04. We Don't Need To Talk Anymore
05. CAMOUFLAGE
06. Backstage
07. Separate Way《橘慶太ソロ楽曲》
08. ORIGINAL LOVE《緒方龍一ソロ楽曲》
09. In your warmth《千葉涼平ソロ楽曲》
10. wind wind blow
11. TABOO
12. Players
13. We Don't Need To Talk Anymore DMD Remix

[CD（disc2）] ※初回盤Aのみ
w-inds. Reflection Remix by DMD

[Blu-ray]
シングル3作品のMV&MVメイキング
メンバーソロインタビュー（合計約30分）
スペシャル映像"INVISIBLE"Game（約60分）

[DVD]
シングル3作品のMV
「INVISIBLE」制作ドキュメント（約15分）
メンバーインタビュー（約20分）

w-inds. ⇒
ウィンズ。ヴォーカル&ダンスの橘慶太と、コーラス&ラップ&ダンスの千葉涼平、緒方龍一からなる3人組ダンスヴォーカルユニット。'01年3月に、シングル「Forever Memories」でデビュー。3月14日より、アルバム発売記念のイベントを開催予定。

lol

party up!!

メンバーも出演しているCMのテーマソング「party up!!」を
2月14日に配信リリースしたlol(エルオーエル)。
爽快なパーティ・チューンとなった今曲についてはもちろん、
それぞれがいちばん共感できるlolの楽曲についても
5人にたっぷりと語っていただきました。

Text ⇒ 武市尚子　Photo ⇒ 後藤倫人





●佐藤友祐

■2月14日に配信された「party up!!」は、等身大のlolを感じさせるパーティチューンだね。

佐藤友祐「自分たち的にもすごく気に入ってます。これまでは、ちょっとクールでカッコ付けてる曲が多くて、大人っぽい魅せ方をしてたところもあったんですけど、今回の〝party up!!〟とか〝gimme gimme〟みたいな曲はすごく等身大だから、きっとファンのみなさんの感覚にも近いんじゃないかなって思ってます」

hibiki「〝gimme gimme〟とか〝HEARTBEAT〟とかっていうEDM曲は、ライヴでも盛り上がるし、〝gimme gimme〟は一緒に出来る振り付けもあるから、ファンのみなさんには喜んでもらえるかなって思いますね。去年ライヴをやって思ったんです。そういう意味でも、〝party up!!〟は、一緒に盛り上がってもらえる1曲になったなって思いますね」

佐藤友祐「〝party up!!〟を配信シングル曲として選んだ時は、曲が海外の方の作曲なので、歌詞が英詞だったんです。曲調も海外ならではのノリを感じたし、すごく新鮮で」

honoka「この曲は、『住宅情報館』のCMソングでもあって、初めはCMで使う部分だけの振りをしたので、後から全部の振りを覚えていくっていう感覚もすごく新鮮でしたね。そういう流れは初めてだったので」

小見山直人「〝CM見たよ！〟っていう反応がすごく多くて。振り付けの中にlolを形どったダンスが出てくるんですけど、何のレクチャーもなく、みんなCMを見ただけで覚えてくれたみたいで、ライヴでやったときには、もうみんな一緒に踊ってくれてたんですよ！それはすごく嬉しかったです」

moca「CMはサビだけだけど、実際のこの曲の始まりは手拍子からなんです。そこも、もうライヴでは浸透していて、ファンのみなさんも一緒に手拍子してくれるところから曲がスタートしていくんです！　キャッチーな振り付けが多かったりするので、みんな一緒に踊ってくれてるのが嬉しくて」

■全員で声を重ねて歌っているサビも印象的だよね。

hibiki「そうなんです！　サビを丸ごと全員で歌うっていうのは初めてなんです！みんなで歌っている感がすごく楽しいんです！」

佐藤友祐「個人的にみんなで歌うというのが、今、すごく好きですね」

■この先、自分たちで歌詞を書いていく機会もあるかもしれないことも踏まえて、今後歌っていきたいメッセージってある？

佐藤友祐「曲に合った歌詞で、よりその曲を表現したいっていう思いもあるし、僕自身が音楽を聴くとき歌詞を重視して聴くので、落ち込んでたりするときも、楽しいときも、曲に

無理に遠いところを歌詞にするんじゃなく、
〝そういうことってあるよね〟って思えるような、
身近な景色を歌っていけたらいいのかなって思いますね（佐藤友祐）



楽しいとき、悲しいとき、失恋したとき、嬉しいとき、パーティーしたいとき、成績が悪くて怒られたときっていう、いろんな場面で〝ｌｏｌのあの曲聴きたい！〟って思ってもらえたらいいな（ｈｉｂｉｋｉ）

lol party up!!

よって救われるんです。無理に遠いところを歌詞にするんじゃなく、〝そういうことってあるよね〟って思えるような、身近な景色を歌っていけたらいいのかなって思いますね」

■今現在、友祐がいちばん等身大の自分に近いと思う歌詞の楽曲を選ぶとしたら？

佐藤友祐「〝bye bye〟です。あと、ストレートな想いを歌ってるなって感じるのは〝follow me〟かな。最近の歌詞って、すごく難しく書かれているものも多いけど、lolの曲の歌詞はストレートなものが多いと思います。lolの歌詞は、〝大好きなんだよ〟だったり、気持ちをハッキリ出しているから、共感してもらえたら嬉しいです」

■なるほどね。hibikiはどう？

hibiki「楽しいとき、悲しいとき、失恋したとき、嬉しいとき、パーティしたいとき、成績が悪くて怒られたときっていう、いろんな場面で〝lolのあの曲聴きたい！〟って思ってもらえたらいいなって思いますね。この先もいろんなジャンルの曲を歌っていきたいし、それに似合ういろんな歌詞を歌っていけたらいいなって思います」

■じゃあ、今、hibikiがいちばん共感出来て好きな曲は何？

hibiki「全部共感出来るんだけど、〝party up!!〟が今いちばん好きです。悩んでてもしょうがないじゃん！　今はとにかくオシャレして楽しもうよ！っていう曲なんですけど、そういうのっていいなと思って。落ち込むこともあるけど、本当にずっと落ち込んでてもしかたないから。だから、嫌なことは一日も早く忘れて、前向きになれるようにおもいっきり、今を楽しめたらいいなって」

■そうだね。じゃあ、moca は？

moca「聴いてくれるみんなと目線を合せた歌詞も歌っていけたらいいなと思ってます。きっと、それは、自分たちが成長していく上で変化していくところでもあると思うので、聴いてくれる人たちと一緒に歌詞も成長していけたらいいんじゃないかなって思います」

■お互いに成長していけるっていうのはいいことだよね。mocaが今、いちばん共感できる曲は？

moca「〝brand new story〟とかは、今の自分に近いんじゃないかな？って思います。覚悟を決めて、夢を掴む為に上京して来たって言う歌詞が、去年の6月から上京してきた、今の自分の心境にピッタリだなって」

佐藤友祐「〝brand new story〟の歌詞は、好きな人を遠い場所においてくるストーリーだけど、mocaも誰かおいてきたってこと!?（笑）」

moca「好きな人じゃないけど、家族だったり友達だったりとは離れてきたから、そこが〝好きな人〟に代わるとこかな〜」

honoka「たしかにね、そこは誰を当てはめてもいいわけだからね」



初めてのファンクラブイベントで
一緒に曲を作ったりもしたので、そういう交流は
この先もずっとしていけたら嬉しいです（moca）

lol party up!!

hibiki「そうそう。特に恋愛の歌詞って限定する必要はないからね。だけど、聴いてくれる人に好きな人が居たら、きっと〝brand new story〟は恋愛ソングになるだろうしね」

honoka「そうそうそう。だから、〝好きな人をおいてきたの？〟って聞いた友祐は、自分が好きな人をおいてきたんじゃない？（笑）」

hibiki「そうそうそう、そういうこと（笑）。恋愛ソングとして聴いてるわけだからね（笑）」

■置いて来たんだな、北海道に（笑）。

小見山直人「あははは。ツッコミを入れたのに、逆に突っ込まれたっていう（笑）」

佐藤友祐「置いて来たよ、101人くらい（笑）」

■101人!?　なんで101人!?

佐藤友祐「101＝lolですよっ！（笑）」

一同「何それ〜（笑）」

■ブーイングの嵐（笑）。honokaは？

honoka「hibikiが言ってたことと、そのまま同じことを思ってますね。本当に同じ。聴いてくれる人の人生に影響を与える歌詞を歌っていけたら嬉しいなって思う。誰にでも、〝この曲聴くと、あの頃を思い出す〟っていう曲って絶対にあると思うんですよ。〝この曲聴くとめっちゃ悲しくなる〟とか〝この曲聴くとめっちゃ楽しくなる！〟とか。lolの〝bye bye〟聴いたら、あの頃の恋愛思い出すな〜〟とかっていうふうに、みんなの青春の中にlolの曲があってくれるような、そんな歌を歌っていけたらいいなって思うんです！　その人にとって大切な曲を歌っていきたいな〜って」

■ミュージックビデオも思い出の中に色濃く残るだろうからね。「bye bye」のミュージックビデオなんて特に色濃く残るんじゃないかな？　ちょっとドキドキしちゃったけど（※hibikiが主役の恋愛ストーリーMV）。

honoka「〝ちょっと！　hibikiちゃん！〟みたいなね（笑）。ファンの中にもいましたよ、私に〝honokaちゃん！　hibikiちゃんくっつきすぎだよね！　honokaちゃんもそう思うよね〟っていうメッセージくれた子（笑）」

hibiki「え!?　そうなの!?　hibiki、直接は何も言われなかったよ！　でも、相手役は初めてお会いした方で、当日ご挨拶して3秒後に一緒にお風呂入ったんです（笑）」

■活字にすると、よりドキドキするな（笑）。

moca「最初、まだ編集前のものを見せてもらったので、ドキドキするシーンばっかりで、mocaも〝どうなっちゃうんだろ!?〟って思いました（笑）」

佐藤友祐「ちょっと嫉妬する部分もあったかもしれないけど、hibikiは同性のファン



〝bye bye〟聴いたら、あの頃の恋愛思い出すな〜〟とかっていうふうに、みんなの青春の中にlolの曲があってくれるような、そんな歌を歌っていけたらいいなって思うんです！（honoka）

も多いから、共感する人のほうが多かったかもね」

小見山直人「でも、両方役者さんでやるより、やっぱりメンバーであるhibikiが演じたことで、よりリアルに歌詞が伝わったと思うから、良かったんじゃないかなって思うよね」

■そうだね。じゃあ、honokaが今、いちばん共感出来る歌詞は？

honoka「全部に共感出来るんだけど、敢えて選ぶとするなら〝think of you〟かな。〝今〟ってことではないんだけど、レコーディングのときのことを今でもハッキリと覚えてるというか。それもあって、気持ちがいつも入るんです。あと、この曲は、歌詞の意味を深読み出来るとこも好きかな」

■なるほど。直人は？

小見山直人「僕は、共感出来たらいちばん伝わるんじゃないかな？って思っているので、みんなの人生の中で共感出来ることを、歌っていけたらいいなと思ってますね。絶対に自分に重ねて聴くと思うんですよね、歌詞って。だから、みんなの言うように、いろんな気持ちを歌っていけるグループでいたいなって思いますね。分かりやすくて、気持ちを重ねやすい歌詞を届けていけたらな、と」

■そんな直人が今、自分たちの歌詞でいちばん共感出来るのは？

小見山直人「〝shake shake〟ですね。〝殻を破れ〟とか、〝一緒に挑戦していこう〟とか、そういう意味の歌詞。僕自身、物事を始めるときに、一歩を踏み出せずに躊躇してしまうときがよくあるんで、そういう自分に重ねたときに〝shake shake〟はすごく当てはまるというか、背中を押してくれるんです。自分にとっても力になってくれてる1曲なんですよね」

honoka「そうだね、〝shake shake〟の歌詞ってそうだね（改めて納得）。〝shake shake〟は、女子チームは踊ることに徹する曲でもあって、サウンド重視で聴いていたけど、本当にそうかもね。でも直人、こんなこと言ってますけど、本当は〝girl is mine〟に一番共感してる気がするんやけどなぁ〜（笑）」

小見山直人「誰を誰と取り合ってんの!? 〝girl is mine〟は1人の女の子を取り合う曲やぞ!?（笑）」

佐藤友祐「いやいや、きっと直人はね、〝sync〟だと思うなぁ〜（笑）」

小見山直人「適当やな、ほんまに（笑）。なんで俺ばっかりそんなに突っ込まれんの？」

honoka「いやいや、面白いかなと思って（笑）。でも、〝girl is mine〟とか〝sync〟は、そういう状況にある人には共感出来ると思うけど、このあたりの曲は、歌詞に共感するというより、サウンド重視の〝魅せる曲〟なのかなと思うので、そういう曲もいっぱ



●小見山直人

いやっていけたらいいなと思いますね」
佐藤友祐「そうだね。特に〝sync〟はアニメをイメージした曲だったから、歌詞がすごく詩的だったりするもんね。〝忘れていた感覚が 今 二つを一つにシンクロさせる〟とかだもん」
小見山直人「そこに共感はなかなかないでしょ(笑)。俺、普段どんな生活してんの!?」
同「あははは!(爆笑)」

■グループ内的役割として、直人は突っ込まれ役になったわけ?(笑)

hibiki「あははは。今日はたまたま(笑)。去年ツアーとかやらせてもらって、だんだんそれぞれのキャラクターがファンのみんなの中で出来て来たと思うんですけど、グループ内のボケとツッコミの役割は、その時によって違うんですよ(笑)」
moca「その時々によって変わるよね(笑)。みんなボケるし、みんな突っ込むし(笑)」
佐藤友祐「そう。その時によるんで、今、まだそれぞれの役割は模索中なんです(笑)」
honoka「自分たちでも、ファンの人の反応に驚くときとかもあるんですよ。〝あ、ここでそんなに盛り上がってくれるんだ!〟とか、〝こういうの好きなんだ!〟とか。本当に刺激をもらってる感じなんです。だから、この先は私たちがみんなを引っ張っていけるようになりたいです」
hibiki「この先、大きな場所でツアーとか出来るようになりたいけど、ただ、なったとしても、今まで通りファンのみんなとの距離はこのままでいたいから、ずっと近い距離でインストアライヴとかしていきたいです。どんなに忙しくなっても、ファンのみなさんとの交流は忘れたくないですね」
moca「初めてのファンクラブイベントで一緒に曲を作ったりもしたので、そういう交流はこの先もずっとしていけたら嬉しいです」
小見山直人「アルバムも出していけたらいいなと思ってますので、楽しみにしててほしいなと思います!」 B



Digital single
party up!!
2017.02.14 Release
¥231(tax out)

01.party up!!

lol ⇒
エルオーエル。2014年に結成。2015年8月12日に、シングル「fire!」でメジャー・デビュー。4月19日に5thシングル「boyfriend / girlfriend」をリリース予定。5月6日より、初の全国ライヴツアーもスタートする。

いろんな気持ちを歌っていけるグループでいたいなって思いますね。
分かりやすくて、気持ちを重ねやすい歌詞を
届けていけたらな、と(小見山直人)

lol party up!!

New Era®の[9FIFTY™]¥5,000(税別/ニューエラ tel.03-5773-6733)、その他・すべて本人私物



hibiki (lol)
talk about
New Era®

■New Era®の帽子は現在何個ぐらいお持ちですか?
「キャップだけでも10個以上はあると思います。あとニットキャップもいくつか持ってますね」
■最近はツバがカーブしたタイプも人気ですが、hibikiさんはフラットなタイプとどちらがお好みですか?
「どっちも好きなんですけど、最近よく被っているのはツバが曲がってるタイプの[9TWENTY™]です。ダンスをする時もニューエラのキャップを愛用しているので、フラットバイザーもサイズ調整ができるスナップバックを選ぶことが多いですね」
■普段はどんなファッションの時にNew Era®を合わせますか?
「今被っているような[9FIFTY™]は、ストリート系の時に被ることが多くて、ツバが曲がった[9TWENTY™]はどんな格好にも合うので、今日帽子を被りたいなって時にピッて出して被ったりしています(笑)。最近は古着とかもガッツリ着るんですが、New Era®の帽子を被ると、そこに目が行ってファッション全体が引き締まるので、ポイント的なアイテムとしても活用させてもらってますね」
■今回はNew Era®の中でも定番的な人気を誇る[9FIFTY™]を被っていただきました。
「ニューヨーク・ヤンキースの[9FIFTY™]は真っ黒なモデルも持っていて、よく被っているんですよ。今日は最初、派手なスウェットと合わせるつもりだったんですが、やっぱりワントーンっぽくしようと思って落ち着いたスタイリングにまとめてみました」
■この[9FIFTY™]を着こなす上で、他にオススメのコーデはありますか?
「デニムも絶対似合うと思います。今日も"うわぁ、やっぱりデニム持ってくればよかった"って思ったんですよ(笑)。ちょっとダボッとしたジーンズで、上にピタッとしたTシャツを合わせたら超可愛いだろうなって」
■改めて伺いますが、New Era®の魅力ってどんなところだと思います?
「どんな服にも合わせやすいし、いつでも被れるところじゃないですかね。それと私の中では超王道っていうイメージもあります。いろいろなコラボも素敵だけど、やっぱりニューエラっていうブランドがあってこそだと思うし、その印象は小さい頃お父さんにおねだりしていた時からずっと変わっていませんね」 Ⓑ

Spring & Summer 2017 **hibiki's Recommend Item**



Bucket-01
¥4,600(税別/ニューエラ)

「最初にパッと目に入った時に"あ、可愛い!"って、直感でビビッときました。形もいいし、やっぱり柄が可愛いですよね。もし夏にこの帽子を被るなら、タンクトップに薄いジャケットを着て、ショーパンを履いて、ヒールがガッツリ高いサンダルで海に行きたいですね!」

hibiki ⇒
ヒビキ。佐藤友祐、小見山直人、hibiki、honoka、mocaによる男女混成5人組パフォーマンスグループlol(エルオーエル)のメンバー。2014年に結成。2015年8月12日に、シングル「fire!」でメジャー・デビュー。

INFORMATION

4月19日に5thシングル「boyfriend / girlfriend」をリリース!
5月6日より、初の全国ライヴツアー『lol live tour 2017-lolz-』がスタート!
詳細はオフィシャルサイトにて⇒ **http://avex.jp/lol/**

B-PASS Presents

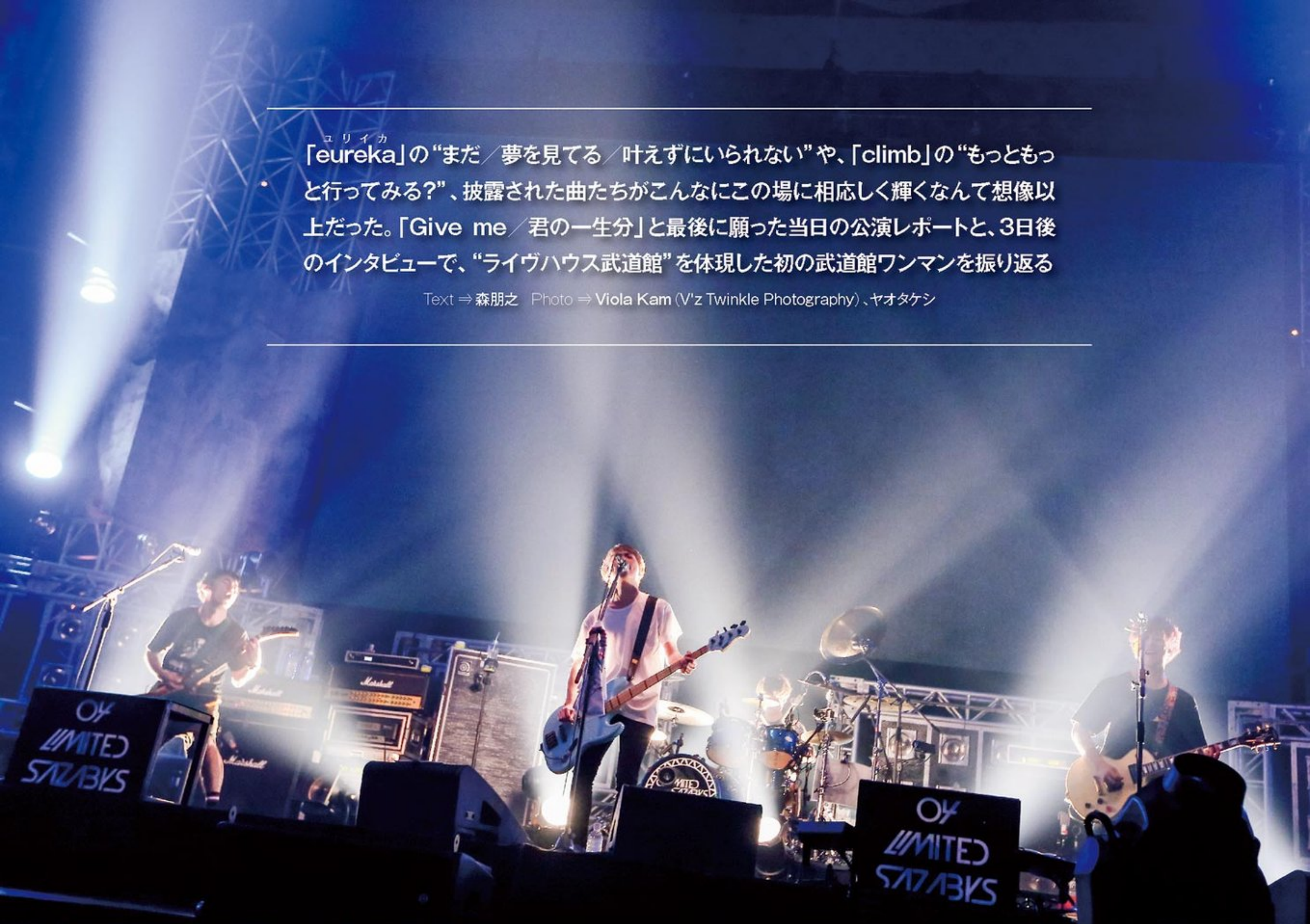
02

Text ⇒ B-PASS
Photo ⇒ 早坂直人(Y's C)

New Era® meets hibiki (lol)

続いては、モデルとしても人気沸騰中のhibikiさんが、
New Era®の人気キャップ[9FIFTY™]をセルフコーデ!
クールなスタイリングを披露してくれました!

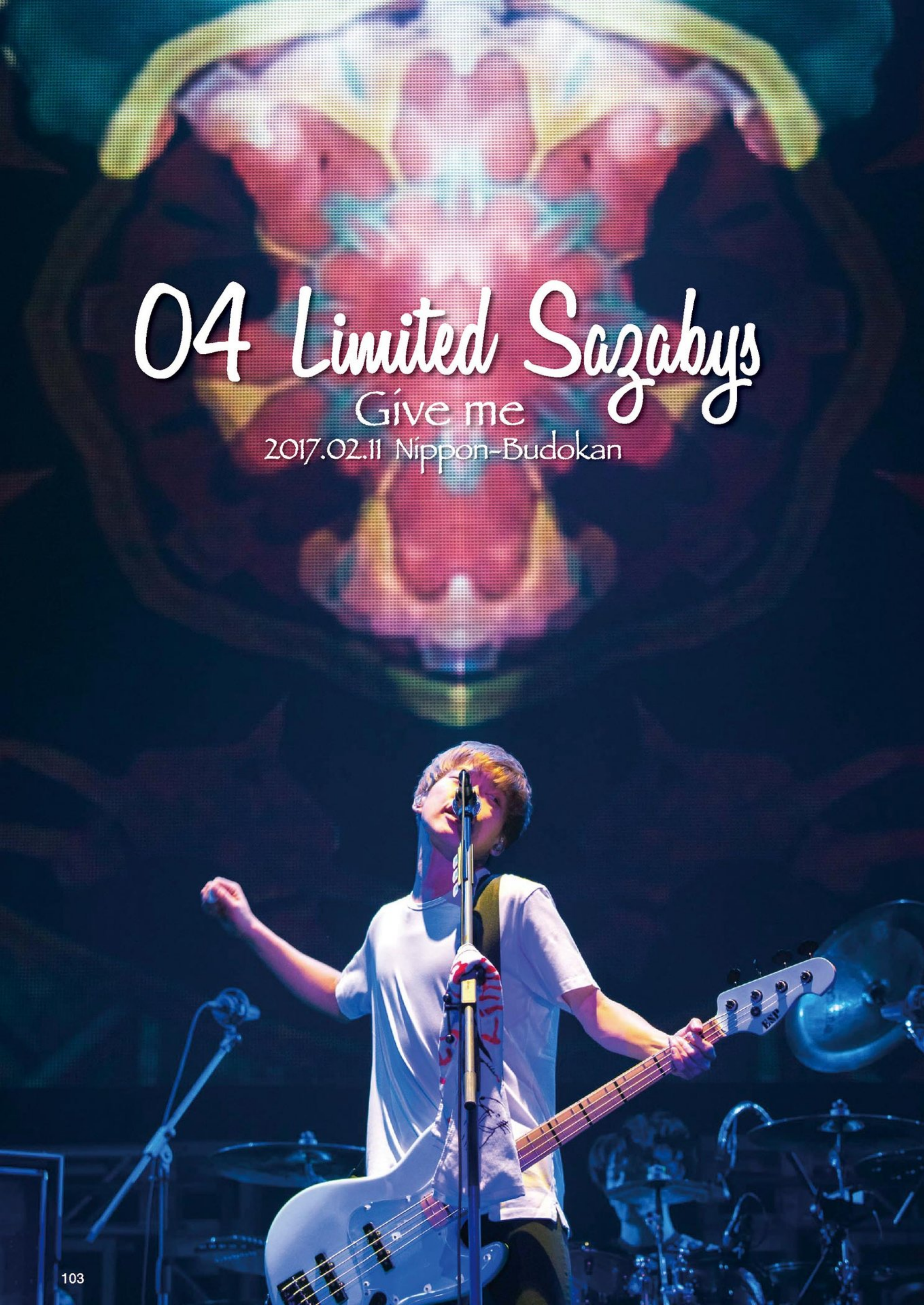




「eureka（ユリイカ）」の"まだ／夢を見てる／叶えずにいられない"や、「climb」の"もっともっと行ってみる?"、披露された曲たちがこんなにこの場に相応しく輝くなんて想像以上だった。「Give me／君の一生分」と最後に願った当日の公演レポートと、3日後のインタビューで、"ライヴハウス武道館"を体現した初の武道館ワンマンを振り返る

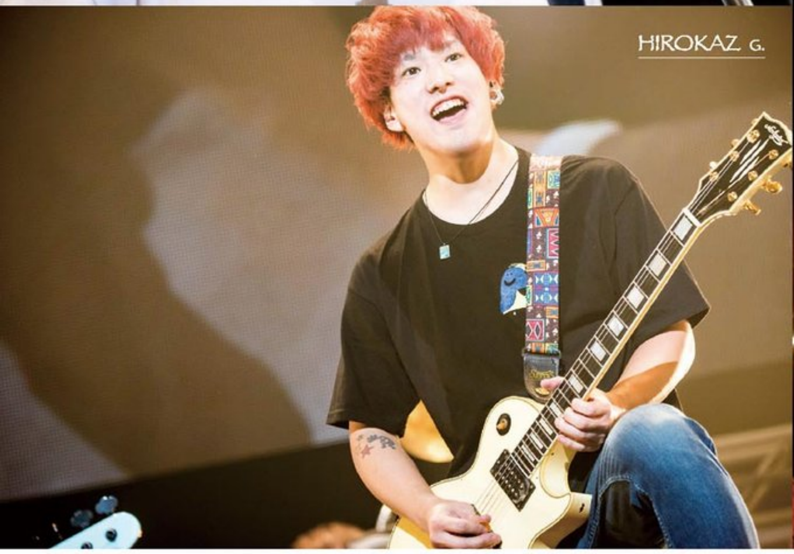
Text ⇒ 森朋之　Photo ⇒ Viola Kam（V'z Twinkle Photography）、ヤオタケシ




04 Limited Sazabys
Give me
2017.02.11 Nippon-Budokan









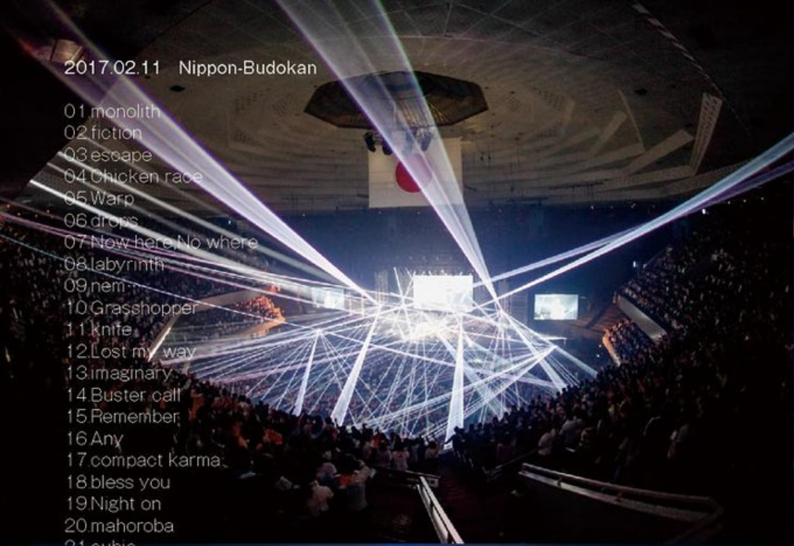
LIVE REPORT

17時を少し過ぎた頃に客席の照明が落とされ、ステージの前に張られた紗幕に、小さなライヴハウスでのリハーサルのシーンが映し出される。ステージの袖で気合いを入れ、いざライヴが始まる――という場面で映像が終わると、今度は4人のシルエットが映される。凄まじい歓声のなかで放たれたオープニングナンバーは「mono-lith」。さらに「fiction」「escape」という攻撃的な楽曲が矢継ぎ早に披露されると、オールスタンディングのアリーナでは早くもサークルモッシュ、クラウドサーフが起こり、観客は熱狂の度合いをグングン高めていく。汗が飛び散る会場の雰囲気はまさにライヴハウスそのものだ。

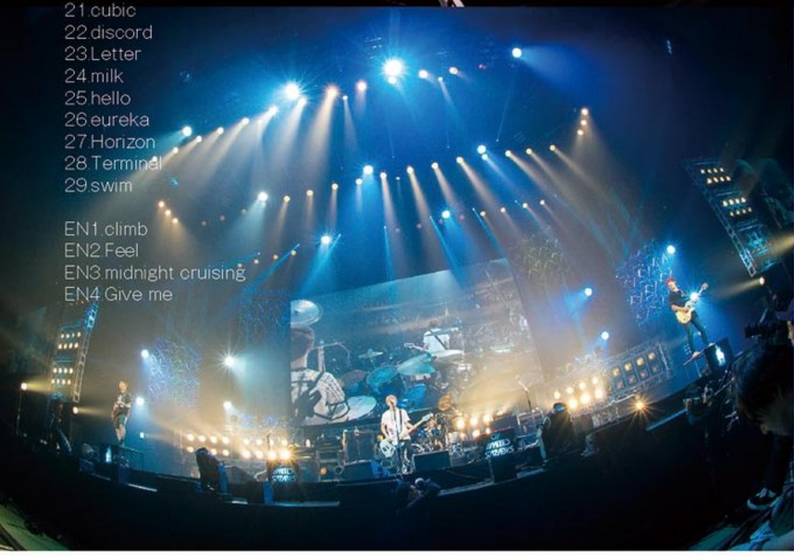
「とうとうこの日がやってきました。名古屋のライヴハウスからここまでたどり着きました04 Limited Sazabysです。全国各地から見届けに来てくれたみなさん、ありがとうございます。曲数もいままでで一番やるんじゃないかな。一音一音、心を込めてそっちに飛ばすんで、一緒に気持ちいいところに行きましょう!」というGEN(Vo.&B.)のMCを挟み、メジャー2ndアルバム『eureka』の収録曲「Warp」「drops」へ。多彩なリズムアレンジ、華やかなポップネスを共存させた楽曲からは、このバンドの現在のモードがはっきりと伝わってきた。武道館ライヴの前に40本に及ぶアルバムツアーを行なったフォーリミはまさに絶好調。この日のライヴには、ツアーのなかで得た手応えもしっかりと反映されていた。「まだまだ踊れるか?!」と煽りながらステージの端から端まで走り回るRYU-TA(G.)、お立ち台に上がってシャープなフレーズを放ちまくるHIROKAZ(G.)、高速の2ビートからバウンシーなダンスビートまで幅広いドラムでライヴ全体を牽引するKOUHEI(Dr.)も最初から全開。メンバー全員がこのスペシャルなライヴを自然体で楽しんでいることがわかる。

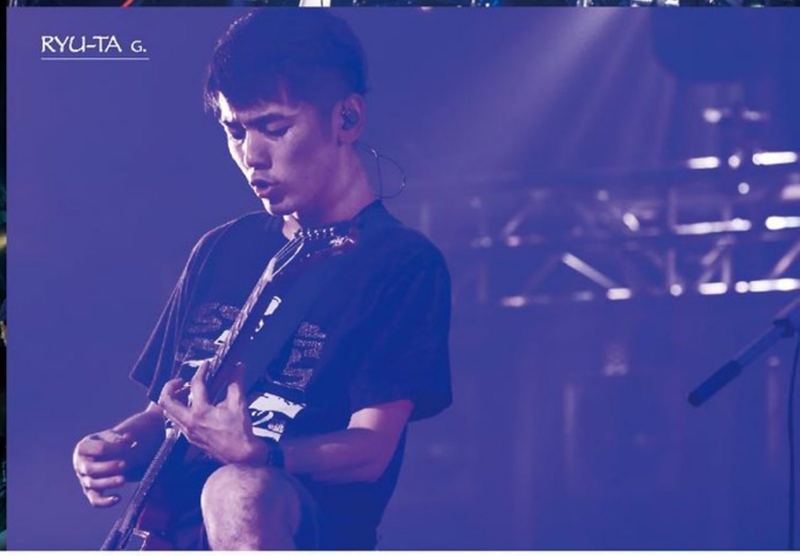
「懐かしい曲もやっていこうと思ってるんですけど、こんなにいい場所で鳴らせると思ってなかったから、曲たちも嬉しそう」(GEN)というコメント通り、インディーズ時代の楽曲も次々とプレイ。ミュージックビデオを映しながら演奏された「nem…」(3rdミニアルバム『mono-lith』収録)、イントロが始まった瞬間に「うわぁ!」という歓声が沸き起こった「Glasshopper」(1stミニアルバム『Marking all!!』収録)など、これまでのライヴを支えてきた楽曲たちが大舞台で気持ち良く広がっていく。また、過去のライヴの映像、これまでのライヴの日程と会場(凄まじい数!)をビジョンに映し出す演出も心に残った。地元・名古屋を中心とした小さなライヴハウスで活動をスタートさせたフォーリミは、1本1本のライヴに真摯に向き合い、試行錯誤を繰り返しながらライヴバンドとしてのポテンシャルを自ら引き上げてきた。超満員の日本武道館ライヴでこれほどまでに堂々としたステージを繰り広げることができるのは、約10年に及ぶライヴサーキットの賜物なのだ。

ライヴ中盤ではメンバーのユーモア精神が発揮されるコーナーも。「今日は一緒に旅をしてきた仲間たちもみんな来てくれてます。豪華なアーティストもビデオレターを送ってくれて。たぶん、ビックリすると思うよ」(GEN)というMCに導かれたのは、メンバーがフレ









ディー・マーキュリーや(RYU-TA)、くいだおれ太郎(HIROKAZ)、芥川龍之介(GEN)、「魔女の宅急便」のキキ(KOUHEI)などに扮したオモシロ映像。会場が笑いに包まれるなか、「いや、俺は嫌だったんだけど、KOUHEIがどうしても女装したいって言うから……」(GEN)→「言ってねえわ!」(KOUHEI)→「ウダウダうるせえな。じゃあ、男らしいところ見せてみろよ!」(GEN)というクダリから爆発的なドラムソロに突入。「Night on」「discord」などのアルバム『eureka』に収録されたアッパーチューンで再びフロアを熱狂の渦へと巻き込んでみせる。まさに緩急自在。楽しさと激しさを高いレベルで共存させたステージを見ていると、これが

ここまで来たからには山頂を目指すしかない。俺たちこんなもんじゃないです!

初めての武道館だとはとても思えない。

ここからライヴはクライマックスに向かって進み始める。「あんなに通じ合ったのに/盲目になって今日も拗ねる」から始まる手書きの歌詞を映しながら演奏された「Letter」、観客が声を揃えて合唱した「hello」、そして、「ここで歌うために作りました」というバラードナンバー「eureka」。ドラマティックなメロディラインと星空を想起させるライティングが重なったこの曲は、フォーリミの初武道館を象徴するシーンのひとつだったと思う。

ここでGENはオーディエンスに向かってゆっくりと語り掛ける。自分たちは金もコネもなく、オーディションに受かったわけでもなくて、ガラガラの名古屋のライヴハウスから少しずつ仲間を増やし、地続きでここまでやってきたこと。いいタイミングでいい人と出会えたことで、いまの自分たちがいること。ここに来るまでにいろんな出会いと別れがあって、辞めたくなくても辞めなきゃいけなかったバンドもたくさんいたこと――。「ここに自分ひとりで立っている気が全然しません」と目を潤ませて言うGENの言葉からは、フォーリミが武道館のステージに立つことの強い意義が真っ直ぐに伝わってきた。

本編ラストは「Horizon」「Terminal」「swim」というポジティブなメッセージを込めたナンバー3連発。アンコールでも感動的なシーンが次々と実現する。4台のミラーボールがロマンティックな光を放った「midnight cruising」、そして「俺たちはみなさんの青春の思い出になりたいわけじゃない。できるだけ一緒にいたい。できれば一生一緒にいたい!」(GEN)というMCからつながったラストナンバー「Give me」。大きな感動と強烈な高揚感が同時に押し寄せるなか、ライヴは終了した。「ここまで来たからには山頂を目指すしかない。俺たちこんなもんじゃないです!」(GEN)と宣言した04 Limited Sazabys。初めての日本武道館公演という最高の晴れ舞台で最強のライヴバンドとしての存在感を改めて見せ付けた4人は、ここから新しいストーリーを描き始めることになるだろう。

■初めての日本武道館ライヴ、本当に素晴らしかったです!

全員「ありがとうございます!」

■ライヴ後の打ち上げも盛り上がったんじゃないですか?

GEN「いやー、あの日は朝早かったし、スタッフも夜中から準備してましたからね。だいぶ疲れてたんで、サッと帰っちゃいました。俺が帰った後、どうした?」

KOUHEI「30分くらいで帰ったよ」

■次の日は休み?

KOUHEI「そうだったんですけど、筋肉痛で動きたくなくて」

GEN「あ、俺も」

HIROKAZ「俺も痛かった(笑)」

GEN「俺も首が痛くて(笑)。やってる最中はわからなかったけど、いつもより力が入ってたんでしょうね、たぶん」

■すごく自然にやっているように見えましたけどね。武道館のライヴは大成功だったわけですけど、みなさんの手応えはどうでしたか?

GEN「来てくれたみんなにとっても〝おめでとう〟と言える場所なんだなって思いましたね。ずっと武道館を目指していたわけではないから、集大成とかゴールという感じを出したくなかったというか、個人的にはいつも通りにやりたいと思ってたんですよ。でも、全国からたくさんの人が集まってくれたし、みんなすごく思い入れを持ってくれていて。会場に流れる空気がいつもとは違ってましたね」

KOUHEI「ライヴ自体は一瞬でした。ゲネプロのときは結構疲れてしまって、〝大丈夫かな?〟という不安もあったんです。でも、本番では〝まだまだいける〟という感じで、体力的には楽勝だったので。お客さんが作ってくれた景色に助けてもらったんだと思います」

HIROKAZ「うん。1曲目の〝mono-ith〟で幕が下りた瞬間にお客さんが見えて〝いつも通りやれるな〟と思えたので。33曲やったし、映像もあったんですけど、テンポよくやれたと思うし。ホントにアッという間でした」

RYU-TA「僕はけっこう動き回ってたんですけど、ステージの端まで行くとお客さんがすごく近くて。みんなの笑顔とか、楽しそうにアガってるところも見えたので〝よし、やってやろう!〟という気持ちにもなれたというか。アリーナクラスの会場ですけど、ライヴハウスのような感覚でやれましたね」

GEN「確かに〝デカいところでライヴをやってる〟という感覚はそこまでなかったですね。フェスでもっと大きい場所でもやらせてもらったことあるし、未体験ゾーンではなかったというか。メンバーとも〝これなら怯まずにやれそうだね〟という話をしてましたからね」

■いままでの積み重ねがあったからこそ、武道館のステージにも堂々と立てたわけですね。

GEN「そうだと思います。あと、『eureka』のワンマンツアーはZeppとかなんばhatchみたいな大きめの会場だったから、2階の高さも意識しながらライヴをやってたんですよ。前のほうで盛り上がってる人はもちろんなんですけど、後ろのほうにもしっかり気持ちを入れて聴いてくれてる人がいるだろうから、奥のほうまでちゃんと届くように意識して。それも良かったと思いますね」

■アリーナはスタンディング形式でしたが、あれはメンバーの希望?

KOUHEI「そうですね。スタンディングのほうがライヴ感があるというか。ずっとライヴハウスでやってきたバンドだし、いきなりイス席というのも違うかなって」

GEN「学園祭とかではイスありのライヴもやったことがあるし、それはそれで良いと思っていて。ただ、自分たちで選べるんだったら、やっぱり席ナシのほうがいいなっていう。このタイミングで座席があったら、ちょっとブレてる感じもすると思ったんですよね」

■実際、お客さんもめちゃくちゃ盛り上がっていて。

GEN「インディーズの頃はいま以上に激しかったんですけど、その頃から応援してくれてる人たちと一緒にここまで来れたという感覚もありますからね。僕らも成長しているし、いろいろ考えながらライヴをやるようになってますけど、昔を知ってる人が見ても〝スタンスは変わってない〟と思ってもらえるライヴをやりたかったので」

■演奏もめちゃくちゃタイトだったし、音もすごく良かったです。

GEN「音に関しては音響のみなさんが攻めてくれたんじゃないかな(笑)。演奏については、やってるときはよくわからなかったんですよ、正直。緊張というか、ちょっとフワフワしてる感じもあったし〝大丈夫、イケてるはずだ〟と思うしかなかったので。あとでみなさんから〝すごく良かったよ〟と言ってもらって、やっと〝あ、大丈夫だったんだ〟ってわかったというか」

RYU-TA「そうだね」

GEN「武道館のために初めてイヤモニを使ったんですけど、それも最初は慣れなくて。そういう部分の試行錯誤はありましたね」

■ミラーボールとかレーザーとか大きい会場ならではの演出も多くて。みなさんが印象に残ってるのはどんな演出ですか?

HIROKAZ「〝knife〟の炎ですね。ステージの前から炎が出たんですけど、いままで映像でしか見たことがなかった演出を自分のライヴでやれているのが嬉しくて。かなり熱かったんですけど、本番は自分で炎のほうに近づきました(笑)」

GEN「めっちゃ熱かったんですよ。僕はマイクの位置から下がれないから、マジで顔のあたりが焼けるんじゃないかと思って(笑)。初めての演出もたくさんあったんですけど、ひとつクリアするたびに〝よし、上手くいった!〟って進んでいける感じもあって。メンバー4人だけじゃなくて、音響、照明のスタッフともタイミングを合わせなくちゃいけないので」

KOUHEI「以前のライヴでは〝出る予定だったスモークが出ない〟みたいなこともありましたからね。そういう経験も活かせたと思います」

GEN「今回もゲネの段階では上手くいかない部分もあって。本番は大丈夫でしたね。武道館に受け入れてもらえたのかも(笑)」

■引きが強いですよね、ホントに。

RYU-TA「僕は〝Buster call〟の前の演出が印象深いですね。映像があって、そこからギターが入るという流れなんですけど……」

HIROKAZ「本番がいちばん上手くいったよね」

RYU-TA「うん。お客さんやバンドマンから



04 Limited Sazabys ⇒
フォーリミテッドサザビーズ。'08年名古屋にて結成。'15年4月に1stフルアルバム『CAVU』にてメジャー・デビュー。今後は、3月29日発売、ASIAN KUNG-FU GENERATIONトリビュート・アルバム『AKG TRIBUTE』に参加。主催フェス『YON FES 2017』を4月1日・2日に愛知県・モリコロパーク（愛・地球博記念公園）にて開催する。

も〝あの演出が良かった〟って言ってもらえたので」

■これまで行なってきたライヴの日程と会場名がスクリーンに映されて、そこからギターのアルペジオが始まる演出ですよね。

GEN「あれは武道館が決まったときから絶対にやりたいと思ってたんですよ。昔の映像も使いたかったし、名古屋のライヴハウスから始まって、地続きでここまで来たということを表現したかったので。年表の最後が〝2017年2月11日　日本武道館〟ってエモいじゃないですか」

KOUHEI「ホントだよね」

GEN「お客さんのなかには〝あのライヴ、私も行った〟と思う人がいるだろうし。みんなで一緒にここまで来たという感じになってもらえるかなって」

■なるほど。それにしてもすごい数のライヴをやってますよね。

GEN「そうですね。〝意外と苦労してるんだな、こいつら〟っていう（笑）」

HIROKAZ「ああやって振り返ると〝けっこうやってるな〟って思うくらいですけどね」

KOUHEI「3週間くらいやらないと〝久しぶりだな〟って思っちゃうんで（笑）。やっぱりライヴをやってないとダメなんでしょうね」

GEN「そのおかげで、ライヴ中に何があっても動じない感じになってるんですよ。ハプニングが起きたときが力の見せどころというか、そこで経験が出ると思うんです。ハプニングによって崩れてしまうバンドも見てきましたけど、逆にそれをプラスにできるのがエンターテイナーだと思うので。実は武道館のときも、リハでRYU-TAのギターの調子が悪くなっちゃって。一瞬〝武道館ってやっぱり魔物がいるのかな〟って思ったけど……」

RYU-TA「俺も思った（笑）」

GEN「そのときも〝もし本番でトラブルがあっても、冷静に対処しよう〟と思えたし。焦ってる感じが出ちゃうと、お客さんがかわいそうじゃないですか。僕らのいい顔を見たいと思ってるだろうから」

■確かに。それにしてもフォーリミは愛されてますよね。オーディエンスにもバンドマンにも。

HIROKAZ「そうですね」

GEN「何よりも嬉しかったのはそれですよね。自分たちの晴れ舞台というか〝武道館のステージに立ったぞ〟という気持ちもありましたけど、あれだけたくさんのお客さんと仲間たちが見に来てくれて、〝良かった〟って言ってくれたのがいちばんだなって。ちょっとずつちょっとずつ増えていった仲間なんですけど、改めて愛されてるなっていう実感がありました」

■次の目標は4月1日、2日に行なわれる主催フェス「YON FES」ですね。

KOUHEI「はい。『YON FES』があるから、武道館が終わった後もすぐに〝次〟に向かって切り替えられたので」

RYU-TA「武道館が無事に終わって、やっと『YON FES』に集中できますね」

GEN「今年は2回目ですからね。初年度はバンドマンもお客さんも大きな心で見てくれていたと思うんですけど、今回は違うので。去年のことをふまえて、もっと快適にもっと楽しく過ごしてもらえるようにしないと。がんばります！」 B

[L→R]
KenKen_B.
JESSE_Vo.& G.
金子ノブアキ_Dr.



RIZE



SILVER

『銀魂』を愛するあまり、テーマソングのオファーがあった時のためにと、
KenKen（B.）が自ら作曲し温めていた楽曲が、時を経た今、実際にエンディングテーマに抜擢！
熱くブレないメッセージと人間力とテクニックがぶつかりあい爆発したバンドサウンド。
結成20周年イヤーに突入したRIZEが放つ、'17年一発目シングル「SILVER」についてKenKenに訊いた。

Text ⇒ 大西智之

■今回の表題曲はTVアニメ『銀魂.』のエンディングでも流れていますが、KenKenさんは昔から『銀魂』の大ファンなんだとか(笑)。

「そうそう(笑)。『銀魂』のアニメはスタート時から観ていて。俺、6年くらい前に勝手に主題歌を作ってたんだよ」

■そんな前に!

「うん。いつか話が来たら速攻で出そうと思って(笑)。ただ、その時は、RIZEの曲としては作ってなかったし、もっとファンキーだったの。言ってしまえば俺が趣味で作って終わってもいいはずの曲だったんだよね。それが、RIZEが結成20周年で、EPICレコードジャパンに戻ったこととか、アニメ『銀魂.』が深夜に再開したりとかね。そういういろんなパズルがハマッたんだよね」

■運命の巡り合わせですね。

「俺的にはすげぇドラマがあるんだけど、あっくん(金子ノブアキ)とJESSEからしたら、いきなり来た話だし。しかもエンディングが決まりましたから曲を作りませんか?ってことでもなかったからね」

■採用されるかわからないけど曲を出して、手を挙げようって感じだったんですね。

「そう。だから、本当に今回は2人が嫌な顔一つせず、一緒にやってくれたことが嬉しくて。感謝しています」

■『銀魂』のどこに惹かれたんですか?

「超パンクスだと思ってるの。俺の人生観とすげぇ重なっているというか。やってみるだけやってみて怒られたらちゃんと謝ろう、みたいな感じがね。で、その6年前オープニング用に〝銀〟、エンディング用に〝魂〟っていう曲を1曲ずつ書いて。この〝SILVER〟はその〝銀〟のほうで。『銀魂』のオープニングってだいたいゆっくりロゴが出てくるみたいな。〝SILVER〟のイントロのベースは、あのロゴの場面を意識して作っていたし。曲に合わせてキャラクターが動いている姿を意識して作っていたんだよね」

■そうなんですね。『銀魂』って、確かに行き切ったふざけ感、パロディ感もいいし、銀さんの生き方も……。

「生き方、いいよね。だらしないところはだらしなくて。3枚目っぽいんだけど、ピシッとしているところはしてる。RIZEのみんなもそんなところがあって。ふざけてるんだけど、1本ちゃんと筋が通っている人間でさ」

■その筋も自分の価値観での筋で。

「そうだね。JESSEって見た目は外国人だけど、チャキチャキの江戸っ子だからさ(笑)、彼のいつもの感じを、ちょっとだけ『銀魂.』のストーリーを頭に入れた状態で書いてくれたら絶対にハマるはずだ、と思ったし。だから〝四文字熟語とか、そういうわかりやすい感じでできたらいいね〟とか、歌詞の話はそれくらいしかしてない(笑)」

■〝爆雷再来 捲土重来〟という歌の始まり方ってかなりカッコいいんですが、四文字熟語というキーワードはあったんですね。

「四文字熟語って日本ぽいしね。あとはチャキチャキでお願いします、みたいな(笑)。やっぱ東京生まれしか出せないんだよね。チャキチャキの感じとか、半歩先に殴りにいく、みたいな江戸っぽい感じはね(笑)。『銀魂.』も江戸の話だし。アニメの主題歌をやるのは、RIZEにとってチャレンジに映ってるかもしれない。でもそういう感じだから、俺らは全然ナチュラルにできてるんですよ。まぁ、マーケット的なものにちょっと動きを合わせて、〝TV size ver.〟(アニメエンディング用のショートバージョン。期間生産限定盤収録)を入れてみたりというのは、今までの俺らだったら絶対しなかったことではあるけど(笑)」

■曲としては、RIZEのもの、でしかないですから。

「用意したのはナイスな3曲だし、RIZEの良さが伝わるかな、と思う」

■「SILVER」と、20周年の幕開けに配信限定リリースした「ONE SHOT」のリテイク、2001年発表の「日本刀」を今のRIZEアレンジでスタジオライヴ録音したものと。この3曲はすべて、RIZEってこういう音楽だよね、って言われるようなスピード感だけど、全然違うっていう。

「リズムの〝跳ね方〟が全部違うというね。あとRIZEってさ、取りあえずぶつかり合いまくって、暴動に近いっていうかさ、バンド内暴動、客も暴動みたいな(笑)。そんなものも封じ込められたね」

■でもその手のつけられない3人の呼吸がピッタリと合っていて。「SILVER」は、スラップベースの派手な始まりにもアガったけれど、その後のギター、ベース、ドラムがひとつのリフを生んでるあのノリが肝でもある。

「RIZEではリフもシンプルに作ったりするんだ。俺らがキッズの時に、〝このリフ、簡単なのになんで自分で弾いてみるとああいうふうにカッコ良くならないんだろう?〟とか思っていた感じ。そこが大事で。それってグルーヴだと思うし」

■身を任せたら勝手に体が動くようなノリ。

「うん、だから好きにノってくれたらいいんだよね。で、暴れたくなったら暴れてくれたらいいし、ダイヴしたくなったらダイヴしてね、ってだけの話なんだ。それが、フェスとか行くとみんな同じ動きしてる。やる側も4つ打ちの音楽ばかりでしょ。周りに合わせられないから俺たちロックをやっているのに、本末転倒になってきているな、と最近思っていて。ミュージシャンが俗離れした存在じゃないんだよね。現実の一歩先にロックバンドがいる感覚じゃん。もっと五歩先とかにいなきゃいけないものなんだよね」

■フェスでノリやすいから、初見でノレるから4つ打ちが増えるのも、ね。

「ノリやすいからそれだけでまとめちゃうってことはお客さんも進化しないし、音楽が退化していくことになる。でも、音楽っていろんな人の骸の上に成り立っているというか、いろんな人が実験しまくってきて今があるわけで。それをちゃんと理解した上でどう新しいものを作っていくかは考えなきゃやだと思う」

■あとは、その人でなければ出せない音ですよね。例えば「SILVER」のサビとかシンプルで削ぎ落としているけれど、温かさも感じたんですよね。これってピースだし、鳴らしている人の人間性だな、って。

「何をやるか、っていうより、誰がやるか、ってことだからね」

■〝君と生きる事 君を守るよ〟というラインひとつ、昔のJESSEさんならこういうニュアンスではなかったのかな、と。

「JESSEは子供をひとりで育ててさ。お父さんとしても頑張ってる。昔と同じようなことを言ってるんだけど、温度も変わるよね。それが20年目の結果だし。このサビは、元々はAメロの勢いのままいってたんだけど、思いっきり

キャッチーにしたんだ」

■〝花は舞う〟がBメロにあたるのかな？　ここの綺麗なフレーズでAメロとサビをつないでいく感じが好きでした。場面を変えてる。

「ホント！（笑）　他のRIZEの曲を思うとパンチ力がないように聴こえるかもしれないけれど、今の混ざり方はこれくらいかもね」

■Aメロの〝わっしょい　わっしょい〜〟ってところのベースなんてKenKenさんならではのパンチ力ですよ。しかもそれを浮かせないっていうのも、RIZEなんですよね。

「あれ、俺とあっくんがサウンドチェック用にやったワンテイク目だからね！　俺らリズムは、2人で同時にブースに入って、せーの、の一発録りだし。やっても2回なんだよね。このパチっとハマる感じは、あっくんとしかできない。俺が他にやってるどのバンドより気を遣ってないんだ（笑）。ライヴ中もあまりメンバーのこと見ないし。取り敢えず全力でぶつかればすごいことになるってわかっているから」

■最後のDメロのアルペジオもよかったです。

「俺のイメージでは、アニソンって後半にああいうギターのオブリが入ってる（笑）」

■いい混ざり方をしたんじゃないですか？

「そうそう！　RIZE流という感覚もあるけど、KenKenがアニソンを作ったらこういう感じかも、っていうものにRIZEの良さが入った感覚だから。みんな最終的にお前がチョイスしていいよ、って言ってくれたんですよ。俺がRIZE用にデモを作り直して、それが通った感じかな」

■KenKenさんが歌詞の言葉からグッときたところは？

「〝心臓が今日止まっても　魂が折れぬ様に今日も高く舞う〟はハマってる。『銀魂』にもそういう台詞があるしね」

■それくらいの覚悟で生きている切なさみたいなものも、RIZEの在り方に通じますね。

「この歌詞って、その人が本気で想っている何かに置き換えられるんだよね」

■そのフレーズにあることって、意識するとしないで生き方が変わりそうですよね。

「そうだね。YouTuberのCMで、〝好きなことで、生きていく〟って言ってるけど。好きなことで生きるって、好きなことが大嫌いになる、ってことだからね。実際、音楽のことなんか本当に嫌いになったり、ベースなんか弾かねぇと思うくらい自分を追い込んで、追求するし。で、もうやめようと本気で思うけれど、最後の0.0何%好きだから続いちゃうみたいなところが一番大事なわけ。楽しく生きるってラクをするという感覚に履き違えてるっていうか。本当の〝好きだから続く〟みたいな感覚を、ゲットしてほしい。楽器って練習しないとうまくならないからね」

■KenKenさんも10代からうまかったけれど、またここにきて、出すノリの感じも深まった気がするし。

「そうだね。昨日よりも今日のほうがうまいものだから、楽器って。自分が努力したぶんにセンスが追いついてこない人もいるだろうけど、だったら倍頑張らなきゃだし。それでもって、自分がどんなにうまくなっても仲間とか友達がいないと生きていけないことに気づくんだ。ソロアルバムをひとりで録ろうが、ライヴでやる時は友達がいないとできないし。そうやって考えると今、RIZEは3人揃った時になにやろうか、って前向きな感じになってる。みんなソロを作って大正解だね」

■今やRIZEは、存在するだけで音楽ファンが嬉しいバンドですよ（笑）。

「最近ライヴが調子いいというか。何があったかわからないけど、一段階パワーアップしている気がするし。フェスに出ると、俺らだけ謎にSNSのトレンドが上がるくらい。そうやってつぶやかれるのはいいことだよね、ライヴバンドとして。ライヴがヤバかったってことでその場にいた人たちが盛り上がる。それでいいんだよ」

■そして昨年11月からのライヴに続いて、4月からは40公演のツアーが始まります。

「今度は〝春季爆雷〟と〝秋季爆雷〟の2本にわけてね（笑）。それは、やれることをやるだけ。まだ発表してないところもあるし、俺はライヴ漬けなんで。首振りすぎて頭が取れないことを祈って（笑）」

■ハハハ！　リハとかガッツリやってツアーに入っていく？

「この間のツアーの時に久々に3日間くらいガッツリ入ったけど。その後はやってないね。明日久々にみんなで集まるかな」

■久々に集まるとどんな感じですか？

「自然だよ。ダベってたり。普通に実家感（笑）。まぁでも、マジで誰にも負ける気がしないというか。いい状態ですよ。やっぱいいバンドじゃん！　RIZEイケてんね、みたいなことを、20周年目で自分らでも思う、みたいな（笑）。それを俺らだけじゃなく、周りのスタッフ、レコード会社、媒体さんも含めて気づいてくれている。だからこのままやっていればいいんじゃないかな、と思うけれど。どうせならさらにもっと上を目指したいよね」

好きなことで生きるって、
好きなことが大嫌いになる、ってことだからね。
実際、音楽のことなんか本当に嫌いになったり、
ベースなんか弾かねぇと思うくらい
自分を追い込んで、追求するし。
で、もうやめようと本気で思うけれど、
最後の0.0何%好きだから続いちゃう
みたいなところが一番大事なわけ



期間生産限定盤



通常盤

New Single
SILVER
2017.03.01 Release
期間生産限定盤 ¥1,296（tax out）
通常盤 ¥1,296（tax out）

01. SILVER
02. ONE SHOT（EP edition）
03. 日本刀（STUDIO LIVE ver.）
04. SILVER（TV size ver.）※期間生産限定盤収録

RIZE ⇒
ライズ。'97年、JESSE（Vo.）と金子ノブアキ（Dr.）により結成。'00年、シングル「カミナリ」でメジャー・デビュー。'06年よりKenKen（B.）が加入。結成20周年を迎える'17年4月からは40公演のロングランツアーがスタートする。



the GazettE

New experimental result

**約6年ぶりにリリースするベスト・アルバム『TRACES VOL.2』は、全曲再録によるバラード集。
実験的な手法でのレコーディングとサウンド・エンジニアリングを含めた完全セルフ・プロデュースへの挑戦は、
バンドに大きな達成感と新しい発見をもたらしたようだ。
何事に対しても、自らのジャッジでスタートからゴールまでとことん取り組む今の彼らだからこそ
新たな輝きを与えることができた本作について、5人にたっぷり語ってもらった。**

Text ⇒ 早川洋介



the GazettEにとって2作目となるベスト・アルバム『TRACES VOL.2』。今作は全曲リレコーディングのバラード集となっており、さらにエンジニアリングの作業含めて完全セルフ・プロデュースという、実に意欲的な内容なのだ。今後への大きな糧となった制作過程の模様を語ってもらった。

■まさに数日前に、セルフ・プロデュースで作品を完成させたばかりということですが。

RUKI「達成感しかないですね。いろいろ勉強になって、すごくためになりましたよ」

REITA「5人で模索しながらやったことが大きくて、エンジニアさんがいたらここまで付き合ってくれないはずなので。ホントに毎日、試行錯誤を繰り返していくなかで、なんとなく〝次回はこういうほうがいいのかな〟ってものが見えてきたことは収穫でした。再録ってことで、ちょっと勇気が出て、いろいろ挑戦できたというか(笑)。次につながるレコーディングでしたね」

葵「とても実験的な要素が大きかったので、いい経験になったなと」

麗「ホント、実験、実験、実験……という感じで。セルフということよりも、そもそも手法が初だし、それによって何が起こるかも、想像できているようでできてない部分もあったし。でも良くなると信じてやってたんで」

■それはレコーディングの手法ですか?

麗「ええ。今回は根本的にほとんどが作り方から別モノで、わりとDTMのアプローチに振っているんです。ドラムも実際に叩いてはいますけど、さらにその音を構築していく作業が大きな比重を占めていたりとか。今までは絶対にドラムは生だったし、他のものも同じ空気感

でないと成立しないってことが支配してたんですね。でもドラムの録り方が変わると、ギターもベースも生でマイキングしてなくてもなじんできたり、そうやって根っこが変わったことが今回大きな変化で」

戒「こういうレコーディングの仕方もアリなんだなという発見はありましたね。たとえば、プリプロをしながらワンコーラスずつ録っていって、その一つひとつの音を詰めていくやり方は初だったし、手探りしてやるというね」

■ジャッジがすべて自分たちですから、過去最高にこだわりぬいた作品でもある？

RUKI「そういう側面はありますね。あと、“このアレンジだから、こう聴こえる／聴こえない”ってことまではっきりわかったのは初めてだったのかな。今までやってきた形が必ずしも全部正解じゃなかったのかも、とは思いましたね。奥深いなという」

■ここにきて新たな発見があったわけですね。

RUKI「あと、どんどん音を積み重ねていく段階で感じたのは、生音や録り音ってすごく重要だということで、特にヴォーカルはそう実感しましたね。ヴォーカルの録り音自体はマイクで録ってるので、ラフミックス後とかになると、あまり左右できなくて、その重要性を改めて感じたり。伸びしろも感じたし……楽しかったって印象も強いかな。いや、聴いててかなりツラいですけど(笑)。でもピタってハマるときの感覚を覚えてるから、この先、余計妥協できなくなるんだろうなって」

■ああ、なるほど。

RUKI「だから、リッチに1年ぐらいレコーディングできたらいいですけど、そういうわけにはいかないので、その前のプリプロが大事だったり、どういうふうに仕上げていくのかメンバー同士の話し合いをしっかりしていく動きにもなるのかもしれないし。プリプロが終わった段階で全員で聴いて、アレンジだったりの話ができるのかなと。だから、わりと本来の形に立ち返っているというか。アナログ世代でもないし、プロトゥールスもあったし、実際ヘヴィな音というのが今まで基本にあったから、対照的なバラードをやってるときの楽器のいい音を作るとなると、それが一番難しいなと。個々のいい音、声のいいところを追求していくと果てしないですね。結局、そういうバンドなんだなってことは思いましたけど。映像もそうですけど、なんでこうならないんだろう？ってところから手をつけ始めて、一回自分たちでやってみて、ひとつの完成を見い出すところがいいところだなと思います。人のせいにしていく感じではなくて、研究熱心というか(笑)」

■たしかに(笑)。それとバラード集ではあるけど、ギターソロを筆頭に、全編でかなりギターがフィーチャーされている印象で。

麗「たしかに、12曲中9曲ぐらいにギターソロが入ってますね……大変だったな(笑)。こんなにギターを弾いていてツラい思いをしたのは初めてでしたね」

■それは、麗さんがエンジニアリングの作業も担当していたことも大きいですか？

麗「それは言い訳にしたくないんですけど(笑)。ギターの音を作るのがすごく難しいなと……ギターって空気感が大事なくせに、音の伸びを表わしづらい場面が多くて」

■プレイ面よりも、サウンドメイキングでの苦労ですか。

麗「そうですね。音がタイトすぎてハマらないなってことが多かったりとか。いろいろやってると、頭がごっちゃになってきますよね(笑)。ドラム作りの流れからいくと、ギターソロもやたらリズムをきっちりいかなきゃみたいな先入観もあったりして、あとで聴いてみると人間臭さがなかったり。そういうところは、気持ちを切り替えて弾いたほうがいいんだろうなって発見もあり」

葵「最初のミックスでは、ギターがそれほどフィーチャーされてない印象だったけどね。自分のパート(の音)が上がってたら、何か言われるだろうなって気持ちもあると思うし」

麗「あるね(笑)。“あ、こいつ上げてきてんな”って思われそうだし」

葵「だから、めちゃめちゃ控えめなんですよ(笑)。“やっぱり、もう少しギターソロを聴きたいよね”みたいな話にもなるし。上げてって言ってるのに、“1デシ(＝1db)上げといた”ってメールで書いてくるんですよ。1デシの違いでわかるかな？と思って(笑)」

RUKI「で、最終的にベースがめちゃ上がってたっていう(笑)」

葵「あとアコギは難しかったですね。アコギは空気感をだませないし、すごく繊細な楽器だから難しかったことは確かですけど、僕はミックスのほうには寄っていかないでおこうと思ってたので、そういうところではいつもとあまり変わらない感覚でやれてましたね」

■各ジャッジは、どう着地するんです？

葵「ディスカッションしかないですよね」

麗「どのパートでも、気になるところは誰でも自由に言っていって」

RUKI「なんか違くねぇ？って、ちょこちょこ

なんでこうならないんだろう?ってところから
手をつけ始めて、一回自分たちでやってみて、
ひとつの完成を見い出すところが
いいところだなと思います。
人のせいにしていく感じではなくて、
研究熱心というか(笑)



言ってて、ドラムじゃねぇ？とかなって、ドラムを直し始めたらもう大変ですよね（笑）」
戒「〝今日はベースの音を作ろう〟って言ってたんですけど、いつの間にかドラムの音作りに変わってるという」
REITA「俺、ベースを持って麗の家に行ったんですよ。最初の2時間ぐらいベースの作業をしていて、〝やっぱこれ、まずキックが……〟とかなって、もうそこから8時間ぐらいドラムの音作りになって……」
麗「B型の悪いところが出ちゃうんですよ」
RUKI「だから俺は、あれから行かなくなったよ」
REITA「結局ベースは最初の2時間やって、その日はベースは使わず、背負って帰りました。朝になっちゃって（笑）」
麗「戒もそうなんですけど、まずドラムのキックからとかパーツごとにやっていくって言ってるのに、〝ちなみになんだけどさ……〟って言って、絶対に違うことを言い始める」
RUKI「それがB型なんだよ」（※RUKIと戒の血液型がB型）
戒「ははは！」
麗「〝わかった、わかった。それもいいんだけど、でもまずは……〟って俺が言って」
RUKI「最初はそんなこと言わないでやってくれていたんですけどね。途中からね、いろいろと言うようになって」
麗「あまりにも多すぎて、イライラしてた」
RUKI「イライラしてたんだ！（笑）」
一同「はははは！」
麗「話が、すんげぇワープする」
REITA「麗と2人でいるときに、その話出たもん。〝やっぱB型2人がね、途中で変わるんだよ〟って」
麗「中に人格が何人かいるんだよ。10人ぐらいいるから、いろいろ出てくる」
RUKI「いやいや、忘れないように言ってるんだよ、それは」
戒「そうそう、忘れないように（笑）。〝全然あとでいいんだけど〟って言って」
麗「何人か人格が出てくるから、マンツーマンでやってる気がしないんですよ」
葵「一個直すと、今度はこっちの音がやっぱり気になるんですよ。締切がなければ、今もまだやってるでしょうね」
REITA「そうねぇ」
麗「ちなみになんだけどさ、って」
RUKI「何回言ったかな、〝ちなみに〟って（笑）」
REITA「めっちゃ〝ちなんだ〟よね」
麗「ちなんだなぁ」

■〝ちなみに〟の域を超えてる（笑）。初期曲「絲（いと）」のアップデートされた仕上がりもいいし、変化という部分では、「Cassis」の冒頭がピアノアレンジになっていますね。
葵「たぶん、僕のギターが気に入らなかったんでしょう」
RUKI「あ、そっちの発想になるとは思わなかったな（笑）」
REITA「その流れで俺もクビになったけど」（※オリジナルは、アコースティックギターとベースによるイントロが付いていた）
麗「バッサリと（笑）」
RUKI「いや（笑）、オリジナルではその後ろで鉄琴のような音が鳴ってたんですけど、それをやめたいなと思っていて……というところから始まった今回のアレンジですね」
葵「あの部分がないことでアコギを使わなくなったので、下手（しもて）側は結構変わりますね」
REITA「あれ、Aメロのアコギは？」
葵「それもエレキにしたから。……聴いてる？」
RUKI「そういうところあるから」
葵「うん」
REITA「……俺の聴いたマスター、オリジナルが紛れてたかもしれない」
一同「ははは！」
RUKI「お前のだけ!?」

■そんな馬鹿な（笑）。また、「体温」の英詞部分が日本語になってますが、基本は元の歌詞に沿った日本語詞ですね。
RUKI「そうですね。題材が題材なので、ちょっと表現は緩めてますけど。〝絲〟もそうですけど、これは今のテンションというか、ちょっとDOGMA臭が香る感じかなと。これも難しいなかのひとつだったような記憶がありますね。ドラムを結構変えたもんね？」
戒「そうだね。フレーズは変わってはいるんですけど、でも雰囲気は守ったよね」
RUKI「昔の曲って、あまり余韻を持たせたりしてないんですよね。サーッと突き進んでいくアレンジが多かったりして。それが合う曲もあるんですけど、逆に〝絲〟と〝体温〟は、もうちょっと空気感を大事にするようなアレンジが合うだろうなと思って」

■そして、3月10日・国立代々木競技場第一体育館でのライヴが迫ってきましたが、追加公演のツアー（4月開催）が発表されましたね。
RUKI「ファンクラブ限定ツアーですけど、3月のチケットを取れない人が多かったらしいので。やっとベスト盤の作業が終わったので、ようやくこれからライヴモードですね」 B


初回限定盤


通常盤

BALLAD BEST ALBUM
TRACES VOL.2
初回限定盤 ¥3,611（tax out）
通常盤 ¥3,056（tax out）

01. 枯詩
02. Cassis
03. D.L.N
04. CALM ENVY
05. reila
06. UNTITLED
07. WITHOUT A TRACE
08. 紅蓮
09. 白き優鬱
10. PLEDGE
11. 絲（初回限定盤のみ）
12. 体温（初回限定盤のみ）

the GazettE ⇒
ガゼット。'02年結成。'04年、初のフル・アルバム『DISORDER』を発表。'06年、初の日本武道館公演を果たす。'10年、Sony Music Recordsに移籍。'17年3月10日、国立代々木競技場第一体育館にて、結成15周年記念ライヴを開催。4月からFC限定となる全国5ヵ所を廻る追加公演も決定した。

雨のパレード

Change your pops





L→R
是永亮祐 B.
山崎康介 G.
福永浩平 Vo.
大澤実音穂（みねほ） Dr.

その楽曲の完成度やライヴアクトで注目を集める雨のパレード。昨年のメジャー・デビュー作からちょうど1年、2ndアルバム『Change your pops』が届く。言葉とメロディは強く、心地よいサウンドは心と体を揺らす。彼らが描くポップ・ミュージックとは? Vo.福永浩平に聞く

Text ⇒ 森朋之

■2ndアルバム『Change your pops』が完成しました。前作『New generation』で示したバンドの軸はしっかりキープしたまま、サウンドメイク、歌詞を含めて、雨のパレードの音楽性がさらに明確になったアルバムだと思います。

「ありがとうございます。音作りに関しては、前のアルバムを出した後に〝もっとこういうふうにできたな〟と思うところもいろいろあって。今回はそれをさらに突き詰められたし、もともと自分たちがやりたかった音に近づけたアルバムになりましたね。シンセやドラムマシンなどの新しい機材も取り入れたし、スネアの代わりにスナップ(指を鳴らす音)やクラップを使ったり、新しいこともたくさんやってるので」

■雨のパレードの音楽からは同時代の洋楽からの影響が感じられますが、単にトレースするのではなくて、独創的なサウンドにつながってますよね。

「そう言ってもらえると嬉しいです。曲数も増えてきたし、自分としても〝アレンジの精度も上がってきたな〟という感じもあって。あと、今回はサビのメロディから作るパターンが多かったんですよ。メロディをしっかり活かした作り方ができたのも、自分たちが思い描いているポップスに近づけた理由かなと」

■楽曲の軸になるのはメロディ?

「それを心掛けてます。確かに海外の音楽を意識した音作りになってるんですけど、入り口はメロと歌詞にしたいと思っているので。たとえばユーミン(松任谷由実)さんの音楽はポップスとして聴かれていますが、そのなかにいろいろな要素が入っていると思うんです。ファンクやボサノバといった幅広いジャンルの音楽を落とし込んでいるというか。自分たちもダブステップやトラップをポップスのなかに落とし込みたいと思っているんですよね」

■その時代の新しい音楽を自由に反映できるのがポップスの良さでもある、と。

「僕はそんな印象を受けてますね。あと、〝日本のシーンを底上げしたい〟という気持ちもずっとあって。日本の音楽が(海外に比べて)劣っているわけではないですが、最先端のカッ

最先端のカッコいい音楽をポップスとして昇華することで、"こういう音楽もあるんだ"って知ってほしい

コいい音楽をポップスとして昇華することで、"こういう音楽もあるんだ"って知ってほしいというか。それは僕らがずっと持っている願いだし、僕らの同世代のバンドも同じようなことを思っているんじゃないかなって」

■その願いが『Change your pops』というアルバムタイトルにつながったわけですね。今回のアルバムは歌詞もすごく直接的になっていて。

「多くの人に届く歌詞を意識するようになりましたね。今回はその傾向がさらに目立っているかもしれないです。"時代を変えたい"みたいなことも歌ってるし」

■1曲目のタイトルが「Change your mind」ですからね。

「そうですね（笑）。この歌詞はアルバムのタイトルが決まってから書いたんですよ。それぞれの人のなかに"これが自分のポップスだ"というものがあって、それがひしめいているようなイメージがあるんです。"直感に素直になってほしい"みたいな気持ちも込めてますね。"直感はあなたが本当になりたいものを知っている"という言葉があるんですけど、僕自身、それを知ったときにハッとしたので」

■音楽を作ることにおいても直感を大事にしている？

「うん、そうですね。違和感というか、"何か良くないな"ということに対して、どう答えが出せるかを大事にしていて。そのときに必要なのが直感なんです。僕らはセッションで曲を作っていくんですが"その音の使い方は良くない""そのリズムは変えたほうがいい"ということも遠慮なく言い合って、どんどん詰めて

■直感的に"違う"と感じたことを解消していくというか。メンバー同士のレスポンスも向上してるんですか？

「はい。ウチのギタリスト（山崎康介）は以前、コテコテの泣かせるフレーズが好きだったんです（笑）。そこからどんどん変わってくれて、いまは"そのフレーズ、いいね"っていうこともすごく増えていて。このバンドを始めて5年目なんですけど、僕がチェックした新譜をみんなで共有してきて、"これ、カッコいいね"という感覚を少しずつ分かち合ってきたんですよね。それも今回のアルバムにつながってると思います」

■雨のパレードって、ストイックなミュージシャン集団というイメージもあって。自分たちが理想とする音楽を真摯に追求するというか……。

「でも、けっこう仲は良いと思いますけどね。一緒に食事することも多いし、必要なことはちゃんと腹を割って話せるので」

■一緒にライヴに行ったりすることもあるんですか？

「ときどき行きますよ。最近だとイヤーズ&イヤーズとか、THE1975とか。"あの機材を使ってるんだ"とか"こういうライヴのアプローチなんだね"みたいなこともわかりますからね。ライヴを観ると。実際、あるアーティストのライヴを観て、同じシンセを買ったりしてるんですよ」

■機材のセレクトも重要ですからね。

「そう、物理的にやりたい音に近づけるので。サウンドは常に変化したほうがいいと思ってるんです、僕は。実際、1stと2ndではかなり変わっていると思うし」

■そのほかの曲についても聞いていきたいんですが、まず「Count me out」の歌詞はかなり強烈ですよね。「ほらクールなふりして中指立てるのさ」とか。

「ちょうどこの曲を作っていたとき、友人に"丸くなったんじゃない？"って言われたんですよ。で、"は？"と思って書いたのがこの歌詞ですね（笑）」

■"メロディ重視＝丸くなった"というのは違う、と。

「うん。楽曲自体は尖りまくっているし、その入り口が歌詞とメロディということなので。自分たちのなかでしっかり成立させたものを、たくさんの人に認めさせることが大事だと思ってるんです。どんなに歪なものであっても、時代が認めたらポップスになるので。海外だとR&Bもダブステップもポップスとして受け止められているじゃないですか。日本もそういう感覚になってほしいということですね」

■なるほど。「Hey Boy,」もリスナーを鼓舞するような内容ですね。

「僕は引きこもっている時代があったんですけど、その頃の自分と会話している感じで書いた歌詞ですね。けっこう乱雑な会話というか」

■引きこもりの経験って、決して楽しい思い出ではないですよね？

「小学校5年のときと中2のときだから、けっこう前の話なんですけどね。重いところもあるし、思い出すとそっちに引っ張られそうにもなるけど、"Hey Boy,"はけっこう楽しみながら書けたかな」

■「寝顔」についてはどうですか？ 甘い雰囲気のラブソングですが、これも実体験が反映されている……？

「そこは言わないでおくことにします（笑）。ラブソングって、今までほとんど書いたことがなくて。シングルの"You"も僕のなかではラブソングなんですが、それがほぼ初めて書いたラブソングなんです。音作りと同じように歌詞もすごく変わってきてるんですよね、今回。聴いてくれる人の支えになるような歌を書きたいという気持ちも強くなっていて」

■聴き手に対する思いも変化しているんでしょうね。

「そうですね。以前は（支えになるような曲は）"まだ歌えないな"と思っていたので。そのきっかけになったのも"You"だったんです。オケとメロが上がったときに"この曲だったら、人を支えるような曲に挑戦できる"と思ったので。最初の一歩は重かったけど、"You"を書いたあとは、そういう曲も増えてきました」

■聴き手にメッセージを伝えるためには、ヴォーカルの説得力も重要になってきますよね。

「そこもがんばってます（笑）。今年26歳になるから、ちょっとセクシーさも必要かなって思ったり。バンドのヴォーカリストって、ちょっと色気があったほうがカッコいいじゃないですか。見た目のことだけじゃなくて、顔には生き方が出ると思うんですよね。役者さんを見ていても、顔の老け方に人生が表われてる

なって思うので。いい役者さんの表情筋ってすごいですよね（笑）」

■アルバムにはインタールードが3曲収録されていて。単に前後の曲をつなぐだけではなくて、アルバム全体のフックになっているし、楽曲としても素晴らしい出来ですよね。

「僕もすごく気に入ってます。インタールードのタイトルは自分たちが時代を変えるために必要な3つの要素になってるんですよ。視点（「perspective」）、直感（「intuition」）、伝える能力（「speech」）っていう。サウンドに関していうと、〝直感〟はベースの是永に即興でソロを弾いてもらっていて。〝視点〟はプロフェット（シンセサイザー）で作ってるんですが、鮮やかな音色になってると思います。〝スピーチ〟は声だけで構成してるんですよ。ボン・イヴェールの新作に声だけで作ったトラックがあって〝カッコいい！　自分もやってみたい！〟と思って（笑）。すごくいいのでぜひ聴いてもらいたいですね」

■福永さんは〝視点〟〝直感〟〝スピーチ〟のなかで、どれ一番得意ですか？

「今のところは視点と直感ですかね。その二つは人よりも少し秀でているのかなって。あとは伝える能力をもっともっと鍛えないと」

■自分たちの音楽をプレゼンする能力も必要ですからね。

「それが一番大事かもしれないですね、もしかしたら。すごくセンスが良くても、それを伝えられなかったら〝何がやりたいのかわからない〟ということになってしまうので。それは今回のアルバムの歌詞にも出てると思います」

■それにしても福永さん、ポップミュージックに対する思いがめちゃくちゃ強いですよね。それって子供の頃からですか？

「そうですね。子供のときは〝これがポップス〟みたいな括りで聴いていたわけではなくて、単純に〝カッコいい〟と思って聴いてただけですけど、ずっと惹かれてました。好きな音楽を聴くと、生活がいいものになるんですよ。音楽を聴いてると歩いてるだけで楽しくなるし、どんなこともカッコよくなるというか。お年玉でコンポを買って、遊んでるときもゲームしてるときもずっとかけてましたね」

■「福永、ずっと音楽聴いてるよね」って言われなかった？

「いや、友達もMDを持ってきて流してましたから（笑）。小学校のときはクイーンをよく聴いてましたね。〝ボーン・トゥ・ラヴ・ユー〟がドラマの主題歌になって『ジュエルズ』っていう日本版のベスト出て。それが初めて買ったCDなんですよ。あとは親が持っていたジャズのヴォーカルのオムニバスとか、当時のランキングに入っていた曲とか。そこからずっと聴き続けてるんですけど、僕、他の人も同じような感じだろうなって思ってたんですよ。でも、意外と音楽に興味がない人もいるんだなって（笑）」

■（笑）福永さんの場合、アーティストのなかでも特に多くの音楽を聴いているほうだと思いますよ。自分が音楽を作る立場になっても、ずっと新しいものを聴いてますよね？

「そうですね。最近は日本の音楽を聴くことが少し減ったかな。自分が知ってる人の音楽だと現実感があり過ぎるというか、僕はどこか違う世界に連れて行ってくれるような音楽が好きなんですよね。自分たちの曲も、普通のバンドサウンドよりは〝遠くへ連れて行く感じ〟があるんじゃないかなって」

■なるほど。ちなみに福永さんは、音楽以外のカルチャーもチェックしてるんですか？

「もちろん。洋服もそうだし、映画とかマンガとか。それも感性を磨くことにつながると思うので。一番すごいのは景色を観ることなんですよ。地元のきれいな景色を観ると、カルチャーショックというか、すげえ！っていう驚きがあったり」

■そういう衝撃も音楽につながっていくんでしょうね。アルバムのリリース後はツアーも。以前は「プログラミングされた音は使わず、すべて人力で演奏してます」と言ってましたが、それは今回も変わらないですか？

「うん、そこは今のところ変わらないですね。〝Count me out〟と〝feel〟はドラムマシンを使ってるから……リズムはうちのドラマー（大澤実音穂）に組んでもらったんですけど、もしかしたらライヴでもドラムマシンでやるかもしれないです。それに合わせてパッドを叩くとか。でも、人力でやることにはこだわりたいですね。この前、andropと対バンしたとき〝以前は同期の音を使ってたけど、今は全部自分たちで演奏してる〟って言っていて。ミュージシャンは同期の音を使わないバンドに対するリスペクトがあるし、グルーヴというものに好奇心を持ってる人が多いなって」

■雨のパレードもそうですけど、バンド固有のグルーヴがありますからね。

「グルーヴという不確かなものに引っ張られているというか。理論的に説明できるのかもしれないですけど、ちょっと神秘的なところもあるじゃないですか。自分たちもライヴをやっていて〝今日は気持ちいいな〟と感じることがあるし」

■グルーヴの快楽もポップスの魅力の一つですからね。〝新しい時代を切り開きたい〟〝新しいポップスのスタイルを提示したい〟という目標に近づいている手応えもありますか？

「少しずつ近づいている感じはありますね。さっきも言いましたけど、同じような感覚を持った同年代のバンドがひしめき合ってるのも嬉しくて。アンダーグラウンドにも〝カッコいい！〟と思うバンドはいるし、まずは自分たちが引っ張って、その入り口になれるようにがんばりたいなって。そうすれば少しずつシーンも変わっていくと思うんですよね」 B

2nd Album
Change your pops
2017.03.08 Release
初回盤 CD+DVD ¥3,500（tax out）
通常盤 CD ¥2,800（tax out）



初回盤



通常盤

01. Change your mind
02. free
03. stage
04. Count me out
05. Take my hand
06. perspective (interlude)
07. You
08. feel
09. Hey Boy,
10. intuition (interlude)
11. 寝顔
12. 1969
13. speech (interlude)
14. morning

雨のパレード ⇒
'13年に結成。様々なジャンルを超えたその音楽性や、バンドという形態に拘らないサウンドメイクで大きな注目を集める4人組バンド。'16年3月に1stフルアルバム「New generation」でメジャーデビュー。3月24日・新潟から全国ツアーがスタート。



ベリーグッドマン

BERRY GOODMAN

Spring Spring Spring

**昨年3月のメジャー・デビューから1年。秋に発表した通算4枚目のフルアルバムを経て、
そしてこの春、コンセプトアルバム『Spring Spring Spring』が届きます。
ベリーグッドマンが春に添えるグッドミュージック。
3人の個性あふれる楽曲、そしてエピソード満載のインタビューをお楽しみください。**

Text ⇒ **山口哲生**　Photo ⇒ **MASUMI KOJIMA**



■なぜ春をテーマにしたコンセプト作品を制作してみようと思ったんですか？

Rover「ベリーグッドマンの頭文字をとると"BGM"になるように、僕らはみなさんのバックグラウンドミュージックになるものを作っていて。ただ、そのコンセプトが広すぎるので、何かのテーマに特化した1枚を作ってみようと。その一発目ということで、僕らは去年の春にデビューしたのもあるし、これまでシリーズでやってきたアルバム『SING SING SING』をもじった『Spring Spring Spring』というので、作ってみようということになりました」

■楽曲制作もコンセプトありきで？

HiDEX「"エキスパンダー"は、ほんまの無から作ったんですけど、"My baby"はMOCAがずっと構想してたんですよ」

MOCA「あと、おかんの曲はRoverが1年前から作りたいって言ってたりとか、テーマ自体はいっぱいあったんです」

■なるほど。どれが推し曲になってもいいものばかりですが、まずミュージックビデオが公開されたのが「はじまりの恋」という曲で。

Rover「この曲は『恋んトス シーズン5』の主題歌なんですけど、前シーズンに引き続いて2シーズン目もやらせてもらっているので、番組の方々に敬意を込めてというのと、春は恋の季節でもあるので」

■弾んでいるビートが春の雰囲気を盛り立ててくれていて気持ちがいいですね。

HiDEX「この曲、もうちょっとバンドサウンドにしたくて、一回最初から全部作り直したんですよ。ドラムは重くなりすぎず、エレキも爽やかな音にして、身体を揺らしながら聴いてもらえるイメージで作りました」



L→R
HiDEX(ヒデックス):Vo,Track Maker,Pf,G,Perc
Rover(ロバー):Vo,G,Tp
MOCA(モカ):Vo,MC

Rover「あと、僕らって今までこういうポップなラブソングでミュージックビデオを撮ったことがなかったんですよ。だから、おっさんになる前に撮っとくか？って（笑）。で、今回沖縄で撮ってきました」

■前回の取材で、Roverさんが2017年中に沖縄に行きたいっていうお話されてたんで、早くも念願叶ってる！と思いながら観てました（笑）。

MOCA「オーシャンビューのホテルを取ってもらったんですけど、朝から夜遅くまで撮影してたんで、景色一切見れなかったですね」

HiDEX「そのホテルが、僕とRoverが中学校の修学旅行で行ったホテルやったんですよ。なんかこの道、見たことあるぞと思って、着いた瞬間にあのホテルや！って」

MOCA「なんか、Roverのおかげで修学旅行が沖縄になったって言うてなかった？」

Rover「僕、生徒会に関わってて、遠足の場所をUSJに決めたりしたんですけど、修学旅行で行く場所を、沖縄って言ってみたんですよ。さすがに厳しいやろってなってたけど、結局行けることになって」

HiDEX「でも、僕らの代で最後だったんですよ」

Rover「予算がかかりすぎて。そのホテルで思い出したんですけど、それこそ修学旅行の中日かなんかに、朝の情報番組を観ていたら、森山直太朗さんの"さくら"のミュージックビデオが流れてて。それを見て衝撃を受けて以来、ずっと憧れてるんですよ」

■ちなみに、「はじまりの恋」の次に収録されているのが「さくら」という曲ですね。

今回は春でしたけど、夏やったら『SUMMER SUMMER SUMMER』とかもいけますからね（Rover）『PARTY PARTY PARTY』とかもええよな（Hi-DEX）

Rover「このタイトルにしたのは完全に僕のエゴで、カラオケに入ったときに森山直太朗さんの〝さくら〟と並びたいっていうだけの理由なんですよ」

Hi-DEX「〝も〟と〝べ〟やから近いもんな？」

Rover「そう。ありえるから。だから、いろんなことがリンクしてるんですよね」

MOCA「まぁ、カッコよく言ったらガイダンスですね」

Rover「導かれてますよ。今では同じレコード会社でやらせてもらってますから」

■本当にいろいろエピソードがありますよね。「さくら」は卒業ソングですが、イメージは膨らませやすかったですか？

Rover「卒業する人も、送り出す人も、何年も務めている先生方も、それぞれの想いで受け取ってもらえる曲にしたかったんで、それやったら悲しいだけの曲じゃないなと。そこから僕達のカラーを濁さずストレートに書いたら、この感じになりましたね。この曲はアコギから作って、そこから広げていったんですよ」

Hi-DEX「ギター1本でも歌えるような曲にしたかったんで、それが見えるようなトラックにしてますね」

■卒業ソングって個人的にピアノのイメージがあるんですけど、アコギっていいなと思いながら聴いてました。

Hi-DEX「ピアノでもリズムは出せるけど、温かくて力強い感じにしたかったから、アコギをピックで弾いているリズム感のほうがいいなと思って。弾いているときの擦れてる音とかも入ったほうが勢いも出るし、温かい音になるからこれかなっていうところはありましたね」

MOCA「いいものができたと思うし、中高生にとっての新しい〝さくら〟は、ベリーグッドマンって思ってもらえるような曲になってほしいです」

■次の「おかん〜yet〜」は、Roverさんが1年前から作りたかったそうですが。

Rover「デビュー曲の〝ありがとう〜旅立ちの声〜〟をリリースしたのが2016年3月9日で、あれはおとんに宛てた曲だったんですよね。だから、おかんの曲も作りたいと思ってたんですけど、今回のリリース日が3月8日に決まって、それこそガイダンスじゃないけど、もうここしかないなと思って」

MOCA「最初、Roverが、今の自分のバースの4倍ぐらいの長さのやつを書いてきたんですよ」

Rover「今の歌詞ぐらいの長さを全部ひとりで書いてて。でも、僕の中では7分になってもいいと思ってたんですよ、この曲は。で、長すぎるからカットしたバージョンを作ればいいと思ってて。でも、自分とおかんの苦労話を誰が聴きたいんかなと思って」

■一度冷静になって考えてみた、と。

Rover「でも、僕のエゴになってしまうかもしれないけど、〝今年　母の日にこの声で〟で始まるのは、俺に最初を歌わせてくれっていう意思表示でもあったし、それぐらいの気持ちで書いてましたね。一番気に入ってるのは〝焼き魚〟のところなんですけど」

■〝実家で焼き魚〟のところ、エモいですよね、あのくだり。

MOCA「最近はライヴで泣いてくれるお客さんが減ってたんですけど、この曲を初披露したときは結構泣いてる方がいたので、パワーソングになったなと思いますね」

■3人それぞれのエピソードがそのまま歌詞になっていますけど、それだけじゃなくて、歌声もそうだし、いろんな場面で個々のキャラクターがより際立った1枚になってますよね。

Hi-DEX「メジャー・デビューさせてもらって、1年間いろんなところで歌ったり、曲を作ったりしていて、自然とそうなっていったのかもしれないですね」

■出たというよりは、出てしまっている？

Rover「カッコよく言うと、隠しきれないってやつですね」

MOCA「今、Roverが言ったやつ、僕が言うたことにしてください」

■ははは（笑）。ただ、「おかん〜yet〜」からの「エキスパンダー」っていう流れが……。

Hi-DEX「おかしいですよね？」

MOCA「情緒不安定ですよ」

Hi-DEX「どんな気持ちで聴けばいいのか」

Rover「まぁ照れ隠しですね、これは」

■なるほど（笑）。春がテーマなのに、なぜエキスパンダーなのかというと、Spring→バネ→エキスパンダーという。

Hi-DEX「最初は入れるつもりじゃなかったんですけど、アゲ曲いるな？ってなって、そこから急いで作ったんですよ」

Rover「スケジュール的にいけるんやったら入れようって思ってたら、できちゃったんですよね。結構なスピードで」

MOCA「もう才能を隠しきれない」

Rover「漏れちゃってますね。才能のおもらしです」

■（笑）。RoverさんとMOCAさんのバースと、Hi-DEXさんが綺麗な声で歌い上げているサビのギャップがまたすごくて。

Hi-DEX「これね、Roverが〝この曲はカッコいい系にしよう〟って言ってたから、僕はそういうサビを書いたんですよ。なのに、2人が全然違う方向で書いてきたから、なんか俺だけめっちゃイキってる感じになってて」

Rover「考えたんやけど、どう頑張ってもカッコいい系のやつが出てこなくて」

Hi-DEX「MOCAに至っては下ネタしか言うてへんしな？」

MOCA「バネのこと考えてたらピストンのことしか出てこんかった」

Hi-DEX「ピストンってバネちゃうからな!?」

■確かに（笑）。次の「ライトスタンド」は過去に発表されていた曲ですけど、今回は大阪桐蔭高校の吹奏楽部とコラボしていて。原曲よりもBPMを気持ち落としてますよね。

Hi-DEX「落としたというか、最初はクリックにあわせて演奏してもらってたんですけど、それだと抑揚が伝わらないっていうことになって、先生のフリーハンドで全部録ったんですよ。だから、僕らのレコーディングもそれに合わせたんですけど」

■めちゃくちゃ難しいやつじゃないですか！

Rover「フリーハンドだったのもあって、MOCAの"バット振っていた"のところだけ走ってるんですよ」

HiDEX「ゆっくりなところから走る感じになってるんですけど、そこは吹奏楽部の音がそうなってるんですよ。で、MOCAがそれにぴったりな感じで歌ってて。編集してて、こほんまにすごいけど、普通やったら絶対にあかんけどなぁって」

■吹奏楽部の収録には立ち会われたんですか？

Rover「はい。いやぁ、圧巻でしたよ！」

HiDEX「僕とRoverは元々吹奏楽部で、僕はパーカッションやってたんですけど、生徒さん達が自分達の曲を演奏してるのが感慨深かったですね」

■Roverさんは目の前で学生さん達がトランペットを吹いているのを見て、ちょっと吹きたくなったりしました？

Rover「収録はしてないんですけど、トランペットの子達の中に入って一回吹いてみたんですよ。音はあんまり鳴らなかったけど、譜面台とか雛壇を見て、懐かしくなって。なんか、頑張れよっていう気持ちになりましたね。お前らもっと音楽に集中せえや！って」

MOCA「なんでそんな偉そうやねん」

Rover「当時バンマスをやってた自分が出てきた」

MOCA「大阪桐蔭高校が今度の春のセンバツに出るんで、持ってるなぁって思ったし、今回手伝っていただいたんで、今度は逆に応援に行けたらいいなぁって。スタンドで歌えたりしたらいいですよね」



■最後の「My baby」のイントロに入っているのは、MOCAさんのお子さんの声ですか？

MOCA「そうです」

Rover「あの声はほんま感動やわ。あの後いらんもんな？」

MOCA「なんでや！」

HiDEX「最初の15秒だけでええわ」

MOCA「そのまま4分半聴けや！」

■ははははは（笑）。MOCAさんはこの曲の構想をずっと温めていたそうですが。

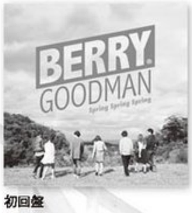
MOCA「この曲のサビを作ったのは奥さんが妊娠したときだったんですけど、あんまり身体が強くなくて入院してたんですよ。もしかしたら流産するかもしれなくて。でも、僕は腹も痛まないし、会いには行くけど、他に何かできることないかなと思って、この曲を作ったんですけど」

■そういう経緯から生まれた曲なんですね。

MOCA「そこから子供が生まれたんですけど、最初に書いた"どんな姿で生まれても大丈夫、守っていく"っていう歌詞から、生まれてから1歳を迎えた歌詞に書き換えました」

Rover「この曲でおもろかったのは、"ステージ立つ前キッチンに立ってる"が下ネタに聴こえるっていう」

■引っ張られすぎです（笑）。



初回盤



通常盤

Concept Album
Spring Spring Spring
2017.03.08 Release
初回盤 CD+DVD ¥2,500（tax out）
通常盤 CD ¥1,621（tax out）

01. イントロ
02. はじまりの恋
03. さくら
04. おかん～yet～
05. エキスパンダー
06. ライトスタンド feat.大阪桐蔭高等学校吹奏楽部
07. My Baby

ベリーグッドマン ⇒
'13年11月に結成、大阪出身の3人組ヴォーカルユニット。'14年3月、デジタル・シングル「コンパス」でインディーズ・デビュー。'16年3月、シングル「ありがとう～旅立ちの声～」でメジャー・デビュー、10月にアルバム『SING SING SING 4』をリリースした。5月より全国ツアーを開催。

HiDEX「あそこで恐妻家出てるよな？ MOCAがキッチンに立たされてるっていう」

MOCA「ここはまさにキッチンに立ってるときに頭の中で組み立てたんですよ。食事は僕が作ってるんで、これが俺の仕事やって」

HiDEX「でも、包丁使われへんのやろ？」

MOCA「うん。大根とかも全部、果物ナイフで切ってる。長い包丁だと怖いんで」

■大変そうですね（苦笑）。また別のコンセプト作品を是非聴いてみたいです。

Rover「今回は春でしたけど、夏やったら「SUMMER SUMMER SUMMER」とかもいけますからね」

HiDEX「『PARTY PARTY PARTY』とかもええよな」

MOCA「あとは全曲違うトラックメイカーにリミックスしてもらうとか」

Rover「タイトルは『違う 違う 違う』？」

■そこを取るんですね（笑）。

HiDEX「あと、MOCAが前に言ってたんですけど、『とにかく○○になりたくて』っていうシリーズもええなと思って。"とにかくアイドルになりたくて"とか、"とにかくヴィジュアル系になりたくて"とか」

MOCA「なんか、今の自分たちとは違う世界に連れていけるような曲もあるとええなと思って。あとは"とにかく裏声を出したくて"っていう、僕が1分間裏声を出し続ける曲とか。ピコ太郎さんじゃないけど、ああいう（曲）尺の感覚ってなかったし」

HiDEX「じゃあ、次のアルバムの"イントロ"は、MOCAの"とにかく裏声を出したくて"やな」

MOCA「もうちょっと練習しとくわ！」 B







アンティック -珈琲店-

ラフ・ソング

現在の環境に移り、インパクトのあるシングルを発表してきたアンティック-珈琲店-から、満を持してフルアルバムが到着。歌に重点を置きつつ、様々なサウンドが色を添えるカラフルな1枚。『ラフ・ソング』と名付けられた今作について、新曲を中心に5人に語ってもらいましたよ。新しさと、らしさを、ぜひ確かめてみて!

Text ⇒ 須田真希子



アンティック-珈琲店- ⇒
アンティック·カフェ。通称アンカフェ。'03年結成。'07年、現在のメンバー構成に。'15年にレーベルを移籍、8月にメジャー1stシングル「千年DIVE!!!!!」をリリース。その後2枚のシングルを発表。今作のリリースツアーを3月に開催。



カノン
B.



ゆうき
Key.

メジャー初のアルバムだし、
感謝の気持ちを届けたいという想いも込めて、ラフ（laugh）とラブ（love）をかけて『ラフ・ソング』にしたんです。
“笑顔”や“愛”を歌ってる曲が多いので

■メジャーとしては1枚目のアルバムが完成しました！　アルバム制作はアンカフェにとって初めてではないですが、これまでと違った手ごたえはありましたか？

みく「インディーズのころはアルバム1枚を1〜2ヵ月で作ってたんですけど、今回は、1年半ぐらいかけて作ったので、心にも体にもゆとりがあって。思考が偏らず、いろんな心情を歌詞や曲に投影できて良かったです。制作期間が短いと、感情の幅がどうしても固定しちゃうんですよ」

takuya「制作期間がすごく長かったことで、メンバー自身、それぞれが自分の成長を感じられたんじゃないかと思います」

カノン「うん、1曲録り終わるごとに〝次はどういうことをやろうか〟と考える時間があったので。いろいろなチャレンジを積み重ねて仕上がったアルバムになりました」

ゆうき「複数のアレンジャーさんが参加してくださったので、曲調の幅がものすごく広いんですよ。経験値が豊富なアレンジャーさんばかりなので、引き出しが多いんです。勉強になりました」

takuya「そう、アレンジャーさんによって個性があるので、レコーディングの時のディレクションの仕方もそれぞれ違うんです。いろんなことを吸収して、それを作品に反映することができましたね」

輝喜「メジャー・デビューから1年半、準備期間を含めると今の環境に移って2年近く経つんですよね。その2年の間に良い影響をいろいろ受けて、環境に成長させてもらったなという手ごたえを感じますね、このアルバムを聴くと」

みく「僕は、特に大島こうすけさん（作・編曲家）との出会いがあって、自分が大きく変わったという実感があるんですよ。大島さんは第一線で活躍されているプロデューサーでもあるので、めっちゃうまいヴォーカリストの声をたくさん聴いてる。だからこそ、歌のディレクションがすごく厳しくて、〝まだまだ（声が）出るよ〟って言われるんです。それから歌に対する意識や発声の仕方が変わってきて、いろいろ研究するようになりましたから」

輝喜「そういう意味で今回のアルバムは、今までとは全然違うものになったと思います。単純に、曲やサウンドが変わってきてますから。でも、同時にアンカフェらしくもあるなって」

■そんなアルバムに、タイトル『ラフ・ソング』と名付けたのは？

みく「メジャー初のアルバムだし、感謝の気持ちを届けたいという想いも込めて、ラフ（laugh）とラブ（love）をかけて『ラフ・ソング』にしたんです。アルバムタイトルと同じ表題曲が、〝君が笑ってくれるなら僕は幸せ〟という意味のラブソングだし、この曲以外にも、〝笑顔〟や〝愛〟を歌ってる曲が多いので」

■確かに、ネガティブな要素がほとんどないアルバムですよね。ホームページに全曲のライナーノーツが掲載されているので、それとは違う視点で解説してもらえればと思うんですが、「Spring Snow」はキラキラ感あふれる王道のアンカフェサウンドですね。

輝喜「1年半かけていろいろな曲を録り溜めた中で、この曲が一番最後にできたんですよ。というのも、〝ラフ・ソング〟を作ってた時に、それまでに揃えた曲を大島さんと一緒に聴き直してみたら、〝トータル的に考えて、アンカフェのアルバムとしてもっと他のスパイスも入れよう〟という話になって。歌詞は前向きでも、シリアスな曲調が多かったんですよね。なので、〝もっと明るくて華やかな、アンカフェがずっとやってきた往年のサウンドを入れようよ〟ということになり、みくくんがこの曲を作ってきてくれたんです。そういう意味で、このアルバムは、結構この曲が入って完成系になったと思います。過去、ずっとお世話になってきた、アレンジャーの千葉〝naotyu〟直樹さんにも協力していただいて、まさにアンカフェらしい曲になりました」

■カノンさん作曲の「JUMBO」は往年のディスコチューン。ダンスナンバーが得意なアンカフェとは言え、今までとは違う新しさがあって、若いファンにとってはすごく新鮮に感じるのでは？

カノン「デモ段階からダンスナンバーの雰囲気はあったんですけど、自分も昔のディスコサウンドは通っていない世代なので。アレンジャーの告井（孝道）さんに〝この曲をディスコでロックな感じにしたいんですけど〟というイメージを伝えたら、モロどんずばのディスコになりました（笑）」

■生のホーンや女性コーラスが入って、すごくゴージャスな仕上がりですよね。

カノン「ナマの管楽器は初めて入れたんですけど、すごく衝撃で。音の厚みがシンセとは全然違うっていうカルチャーショックを受けました。これから融通が効かなくなっちゃうかもしれないですね。ホーン入れるならナマじゃなきゃイヤだ！って（笑）」

みく「今の時代、やりたいことがあっても予算的な問題とかでなかなか具現化が難しいじゃないですか。でも、やりたいことをやらせてもらえる音楽環境が整っている僕らは幸せだと思います」

■歌詞はディスコサウンドに合わせる意識をしました？　〝アチチ〟とか、言葉選びが今っぽくない（笑）。

みく「はい。曲に感化されました（笑）。歌詞にパンチを持たせたいと思ったので、みんなで口ずさめる言葉を探したんですよ。いろいろ考えるのではなく、曲を聴いた上で降ってきた言葉を直感的に選んで。いろんな言葉をパズルのようにハメていった感じです」

■アルバムならではの遊び心ですね。

みく「シングルだと冒険ですよね（笑）」

■「涙より重いWAR」は歪んだギターが特徴的なロックチューンです。

takuya「荒々しくて攻撃的な曲ですよね。でも僕は、どっちかというと王道のブルー

スギタリストタイプだと思っているし、プロデューサーからも、〝おまえのギターはマジメ過ぎる。もっとふざけていいんだよ〟というアドバイスされたぐらいなので(笑)。こういう荒々しい曲は難しかったです。あえて汚いギターを弾くように心がけてレコーディングしました」

■次の「似た者同士」は、一転して優しいアコギとピアノの音色がとても印象的。

takuya「アコギが主体になってる曲は今までのアンカフェになかったので、〝これで大丈夫かな〟という不安に襲われました(苦笑)。でも、作曲者のカノンさんがずっと一緒にいてくれたので、フレーズを相談しながらレコーディングできました」

ゆうき「ピアノも、今までのアンカフェにはない感じで……」

輝喜「あったんじゃない?」

ゆうき「バラードだけど4つ打ちで……」

みく「普通じゃない?」

ゆうき「いやいやいや。バラードでもリズム感があるっていう部分が今までにない感じかなって!」

みく「この曲の歌詞は、ゆうきが題材なんですよ。彼、雨の日でも傘を差さないらしくて。そういう個性的な性格がおもしろいなと思って歌詞に入れてみました」

■ゆうきくんに取材を?

みく「いえ、長年一緒にいて、いろいろな話を聞いていたので。ゆうきの高校時代を思い浮かべながら、ちょっとした小説のようなポエムにできたらいいなと思って書きました」

ゆうき「僕がモチーフだっていうことはあとから聞いたんですけど、若いころの恋愛をちょっと後悔しました……」

■そうなんだ(笑)。「恋するサンタクロース」は、2015年12月に発売した〝クリスマスパック〟の収録曲ですね。

みく「サンリオピューロランドのクリスマスイベントのテーマソングとして作ったので、〝夢の国〟をイメージした雰囲気があるんですよね。聴いていてすごく癒されるんです」

■実際にサンリオピューロランドに行って、その雰囲気を確かめて来たりも?

みく「何回も行かせてもらって、ハマっちゃいました。かわいいし、日常とはかけ離れた空間だし。そんな中にどこか親しみがある雰囲気がよかったんですよね」

■そして最後は、表題曲の「ラフ・ソング」。この曲、アレンジが秀逸だなと思いながら聴きました。サビ前の展開とか全体の構成とか、ドラマティックでありつつノリも抜群で、すごく引き込まれる。

輝喜「この曲こそ今までのアンカフェになかったタイプの曲だと思うんですよ。アンカフェに限らず、最近の曲にこういうタイプはないんじゃないかって思う。ただ疾走感があるだけじゃなく、とにかくドラマティック。特に歌がすごく良いんですけど、バックの演奏にも、歌を演出するドラマティックさがあって」

カノン「結果的に聴きやすく仕上がって良かったですけど、実はこの演奏は、曲の印象に浸る余裕がないくらい難しくて大変でした」

takuya「めっちゃ難しいパズルを組み立てる感じでした。ギターもそうなんですけど、ひとつひとつのピースが合わないと崩壊しちゃうんですよ。まだライヴでは一度もやってないんですけど、メンバー全員の音が噛み合わないと大変なことになりそう……。がんばって練習します!(笑)」

ゆうき「アルバムの表題曲でもあるし、ライヴでは、ワッと盛り上がるような演奏をしたいですね。特に、〝ウ〜〜、オイ!〟っていう声が入っている出だしのところでみんなと一緒にジャンプできたらいいですね」

カノン「それと、この曲は、メンバー全員でカラオケを歌うようにメロディを作ったことが印象的でした。オケだけ流してみんなでラララで歌ってっていう」

■だからメロディが残りやすいんですね。ライヴではお客さんたちにも大きな声で歌ってもらいたいですね。

カノン「〝ラフ・ソング〟に限らずですけど、アルバムの曲たちが加わることで、これからのライヴがどうなっていくのかがすごく楽しみです。シングル曲も含め、全体的に、メロディのしっかりした歌もので固めましたからね。実はその点が今までのアルバムと違うのかもしれないです。今までは、アルバムとなると、煽り系の曲も入れてたので。そういった意味でも、すごく聴きやすいいいアルバムになったんじゃないかなと思いますね」

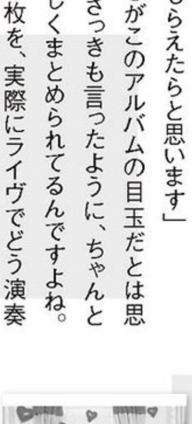
takuya「メジャー・デビューをしたことで、僕たち自身、音楽的なステップアップをすることができました。でも、それだけじゃなく、プロデューサーさんやスタッフさんといった周りの協力があってこそ表現できた曲もいっぱいあります。このアルバムを通して、僕たちの成長を感じてもらえたらと思います」

輝喜「新しさがこのアルバムの目玉だとは思いますけど、さっきも言ったように、ちゃんとアンカフェらしくまとめられてるんですよね。そんなこの1枚を、実際にライヴでどう演奏するのか……。ライヴでの僕たちを想像しながら聴いてもらえたらいいですね」

■純粋に曲に力があるからこそ、実際に演奏している姿を通して、よりそのパワーを感じてほしいという。

ゆうき「ファンのみんなが想像している以上にいい曲が揃ったので、CDを聴いたら絶対にツアーに行きたくなると思うんですよ!〝JUMBO〟は振り付け動画をホームページにアップしてますし、それを観て練習して、ぜひライヴに来てほしいです。まずはCDを聴きながらワクワクを高めてください」

みく「等身大の僕等の愛や平和、日常が詰まった曲たちを聴いて、あたたかさや明日へ踏み出すエネルギーを感じてほしいですね。そして前向きにな気持ちになってもらえたら嬉しいです」 B


初回盤


通常盤

Major 1st Album
ラフ・ソング
2017.02.22 Release
初回盤 CD+DVD ¥4,445(tax out)
通常盤 CD ¥2,593(tax out)

01. 千年DIVE!!!!!
02. JIBUN
03. Spring Snow
04. JUMBO
05. 涙より重いWAR
06. 似た者同士
07. 恋するサンタクロース
08. 生きるための3秒ルール
09. 熱くなれ
10. ラフ・ソング
11. スマイル一番イイ♀〜2015ver.〜 -English ver.-(初回盤のみ)
12. 熱くなれ -English ver.-(初回盤のみ)






(上段・下段)L⇒R

宗弥(G.)
mag(G.)
ミケ(Vo.)

Seika(Dr.)
teru(Key.)
珀(B.)

Blu-BiLLioN

響心identity



新曲毎にヴィジュアル系というパブリックイメージを打ち破り、新たな音世界を提示してくるブルービリオン。今作「響心identity」は、近年見つけた彼らの音楽“Sing×Dance×Rock”のなかでも、ロック色強めの“踊れるロック”にアプローチ。生きているとぶつかる疑問や想いをリアルにぶつけた1曲になっている。カップリング曲もそれぞれがまったく違う個性豊かな楽曲が揃った。曲に絡めた質問で脱線もしつつ、彼らの音楽道を感じるインタビューを。

Text ⇒ 赤木まみ

■このところダンスナンバーが続いてましたけど、今回は正統派ロックナンバーというか。

宗弥「いや、これも自分の中ではダンスナンバーだと思ってるんですよね。もちろんロックではあるんですけど、今、自分達は〝Sing×Dance×Rock〟というテーマを掲げてて。実際、僕ら自身〝踊れるロック〟をステージでやることに手応えを感じているし、お客さんも楽しんでくれてる感じがあるので、そこはなくしちゃいけないなと思って、〝踊れる曲〟を意識して作ったんです」

■その〝Sing×Dance×Rock〟という3要素は、今のブルービリオンの柱、と捉えてもいいのかな。

宗弥「そうですね。〝ダンス〟に関しては、前回のアルバム・タイミングで〝Miss Mermaid〟って曲を作って、そこからライヴをやっていく中で〝自分達はこっちかもしれないな〟と思うようになったんですけど。前回のツアーを廻ってる時にはもう全員が〝自分達はSing、Dance、Rockの3本立てだな〟っていう共通認識を持ってた、みたいな感じですね」

Seika「だから〝Sing×Dance×Rock〟はうちらにとってすごく自然な3要素なんですよ。ライヴから出てきたものなので」

■なるほど。で今回の「響心-identity」はそのテーマに沿って作って。音的には、前々作がエレクトロ色が濃かったのに対して、前作、今作はバンドサウンドが全面に出た作りになってますね？

宗弥「やっぱりそれは耳を裏切りたいっていうのがあったので」

mag「この曲ってギターがガツガツ全体を引っ張ってく感じがあるじゃないですか。俺、その感じが好きで。すごい気に入ってます」

珀「うん。今、僕らが出せるベストの形になったなと思いますね」

teru「あと、僕は歌詞もすごくいいなと思ってて。同じバンドのメンバーながら、聴き入っちゃうところがあります」

■歌詞は〝イエス／ノー、ハッキリ自分の意志を示そう〟というのがテーマ？

ミケ「そうですね。僕もよくあるんですけど、本当はそう思ってないのに頷いちゃうことってあるじゃないですか？ でもそこで〝イエス／ノー〟を言わないと損することって沢山あるはずだし、小さな選択の積み重ねで人生が変わっていっちゃうこともあると思うんですよ。だから後悔しないように、ちゃんと自分の意志を表明していこうよっていう」

宗弥「〝イエス／ノー〟ってすごく大事なことだと思うんですよね。特に僕らはイエス／ノーを示さないと成り立たない仕事だし、ノーをイエスに変えていくのもアーティストの仕事だと思うんです。だからそこはもっと責任感を持っていきたいなって、歌詞を読んだ時に思いました」

■ただ、仕事では意思表示できても、プライベートだとまたちょっと違ったりもしない？

宗弥「いや、プライベートでも今言ったことと同じような考え方だと思います。イエス／ノーは人間の尊厳だと思うんですよ。人って顔や名前は記号だとして、その人の凹凸を形成してるのはイエス／ノーだと思うんです。逆に言うと、みんながみんな同じ答えだったら、凹凸がなくなって全員〇（丸）になってしまう。だからイエス／ノーはその人がその人であるための重要なもので。だからこそ俺はこの曲の〝identity〟っていうタイトルを聞いた時、しっくりくるなと思ったんですよね。まさにイエス／ノーはその人のアイデンティティだなって」

小さな選択の積み重ねで人生が変わって
いっちゃうこともあると思うんですよ。
だから後悔しないように、ちゃんと
自分の意志を表明していこうよって

■じゃあプライベートでもイエス／ノーはハッキリと言える。

宗弥「う〜ん、今まで太鼓持ちとして生きてきた僕は、疲れたなぁと思ってても、会社の人に〝飲みに行こう〟って言われたら、〝あ、いいですね、行きましょう行きましょう！ 僕も今ちょうど同じことを考えてました！〟ぐらいのことは言っちゃうんですけど（笑）。まぁでも最近は結構ハッキリ言えるかな」

Seika「僕もやりたくないことは絶対やらないし、イエス／ノーはハッキリしてますね。っていうか、うちは結構みんな自分の意志を通す方なんじゃないかな」

ミケ「うん。teruくん以外は（笑）」

宗弥「teruくんの辞書に〝イエス〟〝ノー〟はないもんね。どっちもない（笑）」

■teruくんは意思表示しないの？

teru「いや一応ノーは提示するんですよ。でも最終的にみんなに巻かれてイエスのほうに行くっていう。例えばご飯を食べにいって、自分の食べたいものを決めるじゃないですか。でもみんなに〝teruくんホントにそれにするの？ 俺達これにするけどホントにそれでいいの？〟って言われると、〝じゃあ、そっちにする〟とか」

■自分はオムライスを食べたいのに、最終的にはみんなと同じ肉料理、みたいな。

宗弥「そう。〝いやいやteruくん、ここに来てオムライスはないでしょう〟って、暴力的にイエスに変えられる（笑）」

■珀は？

珀「僕はなるべく人と関わらないようにしてるんで、イエスもノーも選ばないですね」

ミケ「新しい選択肢が出てきた！（笑）」

珀「僕は何でも自分の思う通りにしたいんですよ。そのためにはなるべく人との関わりを捨てるっていう（笑）。それか、自分の意志を通せる人としかつるまない。でも基本、僕はハッキリしてるほうだと思います」

■magは？

mag「僕はザ・日本人なので（笑）。でも本当に何か言いたい時は僕も言います」

ミケ「だから基本、みんな意思表示する、と。teruくん以外は（笑）」

珀「teruくんはホント、みんなに操作されてるもんね。〝煙草行こうよ〟って誘うと、さっき他のメンバーに誘われて行ったばっかりなのに、断れずにまた行くとか」

teru「それで立て続けに煙草吸って気持ち悪くなったりして（笑）」

ミケ「でもそういう人がメンバーにいるのはすごくいいことだと思う」
珀「うん。みんな自己主張ばっかりしてたらまとまらなくなっちゃうしね」
■それに何よりteruくんはキーボードできっちり自己主張してるから。
teru「そうです。その通り！（笑）」
宗弥「今の〝イエス〟は力強かったね（笑）」
■ではカップリングの「PM7：00」。これは
宗弥「オシャレなナンバーですね。いうのもあったし、自分の中で自然に生まれてきたものだったので、自然に出てきたってことは入れるべきなんだろうなと思って、自信を持ってメンバーに送りました」
■歌詞は時間の流れが入ってて、新しいなと。
ミケ「タイトルも時間なんですけど、想像してほしかったんですよね。主人公はどんな女の子で相手の男の人はどんな人なのかとか、午後4時に一緒にカフェにいて、5時過ぎに男が帰っちゃって、7時に主人公はどこにいてどういう思いなのかとか」
■午後7時には主人公は自分の部屋に戻ってるかもしれないし。
ミケ「電車で帰る途中なのかもしれないし。7時っていろんな可能性のある時間だから」
■ご飯の時間でもあるしね？
ミケ「そうなんですよ。たぶん男のほうは本命の女の子と食事が始まる時間なんですよね。で、女の子は湘南新宿ラインあたりに乗ってるのかもしれない（笑）」
■結末が書いてないだけに想像が広がるよね。magだったらどんなふうに考える？
mag「自分なら相手の男が帰ろうとした時点でビンタしてますね（笑）。自分が女だったらフラれるとかあり得ないんで（笑）」
宗弥「強ぇ〜！（笑）」
ミケ「でもそうなると曲も変わってくるね。もっと攻めるタイプの曲にしないと（笑）」
■では「Mr.Freedom」。これはもう、ライヴにピッタリの曲です。
珀「まさにライヴを考えて作りました。みんなでワイワイ楽しみながら、声も出してほしかったんですよ。なので、Aメロでは掛け合いができるようになってます」
■声を出すとストレス発散にもなるしね。
珀「そうなんですよ。僕は声を出すのが一番だと思ってて。みんなハッピーでいてほしいけど、現実はそうじゃないこともいっぱいあるじゃないですか？　なので、少しでもハッピーに繋がる何か……晴れ晴れとした気持ちになってもらいたいので、この曲で声を出していろいろ発散してもらえたらなって」
Seika「この曲は祭りっぽい感じもあるので、ライヴでは一緒に騒げるノリを作ってあげたいなと思ってます」
■歌詞の中には〝あいつら方向性イマイチわかんねー／髪型もファッションもなんか違うって〟というフレーズが出てきますけど、実際こういうことを言われたこともあるの？
ミケ「もちろん（笑）。うちらってメイクも薄いしファッションもポップなので、他のファンの人達からすると〝どこがヴィジュアル系だよ？〟みたいな。でもそれって俺らのことを見ないで言ってる人も多いと思うんですよ。で、バンドをやってるならそういうとこも自由に生きたいなと思って言葉にしました」
■くだらないルールなんかに縛られるなって、それこそロックだよね。
ミケ「そう。だから俺、この曲が一番〝Sing×Dance×Rock〟を表わせてるんじゃないかなって思うんですよ。歌うとこもあるし、踊れるし、ロック魂みたいなのもあって。すごく象徴的な曲になったなと思ってます」
■3曲3様、いろんな景色が見えて。こういう曲達を聴くとライヴが待ち遠しくなります。
宗弥「そうですね。5月から次のツアーが始まるんですけど、僕らもこの3曲がツアーでどう育っていくのか純粋に楽しみだし、みんなでSing×Dance×Rockできるライヴになると思うので、楽しみにしててください」 B



Blu-BiLLioN



初回盤A



初回盤B



通常盤

New Single
響心identity
2017.02.22 Release
初回盤A CD+DVD ¥1,800（tax out）
初回盤B CD+DVD ¥1,800（tax out）
通常盤 ¥1,500（tax out）

01. 響心identity
02. PM7:00
03. Mr.Freedom ※通常盤のみ
04. 響心identity（カラオケ）

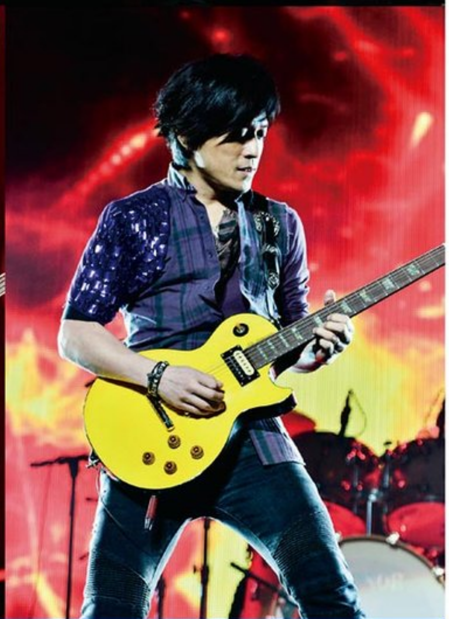
Blu-BiLLioN ⇒
ブルービリオン。'10年2月結成の6人組バンド。5月11日よりBlu-BiLLioN 6th Anniversary TOUR「Sing×Dance×Rock」がスタート。7月からは所属レーベルのイベントツアー「治外法権VOL.7」も決定している。















[上段からL to R] **阿信** アシン：Vo. **石頭** ストーン：G. **瑪莎** マサ：B. **怪獸** モンスター：G. **冠佑** ミン：Dr.

Mayday ⇒
メイデイ（五月天）。台湾を代表するロックバンド。'99年デビュー。'13年11月に日本版ベスト『Mayday×五月天 the Best of 1999-2013』を発表。'17年2月1日にニュー・アルバム『自伝 History of Tomorrow』をリリースした。

Mayday

Re:DNA ~2017 復刻版~　2017.02.04 日本武道館

1年半ぶり、Maydayが日本武道館に帰ってきた。単なる再演ではない復刻ライヴ。

Text ⇒ 田家秀樹　Photo ⇒ 橋本塁（SOUND SHOOTER）

『自伝 History of Tomorrow』――。

アジアのスーパーバンド、Mayday（五月天）の、2月1日に出た新作アルバムにはそんなタイトルが付いている。

明日の歴史、である。

アルバム発売の直後の2月3、4日、彼らは新作を携えて二度目の武道館のステージに立った。前回は、2015年8月28、29日。ヴォーカルのアシンは「ここに来るまでに16年かかりました」と感慨深げだった。

ただ、今回の「Re:DNA～2017 復刻版～」は、単に「武道館に帰ってきた」という以上の意味を持っていた。それは2009年から2010年にかけて世界各地で44公演行なわれ、台湾史上最高の動員を記録、世界にMaydayの名前を強烈に印象づけたワールドツアー「DNA"創造"」の再演だったからだ。

彼らがなぜそれだけ熱狂的に迎えられたのか、それまでのアジアのバンドとは違う存在になったのか、いくつもの答えがそこにあるというツアーだったからだ。その時の東京公演はZEPP TOKYO、台湾はもとより各国での大会場で行なわれたツアーの一貫としては会場の規模が小さい。武道館に舞台を移して行なわれる今回の公演は、彼らの歴史的公演の全貌を見せてくれることになった。

再演と初演の組み合わせ――。

開演前に客席で流れていたBGMは新作アルバム『自伝 History of Tomorrow』の中の「Buzzin'」。ポルノグラフィティの新藤晴一が書いた詞の舞台は新宿。ダンスビートに合わせて客席でブルーのサイリウムを振る日本のファンにとっては、自分達の歌でもあるだろう。2009年のツアーを観ていない人も多かったのではないだろうか。幻のライヴの前の最新曲に高まる期待感がはち切れそうになってゆく。

何しろ、冒頭から、度肝を抜くような光景が展開されたのだ。アクション映画のようなカーチェイス。タクシーに乗り込んだメンバーは警察に追われている。パトカーとの追いつ追われつの激しい攻防。パトカーは横転して炎上、彼らに向けられた銃弾は、近くを走るトラックに積まれたダイナマイトに引火して爆発、一面は火の海になる。かろうじて脱出したメンバーが、そのままステージに登場、1曲目の「モーター・ロック」が始まった。ショートムービーの熱気そのままの爆走ロックに客席が盛り上がらないわけがない。2曲目は、2009年の初演時にはなかった「Do You Ever Shine?」、作詞は小林武史。新作アルバムの最後の曲だ。

メンバーソロや厚目のコーラス、バンドのスキルと呼吸の良さ。1曲ごとに加速するオープニングパートの締めくくりがテーマ曲「DNA」だった。映像はクリスタルのようなデスマスクがフィーチャーされて過去と未来が交叉する。"叫びたいなら叫べ、自分の鼓動を取り戻せ"というメッセージがアグレッシブだ。

そう、メッセージである。

彼らがなぜ、世界でこれだけ多くの人たちに支持されているのか。そして"中華圏のビートルズ"と呼ばれているのか。その一つが彼らの曲の持つメッセージだと思った。

左右の画面に日本語の訳詞が出る。

同じ髪型で同じ人生を送ることに対してのいくつもの"なぜ"が歌われていたのは5曲目の「君は幸せじゃないのに」だ。歌詞に沿って映像が変わっていく。生まれた病院や小さい頃の記憶、ノスタルジックな過去を爆破して生まれる新しい自分。自分のDNAが求めるような人生にやり直せないのか。そんな内省的な歌のフィナーレにはいつのまにか着ていた着ぐるみを脱ぎ捨てるユーモアもあった。

今と違う自分、新しい人生。音楽がそれを可能にする。そのレシピを歌ったような7曲目の「人生有限会社」は、新作アルバムの中の曲だ。曲のイメージを膨らませる映像の中のジョン・レノン。それがヒントだった。

映像と曲の持つストーリー。冒頭でなぜ警察に追われていたのかが明かされてゆく。彼らが盗みだそうとしていたのがジョン・レノンのDNAだった。誕生と成長、母と子供、どこの国にも同じように生きている命がある。画面一杯に映し出された地球に「Re:DNA Mayday」というツアータイトルが重なり合っていった。

ジョンのDNAを盗み出して少年の元に届けるというストーリー。あの少年は、過去の自分であり未来のMaydayでもあるのだろうと思った。17曲目の「John Lennon+僕」の中には"ビートルズと呼ばれたい""LOVE LOVE LOVE"という歌詞もある。18曲目の「大切な何でもない事」の映像は、60年代のポップアートのようだった。19曲目「天使」が、2016年と1999年を結んでゆく。一つのコンサートに託されたテーマとメッセージ。この日何度目かの客席の大合唱は感動的だった。

アンコールで登場したのが新作の中の「Song for you」の作詞、ゲストヴォーカルでも参加している、ポルノグラフィティの岡野昭仁。「初めて人に詞を書いた」という曲は、同じ1999年にデビューしたからこその共感。「途中で悩んだり立ち止まったりした時に支えになってくれたのが目の前のお客さんだった。そんな気持ちを込めて書いた」と言った。彼らも3月に台湾でコンサートをやるのだと言う。そうやって音楽で国と国が結ばれていく。

それまで原語で歌っていた客席の日本語の大合唱が、ここが武道館だと思わせてくれた。

"自伝"というのは、普通はこれまでの歩みを振り返ったものだろう。

Maydayはそこに留まっていない。

ここから明日に続いてゆく未来の歴史。2002年、GLAYのTAKUROとTERUとともに訪れた彼らのスタジオに巨大なビートルズの写真が貼られていたことを思い出した。

DNAはTOMORROWへと受け継がれていく。Maydayは、僕らと同じDNAの下に生まれている。 (B)

SET LIST 01.モーター・ロック / 軋車　02.Do You Ever Shine?　03.HoSee　04.DNA　05.君は幸せじゃないのに / 你不是真正的快樂　06.生存以上生活以下　07.人生有限会社 / 人生有限公司　08.Crazy world+migratory birds（渡り鳥）/ 瘋狂世界+候鳥　09.The Yet Unbroken Part of My Heart / 我心中尚未崩壞的地方　10.満ち足りた想い出 / 知足　11.人生は海のよう / 人生海海　12.春の叫び / 春天的吶喊　13.瞬間少年ジャンプ / 離開地球表面　14.Dancin' Dancin'　15.孫悟空　16.乾杯　17.John Lennon+僕 / 約翰藍儂+我　18.大切な何でもない事 / 最重要的小事　19.天使　20.馬鹿 / 憨人　ENCORE 21.Buzzin'　22.出陣の歌 / 入陣曲　23.頑固　24.Song for you feat. Akihito Okano（PORNOGRAFFITTI）　25.OAOA　W ENCORE 26.愛の記憶は突然に / 突然好想你　27.最高の一日 / 最好的一天



[L to R] 大島知起:G. カワイリョウタロウ:B.&Cho. 寺口宣明:Vo.&G. 福島由也:Dr.&Cho.

れているじゃないですか」
福島「SMAPもやってたよね」
寺口「それこそSMAPって、誰かの背中を押す感じでこの言葉を言ってるけど、自分に言い聞かせているところが福島なんですよね。どこかネガティブだけど、いや、やめらんねえ、大丈夫、きっとうまくいくっていう。そうやって呪文みたいに言い聞かせているように聞こえて」
■でも、その呪文が世の中に出ることによって、聴いた人の呪文になるからいいですよね。
福島「それが理想的な形ですね。自分のために書いたものが、結果、人のものになるっていう」
■言い聞かせるという部分では「!」も肯定感がありますけど、寺口さんはこのタイトルが"あまだれ"ってすぐに読めました?
寺口「いや、最初は自分用に分かりやすいように、!マークをつけて保存したやつをそのまま送ってきたのかなって(笑)」
■福島さんは元々この読み方を知ってました?
福島「"雨垂れ石を穿(うが)つ"っていう慣用句が好きで、それを歌詞に入れてたんですけど、そこから雨垂れを調べたら、"!"が出てきて。"!"って点と線で出来ているし、そこは歌詞ともリンクしていたので、これにしました」
寺口「その意味を聞くと伏線が回収される感じがあるけど、最初はびっくりしますよね。この曲がこのタイトル!?っていうのもあるし」
■強そうなイメージが湧きますけど、実際は優しい曲ですからね。どの歌詞も最終的に前を向いてはいるんですけど、「徒労」は出だしがかなり赤裸々ですよね。豊かさのために始めた音楽が、いろんな豊かさを奪っていったという。
福島「それを曲にしていいのかなっていうのは、もちろん考えたんですよ。今まではそれこそ音楽とか、具体的なワードを使ってこなかったので。でも、生きていて徒労に思えることって、誰でもあるじゃないですか。僕にとってそれは音楽だけど、誰かにとっては仕事だったり。それを素直に書いたら、みんながそこに自分を当てはめて聴いてくれると思ったので、ここまで言ってもいいだろうと思って」
寺口「俺もライヴしたくないときとか正直あるんですよ。だから、何言ってんだこいつとは全然思わなかったし、歌っていて、この曲は俺に合ってるなって思いました。なんか、本当の自分がどれなのかよくわかんないんですけど、俺って子供の頃はあんまりネガティブじゃなかったんですよ。今でも楽しいことが好きだし。でも、いつしか俺は意外と弱いし、かっこつけてるわけじゃないけど、闇のほうが多い気がするって思うようになって。ほとんどの人がそうなのかもしれないんですけど、生きていく中で、なんか暗くなってしまうというか」
福島「誰もが成長の段階でいろいろ考える瞬間がくるんだろうね。誰しもがそう考えるし、だからこそ、この曲には普遍性があると思うし。この歌詞と歌でぐっとくる人は多いと思う」
■寺口さんとしては、歌っていて自分の心が継がれる感覚もありました?
寺口「それは毎作、毎曲思ってます。"夢想家"でも話したけど、この音楽って、俺の中では変な応援歌を聴くより救ってくれるというか。わかりやすいわけではないけど、俺はこういう音楽のほうが起き上がらせてくれる力を持ってると思います。それを歌えることにすごく幸せを感じるし、それだけで生きる糧になってますね」 (B)

Ivy to Fraudulent Game ⇒
アイヴィ・トゥ・フロウジュレント・ゲーム。'10年10月に群馬県にて結成。全楽曲の作詞作曲をDr.福島が担当。'16年4月に1stミニアルバム『行間にて』をリリース。4月からレコ初ツアーがスタート。

Ivy to Fraudulent Game

前作、そして多くのライヴを経て、バンドの表現力、佇まいはより確固たるものになった。楽曲もしかり。未来へと継ぐ2ndミニアルバム『継ぐ』。Vo.寺口、Dr.福島に聞いた。

Text ⇒ 山口哲生

■『行間にて』から約1年振りになりますが、自分達の軸を提示した作品を世に出し、ライヴをしてきてどんなことを感じました?

福島「ちゃんと広まっている感覚もありつつ、もっとこういうものがやりたいっていうのが出てきたのが大きかったですかね。もっといろんなものが見せられると思ったし、見せたいなって思うようになりました」

■もっと行けるし、もっとやれると。

福島「そうですね。もっと上に行きたい気持ちはメンバーみんな強くなったと思います。初めての全国流通盤でもあったし、リリースしたことで意識がより明確になったというか」

寺口「俺も同じような心境なんですけど、行くぞ!っていうところから、行かなきゃダメなんだっていうところに来たような気がします。掴まなきゃっていう気持ちが強くなってきた」

福島「きっと自信があるからそう思えたと思うんですよ。今までは"行きたい"だったけど"行ける"と思ったから"行かなきゃいけない"になった。自分たちに自信があるからこそ、そこまでは絶対に行かなきゃいけないっていう」

■そんなモードの中で完成した『継ぐ』ですが、前作同様、まずタイトルがいいですよね。動詞で2文字ってインパクトがありますけど、どういうところから付けたんですか?

福島「ジャケットのアートワークになっている刺し子がヒントになっていて。刺し子って、日本の修復技法で、破れてしまった衣類を糸で継ぐんですけど、その縫い目を幾何学模様にして、新たな付加価値をつけるというものなんですよ。その心の在り方とか考え方がすごくいいなと思ったし、それを自分達の音楽に当てはめたら、すごくしっくりきて。日々の感傷とか負の感情が破れた衣類であって、それを音楽で継ぐっていう。あと、ダブルミーニングでもあって、未来の音楽シーンを継いで行くぞっていう、ちょっとダサいやつの2つの意味があります(笑)」

■ダサいって(苦笑)。福島さん的に、そういう意気込みを出すのはためらったりするほう?

福島「いや、ためらいはないです。僕は本気でそう思ってますけど、よく言われる言葉でもあるじゃないですか。そこがちゃんと伝わるかなっていう不安があって」

■最初にタイトルを見たときに、やっぱり2つ目のほうをイメージしたんですよ。で、聴いてみて、それができる音楽だとも思いました。今作はアップテンポな「Dear Fate,」がリード曲ですけど、この曲を選んだ理由というと?

福島「他の曲は挑戦的で実験性も高めだけど、聴いてくれている人達が、僕らのライヴに対して持っているイメージはこの曲だと思うんですよ。曲の間口が広い気もしたし、これまでの集大成みたいな感じもあったので、これをリード曲にしましょうって話し合いで決めました」

■歌詞としては、運命や宿命に対しての手紙という形なわけですが。

寺口「普段言わないようにしてるんですけど、変な話、俺は行けるのか、消えるのかっていうことを最近考えていて。そういうときにこの歌詞が福島から来たから、同じ気持ちなのかなって。自分がどうなるのかは運命みたいなもので決まっていたとしても、やっぱり戦わないほうが怖いし、やるしかないっていう。全然無力なんですけどね。理想通りにいけない自分がいるし、劣っているところもたくさんある。そういう葛藤の中で、でも戦わざるを得ないっていう」

福島「ライヴで"青二才"をやってるときに、ノブ(寺口)が"戦え!"ってめっちゃ言ってたんですよ。それがお客さんにじゃなくて、自分に言っている感じがあって、それを後ろから見てたらグッと来ちゃって。あの言葉がこの歌詞に反映されているところもあると思います」

■ちなみに、最初に作った曲ってどれですか?

福島「一番最初にできたのは"夢想家"ですね。『行間にて』のRecが終わってから書き始めたんですけど、最初はピアノとかサンプリングとか、バンドサウンドじゃないところから作り始めたんですよ。それでリョウタロウ(B.)にいいのかな?って聞いたら、"好きにやっていいよ"って言ってくれたことで、ちょっと吹っ切れたんですよね。そこから制限を設けずに作り始めて」

寺口「俺、今回の中でこの曲が一番好きで。うまくいかなくて部屋に引き籠ってるんだけど、結局は"よし行くか"って、部屋を出ていくような描写がすごく好きで。なんか、耳に入ってくるのは完全にシューゲイザーなんだけど、J-POPな感じがあるというか」

福島「人情みたいな」

寺口「うん。前を向かせてくれるテイストが入ってていいなと思いますね」

■その「夢想家」とは打って変わって、ギラギラしていて爆発力がある「E.G.B.A.」も収録されていて。このギャップもいいですね。

福島「"夢想家"の次に"Utopia"を作って、自分の好きなように2曲書いたんですけど、なんか暗くね?と思って(笑)。それで、前のツアーの後に、ノブが"ロックな曲もあったらいいんじゃないかな"ってポロっと言ってたのを思い出して、その方向に振り切って作ってみました」

寺口「自分がやりたかったのもあるんですけど、ライヴの空気とか、お客さんの反応を見ていて、こういう曲を待っているような気がしたんですよ。福島が普段聴いている音楽からして、"夢想家"と"Utopia"を持ってくる感じはわかってたけど、こっちサイドも是非!みたいな(笑)。両方やるのが俺らだと思ってるんで」

■タイトルは「Everything's Gonna Be Alright」の略ですが、言葉の意味合いとしては優しさがあるけど、このサウンドに乗るとかなり強い響きになりますよね。

福島「これは"大丈夫、きっとうまくいく"って、自分に言い聞かせている感じですね」

寺口「このフレーズって、いろんなところで使わ



2nd Mini Album
継ぐ
2017.03.08 Release
初回盤 CD+DVD ¥2,407(tax out)
通常盤 CD ¥1,574(tax out)

01. Utopia
02. Dear Fate,
03. E.G.B.A.
04. !
05. 揺れる
06. 徒労
07. 夢想家



■「あれから何度目のBirthday」って、何年、後悔を引きずってるの?っていう(笑)。でもここまでの3曲みんな後悔してますね(笑)。
「確かにずっと後悔。恋には後悔がつきものなんですね(笑)。でもずっと好きって、怖いですね(笑)。"嘘の火花"も曲調があんだけ激しいからわからないけど、"ずっと好き あなたが好き 気付いてよねぇ〜"っていう歌ですからね。病んでるのか、この子は?っていう(笑)」
■若干ね(笑)。そして女子っぽい3曲から一転、ボカロ曲カバーの「ブリキノダンス」。洗脳されそうな中毒性です(笑)。
「勢いと言葉で雰囲気を作った曲ですね。今まで人物像とかを思い描いて歌っていたけど、これは人物像も世界観もまったく見えないので感情移入とかはなく(笑)。インドなのか宗教なのか時代もよくわからないし、そういう意味では難しかったですけどよく生放送で歌わせてもらっていたので、今回できて良かったです。こういう激しい巻き舌曲って好きなんですよ」
■他の方のも聴いたんですけど、96猫さんのは他のどれとも違ってまた格好良い!
「歌う人によってまったく違いますよね。コニーくんっていう歌い手さんが歌うのはなぜかキレイで、SymaGさんのはこの曲の世界観にピタってハマっていたり、逆に女の人が歌う妖艶さがあったりして、聴き比べると楽しいですよ」
■96猫さんはこの曲ではイケメンボイスです。
「歌詞も強い感じで命令口調が多かったので、ただ壁をぶん殴ってるような、がなって巻き舌使っているような攻撃的な感じで歌ってます」
■しかもこれが通常盤CDに入るそうで(笑)。
「"嘘の火花"の声が好きでシングルを買ってくれた人が聴いたら、ビックリしますよね。狙いだそうです(笑)」
■アニメ盤には同じくボカロ曲のカバー「ラズベリー＊モンスター」を収録。こちらは96猫さんお得意のいろんな声色が入った歌い方です。
「曲を解釈したMVもあるんですけど、内気な女の子とその子が憧れるラズベリー＊モンスターっていう女の子がいて、内気な子はラズベリー＊モンスターを見て"こうなりたい"って思うんだけど、学校では友達に馴染めず自分はダメだって思っていて。だけど実はそんな内気な子を見守る男の子がいて、女の子が落ち込んだ時に助けに来て、女の子は1人じゃなかったっていう曲なんです。だからサビはラズベリー＊モンスターのイメージで元気に、メロは内気な女の子の感じにスイッチを入れ替えて歌いました」
■さて、このバラエティ豊かなシングルが出て、3月末には2年ぶりのワンマンライヴがあります。ちなみにタイトルにある"2.5D"って?
「2.5次元って意味で、もともと私がネット動画で顔も見えない状況からからスタートして、いろんな人が聴いてくれるようになって、それが今やメジャー・デビューして画面を越えて活動させてもらって、2次元と3次元の間にいるっていう。そこまでの成長記録じゃないですけど、みんなに支えてもらって私はここにいるよっていうことを伝えたくて、このタイトルにしました」
■もちろん今作の曲も歌いますよね?
「はい。"嘘の火花"で96猫を知ってくださった方も、その前から知ってくださっていた方にもぜひ来ていただきたいです。これからも変わらず私のペースでちょっとずつ歩いていくので、良かったらこれからも見守ってやってください」 B

96猫 ⇒
クロネコ。'06年からニコニコ動画の「歌ってみた。」カテゴリで活動を開始。精力的な動画投稿と生放送を行ない、投稿動画の累計再生数1億回を超える女性シンガー。'16年6月にミニアルバム『Crimson Stain』でメジャー・デビュー。3月末に大阪·東京にてワンマンライヴを開催。

96猫

96猫初となるシングル、アニメ『クズの本懐』オープニング曲「嘘の火花」をリリース！
彼女の願いがいろいろ叶いつつ、試行錯誤を重ねた1曲。c/wもすごい布陣です！

Text ⇒ 花倉有紀子

■デビュー以来、ボリューミーなミニ・アルバムをリリースされていたのが、ここに来て1stシングルの発売となりましたね。

「ずっとシングルを出したかったんです。しかも自分の目標だったアニメのオープニング曲っていうのがすごく嬉しいです。緊張と不安と喜びと、部屋とYシャツと私……みたいな（笑）」

■（笑）しかもノイタミナのアニメ『クズの本懐』のオープニング曲というビッグタイアップ。

「ノイタミナはアニメ好きで知らない人はいないぐらいの枠で、私の好きなEGOISTさんもオープニングとエンディングを飾っているので感慨深いですね。最初にお話を頂いた時はびっくりしました。今までは“私なんかでいいんですか？”って気持ちが強かったんですけど、今回は“せっかくいただいたチャンスだからやってやるぞ！”ってやる気に満ちてました。今回ジャケットもアニメ盤っていうのがすごく嬉しくて」

■ただそのジャケがまた、CDを買いに行ってもドキッとしてしまうほどエロティックな（笑）。

「『クズの本懐』の主人公の花火ちゃんが下着姿で麦くんと絡まっているっていう。親と一緒にいたら買いづらいですよね（笑）。しかもジャケをひっくり返すと2人の足が絡まっています」

■10代の96猫さんファンには刺激が……。

「そういう方は、無難なロイドちゃん（黒猫バージョン）のほうを手にしていただければ。友達にも貸しやすいし（笑）」

■ですね。選曲はスムーズにいったんですか？

「最初に3曲ラフを録ってアニメ会社さんに提出したら、その中の1曲だった“嘘の火花”が選ばれたので曲選びはスムーズでした。でもその時はまだタイトルや歌詞が未定でもっと和風だったんですけど、曲が決まってから歌詞もアレンジもアニメに寄せて変わっていきました」

■いつも七変化の歌声を聴かせてくれる96猫さんですが、今回また新たな96猫さんを感じました。声色の方向性はすぐ決まったんですか？

「いや、それが全然決まらなくて。最初の和風な歌詞のイメージで歌ったものはしゃくってる（音程を下から上にズリ上げる歌唱法）し、ビブラートかけてるし、こぶしも入れてたんです。でも歌詞とアレンジが変わった時点でそれだと合わないなと思って。それで女の子っぽい感じで歌ったんですけど、“女の子っぽすぎる”と言われて。そこからどう歌おうか悩んで何度も何度も歌い直して。いったん全部置いて、自分が思うままに歌ってみたら、“これでいこう”ってなったんです」

■それだけ曲と向き合った甲斐あって、作品の世界観にハマった、インパクトのあるカッコかわいい楽曲になりましたね。

「苦労した甲斐がありました（笑）。“この曲で歌い手も好きになった”とか“96猫嫌いだったけど、これは好き”って反応もあって嬉しいです」

■『クズの本懐』のアニメを何話か観たんですけど、ドロドロですね（笑）。女子はハマりそう。

「女子はドロドロ好きですからね（笑）。それにちょっとHだし。音がリアルなんですよね。学生ならではの複雑な恋模様も面白いし。また身近にこういう人いたらヤバイだろうな～っていうキャラクターがいるんですよ！　私が一番ヤバイなって思うのが茜先生ですね。茜先生は花火ちゃんが好きなお兄ちゃんとくっつくんですけど、お兄ちゃんのことを好きでも何でもないんです。ただ花火ちゃんの悲しむ顔を見たいからお兄さんを奪うっていう……」

■うわ～、昼ドラチック（笑）。アニメは現在放送中ですが、原作漫画を読んだんですか？

「最終巻まで読みました。でもアニメと原作の終わり方はちょっと違うらしいので、そこもちょっと楽しみです。原作者さんいわく、アニメのほうが希望した終わり方ということなので」

■歌う時は曲の主人公を設定することが多いそうですが、今回はやっぱり……。

「ただただ花火ちゃんですね。花火ちゃんは自分の気持ちを偽って好きでもない相手と付き合うことで人間関係を保とうとしているし、この曲の歌詞からイメージされる人物像は花火ちゃんだなって。だから曲のタイトルを決める時にも“花火”は入れたいと思ったんです。でもそのままだとありきたりだなっていうのと、歌ってる時からずっと“嘘”って言葉があったので“花火の嘘”を逆から読んだこのタイトルにしました」

■アップチューンな「嘘の火花」とは対照的に2曲目の「独り言」は大人っぽいバラードです。

「“嘘の火花”は恋が実る前の歌だとしたら、これは恋が実って別れたその後、みたいな。これは私が本当に曲に惚れ込みました。1stミニアルバム『Crimson Stain』の時点でもうラフを録っていて、その時からずっと作品に残したいと思っていたんですけど、『Crimson Stain』はロックテイストでジャンルが違ったし、次作の『7S』もコラボCDだったので入れられなくて。今回シングルで入れることができて良かったです。この曲は“嘘の火花”とは真逆にスムーズに歌録りができて、ラフを1回歌って、本チャン1回歌っただけです。“嘘の火花”はゴールに辿り着くまでの道がありすぎて、どれが正しいのかわからなくなって、いろんな道を行っては戻りを繰り返していたんですけど、“独り言”に関しては1本の道しかなかったというか。自分の目指した道と、この曲を作ってくれたnanosleepさんが思い描いていた道が同じで、nanosleepさんも現場で歌い方や細かい音程を教えてくださったので、すぐにピタッと曲にハマって歌えました」

■初回盤に収録の「S・K・Y」もまた切ない恋の歌ですが、これはどう選曲したんですか？

「この曲を作ったライブPさんとは6年前から面識があって、そこからライブPさんの曲をいろいろ歌わせてもらっているんですけど、“S・K・Y”はすごくいい曲なのに埋もれちゃってる気がしていて、いろんな人に聴いてもらいたいと思って入れました。好きな相手と別れて後悔してるっていう未練タラタラな曲です（笑）」


初回盤


通常盤


アニメ盤

1st Single
嘘の火花
2017.03.15 Release
初回盤 CD+DVD ¥1,800（tax out）
通常盤 CD ¥1,300（tax out）
アニメ盤 CD+DVD ¥1,800（tax out）

01. 嘘の火花
02. 独り言
03. S・K・Y（初回盤）
03. ブリキノダンス（通常盤）
03. ラズメリー＊モンスター（アニメ盤）
04. 嘘の火花 -Instrumental-
05. 独り言 -Instrumental-



[L to R] Fumiha：B. & Cho.　Aika：Dr. & Cho.　Ryoko：Vo. & G.　Yurika：G.

めちゃテンポが速かったんですけど、今回は少しだけ遅いほうで。自分のイメージ的にはねっとりとしたベースが弾きたいと思いました」

Aika「サビは複雑なことをしてるんですけど、いままでの曲より少しだけ簡単なので、力強くノリやすいビートを刻んでますね」

Yurika「ギターの音はずっと単音なんですけど、イントロのフレーズが大事なので、そこを死ぬ気でやるしかないって感じです」

■全体にこれまでに比べて曲の難易度は下げた印象ですか？

Ryoko「と言うか、“秒速～”とか“仮面～”が頑張ってたんです。舐められたくないから、自分たちのテクニックのすべてを詰め込む、みたいな。あの頃はエイトビートの曲を出して、ありがちだと思われるのが怖かった。だから3分半のすべてがパンチみたいな曲だったんです」

Fumiha「まだ舐められたくはないけど」

Ryoko「でもいまは難しいことをするだけがすべてじゃないというか。シンプルなエイトビートでも、前の2曲より聴かせられる器量がついた。良い引き算ができた曲だと思います」

■それがカップリングの「ひらり舞う」と「満月の夜に」のシンプルさにも繋がってるんでしょうか？

Ryoko「そうですね」

■特に「満月の夜」はいままでのЯeaLの曲で、いちばん歌詞もストレートというか。

Ryoko「“会いたい”とか“好きだよ”とか、いままで伝えてきませんでしたからね」

Aika「やっと素直になった（笑）」

Ryoko「この曲は去年の11月に書きました。基本的に私が好きな曲ってギターが主旋に負けないぐらい歌ってて、ベースとドラムがエイトビートを刻むシンプルな曲なんですよ。それを背伸びせずに作れたし、ЯeaLとして孤独とか愛を歌えたから……カップリングではなくてリード曲でも良かったかな（笑）」

Fumiha「ずっと（Ryokoが）“曲が書けへん”って言ってて、やっとできた曲やったんです。“カップリングに決定した”って言われて、もったいないなと思いました」

■たしかに、その気持ちはわかります。この曲はピアノとストリングのアレンジも綺麗でアクセントになってますよね。

Ryoko「ピアノはデモの段階から入れてましたね。この曲のアレンジは、基本的に私が最初のデモで打ち込んだものと変わってなくて。ストリングスとかリバースシンバルとか、キラキラの音が入ってるんですけど。昔はもっと遠くで鳴るように入れてたんです。それを前に出せたのも成長ですね」

■今回のシングルではチャンスも掴んだし、これまでの成長が刻まれてるし、今年のЯeaLは何かやってくれそうな気がしてます。

Ryoko「ここからだぞ感がありますよね」

Aika「やりますよ」

Ryoko「自分でも思うんですけど、“秒速エモーション”とか“仮面ミーハー女子”は、これですべてだ、みたいな感じだったんですよね」

Aika「切り札!みたいな」

Ryoko「でも今回は隠し玉がいっぱいあるんです。今回のシングルから入ってくれて、前作に戻るの良しやし、これからを楽しみに待ってくれるも良しやし。みなさんの自由に、ЯeaLを好きになってほしいです」 B

ЯeaL ⇒
リアル。'16年3月シングル「秒速エモーション」でメジャー・デビュー。3月12日、渋谷TSUTAYA O-WESTにてЯeaLデビュー1周年記念企画 ЯeaL Яock Яevolution vol.5～ЯeaL vs Gacharic Spin～を開催。5月からは初のワンマンツアーが決定している。

ЯeaL

成長著しいガールズバンド·リアルの新曲「カゲロウ」は、人気アニメ『銀魂.』主題歌! 彼女達の楽曲が持つ和のテイストと、作品が見事にマッチした今作について聞きました

Text ⇒秦理絵

■昨年末はバンド結成4周年ライヴも無事に終えまして。どうでしたか?

Ryoko「大阪と東京で全然セットリストを変えたんですけど、両方ともすごく楽しかったですよ」

■今年は5周年じゃないですか。

Ryoko「そう、だから、今年は大きいところでやりたいなあと思ってるんです」

■4、5年前の自分たちが、いまの自分たちを見たら、どう感じると思います? こうやってバンドを続けていることだったり……。

Fumiha「めっちゃびっくりするやろな」

■それはどういった部分で?

Ryoko「結成してからいろんな経験をするなかで絶望的な気持ちになったり、“辞めたい”と思ったり、喧嘩もしたし。そういうことも、あの頃の自分たちは想像してなかったと思います。始めたときは“絶対売れてやる!”“曲を書けた! 良い! ライヴやろう!”みたいな」

Fumiha「勢いだけみたいな感じやったね(笑)」

■「売れたい」っていう気持ちも少しずつ変化してきてるんですか?

Ryoko「いまも売れたいですよ(笑)。でも、切羽つまった感じはなくなったかな」

Aika「根本は変わってないけど」

Ryoko「ちょっと余裕ができた」

■ちなみになんですけど、振り返ってみて、絶望を感じた、辞めたいと思うのはどういうときでした?

Ryoko「ЯeaLっていうバンドは、ずっとみんなに嫌われてるような感覚でいたんです。バカにされたりとか。すべてが敵に見えてたんです。だから何回もバンドとしての存在意味を考えてて。それを考え切ったうえで、すべてのマイナスを超えても、お客さんたちと触れ合っていきたい。そうすれば最終的にはプラスになって前に進んでいけるって気づけてきたんです」

■気持ちをマイナスからプラスに転換できたのは、何かきっかけがあったんですか?

Ryoko「(ЯeaLの音楽で)幸せになってくれる人もいるっていうことをちゃんと体験できたというか、認められるようになったんです。そしたら、自分たちに価値がないって思い過ぎなくなって。だからこそ、昔よりお客さんを大切にできるようになりましたね」

Aika「私たちよくTwitterでエゴサするんですけど、“ЯeaL、めっちゃ良い!”とか言われると、すごいハイになるんです」

Fumiha「名前を打ってくれるだけで良い!」

■“Я”の変換を乗り越えて(笑)。

Ryoko「“L”が小文字でも、“Я”が打ててるだけでほんまに嬉しい(笑)」

Aika「それが例えアンチでも“ちゃんと打ってくれてる!”と思っちゃいますね(笑)」

■じゃあ、今回はバンドとしてすごく風通しの良い状態でリリースされるシングルになると。

Ryoko「そうですね。いままでの私たちだったら作れなかった1枚だと思います」

■まず、表題曲の「カゲロウ」が、人気アニメ『銀魂.』のタイアップという嬉しい話ですが。

Ryoko「アニメの制作の方がЯeaLの曲を気に入ってくださったらしいんですよ。そこでも認められた気がして嬉しかったです」

Fumiha「“嘘やろ!?”って感じやったよな」

Ryoko「福岡の打ち上げでタイアップが決まったと聞いたんですが、(Aikaは)泣いて後ろに転がりましたからね」

■Aikaちゃんはアニメ大好きだって言ってたもんね。

Aika「『銀魂』大好きなんです! 放送された初回の日に観れなかったんですけど、マネージャーさんがオープニング映像を送ってくれて。観た瞬間もめっちゃ泣きました」

■今回は書き下ろしではなく、もともとあった曲だそうですね。

Ryoko「そうです。デビュー前にワンコーラスだけ書いてて。タイアップが決まってから、1番の歌詞は変えずに、2番とラスサビを新しく書き下ろした感じですね」

■ラスサビの“地を這ってでも生きてやる”っていう歌詞はインパクトがあるなと。

Ryoko「泥臭いですよね(笑)。それこそデビュー前に書いてた1番は、さっきも言ったように卑屈な気持ちが出てるんですよ。すべてにおいてネガティブで“自分なんて”みたいな。でも、絶望も希望も見てきた後が2番と3番なんです。憧れてた人になれてなくても、私たちは生きていくんだっていう強い歌詞。気が付けば遠くまで来たねっていう優しい気持ちも含めて書くことができたから。あの頃に完成させなくて良かったなと思いました」

■アニメの世界観は意識したんですか?

Ryoko「基本的にЯeaLは戦闘心が強いところがあるから、たぶん『銀魂』の熱さとか、戦いっていうのものとシンクロして、寄り添わなくても、寄り添える曲になったんです。根は戦(いくさ)みたいな感じなんで(笑)」

Fumiha「侍魂やな」

Ryoko「アニメのタイアップでもありつつ、ЯeaLとして何を歌いたいかっていう筋の通った曲ができたと思ってます」

■この曲が持ってる和のテイストも『銀魂』に合ってますね。

Ryoko「ЯeaLの楽曲として、いまは和で統一させたいと思ってるんです。“秒速エモーション”も“仮面ミーハー女子”も和っぽかったし。日本っていうのは重点に置いてるので」

Fumiha「聴き馴染みがあるよね」

Ryoko「ギターとかベースのフレーズだけが和っぽいわけではなくて、すべてが重なったときに和っぽくなるようにアレンジしてますね」

■他のメンバーは、演奏に関してどんな感想を持ちましたか?

Fumiha「いままでのЯeaLのリード曲はめちゃ



通常盤



期間限定生産盤

3rd Single
カゲロウ
2017.03.01 Release
通常盤 CD ¥1,204(tax out)
期間生産限定盤 CD+DVD ¥1,389(tax out)

[CD]
01.カゲロウ
02.ひらり舞う
03.満月の夜に
04.カゲロウ
~Instrumental~

[期間限定盤·CD]
01.カゲロウ
02.ひらり舞う
03.満月の夜に
04.カゲロウ ~TV Size~
05.カゲロウ
~TV Size Instrumental~

[DVD]
01.カゲロウ(Music Video)



い言葉で表現したいと思ったんです。この歌詞も、ユーミンさんの力を少しでもお借りしたいと思って、ユーミンさんが使っていたという喫茶店で書きました(笑)」

■あはは。その効果があったのかもしれないですね。

「そうですね。簡単な言葉で、なるべく優しい言葉で言いまわし、語尾を考えて、あえて自分らしくないものにしようとしたんです」

■より多くの人に触れてもらうために?

「はい。アルバムを出して、ツアーをしたときに、やはり聴き手に刺さる言葉は、自分が思っている言葉と少しギャップがあったんです。それでは意味がないので、みんなの共通言語を意識して言葉を選びました。この卒業シーズンにこの曲を聴いて、少しでも元気に背中を押すような気持ちになってもらえたら嬉しいです」

■3曲目の「SUNDAY」もすごく印象的でした。ライヴで盛り上がりそうですね。

「ありがとうございます。この曲はまさに、ライヴで歌う曲が欲しいと思って書いたんです。歌詞は、大人な雰囲気で、少し余裕があるような、肩の力が抜けた言葉選びになっているけど、誰かのためになれるひと言も差し込めたらいいなと思い、作り上げました。ルンルンで聴いてもらいたいですね」

■すごくかわいらしい曲なのに、「いざ行け、しぶき超えて」という歌詞が入るのが、ありさちゃんらしさですよね。

「あはは。ついつい出てしまいました(笑)。メロディと共に出てしまったので、これは活かすしかないなと思ったんです。その違和感も一緒に楽しんでもらえたらと思います(笑)」

■すごくバランスのいい3曲が揃ったんですね。

「はい。いいインパクトがある1枚になったと思います。きっと、瀧川ありさという名前は聞いたことがあるけど、曲は聴いたことがないと言う人もまだまだいると思うんですよ。そういう人たちに、このシングルを聴いてもらえたら、その後のツアーも決まっているし、すごくいいタイミングだと思うんです。いまが、瀧川ありさを知るいいタイミングだと思いますよ!」

■すごい宣伝モードだ(笑)。

「はい! この春からのツアーは12公演もあるんです。これは瀧川ありさ史上、最長なので、ぜひ遊びに来てもらいたいです。長いツアーは滝に打たれて修行に行く気持ちで行きたいと思います。瀧川だけに(笑)」

■……ありさちゃんって、たまにおやじギャグをぶっこんできますけど(笑)、ライヴでの反応はどんな感じなんですか?

「しーんとするところもあれば、何を言ってもどっかんどっかん笑ってくれるところがありますね。これはもう地域性です。しーんとなった時に、ツッコミ役がいないから自分で回収しなくちゃいけなくてすごく困るんですよ。基本的にはツッコミなので、ボケてくれる人も欲しいんです。そういうときに、"グループはいいなぁ"って思うんですよね(笑)」

■ちなみに、ツアーの合間に何をしたいですか?

「地方に行くと、ボウリングやカラオケなど、普段やらないことをしたくなるんです。東京にいると、ほとんど……いや、まったく家から出ないので(笑)、アクティブに動いてきたいですね」 B

瀧川ありさ ⇒

'91年東京生まれのシンガーソングライター。'15年3月シングル「Season」でメジャー・デビュー。4月6日より全国12ヵ所でのワンマンライヴツアー『瀧川ありさ 1st recital live tour 2017 "Spring Journey"』がスタートする。

瀧川ありさ

新曲は、敬愛する松任谷由実の名曲「ノーサイド」のカバーと、前向きな春の別れを歌う「ONE FOR YOU」の両A面シングル。どちらも彼女の新しい扉を開くものでした

Text ⇒ 吉田可奈

■ニュー・シングル「ノーサイド／ONE FOR YOU」は、両A面になるんですね。

「はい。昨年に発売したアルバム『at film.』の制作中に、アニメ『ALL OUT!!』のエンディングテーマ曲として松任谷由実さんの“ノーサイド”をカバーしないかというお話をいただいたんです。もともとユーミンさんが大好きだったこともありすごく嬉しかったですし、何より、ユーミンさんのなかでも“隠れた名曲”と言われるこの曲に、プライベートな思い入れがあったので、本当にビックリしました」

■どんな思い入れがあったんですか?

「高校生の頃に、仲の良かった友達がラグビー部の男の子と付き合っていたんです。その友達が、ある日“私の曲があるから聴いて”って聴かせてくれたのが、この曲だったんです。すでに私はこの曲のことを知ってはいたんですが、あらためて歌詞をしっかり聴きながら聴いたら、本当にその主人公が友達と重なって、“あぁ、彼女の曲だわ”ということになったんです(笑)。それからは、私にとってのこの曲は、その友達の大事な曲として存在し、ずっと聴き続けていました。今回、この曲のカバーというお話をいただいて、すぐにその友達に連絡をしたら、彼女もすごく驚いていました。なんだか、点と点がつながったかのように、運命を感じたんです」

■実際に歌ってみていかがでしたか?

「ユーミンさんの歌声は、自分とは対照的なんです。今回も、原曲のキーで歌っているのに、曲が与える印象がまったく違うんですよ。さらに、ユーミンさんは、サビをロングトーンで淡々と歌っているので、私もあえて感情を入れずに歌ったんですが、うまくいかなくて……。マスタリングを終えてもなお、惜しい気がするという話になり、あらためて録り直しました。こんなに歌録りに苦労したのは初めてで。ミュージシャンとしても、すごく糧となりました」

■自分の曲を歌うのとはワケが違う?

「そうですね。自分の曲は、自分が歌うことを想定して作っているので、すごく自然に歌えるんです。とはいえ、この曲も大好きだった曲ですし、思い入れもあるので順調に歌えるのかなと思ったんですが、そうはいかず……(苦笑)。一音、一音をしっかりと確認して歌っていきました」

■この曲を歌った後に、自身での作曲に影響はありましたか?

「ありました。この曲はとてもシンプルなので、歌声でしっかり聴かせなくちゃいけないんです。自分が作るときも、弾き語りでどう伝えていくのかを考えるきっかけになりました」

■歌詞の言葉選びも、すごく独特ですよね。

「そうですね。歌詞の譜割りもすごく独特で、原曲ではあえてずらして歌っているんですよ。普通に聴く分にはその違和感はないんですが、自分が歌うとものすごく違和感が出てくるんです。これはもう、完全にユーミンさんの技。さらに、歌詞も、ユーミンさんの影響をかなり受けているので、あらためてすごいなと思いました。何よりすごいと思うのは、最初の1行で、一気に情景が浮かぶんですよ。それに、“主人公と君”の歌詞に間違いはないんですが、どこかその二人を俯瞰で見ている歌詞なので、すごくドラマ的なんですよね」

■そんな名曲をあらためて歌うとなると、プレッシャーはありませんでしたか?

「ありました。でも、この曲の素晴らしさをあらためて知ってもらうために、しっかりと歌いたいと思ったんです。当時、ユーミンさんを聴いていた方たちには、こんな新人がいるんだよということに気づいてもらいつつ、若い子たちには、ユーミンさんの曲の良さを知ってもらえるような、相乗効果が生まれたら素敵だなと思っています。この曲のおかげで、カバーっていいなと思いました」

■シンガーソングライターだと、カバーは避ける方もいますからね。

「そうですね。でも、自分が聴いてきた曲に尊敬の念が入って初めてカバーが成り立つので、そういう意味では、これから先、自分のルーツの曲を歌っていきたいと思いました」

■今回、この曲のために、実際に高校のラグビー部に行ったとお聞きしました。

「そうなんです。行った当日は雨が降っていたんですが、部員のみなさんは泥にまみれて練習をしていて、すごく目つきが鋭かったんです。でも、挨拶をしたら等身大の高校生で、別人のようでした。そのギャップに驚きましたね。アニメでもその二面がしっかりと描かれているので、感動しました」

■両A面のもう1曲には、瀧川さんが作詞作曲をした「ONE FOR YOU」が収録されます。

「“ノーサイド”がシンプルでゆったりした曲なので、もう一曲は対極なバンドサウンドを提示しようと、強めな曲を選びました」

■この曲は最近作ったんですか?

「つい、最近です。曲の破片は以前からあったんですが、あらためてアレンジして今の私が作り直し、今の気持ちを歌詞に込めました」

■どんな想いを込めたのですか?

「私自身、ソロで活動しているので、絆や仲間とは遠いところにいるんです。だからこそ、“仲間”に強い憧れがあるんですよね。さらに、運命共同体だった仲間が別れた後、残されたメンバーが強くなっていく姿は、すごく美しいし、ものすごく共鳴するんです。もちろん、自分はその別れに対して何かできるわけではないんですが、25歳になった今、そういった事例のときに、ちゃんとその人たちに向けた言葉が書けるときが来たと思い、この歌詞を書きました」

■歌詞は、とてもわかりやすい言葉でまとめられていますよね。

「そうなんです。これは私の挑戦。幸せのために巣立っていくんだ、と初めてさよならをポジティブに感じ取れた視点を、食いしばるくらい優し



通常盤



期間生産限定盤

6th Single
ノーサイド／ONE FOR YOU
2017.02.22 Release
通常盤 CD ¥1,204(tax out)
期間生産限定盤 CD+DVD ¥1,389(tax out)

[通常盤・CD]
01. ノーサイド
02. ONE FOR YOU
03. SUNDAY
04. ノーサイド -Instrumental-
05. ONE FOR YOU -Instrumental-

[期間生産限定盤・CD]
01. ノーサイド
02. ONE FOR YOU
03. SUNDAY
04. ノーサイド -TV size ver.-
05. ノーサイド
-TV size ver. Instrumental-

NEW RELEASE



たいになっちゃうみたいな」
■たとえも含めて昭和感が（苦笑）。でも恐怖の元が和物でも『リング』とか『呪怨』じゃなくて、江戸川乱歩なんだよね。
「だって『リング』とかほんっとに怖すぎる。たまに鏡に向かって怖い顔を作ったりするんだけど、途中で、もしその顔をやめても鏡の中で怖い顔が続いてたらどうしようとか思ったりして。現代的なのはさらに無理なので、怖いもの見たさでワクワクする、止まりなんです」
■今の話も含めてだけど。以前とは物語を描く視点が変わったのかなと。中学生の曲でもその主人公に入り込むんじゃなくて、主人公でありながら、ストーリーテラーでもあるような。
「たしかに。特に去年から今年書いた新曲6、7、8曲目はストーリーテラー要素が強いかも。だからこう、私が今まで描いてきた少女時代っていうのは、誰かに曲を書かせてもらうときには一個のモチーフになったりするんですけど、もう自分の胸をかき乱すものではないし。やっぱりアルバムにすると、そこにあった熱っていうのは昇華されて消えますよね。そして今回は曲の中だけど、ついに結婚しちゃったし」
■あとはこれまでも1曲目には大切な想いが込まれていて。「ユートピア」で“わたしの言葉で戦う”というフレーズが耳に入ってきたときに、あぁ、今回は覚悟なんだなと思ったの。
「これは19歳のときに書いた曲なんです。でも当時は散文って感じで意味が全然わからなくて。だから今回収録するために歌詞をガラリと変えて、自分が子供の頃、物語を読んで救われたというところを物語にすることにして。お話としては、市民プールで泳いでいたら、ふと自分だけの海に変わる。つまり妄想に逃げて自分の内に籠っている主人公なんですけど。最後の最後、本当の底についてみたら外の世界と繋がっていて、今まで自分を救ってくれていた、そして自分を世界から遠ざけていた物語だったり妄想だったり言葉だったりを今度は武器にして、外の世界で食べていくっていう。何かを作ってそれを商品にする仕事をしている今の自分の歌なんです。そこから始めたいと思って、1曲目にしました」
■何かあってまた自分の世界に入っても、最後には底にぶつかって生まれ変わるんだ。
「そう。何回でも生まれ変われる」
■にもかかわらず、“どうやって言葉にしたらいいのかわかんないよ”と歌う「一角獣」で終わるのも面白くて。
「これは最後に録った曲で。ずっと大事にしてきて、絶対三作目の最後に入れたいと思っていたんだけども。歌う人が“どうやって言葉にしたらいいのかわかんないよ”って、絶対言っちゃいけない言葉だと思うんですよ。とにかくここを変えたくて、みんなを何時間も待たせて、でも全然言葉が出てこなくて。今の歌詞で録音したものを聴き直したときに、私が気に入らないのは自分の生々しさなんだ、自分が出ているから気持ち悪くてしょうがないんだなって気づいて。これが一番いいんじゃないかと思って、レコーディングを終わりにしました」
■けどこの曲は最後に“ずっとあなたに会いたい”と言ってる。ちゃんと言葉にしているから。
「ずっとあなたに会いたいって言いたかった。うん。ツアーはどうしよう？　どうやって再現したらいいのかなぁ」 B

吉澤嘉代子 ⇒
よしざわかよこ。1990年、埼玉県川口市生まれ。2013年6月、インディーズ1stミニアルバム『魔女図鑑』を発売。2014年5月14日、ミニアルバム『変身少女』でメジャー・デビュー。4月29日より「獣ツアー2017」を開催する。

吉澤嘉代子

3枚目のフルアルバムは、妄想メーター振り切りの楽曲揃い。その名も『屋根裏獣』。MVも必見の「地獄タクシー」他、1曲1曲の物語にどっぷり浸かって欲しい作品です。

Text ⇒ 山本祥子

■紙資料には「アルバム初期三部作の集大成的作品」という文字が踊っております。

「これ、何かで私が言っちゃって、そしたら結構資料とかにも使われてるな～って(笑)。でもデビュー前にこの曲は入れたいっていうイメージを3枚分作っていたので、それを今回出しきるから、初期三部作と言っても間違いではないかなと。ただ初期と言ってもどこまでが初期なのか……」

■間にミニアルバムを挟むからまたややこしくなる(笑)。中でも、前作との間に発表されたコラボレーションアルバム『吉澤嘉代子とうつくしい人たち』はイレギュラーかつ、ご褒美みたいな作品だったから、今作には今までにない新しい風が入ったのかなと思ったんです。

「たしかに。『～うつくしい人たち』はまるで作り方が違ったので楽しかったんですけど、やっぱり100%自分が書いたものを作りたい!っていう意欲が高まって。『屋根裏獣』はほんっとに純粋に自分だけの詞曲が入ってますね」

■ただ、今作は吉澤嘉代子純度100%の濃さだけじゃなく、より自由奔放な感じがしました。

「ほんとですか?　うーんと、いつもそうなんですけど、気負いすぎてしまって今回もすごい苦しいことがあって。本当に好きな曲だけしかやらないって言うと語弊がありますけど、自分が好きな作品を作りたいって思ったときに、ここはこうでなければいけないとか、歌詞はもちろん、アレンジにおいても、ひとつの“あれ?”も許せないみたいな。がんじがらめで不自由にところに自分から迷い込んでいってしまって」

■それ意外かも。むしろ吉澤さんが吉澤嘉代子のプロフェッショナルになった感触というか。

「おお、それはありがたいです。自分としては聴けば聴くほどに粗が(苦笑)。ここ、なんでこうやって歌えなかったんだろう!とか」

■えっ。歌が特に奔放だと思ってるんだけど。

「OKが出てるのにどうしても気になって、録り直させてもらったのが1曲や2曲じゃなかったから。どうしたら歌に集中できるかなって思って、全部じゃないんですけど、自分でディレクションをするようになって。とは言え、商品になるものなので自分の好みだけで歌を選ぶというのは偏りが出るんじゃないかとか。自分の声だから気付かないところもきっとあるじゃないですか、ここは滑舌が悪いとか。実際、自分でディレクションするって決めて、歌い始めてすぐにやっぱ無理かも!?とか思っちゃって。“ディレクターに聞いてこよー”って独り言を言ったら、エンジニアさんが“まずはやりたいやつを作ってみませんか?”って言ってくれて」

■ナイスアシスト!

「スッと戻って(笑)。自分でやるとかやらないとか大した話じゃなく聞こえるかもしれないけど、歌は自分の仕事なので、その行く末を左右しかねないおおごとだったんです。方向性とか、強弱とか、いろいろ悩んだけど、そこですごく気に入ったものができて。歌入れの不安がもしかしたら解消されるかも!?と思ったら、パァーって目の前が開けた気がして。でもそれは今まで一緒にやってくれた人がいて、そのなかで自分が勉強して、今回、皆さんが信頼して一任してくれたからできたわけで。ありがとうございますって思ってます」

■ちなみに、そのパッと開けた曲って?

「“えらばれし子供たちの密話”ですね」

■歌とポエトリーの狭間を縫うような歌声がとても心地良かった。うん。この曲でパッと開けたというのは、次へ繋がる気がします。

「うんうんうん。あんまりなかった感じかも」

■まっ、アルバムではこの次に待っているのは「地獄タクシー」ですけどね(笑)。

「一応3つのゾーンに分かれてて。1曲目～3曲目が海のゾーン。4曲目～6曲目まではグラデーションになってるんですけど、子供ゾーン。そのあとに事件ゾーンがあったりして、最後なんだろう?　ちょっとわかんないけど。とにかく事件性がどんどん強くなっていくので、“地獄タクシー”までいったら地獄の歌を作ろうと思って。地獄と言えば、火鍋。かつ、日常に潜んでいるものという2つのイメージがあって。こう、伝統的なほうって言うんですか?(笑)　それなら麻婆の辛さで表わせるかな、なんて。だから“麻婆”はギリギリで作った曲ですね」

■地獄曲の2曲のヴォーカリゼーションは、前作のザ・プーチンズとのコラボで「クセを捨てて歌って」ってディレクションされて苦しんだあの反動か?!と思うほどにやりたい放題で。

「そうかも。“じゃじゃじゃ”の反動が“麻婆”にきてますね。だってこれ、クセしかないもん。あれも歌のクセを取る難しさでいえば地獄でしたから。フフフ。レコーディング地獄」

■個人的には「地獄タクシー」の“「え」”ってところがすごいツボです。

「あー、嬉しい。“地獄タクシー”はサウンドがすごくカッコよくなったから、滑稽さを入れたいなって思って。あれは気取った夫人がふと素になるみたいなところを表わしていて。台詞やダジャレは制作中ずっと考えてましたね」

■「地獄タクシー」の“選択肢”“いま行くし”“魂をたくし”は韻じゃなくてダジャレなんだ。

「まったくのダジャレです」

■さっきの地獄祭り。表現が横溝正史的な、江戸川乱歩的な、昭和方向へ行くのはなんなの?

「私、怖がりで、そういうのが全然見れないんです。江戸川乱歩も何回も読もうとしたんですけど、怖すぎて読めなくて。だから逆に憧れがあるのかもしれないですね。自分が見せられる側だと、影響されすぎちゃってお風呂に一人で入れなくなっちゃうけど、自分がやる側だったら、そう、同化することによって恐怖を越えていくっていう、『らんま1/2』の主人公が、猫が怖すぎて猫み



3rd Album
屋根裏獣
2017.03.15 Release
初回限定盤 CD+DVD ¥3,241(tax out)
通常盤 CD ¥2,778(tax out)

[CD]
01.ユートピア
02.人魚
03.カフェテリア
04.ねえ中学生
05.屋根裏
06.えらばれし子供たちの密話
07.地獄タクシー
08.麻婆
09.ぶらんこ乗り
10.一角獣

[DVD]
・「地獄タクシー」MV
・「吉澤嘉代子とうつくしい人たちツアー」よりライヴ映像3曲収録



02

Text ⇒ B-PASS
Photo ⇒ 薮内努(TAKIBI)

New Era®の[59FIFTY®]¥5,500(税別/ニューエラ tel:03-5773-6733)

ISSEI ⇒
小学生時代から逸材として注目を集めてきた日本屈指のブレイクダンサー。昨年の12月、世界最高峰の1on1ブレイクダンス・バトルトーナメント『Red Bull BC One World Final 2016』に出場し、日本人初の世界王者に輝いた。

Hit The Street w/New Era®
ISSEI

今回は、日本が誇るブレイクダンスの世界王者、ISSEIが登場！
弱冠19歳でB-BOYの頂点に立った彼が、自身のNew Era®観について語ってくれた!!

■ブレイクダンサーにとって、New Era®のキャップはどんな存在なんでしょうか?
「絶対に欠かせないアイテムですね。何しろブランドのイメージがHIP HOPと直結していますから(笑)。海外の大会でも多くのB-BOYがニューエラを被っていますね」
■実際にISSEIさんがNew Era®のキャップを被って踊ることはありますか?
「もちろん！　全然ありますよ。バトルや大会でもよく被っていますね」
■やはりメインは[59FIFTY®]ですか?
「いえ、僕の場合は動きも激しいんで、ストラップをキツく締めて踊るんです。なのでダンスの時は[9FIFTY™]や[9TWENTY™]で、今被っているような[59FIFTY®]は、プライベートの時に愛用しています」
■ダンサーの間では〈New Era®を被るとスイッチが入る!〉という方もいるとか?
「間違いないですね。やっぱりニューエラを被っているほうがカッコ良く踊れる気がするんですよ。シルエット的にも、集中力を上げるという意味でも。僕はめっちゃ深く被って踊ります」
■New Era®のアパレルも愛用されていると聞きましたが?
「そうなんですよ。アパレルもすごく良いですよね！　僕のチームでも[Coach Jacket]をお揃いで着ていますし、デザインもカッコ良くてお気に入りです」
■機能系素材が使われたウェアは試されましたか?
「実は『R16 Solo Battle Champion』の世界大会でシャツの下にニューエラのTシャツを着て出場したんですが、速乾性が高くて着心地も良かったですね。Tシャツに限らずどのアイテムも作りがしっかりしているんで、かなりB-BOY向きだと思います」

Spring & Summer 2017
ISSEI`s
Recommend Item

Bucket-01
¥4,600(税別/ニューエラ)



「実はニューエラのバケットハットも好きなんですよ。特にこの[Bucket-01]は自分が持っていないデザインなので一目惚れです！ ホントはダンスでも被りたいくらいですが、動きが激し過ぎると脱げちゃうかなぁ(笑)」

吟遊詩人“高橋 優”が、独自の切り口で世の中を考察するコーナー

高橋優連載

その殻割りを蹴っ飛ばせ。

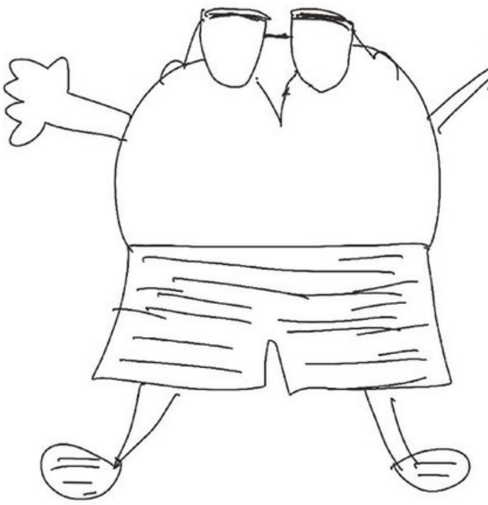


高橋優 >>>

たかはしゆう。'83 年 12 月 26 日秋田県生まれ。O 型。'10 年 7 月 21 日にシングル「素晴らしき日常」でメジャー・デビュー。ニッポン放送「オールナイトニッポンサタデースペシャル 大倉くんと高橋くん」が、毎週土 23 時 30 分～ O.A. 中 !! 現在、全国ホール＆アリーナツアーを開催中！ 4月 12 日にシングル「ロードムービー」を発売予定。公式サイト【http://www.takahashiyu.com/】

第百四回

【旅】



　こんにちは、また締め切りを過ぎてからこの原稿を提出している高橋優です。

　B-PASS編集者の方々には毎度のことご迷惑をおかけしております。…てへ♡…すみません。

　みなさんはいかがおすごしですか？

　バレンタインデーは楽しめましたでしょうか？

　僕にとってのバレンタインデーを一言で表現するなれば「社交辞令」という言葉がぴったり。社交タインデーでした。いつもスタッフの女性チームから一ついただくことを喜びつつも、そのことについてラジオ番組で〝個人的なマンツーマンのチョコはもらえないものか〟とボヤいたところ、それを聞いた心優しいスタッフが「このチョコは個人的にマンツーマンでさしあげます」とチョコを持参して来てくれました。その女性スタッフは現場の男性全員にマンツーマンのチョコとして行き渡るように手作りして持参してくれたのでした。…めっちゃ気い遣わせてるじゃん自分、と。ちょっと反省する結果となりました。女性スタッフに哀れみのチョコを手作りさせてしまっているうちは本命チョコなど夢のまた夢。手作りしてくれたスタッフには日頃の感謝を込めたチョコビを返そうかと思っています。チョコビ。…チョコビといえばクレヨンしんちゃん。

　映画クレヨンしんちゃんは今年で二十五周年。

　そんな二十五周年記念作品「クレヨンしんちゃん 襲来!! 宇宙人シリリ」の主題歌を担当させていただくことになりました。

　二十五年前の第一作目「アクション仮面vsハイグレ魔王」を当時八歳の高橋少年は熱狂しながら観ていたもんで、今回のお話をいただいたときは八歳の自分に負けず劣らずの熱狂っぷりでした。

　今回の映画の内容が、しんちゃんが日本を縦断するというお話だったことと、主題歌の製作期間がはからずも来し方行く末ツアーの最中だったこともあって、「旅」ということがテーマとなり、「ロードムービー」という楽曲を作りました。

　ゴール地点だけに価値があるのではなく、そこへ向かう過程にこそ人生の醍醐味が隠れているのではないか、ということが楽曲のテーマになりました。途中で経験する出会い、誰かと共に歩いた記憶、そしてこれからも続くであろう道のりを見据える今。たとえ周囲から見て遠回りに見えても、効率が悪いようであっても、そこでしか経験できないことがきっと人生の宝物になる。実はそんな思いで今回のツアーを回っていたので、自然と言葉が出てきてこの楽曲が産まれました。今なお、全国の皆さんに会えるその一回一回が人生の宝物と呼べる素晴らしい時間を経験させてもらいながら、各地を旅させてもらっています。

　そして来し方行く末ツアーは間もなく僕にとっての未体験ゾーン、横浜アリーナと大阪城ホールというアリーナ編に突入します。そのアリーナ編を経て、また次なる一歩を踏み出せるのだと信じています。今はツアー一本一本を噛みしめるように抱きしめるように大事に経験させてもらっているのですが、来たる4月のアリーナ編という名の未体験のトンネルも、一人ではなく関わってくださるみんなでくぐり抜けて次のステージへ行きたいと願っています。

　アリーナで、より楽しい時間を過ごせたらいいなと今色々企画も実は進めています。ワクワクが止まりません。歌を聴いてくれるみなさんと歩ませてもらえる僕のロードムービーはまだまだ続きます。

　四月は是非、劇場へクレヨンしんちゃんに会いに行きましょう。そして横浜アリーナもしくは大阪城ホールで高橋優と会っていただけたら、めちゃ嬉しいです。

2017年2月18日

クレヨンゆうちゃん

三色丼と紅しょうが

題字　岡田翔太朗

MAGIC OF LiFE 連載

【第九十三回】

俺の◎◎ part.1
高津戸・岡田 編

高津戸信幸「俺の映画」

僕は小説や映画を観て現実逃避をしています。最新の映画を映画館に行って観ることもありますが、レンタルで適当に選んで古い映画を観ることが多いですね。今回は最近観た映画の中で、素晴らしかった3作品を紹介しますね。







[チョコレートドーナツ]

まだ僕は、ラストを受け止められないままでいる。あまりに不公平な世の中で、「人とは」と考えさせられる作品でした。1970年代のニューヨークのブルックリンでゲイの男性が、育児放棄された障害児を育てたという実話に基づいたストーリーです。深い愛と、どうにもならない法との間で、真実の家族になろうと奮闘していきます。主演のアラン・カミングの演技が素晴らしいです。女性よりも女性らしく、大きく、深い演技でした。

[セッション]

とにかくラストが素晴らしい。終わり方がとてもお洒落な仕上がりになっています。名門音楽学校に進学し、世界に通用するジャズドラマーになろうと決意した青年が、鬼教師にもはやイジメに近い、狂気じみたスパルタ指導を受けるというストーリーですね。一見、スポ根に見られるこの映画、まったく違います。心理戦です。騙し合いですね。いいヤツひとりもいないです。ただ、ラストシーンに見せる青年の狂気なドラミング、鳥肌立ちますよ。

[バードマン]

謎多き映画でした。感想が人それぞれなんですよ。主演のマイケル・キートンの腐敗したイカれた演技がやばいです。人気の落ちた俳優がブロードウェイの舞台で復活しようと奮闘する中で、不運や精神的なダメージを負う姿がコミカルに描かれています。現実と幻想の狭間で追い込まれる様を描いたブラックコメディー。まるでワンカット撮影されたかのようなカメラワークが斬新ですよ。

岡田翔太朗「俺のワイン」



お酒はほどほどに

どうも、翔太朗です。僕は最近ワインが大好きなので、僕が好きなワインを3つご紹介させていただきます!　ワインは素晴らしいお店で飲むのが一番だと思います。値は張りますが、美味しいワインに出会う近道だと思います。どのワインも家で飲むと感動は半分くらいになります。それだけグラスのチョイスや保管方法や注ぎ方、温度管理などなどが大切なんですね!







[ヴォーヌ・ロマネ]

まずはこれ。僕の恋人。ブルゴーニュワインです。ロベール・シリュグという造り手の2013年ヴォーヌ・ロマネ。酸がしっかり出てて、気品溢れつつも親しみやすい味わい。下町育ちの天然美人さんな味わい。それなのに話してると落ち着く、みたいな。恋!?　ワインというジャンルが好きだと自覚して初めて好きになったワインがこれです。この造り手は他にもいくつかいただきましたが、どれも素晴らしかったです。

[コート・デュ・ローヌ]

お次はコート・デュ・ローヌという地方のワイン。白。E.ギガルという造り手のハイコスパなワインです。こちらはヴィオニエという品種が主体となっており、お花のような優しいアロマが漂います。新鮮な酸味が素敵なバランスです。夏の朝は起き抜けに、冷やしたこのワインをちょびっといただきたいですね。値段も割と手頃で、カクヤスさんでもたまに見かけます。僕ん家でも何度か購入してますが、そのたびに部屋がお花畑と化します。

[お好み焼ワイン]

最後は、お好み焼ワイン。その場の雰囲気だったり、一緒に飲む人だったりの大切さに気付かされます。きっとこのワインは高価なものではないでしょう。かのロバート・パーカーさんだって、きっと高得点を付けないでしょう。だけど、楽しく飲んだ記憶は変えられません。美味しい、という言葉の懐の深さに舌鼓を打つ日々です。調べたら、スペイン産で品種はテンプラニーリョ、メルロー、カベルネ・ソーヴィニヨン、という一度冷静に飲んでみたい1本でした。そして、何を隠そう私の実家はお好み焼き屋というオチで失礼します。

MAGIC OF LiFE ⇒ マジックオブライフ。高津戸信幸(Vo.&G.)、山下拓実(G.)、渡辺雄司(B.)、岡田翔太朗(Dr.)による4人組ロックバンド。'03年8月、DIRTY OLD MEN結成。'12年4月、現メンバー構成に。'14年10月、バンド名を改名。'16年9月7日にニュー・アルバム『X-1 A』をリリースした。3月に東名阪の対バンツアー、4月15日に栃フェス2017の開催が決定。

(タイトルの由来)高2の時、バンド結成にあわせ、「DIRTY OLD MEN」と最後まで争ったバンド名が「三色丼」。4ピースになったゆえに"紅しょうが"がトッピング?　バンド名が一新されて、ある意味シーズン3か!?

※当連載のカラー写真をB-PASSホームページ< http://www.shinko-music.co.jp/ >にちょこちょこ掲載中。アクセスしてみてね!

ことはやってみないとわからなかったです。ただ、普段なら絶対立ち会えない現場ではあるので、きつくても楽しかったですね。私がやっていた頃はテープからデータの媒体に移行するタイミングだったので、スタジオの作業期間も長くて規模が大きいレコーディングにつくことができたのはありがたかったです。作業が終わった後に、何事もないのが当たり前なのですが、ミュージシャンやクライアントから「あなたがいたからうまくいった」と言ってもらえたり、チームの一員として見てもらえたのが嬉しかったです。現在の管理部としては、事務作業がメインで、掃除、スタジオのブッキング、経理、一般でいう総務的なことなどレコーディングの現場以外のことを上司と二人体制で見ています。ブッキングの料金だったりアシスタントやエンジニアの采配だったり、知らない部分を知ったことで私が現場にいたときはさぞ大変だったろうなと思いました（笑）。制作サイドとやりとりをしていると現場の事情だけではどうにもできないこともあります。現場の気持ちがわかるだけにスケジュールが大変になってしまったりするのが申し訳なかったりもするので、できるだけ意見が偏らないようにやっていきたいと思っています。私がアシスタントエンジニアとしてやっていた時代とは作業行程などが大きく変わっているので、現場の子たちにはできるだけヒアリングして状況を聞いたりしています。基本的な1日の仕事内容は、出社すると掃除をしてからスケジュール確認、ブッキングの連絡を受けたり、明細や請求書の作成、スタジオに来たお客様の応対です。業界的に時間が不規則だったり拘束時間が長かったりなど、子育てをしながらは難しいのですが、社長がこれからエンジニアは女性も増えるし、その人たちが出産しても戻って来れる前例を作りたいと言ってくださり、みんなの理解と協力に応えたいと仕事をしています。なかなか実感することはないのですが、身近な人が聴いてる音楽が自分のスタジオで録音したものだったりすると、手伝えていることに嬉しさを感じますね。

Q：目指す人にアドバイスを！

音楽の仕事をやってみたいけど、できるか不安な思いがあるのであれば、実際に入ってみるといろんな仕事があることも知れますし、女性で仕事はしたいけど結婚出産もしたいと思っている人も強い思いと環境があれば何かしらの形で続けていけると思います。今のスタジオも元エンジニアで別の仕事をしている人も多いです。ただ、受け身でいても何も始まらないので、チャンスはどんどん掴むためにも飛び込んでみてください。情熱がないと続けていけないと思うので、人間らしい生活は確保しつつ、音楽に携わりたいという気持ちが大事だと思います。学校で得た知識のほかに、技術は現場で吸収していって、スタジオはサービス業でもあるので、必要なコミュニケーション能力を得るにはたくさん人と関わって、いろんな経験をしてください。人間力を高めてもらうと活きる仕事だと思います。

DREAM-PASS

スタジオで働くには

・なんでも飛び込んでみる
・音楽への情熱を持ち続ける
・人間力を高める

MUST ITEM



PC
会社のPCも使いつつ、
経理用もあるので
用途違いで
3台使っています



スマホ
連絡用で、ないと
何もできないです



マイタンブラー
コーヒーを常に飲んで作業しています

憧れの音楽業界への近道教えます！

DREAM-PASS ドリパス！ vol.46



音楽業界に興味はあってもどんな仕事があるの？　どうやってなればいいの？
そんな疑問にお答えする連載第46回目！　Studio A-toneなどレコーディングスタジオの管理部で働く菅野さん、一体どのようなお仕事なのでしょうか？

菅野侑希さん
株式会社フリーマーケット　管理部

尚美ミュージックカレッジ専門学校
音響・映像学科　レコーディング専攻 卒

Q：この仕事を始めるきっかけは？

中学生くらいのときに漠然と音楽の仕事をしたいなと思い始めて、その時点でやるなら裏方だと決めていました。高校生のときに希望の進路に就くためにはという手順を調べて提出する授業があり、そのときに少し面倒だなと思って（笑）。先生のわからない職業なら深く突っ込まれないかもと、音楽方面で探して一番よくわからない感じだったのがレコーディングエンジニアでした。それをきっかけに興味が出てきて、CDのクレジットを気にするようになり、籠って作り上げる仕事に憧れを抱いてレコーディングがやりたいと専門学校を探して決めました。専門学校では、ギリギリ譜面は読めるくらいで楽器ができなかったのでそれがコンプレックスになったり、電気や数字など理系の作業が苦手だから向いてないかもと思うこともありました。でも、実際に現場に出てみるとコミュニケーションがかなり重要だったので、そこに関しては自信があったのでうまくいったところがあると思います。とにかくやる気だけはあったので経験を積もうとレコーディングスタジオのアルバイトを掛け持ちしたりしていました。１年生の途中、学校で行なっていた短期研修で現在勤めているスタジオの前身のスタジオに行くことになり、その後スタジオから声をかけてもらい何度か行くうちにそのままアルバイトとして働いて、就職しました。その後アシスタントをしつつエンジニアの勉強をしているときに結婚しまして、出産をきっかけに今の管理部に移りました。本当は退職しようと思っていたのですが、先輩や社長が戻りたかったら技術に戻っても良いといってくださったので現在に至ります。



JOB PHOTO

◀普段はここで事務作業を主に行なっています

Q：詳しいお仕事内容を教えてください。

レコーディングエンジニアはお客様と一緒にスタジオに入るようになると現場の人と見なされて、バイトも研修も関係ないのでスタジオの印象を悪くしないよう挨拶に気をつけたりしていました。どれだけハードな仕事かという

アルバムが充実の
2月〜3月の新譜紹介

02.22 on sale | album | **SHINee** FIVE

EMI Records／初回盤A BD付 ¥4,980／初回盤B DVD付 ¥4,700／通常盤 ¥3,000



自分たちが鳴らしたい音楽性としっかり対峙したであろう今作は、グルーヴィで妖艶な楽曲が並ぶ。これまでのカラフルでポップなイメージとはまた異なる、アダルトな1枚だ。歌詞はすべて物語性のある、緻密な世界観がより探求心をくすぐるドラマティックな仕上がりに。今後、彼らが目指すネクストステージの扉が開くことを確認できる、ワクワクする全12曲。血液型占いを題材にした03.のようなコミカルな歌詞も面白い。（吉田）

[CD]01.Gentleman 02.Mr. Right Guy 03.ABOAB 04.君のせいで 05.Do Me Right 06.Become Undone 07.Get The Treasure 08.1 of 1(Japanese Ver.) 09.Nothing To Lose 10.Melody 11.Winter Wonderland 12.Diamond Sky [BD・DVD]Music Video 他

02.22 on sale | album | **AAA** WAY OF GLORY



avex trax／CD+DVD+GOODS ¥5,000／CD+DVD ¥4,000／CD ¥3,100

伊藤千晃の卒業を控え、現メンバーではラストとなるアルバム。とはいえ、今後の彼らの指針ともいえるべき、ポジティブで勇気溢れるポップチューンで幕をあける今作は、全体的に光が差す構成に。新生活が始まるこの季節にピッタリの、背中をそっと押してくれるようなメッセージソングが目立つ。04.ではハッピーなオーラにまとった、愛らしいMisaChia（宇野実沙子と伊藤千晃）の新曲も聴ける。今作のなかで異色となった、ホーンが怪しく響き渡る09.とのギャップを楽しんで。（吉田）

[CD]01.WAY OF GLORY 02.NEW 03.S.O.L 04.Jewel by MisaChia 06.Interlude 07.LEAP of FAITH 08.Dangerous Gamble by Takahiro Nishijima & Shinjiro Atae 09.MAGIC 10.涙のない世界 11.ココア by MisaChia 12.Yell 13.Calling 他 全13曲 [DVD]Music Clip 他

02.22 on sale | album | **Goose house** HEPTAGON

gr8! records／初回盤 DVD付 ¥2,778／通常盤 ¥2,500



オリンピック選手も大企業の社長さんもその人なりの等身大を持っている。でもそれは私たちの等身大とは少し違う。あえて"私たち"と言ったのは、キャリアも性格も異なる7人が、今作に『HEPTAGON』と名付けたのときっと同じ理由。7つの声で描かれる10個の物語。登場人物は些細なことで喜んだり躓いたりしながら、特別じゃない自分だけの人生を生きる。そしてその愛の歌は私たちの人生にそっと寄り添ってくれる。（山本）

[CD]01.僕らだけの等身大 02.Fly High, So High 03.You 04.恋と雨 05.MUSIC〜涙の虹〜 06.ALL MY LOVE 07.君に拍手を 08.悪い王様のお話 09.あの日の歌 10.LOVE & LIFE [DVD]Music Video

02.22 on sale | album | **アンティック-珈琲店-** ラフ・ソング

White Cafe／初回盤DVD付 ¥4,445／通常盤 ¥2,593



長いキャリアのなかで環境や時代に刺激を受けつつ、変わり続けることを厭わないアンティック-珈琲店-。そんな彼らの革新と挑戦が詰まったメジャー1stアルバムが完成。キャッチーなメロディと疾走感溢れるビートがJ-ROCKの王道を感じさせる01.などのシングル4曲と、往年のディスコ風ナンバーやアコギ主体の優しいミディアムなど、オリジナリティに富んだ新曲がふんだん。もちろん、ポップで踊れる"アンカフェ節"も健在!（須田）

[CD]01.千年DIVE!!!!! 02.JIBUN 03.Spring Snow 04.JUMBO 05.涙より重いWAR 06.似た者同士 07.恋するサンタクロース 08.生きるための3秒ルール 09.熱くなれ 10.ラフ・ソング ※初回盤は全12曲 [DVD]LIVE CAFE 2016「ココロディスコ」他

02.22 on sale | album | **POLYSICS** Replay!

Ki/oon Music／初回盤DVD付 ¥3,000／通常盤 ¥2,500



祝・結成20周年! アニバーサリーアイテムとしてリリースされる本作は、ライヴの定番ナンバーをリテイクして編纂したベスト盤。また、いまだ衰えることを知らない超絶ハイテンションなライヴ音源や、初回盤付属DVDには過去のライヴ映像を大量に収録しているが、ブリッブリに荒ぶるベースと野性味溢れるパーカッションが絡み合い、バリッバリの求心力を放つキャッチーさにあふれた新曲01.は、新アンセム確定の出来栄え!（山口）

[CD]01.Tune Up! 02.シーラカンス イズ アンドロイド 2017 03.Young OH! OH! 2017 04.Shout Aloud! 2017 05.Urge On!! 2017 06.Electric Surfin' Go Go 2017 07.Digital Coffee 2017 08.Rocket 2017 09.カジャカジャグー 2017 他 全12曲 [DVD]Replay! Live Side DVD

03.01 on sale | album | **HY** CHANCE

UNIVERSAL J／初回盤2CD+DVD ¥3,800／通常盤 ¥2,300



沖縄を拠点に活動を続けて16年、HYは沖縄で生活する中で感じる想いを大切に歌を紡いできた。空を映す碧い海やガジュマルの木々を揺らす風の匂い、色鮮やかな赤花や夜空に広がる星屑の瞬き。五感で受け取る自然の中に、その時々の気持ちを重ねながら歌われる曲は健在。そんなHYらしい明るく開けた曲と同時に、05.ではより踏み込んだ大人の恋愛観を歌う。人としてバンドとしての成長が伺える作品だ。（伊藤）

[CD]01.HAPPY 02.BLUE 03.バタフライ 04.ロックスター 05.あの日のまま 06.光 07.ありがとう 08.君の声 09.三月の陽炎 10.CHANCE [DVD]Music Video 他

03.01 on sale | album | **EXILE THE SECOND** BORN TO BE WILD

rhythm zone／CD+3DVD ¥6,980／CD+DVD ¥3,980／CD ¥2,800 他 全5形態



嫌なことは忘れてハッピーでディープな世界へと導いてくれるパーティーチューンのみならず、ワイルドでセクシーな世界にも誘うEXILE THE SECOND待望の2ndアルバム。シングル3部作収録の全曲と最新シングル01、新曲8曲を収めた14曲。中でも綺麗事の壁をぶっ壊して道なき道を駆け抜けろ!と歌うヘヴィなロック曲03.のワイルドな世界、大人の恋愛を描いたSHOKICHI作詞のセクシーなラブバラード07.は絶品。（伊藤）

[CD]01.SUPER FLY 02.YEAH!! YEAH!! YEAH!! 03.Break It Down 05.Shut up!! Shut up!! Shut up!! 06.Dirty Secret Remix feat. AKLO 07.Shelly 09.Going Crazy 10.Beautiful Angel 12.RAY 13.Step into my party 14.WILD WILD WILD 他 全14曲 [DVD]ライヴ、Music Video 他

※価格はすべて税抜き価格で表示しています

03.01 on sale | album | BOOM BOOM SATELLITES
19972016

gr8! records／初回盤4CD+BD ¥6,667／通常盤A 2CD ¥3,333／通常盤B 2CD ¥3,333



中野雅之自らがマスタリングまで行なったオールタイムベストは、初回盤4枚組CDのDISC.1、2が、過去に発表した『19972007』のリマスター盤、DISC3、4は2008年から活動終了までの楽曲を収録。躍動的なダンスビートと爆発力のあるロックサウンドを融合して衝撃を与えた初期から、メロディアスな方向へ舵を切り、闇の中で圧倒的な光を描いた後期へと繋がる彼らの変遷を堪能できる1枚。この先もずっと聴き続けます。（山口）

[Disc1]01.KICK IT OUT 他 全15曲 [Disc2]01.EASY ACTION 他 全15曲 [Disc3]01.LAY YOUR HANDS ON ME 他 全13曲 [Disc4]01.BACK ON MY FEET 13.NARCOSIS 他 全13曲 [BD]LIVE AND DOCUMENT ※通常盤Aは[Disc1][Disc2]、通常盤Bは[Disc3][Disc4]

03.01 on sale | album | 電気グルーヴ
TROPICAL LOVE

Ki/oon Music／限定盤グッズ+映像コード付 ¥4,600／初回盤DVD付 ¥3,600／通常盤 ¥2,913／2枚組LP ¥3,800



ドキュメント映画『DENKI GROOVE THE MOVIE?～石野卓球とピエール瀧～』で自らのキャリアを振り返った効果か、電気グルーヴの特異性がきわめてクリアに表現された4年ぶりの新作。徹底的に洗練されたテクノミュージックとナンセンスの極北と称すべきリリックが当たり前のように融合し、意味とか意義を軽々と超えて、ただただ気持ちいい、そして頭おかしい。いろいろと悩んでるのがバカバカしくなる超傑作である。（森）

[CD]01.人間大統領/Ningen President 02.東京チンギスハーン/Tokyo Genghis Khan 03.顔変わっちゃってる。/Kao Kawacchatteru. 04.プエルトリコのひとりっ子/Puerto Rico no HITorIKKO 08.トロピカル・ラヴ/TROPICAL LOVE 10.いつもそばにいるよ/Stand by You 他 全10曲 [DVD]ライヴ

03.08 on sale | album | 雨のパレード
Change your pops

SPEEDSTAR RECORDS／初回盤DVD付 ¥3,500／通常盤 ¥2,800



『Change your pops』というタイトルからもわかるように、前作『New generation』に比べると福永浩平（Vo.）の歌詞の強さが際立っている。"リスナーの支えになる曲を書きたい"という思いを込めたシングル「YOU」をはじめ、彼自身の希望、葛藤、怒りなどが生々しく反映されているのだ。一方、最新鋭のダブステップ、エレクトロハウスなどを取り入れたサウンドもさらに進化。この絶妙なバランス感覚こそが、彼らの魅力だろう。（森）

[CD]01.Change your mind 02.free 03.stage 04.Count me out 05.Take my hand 06.perspective（Interlude） 07.You 08.feel 09.Hey Boy, 10.intuition（Interlude） 11.寝顔 12.1969 13.speech（Interlude） 14.morning [DVD]Music Video 他

03.01 on sale | album | KEMURI
FREEDOMOSH

ONECIRCLE／CD+DVD ¥4,600／CD ¥3,000



90年代からスカパンク・シーンをリードしてきた熱い男たちが、今もポジティブなメッセージを掲げ前進し続けていることに大きなリスペクトを。良い意味で年輪を感じさせない陽性のパンクサウンドと賑やかなホーンが全編を貫き、伊藤ふみおの包容力溢れるしなやかな歌声も不変。アコギを生かした05.など、大人の余裕を感じるアイデアも盛り込み、一気に聴き終えたあとの爽快感がたまらない。若い世代にこそ届いてほしい。（宮本）

[CD]01.THUMBS UP! 02.GO! GO! GO! GO! GLOW! 03.CHOCOLATE 04.DIAMOND 05.My Best Friend 06.SAKURA 07.AWE 08.SPIRAL 09.Dancing in MOON LIGHT 10.RAINDROP 11.SHOUT 12.サラバ アタエラレン [DVD]ライヴ、MV

03.08 on sale | album | 東京スカパラダイスオーケストラ
Paradise Has NO BORDER

cutting edge／CD+BD ¥4,800／CD+2DVD ¥4,200／CD ¥3,000



スカパラの音楽は何があっても揺るがない強さがある。これまで奥田民生やMONGOL800をはじめ多くのコラボを行なってきたが、コラボ相手の個性を最大限に採り込みながらも、そこには確かなスカパラサウンドが存在する。通算20作目になる本作では、Ken Yokoyamaやクリープハイプ尾崎、片平里菜、10-FEETのTAKUMA、CMで共演したさかなクンとのコラボ曲などを収録。揺るがない核を再確認できる作品である。（伊藤）

[CD]03.爆音ラヴソング feat.尾崎世界観（クリープハイプ） 06.嘘をつく唇 feat.片平里菜 07.Samurai Dreamers <サビレルナ和ヨ> feat.TAKUMA（10-FEET） 08.Paradise Has No Border feat.さかなクン 09.道なき道、反骨の。feat.Ken Yokoyama 13.Prism 他 全14曲 [BD・DVD]Video Clip 他

03.08 on sale | album | the GazettE
TRACES VOL.2

Sony Music Records／初回盤 ¥3,611／通常盤 ¥3,056



結成15周年を迎える5人組ロックバンドのバラードベスト。全曲再録。一般的には烈しくヘヴィなバンドというイメージが強いかもしれないが、本作を聴けば、一方で心の琴線に触れる美しいメロディ主体の楽曲を数多く作ってきたことがわかる。全編に漂う哀愁や憂いも彼ららしさで、V系云々はさておき、まずはご一聴を。進化が顕著な初期曲「絲」、英詞部分が日本語に変化した「体温」を追加収録する初回盤がお薦めだ。（早川）

01.枯詩 02.Cassis 03.D.L.N 04.CALM ENVY 05.reila 06.UNTITLED 07.WITHOUT A TRACE 08.紅蓮 09.白き優鬱 10.PLEDGE 11.絲 12.体温 ※11.12.は初回盤のみ

03.08 on sale | album | シナリオアート
Faction World

Ki/oon Music／初回盤DVD付 ¥3,700／通常盤 ¥2,913



華やかなパレード感に溢れたシングル曲「エポックパレード」を含む2ndアルバム。トロピカルハウスとスカが混ざり合ったサウンドとともに"絶望を抱えたまま旅に出ようぜ"と呼びかける01、妄想とリアルを行き来しながら好きな人との出会いを夢見る05.など、日常におけるトリップを体感できる楽曲が並ぶ。きついことばかりだけど、どうせ生きなくちゃいけないなら、できるだけ楽しく。そんな意志が伝わる前向きな作品だ。（森）

[CD]01.ジャーニー 02.サンライトハーモニー 03.パペットダンス 04.ジンギスカンフー 05.ビューティフルパーティー 06.コールドプラネット 07.ランキーファンキー 08.イージーオーマツリ 09.ナナヒツジ（Album Mix） 10.ラブマゲドン 11.エポックパレード [DVD]ライヴ

03.08 on sale | album | NakamuraEmi
NIPPONNO ONNAWO UTAU Vol.4

NIPPON COLUMBIA／CD ¥2,700／LP ¥4,000



幼少期から現在に至るまでの自分の姿を描いたヒップホップチューン01.で始まるメジャー2ndアルバム。八方美人だった頃の自分を振り返った03、ハワイへの一人旅を描写した06、家族への思いをナチュラルに綴った07。リアルな体験から生まれたリリック、ジャズ、R&Bなどのオーガニックなサウンドからは、彼女の人間性と音楽性がまっすぐに伝わってくる。心地よいグルーヴの中でしっかりと言葉が響かせるヴォーカルも絶品。（森）

01.Rebirth 02.大人の言うことを聞け 03.晴人 04.ボブ・ディラン 05.ヒマワリが咲く予定 06.ハワイと日本 07.めしあがれ 08.メジャーデビュー

03.08 on sale | album

ベリーグッドマン
Spring Spring Spring

UNIVERSAL J／初回盤DVD付 ¥2,500／通常盤 ¥1,621



春をテーマにした初のコンセプトアルバム。優しい言葉をかけてもらった時のこみ上げる感情、ハグをされた時の安心感、歌が自分の経験に触れた瞬間に溢れ出る涙の苦さ……ベリグの曲が聴く人の心に響くのは、そんないろんな感情を彼ら自身が経験して知っているからなのだろう。君と出逢って始まった恋のドキドキを歌う02、春の訪れと別れを描いた卒業ソング03、母への感謝を歌った04.など全7曲。どの曲もグッとくる。（伊藤）

[CD]01.イントロ 02.はじまりの恋 03.さくら 04.おかん～yet～ 05.エキスパンダー 06.ライトスタンド feat.大阪桐蔭高等学校吹奏楽部 07.My Baby [DVD]ベリー・アコースティック・ライブ Vol.1

03.08 on sale | mini album

Ivy to Fraudulent Game
継ぐ

SPACE SHOWER MUSIC／初回盤DVD付 ¥2,407／通常盤 ¥1,574



約1年振りのミニアルバムが到着。音響系の影響が色濃く表われた01.や05、ギラついたギターリフとバンドアンサンブルが唸りをあげる03、跳ねあがるハチロクのリズムと柔らかな歌声が心地よく胸に響く04、そして、ピアノの音色と無機質なシーケンスが鳴る内省的な世界から一転、シューゲイズな轟音で光を描く07.など、注目を集めた前作から表現力が格段にアップ。間違いなく、さらに圧倒的な支持を獲得する1枚。（山口）

[CD]01.Utopia 02.Dear Fate, 03.E.G.B.A. 04.! 05.揺れる 06.徒労 07.夢想家 [DVD]ライヴ

03.15 on sale | album

w-inds.
INVISIBLE

PONY CANYON／初回盤A 2CD+BD ¥4,630／初回盤B DVD付 ¥3,565／通常盤 ¥2,778



「最近、w-inds.の楽曲がアツイ」という呟きをSNS界隈でよく見かける。それもそのはず。彼らがこの数年で見せてきた明らかな成長と、他の追随を許さない追求した、ストイックすぎるダンスミュージックは目を見張るものがある。アーシーなミディアムチューンから、洗練されたEDM、HIP HOPテイストを盛り込んだエモーショナルなダンスナンバーなど、コアな音楽ファンが聴いても唸る、何度も聴き返したくなる1枚。（吉田）

[CD]01.Boom Word Up 03.Complicated 04.We Don't Need To Talk Anymore 05.CAMOUFLAGE 06.Backstage 07.Separate Way 08.ORIGINAL LOVE 09.In your warmth 10.wind wind blow 12.Players 他 全13曲 [BD・DVD]Music Video 他 [CD2]Remix

03.15 on sale | album

YUKI
まばたき

Epic Records Japan／初回盤2CD+DVD ¥5,200／通常盤CD ¥3,000



YUKIの最大の魅力であるポップチューンをぎゅっと詰め込んだニュー・アルバム。鍵盤の上を軽やかに跳ねながら歌うようなYUKIの声は、無邪気で、可愛くて、でもどこかたくらんでいるようなイタズラさを持つ。そんな年々純度を上げていく彼女の歌声を想定し、様々なクリエイターが楽しみながら作ったであろう楽曲たちは、驚くほど直球で、聴いていてとても心地いい。抽象的ながらも共感しやすい歌詞は、今作でも冴えている。（吉田）

[CD1]01.暴れたがっている 02.さよならバイスタンダー 03.こんにちはニューワールド 04.無敵 05.名も無い小さい花 06.レディ・エレクトリック 07.私は誰だ 09.ポストに声を投げ入れて 10.バスガール 12.聞き間違い 13.トワイライト 他 全13曲 [CD2]YUKI LIVE "commune of ten" [DVD]ライヴ

03.15 on sale | album

大森靖子
kitixxxgaia

avex trax／ドグマ盤BD付 ¥5,800／ガイア盤2CD+DVD ¥4,500／マグマ盤CD ¥3,000



小室哲哉、の子、DAOKOなどが参加したニュー・アルバム。本作で彼女がやろうとしているのは、ひとりの人間が複数の神を持ち（みんなすぐに"あの人、マジ神だよね"とか言いますよね?）、孤独に存在している社会を冷静に見つめつつ、"それぞれの個性を大事しながら、何かを共有する方法はないだろうか?"という提案だろう。アイドル、バンドなどのカルチャーだけではなく、現代社会を映し出すメディア機能を持った異色作だ。（森）

[CD]01.ドグマ・マグマ feat.fox capture plan 02.非国民的ヒーロー feat.の子（神聖かまってちゃん） 06.地球最後のふたり feat.DAOKO 07.ピンクメトセラ 10.オリオン座 13.アナログシンコペーション 他 全13曲 ※ドグマ、ガイアは全14曲 [CD2]ライヴ音源 [BD]ライヴ [DVD]Music Video 他

03.15 on sale | album

KEYTALK
PARADISE

Getting Better Records／初回A・B 盤DVD付 ¥3,800／通常盤 ¥2,900



義勝7曲、巨匠4曲、武正と八木が3曲。最強ソングライター集団へと成長した4人が放つ4thアルバムは、持ち味のお祭りダンスロックを極めつつ、ポップとヘヴィの両面に大きく羽を広げた。最新シングル02.など万人向けのキャッチーなメロディに磨きをかける義勝を中心に、ひねくれファンク08.の武正、狂騒的ハードコア09.の八木、熱い応援歌17.がばっちりハマる巨匠と、個性の暴走は誰にも止められず。聴き惚れるのみ。（宮本）

[CD]01.Summer Venus 02.ASTRO 03.ダウンロードディスコ 04.MATSURI BAYASHI 05.パラサイト 07.秘密 08.森羅万象 09.HOROBIRO 10.Love me 11.STAY 12.Combat Song 14.story 16.スターリングスター 17.Oh!En!Ka! 他 全17曲 [DVD A]ライヴ [DVD B]ドキュメント

03.15 on sale | mini album

LACCO TOWER
薔薇色ノ怪人

TRIAD/NIPPON COLUMBIA／¥2,000



独自の演劇性と歌謡性を取り込み、湿度の高い文学的なロック観を提示する孤高のバンド。メジャー3年目のミニアルバムは、薔薇の持つ多様性に感情と意味をあてはめた、ドラマチックなコンセプト作だ。ピアノとアコースティック・ギターの静かなイントロからバンドサウンドへと劇的に変化する03、04.など、暗く謎めいた恋を歌う歌詞と、ハードにうねるサウンドとの連携は見事の一言。独特の声と歌い回しが、聴くほどに癖になる。（宮本）

01.怪人一面相（かいじんいちめんそう） 02.悪人（あくにん） 03.桜桃（さくらんぼ） 04.楓（かえで） 05.折紙（おりがみ） 06.時計仕掛（Re -Recording）（とけいじかけ）

03.15 on sale | album

吉澤嘉代子
屋根怪獣

e-stretch RECORDS／初回盤DVD付 ¥3,241／通常盤 ¥2,778



海の底から地獄の底まで、底に辿り着くほどに開かれる未来への扉。短編小説（映画じゃないところがキモ）を読み進めるかのように曲が展開し、目眩く物語の奇想天外な主人公たちに心奪われる。隅々まで意識の行き届いた美しい詞曲といい、自在に表情を変えるヴォーカリゼーションといい、鮮やか極まりないサウンドアプローチといい、緻密に練こまれた1曲1曲に潜むダジャレと本音といい。吉澤嘉代子の真骨頂がここに。（山本）

[CD]01.ユートピア 02.人魚 03.カフェテリア 04.ねえ中学生 05.屋根裏 06.えらばれし子供たちの密話 07.地獄タクシー 08.麻婆 09.ぶらんこ乗り 10.一角獣 [DVD]Music Video、ライヴ

03.22 on sale | album | BIGMAMA
Fabula Fibula

RX-RECORDS/UK.PROJECT／初回盤DVD付 ¥4,800／通常盤 ¥2,800



結成10周年の幕開けを飾る7作目は、金井の真骨頂である物語性豊かな世界観を打ち出した、ドラマチックなロック・アルバム。1曲ごとに街のイメージを設定する凝った作りで、02.や07.などポップ度の高いタイアップ曲に、ヘヴィな01、緊張感漂るロック・チューン05、メランコリックなバラード10.を配し、14曲を飽きさせず聴かせる。語り部としての歌の表情も、これまで以上に繊細に響く。バンドのスケール感がまた一つ上がった。（宮本）

[CD]01.ファビュラ・フィビュラ 02.MUTOPIA 03.ヒーローインタビュー 05.BLINKSTONEの真実を 06.Merry-Go-Round 07.Weekend Magic 08.Heartbreak Holiday 10.レインコートになれたなら 12.SPOON DIVING 13.SPECIALS（FFver） 14.愛はハリネズミのように 他 全14曲 [DVD]ライヴ

03.22 on sale | album | 三浦大知
HIT

SONIC GROOVE／CD+BD ¥4,300／CD+DVD ¥3,900／CD ¥3,100



「(RE)PLAY」のヒットにより、ネクストステージに踏み込んだ三浦大知。ニュー・アルバムは、世界中の流行のサウンドをいち早く取り入れた、聴く人を驚かせる壮大な1枚に。SOIL&"PINP" SESSIONSとコラボした08.は、生楽器と打ち込みを見事に融合させ、民族的なアプローチで新境地を開拓。10.では美しいバラードを歌い上げ、その多面性を惜しげもなく披露。表現者としてより才能を発揮した感服の仕上がりに。（吉田）

[CD]01.Darkest Before Dawn 02.EXCITE 03.(RE)PLAY 04.Neon Dive 05.Body Kills 06.Darkroom 07.Can't Stop Won't Stop Loving You 08.Rise Up feat.SOIL&"PIMP"SESSIONS 09.誰もがダンサー 10.Star 11.Cry&Fight 12.Hang In There [BD・DVD]Music Video 他

02.22 on sale | single | 中島美嘉
恋をする

Sony Music Associated Records／初回盤DVD付 ¥1,500／通常盤 ¥1,165



春風が吹くような爽やかなサウンドの中で歌われる中島の歌声が、とても軽やかでキラキラしたニュー・シングル。バラードでの哀愁に満ちた彼女とは、真逆の笑顔が見えてくる歌声が新鮮だ。恋に不器用だった女性が、素直な自分を見せられるあなたと出逢ってどんどん惹かれていく、恋する女性を描いた歌詞も実にハッピーで、新たな彼女の魅力を表現した曲になった。3/22にリリースされるニュー・アルバムが楽しみになる曲。（伊藤）

[CD]01.恋をする 02.Foolish 03.恋をする<instrumental> [DVD]Music Video

02.22 on sale | single | RADWIMPS
君の名は。English edition

EMI Records／¥1,300



映画『君の名は。』の北米公開に際して誕生した英語詞バージョン。「Dream lantern」の儚いまでの瑞々しさ、「Zenzenzense」ではあのフレーズがこんなことに!? どれも始めからこのカタチで存在していたかのような説得力。そもそも日本語と英語が温度差なく混在するRADWIMPSが音楽を担当したこと、映画の大ヒット、全世界に広がる劇場公開は全部偶然じゃない気がするよ。（山本）

01.Dream lantern (English ver.) 02.Zenzenzense (English ver.) 03.Sparkle (English ver.) 04.Nandemonaiya (English ver.)

02.22 on sale | single | 堂珍嘉邦
BIRDY

Kino Music／限定盤ライヴチケット付 ¥6,481／通常盤 ¥1,389



ソロ活動後は、映画やミュージカルなど、ヴォーカリストのみならず活動の幅を広げる堂珍の通算8枚目のシングル。一定のリズムが刻まれるトラックに、徐々に音が重なっていくドラマチックな曲構成と、その中で歌う彼の伸びやかな歌声を聴きながら、いつしかミュージカルの舞台を想像していた。決して声を張り上げているわけではないが、歌詞が届いてくる。輝く未来へと羽ばたけ。握りしめた未来に歌うよ。感動的な曲だ。（伊藤）

01.BIRDY 02.How I love you so 03.#1999

02.22 on sale | single | THE BACK HORN
あなたが待ってる

SPEEDSTAR RECORDS／初回盤DVD付 ¥1,400／通常盤 ¥1,000



01.では、宇多田ヒカルが共同プロデュースに参加。あっと驚くニュースだが、音に大げさな表情がないのは、歌詞を合作し、ピアノと弦のアレンジを手がけ、コーラスに参加した彼女が、あまりに自然に溶け込んでいるから。素朴な愛の感情をまっすぐに伝える言葉と、包容力溢れる演奏に胸が熱くなる。カップリング02.はまるで表情の異なるロック・チューンだが、人を愛するメッセージ性は同じ。バンドの新たな決意を鮮やかに示す1枚。（宮本）

[CD]01.あなたが待ってる 02.始まりの歌 [DVD]Music Video

03.01 on sale | single | 平井堅
僕の心をつくってよ

Ariola Japan／初回盤DVD付 ¥1,500／通常盤 ¥1,130／期間限定盤 ¥926



平井が手がける初のアニメソングは、映画『ドラえもん のび太の南極カチコチ大冒険』の主題歌。"傷つく一緒と 傷つかないひとり 君となら傷ついてもいいかな"といった平井らしい表現で、ドラえもんとのび太の強い絆を描いたバラード。ほぼピアノのアルペジオベースのシンプルな演奏とともに、優しい視線で歌いかける歌声が印象に残る。聴くたびに優しい気持ちになれる曲である。02.はユーミンへのリスペクトソング。（伊藤）

[CD]01.僕の心をつくってよ 02.僕の心をつくってよ(less vocal) [通常盤CD]01.僕の心をつくってよ 02.YUMING 03.ほっ [DVD]KEN HIRAI TV Vol.6「KEN PLAY BACK 2016」

02.22 on sale | single | Blu-BiLLioN
響心identity

Resistar Records／初回盤A・B ¥1,800／通常盤 ¥1,500



Blu-BiLLioNが掲げるテーマ"Sing×Dance×Rock"は彼らのライヴを端的に表わす3要素とも言える。そんな3要素を軸にした本作は、ミケの熱い歌と豪快なバンドサウンドがロックし、聴く人を踊らせるナンバー。"YES/NOハッキリ意思表示しよう"というメッセージも刺さる。想像力を刺激する02、祭り的盛り上がりが目に浮かぶ03.と、どれも早く生で体感したくなる曲ばかり。ライヴへの招待状のような心躍る1枚。（赤木）

[CD]01.響心identity 02.PM7:00 03.響心identity（カラオケ） [通常盤CD]03.Mr.Frrdom 他全4曲 [DVD A]Music Clip [DVD B]オフショット

03.01 on sale | single | RIZE SILVER

Epic Records Japan／通常盤 ¥1,296／期間限定盤 ¥1,296



この数年、配信リリースを続けていたRIZEが、結成20周年イヤーに古巣レコードレーベルよりCDシングルを発表。その01.は、KenKenがファンだというTVアニメ『銀魂.』のエンディングテーマだ。バッキバキのスラップベースから始まる曲は、この3人でなければ出せないゴキゲンなリフが高揚感を煽る。そこに描かれているのは、魂が折れぬ様、気高く闘い生きる者の姿。変わらないもの、守るものを持つ、真っ直ぐな一人の人間だ。（大西）

01.SILVER 02.ONE SHOT（EP edition） 03.日本刀（STUDIO LIVE ver.） 04.SILVER（TV size ver.）※期間限定盤のみ

03.01 on sale | single | Anly＋スキマスイッチ＝ この闇を照らす光のむこうに

SONY RECORDS／初回盤DVD付 ¥1,574／通常盤 ¥1,111



スキマスイッチと、沖縄県の伊江島出身20歳のAnly、世代もキャリアも異なる両者がタッグを組んだ初のコラボシングル。単に企画ものというよりは、アーティスト同士が音楽を通してガチで向き合い、生み落とした楽曲になった。絶望や不安で自分を見失った時、差し伸べられた手を受けとめることの意味とは？　歌詞の中にその答えが記されている。重厚なバンドサウンドと、それを包み込むようなストリングスが印象に残る。（伊藤）

[CD]01.この闇を照らす光のむこうに 02.イギリス / Anly 03.カラノココロ Acoustic Version / Anly 04.この闇を照らす光のむこうに Instrumental [DVD]Music Video、メイキング

03.08 on sale | single | 大原櫻子 ひらり

Victor Entertainment／初回盤A･B DVD付 ¥1,500／通常盤 ¥1,200



毎年同じ季節に花を咲かせ、ひとときを楽しませてくれたと思ったら、あっという間に散りゆく桜。そこに同じ景色があるからこそ、前に向かって変わりゆくことが嬉しくもあり切なくも感じる、そんな桜舞う季節を彩るバラード。柔らかくゆったりしたメロディをしっとりと、時に力強く歌う大原櫻子の歌唱力は本当にお見事。続く3曲は一転してアップナンバー。いつもながら「静と動の櫻子」を楽しめる6作目のシングル。　（前原）

[CD]01.ひらり 02.青い季節 03.Coming Soon!!! 04.Realize 05.ひらり（instrumental） 06.青い季節（instrumental） 07.Coming Soon!!!（instrumental） 08.Realize（instrumental） [DVD A]「ひらり」Music Video [DVD B]「青い季節」Music Video

03.01 on sale | single | 加藤ミリヤ どこまでも～How Far I'll Go～

MASTERSIX FOUNDATION／初回盤DVD付 ¥1,574／通常盤 ¥1,204



「アナ雪」「ズートピア」に続く、ディズニーアニメの最新話題作「モアナと伝説の海」。加藤ミリヤが歌う日本版エンディングソングが、本作だ。重厚なポリネシアンビートと壮大なアレンジで歌う彼女の伸びやかなヴォーカルが魅力的だ。自分が求められている場所は、たとえどんなに遠くても、追い風を見方にして漕ぎだそう、と誓う決意の歌詞は、学校、仕事、友達、恋愛など、さまざまな場面に置き換えられるエールソングでもある。　（伊藤）

[CD]01.どこまでも～How Far I'll Go～ 02.I AM 03.HEART BEAT-SAMBA O Rei REMIX- [DVD]Music Video

03.15 on sale | single | flumpool ラストコール

A-Sketch／初回盤DVD付 ¥2,000／通常盤 ¥1200



映画『サクラダリセット』主題歌01.は、壮麗なストリングスと躍動感あふれるバンドサウンドが輝くミドル･チューン。溢れる感情を叩きつけるドラムとベースと、たっぷりと憂いを帯びた色気を見せるヴォーカルの対比がいい。02.は映画の後編のエンディング曲で、よりオーソドックスなJ-POPバラード。03.はNHK「みんなのうた」への提供曲で、フォークソングのような親しみやすさが魅力。余裕と挑戦が入り混じる意欲的な作品。　（宮本）

[初回盤CD]01.ラストコール 02.ナミダリセット 03.キズナキズ 04.～06.ライヴ音源 [通常盤CD]01.ラストコール 02.ナミダリセット 03.キズナキズ 04.ラストコール（Instrumental） 05. ナミダリセット（Instrumental） 06. キズナキズ（Instrumental） [DVD]ライヴ 他

03.08 on sale | single | 遊助 流れ

MASTERSIX FOUNDATION／初回盤A･B DVD付 ¥1,713／通常盤 ¥1,204



今年一発目のシングル01.は、波音と三線の音色から始まるミディアムナンバー。ゆったりとして心地よい沖縄風サウンドと優しさ溢れるメッセージが、疲れた心にそっと寄り添ってくれる。また、別れてしまった男女の今を切なく、そして未来へと向かう姿を力強く描いた02.など、様々な力加減で聴き手にエールを送る。特に通常盤04.は、彼に悩み相談をしたら、こんな答えが返ってくるのかも……なんて想起させる感じも。　（山口）

[CD]01.流れ 02.2=1+1 03.Only One 04.流れ-Instrumental-（初回盤A･B） 04.まだあるから（通常盤） [DVD A][流れ]Music Video+Making [DVD B]「ひまわり荘4」「2=1+1」Music Video

03.15 on sale | single | 96猫 嘘の火花

SONY RECORDS／初回盤DVD ¥1,800／通常盤 ¥1,300／アニメ盤DVD付 ¥1,800



アジア規模で知名度を誇る歌い手、96猫。自身初のシングル01.は、人気深夜アニメ『クズの本懐』OPテーマ。主人公の女子高生･花火ちゃんに寄せて書かれたという歌詞は報われない恋、偽りの恋の苦悩を綴っているが、儚げな少女の声にのせたロックサウンドも相まって切なさが胸に刺さるナンバー。カップリングはバージョンごとに違うが、いずれも01.とは声色が異なり、96猫の声の奥深さと表現力の幅に驚かされる。（花倉）

[CD]01.嘘の火花 02.独り言 03.S･K･Y（初回盤） 03.ブリキノダンス（通常盤） 03.ラズメリー＊モンスター（アニメ盤） 04.嘘の火花 -Instrumental- 05.独り言 -Instrumental- [DVD]Music Video 他

03.15 on sale | single | The Birthday 抱きしめたい

UNIVERSAL SIGMA／初回盤DVD付　¥1,700／通常盤 ¥1,000



前作から約4ヵ月で早くもリリースされる18枚目のシングル。01.はゆったりとしたグルーヴでありながらも、そこに熱や力強さ、そしてなによりも瑞々しさが宿っていて、4人のバンドアンサンブルのみで壮大な景色を生み出している。また、かき鳴らされるギターとシャッフルビートが、センチメンタルながらも温かみを覚える02.は、かなりポップな雰囲気。両曲共に彼らしさはありながらも、新たな軸になりそうな予感。　（山口）

[CD]01.抱きしめたい 02.木枯らし6号 [DVD]Music Video、セルフライナーノーツムービー

Text ⇒ 赤木まみ、伊藤博伸、大西智之、須田真希子、花倉有紀子、早川洋介、前原雅子、宮本英夫、山口哲生、山本祥子、吉田可奈

News Rush!!

今月も人気アーティストの
ライヴレポートやリリース予定、
最新情報内容満載でお届けします!

news エレファントカシマシ



闘う男たちの30年分の記録 アニバーサリーベストアルバム発売!

今年デビュー30周年を迎えるエレファントカシマシから、ベストアルバムが届けられる。3月21日に発売される、その名も『All Time Best Album THE FIGHTING MAN』。30曲3000円(税抜)という括りで、ヴォーカル宮本がかなりの時間をかけて悩み選び抜いた選りすぐりの楽曲たちは、"Mellow&Shout"と"Roll&Spirit"に分けられ、メンバーも納得のセレクトとなっている。入門編には通常盤を、宮本も驚いたという激レアな発掘映像収録DVDの付く初回盤は、長年のファンのマストバイであること間違いなし。3月20日発売のB-PASS ALL AREA Vol.5では、そんなエレファントカシマシが表紙巻頭特集で登場! 集合ロングインタビューで、トップアーティストであり続ける彼らのこれまでをじっくり振り返ってもらった。アルバムと共にぜひチェックを!

news X4 今の彼らをパッケージした3rdアルバム到着



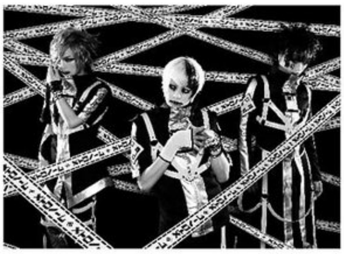
フルアルバムとしては2枚目の『Xross Mate』(クロスメイト)を3月8日に発売するX4。3rdシングル「キズナ」、3ヵ月連続配信曲のほか、メンバー作詞曲、YUYA・T-MAXによるバラードナンバーなど、今のX4を表現した意欲作だ。初回盤には特典DVDとして、2曲のMVとそのメイキング映像を。通常盤にはボーナストラックとして、インディーズ時代の楽曲「Heaven」と「Bang A Gong」をヴォーカルリテイクにて収録するなど、どちらも贅沢な作品となっている。"Xross Mate"とは、X4を通して出逢ったメンバーやXbaby(ファン)のことだそう。

news EXO 3度目のワールドツアー、日本公演を映像化!



アジアのみならず現在世界中で大人気の、韓国出身ダンス&ヴォーカルグループEXO(エクソ)が、3月8日にLIVE DVD&Blu-ray『EXO PLANET #3 – The EXO'rDIUM in JAPAN』をリリース! 今作は3度目のワールドツアーの日本公演の中から、東京ドームでのステージを収めている。各初回盤はA4サイズで、80ページほどのフォトブック付きの豪華版。今後、5月12日(金)~14日(日)に幕張メッセ国際展示場 5-6ホールにて、約1年ぶりとなるファンクラブイベント「EXO-L-JAPAN presents EXO CHANNEL"EXO CUP"」を開催予定だ。

news メトロノーム 止まらないメトロノーム



'16年9月に無期限活動休止となったエレクトロ・ポップ・ヴィジュアル系バンド/メトロノームが、約7年ぶりに再起動! 昨年9月にゼップ東京で行われた復活ライヴは完全ソールドアウト。その動向に注目が集まっていた彼らが3月15日にニュー・アルバム『CONTINUE』を発表。シャラク(Vo.)、フクスケ(G.)、リウ(B.)がそれぞれ新曲を書き下ろし、"再起動"をコンセプトにした彼らしいキャッチーでテクノでポップなサウンドが詰め込まれている。4月からはアルバム発売記念ツアー「現代MONO/POLY」が開催。カオスとキラメキが交差するメトロノーム・ワールドへGO!

news 岸田教団&THE明星ロケッツ アニソンシーン注目の実力派!



'10年にTVアニメ『学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD』の主題歌でメジャー・デビューを果たした後、数々のアニメ主題歌で注目を集めているロックバンド/岸田教団&THE明星ロケッツ。アグレッシブで鮮烈なバンドサウンドとichigoのパワフルなヴォーカルは一度聴いたら忘れられない中毒性を持っている。そんな彼らが、3月22日に待望のニュー・アルバム『LIVE YOUR LIFE』をリリース! 「GATE~それは暁のように~」「天鏡のアルデラミン」など、彼らを代表するタイアップ曲4曲のほか、新曲7曲を含む全12曲を収録予定。夏にはライヴツアー開催も決定!

news 岡本太郎 × New Era® 話題のコラボを記念したトークショーが開催!



本誌でお馴染みのアーティストにも愛用者が多いNew Era®のヘッドウェア。そんな人気ブランドが、芸術家・岡本太郎のアートをまとった斬新なコレクションをこの度発表! さる2月9日にはレゲエミュージシャンRED SPIDERのJUNIOR氏、岡本太郎記念館・館長の平野氏、そして『The New Era® Book』編集長の上木氏を交えたトークショーが開催された。ステージでは、鬼才・岡本太郎とレゲエミュージックの共通点など、さまざまな視点でクロストークが展開。尚、この話題作はすでにファンの間でプレミアム化しているので、興味のある読者は速攻でチェックを! →neweracap.jp

news バンドじゃないもん! 満を持してのメジャー1stアルバム



昨年1月、再メジャー・デビューを果たし、セールスも動員もぐんぐん伸ばし、現在ノリにノっている6人組アイドルグループ"バンドじゃないもん!"。メジャー1stアルバム『完ペキ主義なセカイにふかんぜんな音楽を♡』が3月8日にリリースされる。ORANGE RANGEのNAOTO、在日ファンク、GLAYのHISASHIなどが作詞作曲&プロデュースした提供曲や、メンバーが作詞を手がけた楽曲など、バラエティに富みまくった15曲。全曲リードな勢いの新世代J-POPアルバムが完成しました! 2017年、パーフェクトイヤー宣言をした"バンもん!"、攻めまくりますよ!!

info<da-ice.jp/>

高橋 優
3月11日（土）名古屋センチュリーホール
12日（日）名古屋センチュリーホール
18日（土）わくわくホリデーホール(札幌市民ホール)
19日（日）わくわくホリデーホール(札幌市民ホール)
4月 1日（土）横浜アリーナ
2日（日）横浜アリーナ
16日（日）大阪城ホール
info<www.takahashiyu.com/>

瀧川ありさ
4月 6日（木）ライブハウス浜松窓枠
7日（金）広島ライブジューク
13日（木）長野ジャンクボックス
14日（金）新潟ジョイヤミーヤ
20日（木）仙台ダーウィン
22日（土）札幌くう
27日（木）神戸バリット
28日（金）京都ミューズホール
5月 3日（水）横浜オー・サイト
6日（土）西川口ハーツ
13日（土）長崎オハナカフェ
14日（日）福岡ルームス
info<www.takigawaalisa.com/>

チャットモンチー
3月 9日（木）新潟ロッツ
10日（金）金沢エイトホール
17日（金）長崎ドラムBe-7
20日（月）鹿児島キャパルボホール
24日（金）浜松窓枠
26日（日）岡山クレイジーママキングダム
4月15日（土）青森クォーター
16日（日）盛岡クラブチェンジウェイブ
23日（日）郡山ヒップショットジャパン
27日（木）札幌ペニーレーン24
28日（金）帯広メガストーン
6月 4日（日）仙台レンサ
7日（水）福岡ドラムロゴス
8日（木）広島クラブクアトロ
15日（木）名古屋ダイアモンドホール
16日（金）大阪なんばハッチ
19日（月）六本木EXシアター
20日（火）六本木EXシアター
info<www.chatmonchy.com/>

超特急
4月29日（土）わくわくホリデーホール(札幌市民ホール)
5月 3日（水）大阪国際会議場 メインホール
4日（木）大阪国際会議場 メインホール
6日（土）周南市文化会館
7日（日）広島JMSアステールプラザ大ホール
12日（金）よこすか芸術劇場
20日（土）石川・本多の森ホール
21日（日）富山・高周波文化ホール
27日（土）静岡市民文化会館 大ホール
28日（日）岐阜・土岐市文化プラザ・サンホール
6月 3日（土）和歌山市民会館 大ホール
4日（日）京都・文化パルク城陽プラムホール
17日（土）鹿児島市民文化ホール 第二ホール
18日（日）福岡サンパレス
24日（土）松戸・森のホール21　大ホール
7月 1日（土）山形・酒田市民会館 希望ホール
2日（日）東京エレクトロンホール宮城
9日（日）三重文化会館 大ホール
15日（土）サンポートホール高松・大ホール
17日（月）名古屋国際会議場センチュリーホール
23日（日）神戸国際会館 こくさいホール
8月 8日（火）東京国際フォーラム ホールA
info<bullettrain.jp/>

DISH//
3月19日（日）福岡国際会議場
26日（日）ゼップ大阪ベイサイド
29日（水）新潟ロッツ
31日（金）仙台ピット
4月 1日（土）ゼップ札幌
9日（日）名古屋ダイアモンドホール
14日（金）広島クラブクアトロ
5月 5日（金）神奈川県民ホール
6日（土）神奈川県民ホール
info<dish-web.com/>

ハ

back number
3月 3日（金）大阪城ホール
4日（土）大阪城ホール
11日（土）サンドーム福井
12日（日）サンドーム福井
18日（土）宮城セキスイハイムスーパーアリーナ
19日（日）宮城セキスイハイムスーパーアリーナ
4月 1日（土）愛媛県武道館
2日（日）愛媛県武道館
8日（土）横浜アリーナ
9日（日）横浜アリーナ
15日（土）神戸ワールド記念ホール
16日（日）神戸ワールド記念ホール
22日（土）マリンメッセ福岡
23日（日）マリンメッセ福岡
29日（土）朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンター
30日（日）朱鷺メッセ・新潟コンベンションセンター
5月 5日（金）静岡エコパアリーナ
6日（土）静岡エコパアリーナ
12日（金）北海道立総合体育センター北海きたえーる
13日（土）北海道立総合体育センター北海きたえーる
17日（水）名古屋日本ガイシホール
18日（木）名古屋日本ガイシホール
27日（土）広島グリーンアリーナ
28日（日）広島グリーンアリーナ
6月 3日（土）さいたまスーパーアリーナ
4日（日）さいたまスーパーアリーナ
10日（土）沖縄コンベンションセンター展示棟
11日（日）沖縄コンベンションセンター展示棟
info<backnumber.info/>

風男塾
6月 3日（土）梅田クラブクアトロ
4日（日）名古屋ボトムライン
25日（日）渋谷ツタヤO-EAST
info<nfs724.com/>

flumpool
5月20日（土）日本武道館
21日（日）日本武道館
info<www.flumpool.jp/>

BLUE ENCOUNT
3月12日（日）高松フェストハレ
20日（月）千葉幕張メッセ国際展示場
4月 2日（日）ゼップ札幌
8日（土）仙台ピット
9日（日）新潟ロッツ
15日（土）ゼップ大阪ベイサイド
16日（日）ブルーライブ広島
26日（水）ゼップ名古屋
27日（木）ゼップ名古屋
5月 7日（日）福岡国際センター
info<blueencount.jp/>

Blu-BiLLioN
5月11日（木）ヘブンズロックさいたま新都心 VJ-3
13日（土）新潟ゴールデンピッグスレッドステージ
14日（日）長野クラブジャンクボックス
21日（日）新横浜ニューサイドビーチ!!
26日（金）名古屋E.L.L.
28日（日）江坂ミューズ
6月 2日（金）福岡ドラムBe-1
3日（土）岡山イマージュ
9日（金）仙台マナカ
11日（日）札幌キューブガーデン
16日（金）熊本B.9 V2
18日（日）広島セカンドクラッチ
7月 2日（日）恵比寿ザ・ガーデンホール
info<blu-billion.jp/>

BREAKERZ
3月 5日（日）ゼップ名古屋
20日（月）ゼップダイバーシティ東京
4月 2日（日）ゼップ名古屋
16日（日）ゼップ東京
29日（土）ゼップダイバーシティ東京
info<breakerz-web.net/>
※すべて対バン

ベリーグッドマン
5月 5日（金）ゼップ大阪ベイサイド
13日（土）岡山クレイジーママキングダム
14日（日）高松オリーブホール
28日（日）広島クラブクアトロ
6月 4日（日）福岡ドラムロゴス
10日（土）札幌キューブガーデン
17日（土）熊本B.9 V1
18日（日）鹿児島キャパルボホール
24日（日）名古屋ダイアモンドホール
25日（日）金沢AZ
7月 1日（土）仙台ダーウィン
2日（日）新潟ゴールデンピッグスレッド
15日（土）ゼップダイバーシティ東京
info<berrygoodman.com/>

BOYS AND MEN
2月27日（月）新宿ブレイズ
3月 1日（水）金沢AZ
2日（木）福井チョップ
4日（土）札幌ペニーレーン24
7日（火）静岡サウンドシャワーark
8日（水）水戸ライトハウス
9日（木）宇都宮ヘブンズロック
10日（金）ヘブンズロックさいたま新都心VJ-3
14日（火）奈良ネバーランド
15日（水）和歌山クラブゲート
16日（木）神戸バリット
19日（日）京都ミューズ
20日（月）岡山クレイジーママキングダム
22日（水）高松モンスター
24日（金）松山サロンキティ
25日（土）徳島クラブグラインドハウス
26日（日）高知X-pt
28日（火）滋賀ユーストン
29日（水）富山ソウルパワー
30日（木）新潟ゴールデンピッグスレッドステージ
31日（金）山形ミュージック昭和セッション
4月 1日（土）秋田クラブスウィンドル
2日（日）岩手クラブチェンジウェイブ
3日（月）青森クォーター
5日（水）仙台ダーウィン
6日（木）郡山クラブ#9
7日（金）甲府コンビクション
8日（土）長野クラブジャンクボックス
11日（火）米子 AZTiC laughs
12日（水）松江 AZTiC canova
13日（木）広島ケイブビー
15日（土）周南ライジングホール
16日（日）大分ドラムBe-0
18日（火）長崎ドラムBe-7
19日（水）福岡ドラムBe-1
20日（木）佐賀ガイルス
21日（金）熊本B.9 V2
22日（土）鹿児島キャパルボホール
23日（日）宮崎ウェザーキング
29日（土）沖縄・桜坂セントラル
5月 4日（木）三重・松阪マクサ
info<boysandmen.jp/>

マ

Mrs. GREEN APPLE
3月 1日（水）川崎クラブチッタ
2日（木）川崎クラブチッタ
4日（土）高崎クラブフリーズ
5日（日）水戸ライトハウス
11日（土）広島クラブクアトロ
12日（日）高松オリーブホール
14日（火）神戸チキンジョージ
17日（金）長野クラブジャンクボックス
18日（土）新潟ロッツ
20日（月）金沢エイトホール
24日（金）郡山ヒップショットジャパン
30日（木）浜松窓枠
31日（金）滋賀ユーストン
4月22日（土）三郷市文化会館
28日（金）わくわくホリデーホール(札幌市民ホール)
5月 3日（水）福岡市民会館
5日（金）大阪オリックス劇場
11日（木）名古屋日本特殊陶業市民会館
14日（日）宮城電力ホール
19日（金）東京国際フォーラム ホールA
info<mrsgreenapple.com>

miwa
4月22日（土）名古屋・日本ガイシホール
23日（日）名古屋・日本ガイシホール
5月 6日（土）マリンメッセ福岡
13日（土）ゼビオアリーナ仙台
6月 3日（土）大阪城ホール
4日（日）大阪城ホール
11日（日）横浜アリーナ
17日（土）さいたまスーパーアリーナ
18日（日）さいたまスーパーアリーナ
info<www.miwa-web.com>

ヤ

ゆず
5月 3日（水）ナゴヤドーム
20日（土）東京ドーム
21日（日）東京ドーム
27日（土）京セラドーム大阪
28日（日）京セラドーム大阪
6月 4日（日）福岡ヤフオク!ドーム
info<www.senha-yuzu.jp>

吉澤嘉代子
4月29日（土）岡山クレイジーママキングダム
5月 4日（木）仙台ダーウィン
7日（日）東京国際フォーラム ホールC
13日（土）福岡ビートステーション
14日（日）大阪なんばハッチ
19日（金）名古屋市芸術創造センター
info<yoshizawakayoko.com/>

ラ

RIZE
4月20日（木）下北沢キQue※
21日（金）下北沢Que※
24日（月）旭川カジノドライブ
25日（火）札幌ペニーレーン24
27日（木）帯広メガストーン
5月 1日（月）石巻ブルーレジスタンス
8日（月）神戸チキンジョージ
9日（火）米子AZTiC laughs
11日（木）周南ライジングホール
13日（土）長崎ドラムBe-7
14日（日）熊本B.9 V1
16日（火）広島クラブクアトロ
18日（木）京都ミューズ
6月10日（土）滋賀ユーストン
11日（日）奈良ネバーランド
13日（火）岐阜クラブG
23日（金）横浜米ホール
24日（土）柏パロッツァ
※はFCのみ
info<www.triberize.net/>

RADWIMPS
3月 2日（木）愛媛県武道館
7日（火）横浜アリーナ
8日（水）横浜アリーナ
11日（土）大阪城ホール
12日（日）大阪城ホール
18日（土）北海道立総合体育センター北海きたえーる
25日（土）宮城セキスイハイムスーパーアリーナ(グランディ・21)
26日（日）宮城セキスイハイムスーパーアリーナ(グランディ・21)
4月 1日（土）名古屋・日本ガイシホール
2日（日）名古屋 日本ガイシホール
8日（土）広島グリーンアリーナ
9日（日）広島グリーンアリーナ
15日（土）サンドーム福井
22日（土）神戸ワールド記念ホール
23日（日）神戸ワールド記念ホール
29日（土）さいたまスーパーアリーナ
30日（日）さいたまスーパーアリーナ
5月 9日（火）日本武道館
10日（水）日本武道館
info<radwimps.jp/>

L'Arc-en-Ciel
4月 8日（土）東京ドーム
9日（日）東京ドーム
info<www.larc-en-ciel.com>

ЯeaL
5月27日（土）心斎橋ビッグキャット
6月11日（日）名古屋クラブアップセット
17日（土）福岡キューブリック
25日（日）渋谷ツタヤO-WEST
info<www.realgirlsband.com/>

LiSA
6月17日（土）神戸ワールド記念ホール
24日（土）さいたまスーパーアリーナ
25日（日）さいたまスーパーアリーナ
7月 1日（土）日本ガイシホール
info<www.lxixsxa.com/>

Live Rush!!

ア

Ivy to Fraudulent Game
4月 1日（土）高崎クラブフリーズ※
8日（土）千葉ルック
9日（日）横浜ベイシス
14日（金）金沢バンバンV4
15日（土）ヘブンズロックさいたま新都心 VJ-3
21日（金）水戸ライトハウス
28日（金）札幌コロニー
5月12日（金）岡山クレイジーママ2nd Room
13日（土）福岡CB
21日（日）新潟クラブリバースト
27日（土）広島ケイブビー
28日（日）神戸太陽と虎
6月 9日（金）京都ミューズ
10日（土）静岡アンバー
17日（土）ヘブンズロック宇都宮 VJ-2
18日（日）仙台エン 2nd
23日（金）高松ダイム
30日（金）名古屋アポロベース※
7月 8日（土）心斎橋ミュージッククラブジャニス※
9日（日）恵比寿リキッドルーム※
※はワンマンライヴ
info<www.ivytofraudulentgame.com/>

阿部真央
3月 4日（土）大阪オリックス劇場
5日（日）大阪オリックス劇場
11日（土）神奈川県民ホール
18日（土）新潟県民会館
20日（月）札幌市教育文化会館
25日（土）岡山市民会館
26日（日）福岡サンパレス
4月 1日（土）仙台市民会館 宮城
2日（日）日本特殊陶業市民会館フォレストホール
8日（土）神戸国際会館 こくさいホール
9日（日）京都ロームシアター メインホール
13日（木）徳島あわぎんホール
15日（土）広島アステールプラザ
21日（金）静岡市民文化会館 ホール
23日（日）東京国際フォーラム ホール A
info<abemao.com/>

雨のパレード
3月24日（金）新潟クラブリバースト
31日（金）札幌コロニー
4月 2日（日）仙台エン 3rd
6日（木）梅田クラブクアトロ
8日（土）広島ケイブビー
9日（日）福岡グラフ
12日（水）名古屋クラブクアトロ
14日（金）赤坂ブリッツ
info<amenoparade.com/>

[Alexandros]
3月 4日（土）福岡国際センター
11日（土）沖縄ナムラホール
12日（日）沖縄ナムラホール
4月22日（土）幕張メッセ国際展示場9-11ホール
23日（日）幕張メッセ国際展示場9-11ホール
info<alexandros.jp/>

アンティック-珈琲店-
3月11日（土）阿倍野ロックタウン
18日（土）名古屋E.L.L
26日（日）渋谷クラブクアトロ
info<www.ancafe-web.com/>

家入レオ
4月30日（日）日本武道館
info<www.jvcmusic.co.jp/leo-ieiri/>

EXILE THE SECOND
3月10日（金）兵庫ワールド記念ホール
11日（土）兵庫ワールド記念ホール
12日（日）兵庫ワールド記念ホール
24日（金）マリンメッセ福岡
25日（土）マリンメッセ福岡
4月 6日（木）静岡エコパアリーナ
7日（金）静岡エコパアリーナ
22日（土）青森・盛運輸アリーナ
23日（日）青森・盛運輸アリーナ
info<t-second.jp/>

lol
5月 6日（土）北海道キューブガーデン
12日（金）宮城ダーウィン
13日（土）福島シームーン
27日（土）広島セカンドクラッチ
6月 3日（土）神戸バリット
4日（日）京都ミューズ
17日（土）愛知ボトムライン
18日（日）三重・松阪マクサ
23日（金）福岡ドラムロゴス
24日（土）鹿児島SRホール
7月 1日（土）宇都宮ヘブンズロック VJ-2
2日（日）千葉ルック
7日（金）梅田クラブクアトロ
9日（日）静岡サナッシュ
17日（月）新潟ゴールデンピッグスブラックステージ
29日（土）渋谷デュオミュージックエクスチェンジ
info<avex.jp/lol/>

ORANGE RANGE
3月20日（月）沖縄市民会館 大ホール
info<orangerange.com/>

カ

グッドモーニングアメリカ
3月 4日（土）三重・松阪マクサ
5日（日）浜松フォース
11日（土）旭川カジノドライブ
12日（日）デュース札幌
23日（木）仙台マカナ
25日（土）盛岡クラブチェンジウェイブ
26日（日）郡山クラブ#9
4月 9日（日）大阪ビッグキャット
15日（土）名古屋ボトムライン
22日（土）渋谷ツタヤO-EAST
info<goodmorningamerica.jp/>

GRANRODEO
5月20日（土）ゼップ札幌
21日（日）ゼップ札幌
6月 9日（金）ゼップダイバーシティー東京
10日（土）ゼップダイバーシティー東京
17日（土）福岡ドラムロゴス
18日（日）福岡ドラムロゴス
24日（土）ブルーライブ広島
25日（日）ブルーライブ広島
7月 1日（土）仙台ピット
2日（日）仙台ピット
8日（土）ゼップ大阪ベイサイド
9日（日）ゼップ大阪ベイサイド
16日（日）ゼップ名古屋
17日（月）ゼップ名古屋
info<www.granrodeo.net/>

96猫
3月29日（水）大阪なんばハッチ
31日（金）ゼップダイバーシティ東京
info<96neko.jp/>

黒猫チェルシー
4月 7日（金）福岡ドラムサン
9日（日）神戸太陽と虎
13日（木）金沢バンバンV4
14日（金）高崎トラスト55
21日（金）浜松メスカリンドライブ
5月12日（金）仙台エン2nd
20日（土）札幌コロニー
27日（土）大阪シャングリラ
28日（日）名古屋クラブアップセット※
6月 4日（日）東京キネマ倶楽部※
※はワンマンライヴ
info<www.kuronekochelsea.jp/>

コアラモード.
3月25日（土）横浜ベイシス
4月 1日（土）仙台エン3rd
2日（日）福岡ドラムサン
8日（土）神戸バリット
9日（日）名古屋ハートランド
15日（土）東京イイノホール
23日（日）大阪大丸心斎橋劇場
info<www.coalamode.net/>

サ

The Super Ball
4月 1日（土）名古屋ell.FITS ALL
2日（日）大阪ドロップ
16日（日）赤坂ブリッツ
info<supabo.com>

THE BAWDIES
3月 2日（木）高知X-pt
4日（土）高松モンスター
5日（日）松山ダブリュースタジオレッド
9日（木）浜松窓枠
11日（土）和歌山シェルター
12日（日）京都磔磔
17日（金）盛岡クラブチェンジウェイブ
18日（土）青森クォーター
20日（月）仙台レンサ
25日（土）宇都宮ヘブンズロックVJ-2
26日（日）郡山ヒップショットジャパン
30日（木）岡山エビスヤプロ
4月 1日（土）広島クラブクアトロ
2日（日）周南ライジングホール
15日（土）滋賀ユーストン
16日（日）神戸チキンジョージ
20日（木）松本サウンドホールa.C
22日（土）新潟ロッツ
23日（日）富山マイロ
27日（木）熊谷ヘブンズロックVJ-1
28日（金）高崎クラブフリーズ
30日（日）水戸ライトハウス
5月13日（土）ゼップ札幌
21日（日）東京NHKホール
28日（日）大阪オリックス劇場
29日（月）愛知日本特殊陶業市民会館 ビレッジホール
6月 8日（木）長崎ドラムBe-7
10日（土）大分ドラムBe-0
11日（日）福岡市民会館
16日（金）沖縄・桜坂セントラル
info<thebawdies.com/>

SHE'S
3月 4日（土）広島セカンドクラッチ
5日（日）岡山イマージュ
11日（土）福岡ドラムBe-1
17日（金）札幌クラップスホール
19日（日）仙台マカナ
20日（月）新潟クラブリバースト
22日（水）金沢バンバン V4
24日（金）大阪ビッグキャット
26日（日）名古屋クラブクアトロ
4月 9日（日）赤坂ブリッツ
info<she-s.info>

THE ORAL CIGARETTES
3月21日（火）大阪ビッグキャット
22日（水）名古屋ダイアモンドホール
28日（火）赤坂ブリッツ
4月 6日（木）岡山クレイジーママキングダム
8日（土）高松フェストハレ
9日（日）高知キャラバンサライ
11日（火）札幌ペニーレーン24
12日（水）札幌ペニーレーン24
16日（日）仙台ピット
23日（日）新潟ロッツ
27日（木）福岡ドラムロゴス
28日（金）福岡ドラムロゴス
30日（日）広島クラブクアトロ
5月 4日（木）ゼップ名古屋
12日（金）ゼップ大阪ベイサイド
6月16日（金）日本武道館
info<theoralcigarettes.com/>

SKY-HI
3月 4日（土）新潟県民会館大ホール
10日（金）群馬・ベイシア文化ホール大ホール
18日（土）名古屋国際会議場センチュリーホール
25日（土）仙台イズミティ21大ホール
26日（日）リンクモア平安閣市民ホール（青森市民ホール）
31日（金）大阪フェスティバルホール
4月 2日（日）広島・上野学園ホール
8日（土）福井市フェニックスプラザ大ホール
14日（金）松山市総合コミュニティセンター キャメリアホール
16日（日）島根県民会館 大ホール
22日（土）鹿児島市民文化ホール 第1
23日（日）福岡市民会館大ホール
5月 2日（火）日本武道館
3日（水）日本武道館
info<avex.jp/skyhi/>

SCANDAL
3月11日（土）熊本B.9 V1
12日（日）宮崎ウェザーキング
14日（火）長崎ドラムBe-7
15日（水）佐賀ガイルス
17日（金）周南ライジングホール
18日（土）松江AZTiC canova
20日（月）米子AZTiC laughs
25日（土）金沢エイトホール
26日（日）富山マイロ
28日（火）長野クラブジャンクボックス
4月 1日（土）新潟ロッツ
2日（日）新潟ロッツ
5日（水）千葉ルック
8日（土）高知キャラバンサライ
9日（日）高松フェストハレ
11日（火）松山ダブリュースタジオレッド
12日（水）徳島クラブグラインドハウス
15日（土）ゼップ東京
16日（日）甲府コンビクション
22日（土）ゼップ大阪ベイサイド
23日（日）ゼップ名古屋
28日（金）川崎クラブチッタ
30日（日）高崎クラブフリーズ
5月 2日（火）ヘブンズロックさいたま新都心 VJ-3
4日（木）福井響きのホール
6日（土）岐阜クラブジー
7日（日）三重・松阪マクサ
13日（土）広島クラブクアトロ
14日（日）広島クラブクアトロ
20日（土）郡山ヒップショット
21日（日）仙台レンサ
23日（火）山形ミュージック昭和セッション
25日（木）盛岡クラブチェンジウェイブ
27日（土）秋田クラブスウィンドル
28日（日）青森クォーター
6月 2日（金）札幌ペニーレーン24
3日（土）札幌ペニーレーン24
10日（土）和歌山シェルター
11日（日）滋賀ユーストン
13日（火）京都ミューズ
15日（木）神戸バリット
17日（土）奈良ネバーランド
18日（日）大阪なんばハッチ
22日（木）浜松窓枠
23日（金）ゼップ名古屋
25日（日）岡山クレイジーママキングダム
7月 1日（土）鹿児島キャパルボホール
2日（日）福岡ドラムロゴス
4日（火）大分ドラムBe-0
8日（土）沖縄・桜坂セントラル
14日（金）ヘブンズロック宇都宮 VJ-2
15日（土）水戸ライトハウス
17日（月）豊洲ピット
info<www.scandal-4.com/>

SPYAIR
7月29日（土）富士急ハイランド・コニファーフォレスト
info<www.spyair.net/>

タ

Da-iCE
6月23日（金）三郷市文化会館
24日（土）三郷市文化会館
28日（水）小樽市民会館
30日（金）わくわくホリデーホール（札幌市民ホール）
7月 8日（土）石川県・金沢本多の森ホール
16日（日）福岡サンパレス
21日（金）日本特殊陶業市民会館フォレストホール
22日（土）グランキューブ大阪メインホール
29日（土）サンシティ越谷 大ホール
9月 2日（土）青森県・リンクステーション青森
9日（土）厚木市文化会館 大ホール
10日（日）郡山市民文化センター 大ホール
15日（金）仙台イズミティ 大ホール
16日（土）仙台イズミティ 大ホール
23日（土）広島アステールプラザ 大ホール
24日（日）広島アステールプラザ 大ホール
30日（土）浦安市文化会館
10月 7日（土）群馬県ベイシア文化ホール 大ホール
9日（月）サンポートホール高松 大ホール
11月18日（土）神戸ワールド記念ホール
19日（日）神戸ワールド記念ホール

一足早く春を感じさせてくれるような
優しくて明るいムードのガールズ撮影と
ゴッリゴリなロックバンドの３組を

UVERworld



1月30日／カメラ平野さん。ヘア&メイク渡邉さん。スタイリング上井さん。ソニー小山さん、田野口さん。PP小林さん、スタッフの皆様。AD鶴羽さん、(さ)。2月11日、17～18日／ライター増田さん。

白ホリに並んで立ってるだけ迫力あります

撮り下ろし＋ライヴ密着＋ソロ・インタビューでお届けした今回のUVER表紙巻頭特集。表紙で採用した集合写真は、数年ぶりにアナログフィルムで撮影しました！　今のUVERworldが放っている人間力という熱量をどうやったら写真に落とし込めるか!?と考えた結果、やり直しが利かない本番一発のアナログフィルムで表現してみよう、ということになり。ローライフレックスという名器2台にブローニーサイズ(60mm×60mm)のネガフィルムを使って撮影しました。メンバーも「うわ、初めてみた！　これどうやって撮るんですか!?」と興味津々でした。撮っている間は、デジカメのようにPCに確認写真が出たりしないので、スタッフ全員が固唾を飲んで撮影風景を眺めるのみ(笑)。そうやって出来上がった今回の表紙カット。フィルムに焼き付けられた6人の姿、すごくいい感じですよね！●そして、インタビューは校了直前の17～18日に敢行。メンバー&スタッフさん、そしてライター増田さん。大変なスケジュールでの取材、ありがとうございました！(よ)



ひと言取材日記

★04 Limited Sazabys→インタビュー前「すみません、パン食べながらでもいいですか？」とGENくん。クリームパンをもぐもぐ。(さ)★OLDCODEX→リハスタにお邪魔しての取材だったこともあり、お礼と感謝の意を込めて、チョコレートを。YORKE.さんには恐竜化石発掘チョコ、Ta_2さんには銀河の惑星チョコを。ロマン！(よ)★the GazettE→毎回メンバーからイジられるお馴染みのライター。今回も「今まで聴いた中で出来の悪いベストアルバムってどれですか!?」とメンバーから逆質問されてオロオロしてました(笑)。(よ)★flumpool→前シングルの取材ぶりにお会いしたんですが、山村さん、ほっそりした印象が。特に顔まわり。「(西内)まりやちゃん、ほんと顔ちっちゃいから」と申しておりました。(は)★Anly＋スキマスイッチ＝→プレゼント用に撮ったポラを「私もこれ欲しいな。応募しようかな」とAnly。「1枚、Anlyちゃん用でいいよ」と渡すと、「宝物にします！」とスキマ先輩にサインを入れてもらってお持ち帰り。(は)★遊助→インタビュー中、低い声で「ありがとおー」という言い方が、「今のアリスっぽい(笑)」と伝えると、何回かヴォイスレコーダーを口に持っていき「You're king of kings」頂きました。(は)

※このページの写真は〈http://www.shinko-music.co.jp/〉にアクセスするとカラーで見ることができます

LiSA

白のロングスカートがひらひらして春っぽかった♡



2月7日／カメラ平野さん、ライター大西さん、AD鶴羽さん。ヘアメイク田端さん、スタイリング久芳さん。アニプレックス杉山さん、事務所マネージャーの皆様。ありがとうございました！

初登場のLiSAさん。実はガルデモでの歌声を聴いてから、ずっといちファンとして彼女の歌声を追いかけていたワタクシ、ついにB-PASSに登場していただけて、とても光栄でございました！　雑誌やライヴでしか知らなかったLiSAさんが実際どんな女の子なのか!?　ちょっぴり緊張しながら取材現場におもむいたのですが……「よろしくお願いします！　LiSAです！」と眩しい笑顔で声をかけてくれたのでした(めっちゃええ子や!!と心の中で震えました)。バックカバーカットでは、新曲「Catch the Moment」が持つ、希望のキラめきやLiSAさんの声に宿る前向きな意志の力を表現したかったので、自然光の中でカラフルな色味を活かしながら撮影。上からいくつも釣り下げられたカラーフィルターの隙間を軽やかにチャーミングに動き回ってくれるLiSAさん。カメラマンさんとの息もピッタリです。キリッとした強めの眼差しも、やんちゃな笑顔も、ちょっと憂いを含んだ横顔も、どれもとても自然で素敵でした●この日はみっちり取材デーで、うちの取材が終わったらすぐに控室で次のお着替え&ヘアメイクがスタート。そこから大きな声で最後、「ありがとうございました！」と声をかけてくれたLiSAさん。とても魅力的で、心優しいアーティストさんでした♪　(よ)

大原櫻子



2月5日(日)17時30分～18時30分:レコード会社にて撮影&インタビュー。カメラ山本さん。ライター前原さん。ビクター小柳さん。スタッフのみなさま。ありがとうございました。

パッツン前髪も可愛かったですけど、ふわっとお姉さん風

この日はシングルのプロモーションデー、日曜日の会社は貸し切り状態で、フル回転で取材をしていたようです。B-PASSは夕方頃、まずはインタビューから。インタビュー用の部屋に、あの衣装で現われた櫻子ちゃん、部屋がパーッと春めきましたよ。「取材的には武道館のレポートぶりなんですけど」と伝えると、「あのレポート、すごく印象に残ってます。お父さんも読んだみたいで、"いいねぇ"って言ってたんですよ。ありがとうございました」と、なんとも嬉しい言葉を。こちらこそ、ありがとうございました!!　インタビューでは原稿にあるように、タイムリーなバレンタイン話も。「そろそろ準備しなきゃですよねー」という櫻子ちゃん。「お店に行くと、自分用を買いたくなっちゃいません？」と聞くと、「えー?!それはないです」と即答する櫻子ちゃんの言葉に、そこにいた女性陣(ライター、編集、マネージャー)こそ、「え―?!」と。自分が美味しいチョコを食べたい大人と、純粋に人に贈るためのバレンタインを過ごす天使でした。そして、お父さんが「初めてあげたチョコレートのパッケージと手紙を机の引き出しに入れて取っておいた」という話。櫻子ちゃんはビックリした感じで話してましたが、「それは取っておくでしょー！　嫁に行く前日にまた見るよ」と親目線の大人達でした。　(は)

BACKSTAGE B=PASS BACK NUMBER

表示は8%税込価格です。

好きなアーティストを完全チェック!!

最近ファンになったというキミ、"見逃した"というアナタ、バックナンバーもよろしく。

B-PASS '14.12 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:EXILE SHOKICHI
●巻末特集:VAMPS
●Acid Black Cherry/遊助/家入レオ/ソナーポケット/AAA/阿部真央/アンダーグラフ/超特急/BUMP OF CHICKEN/宮野真守/OLDCODEX/ROOT FIVE/DOG inThePWO/DOBERMAN INFINITY/風男塾/REVALCY/Czecho No Republic/THE ORAL CIGARETTES/Hello Sleepwalkers/FoZZtone/go!go!vanillas/ONE☆DRAFT/Dream/古川雄大/ケラケラ/井上苑子/植田真梨恵/他

B-PASS '15.1 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:SCANDAL
●巻末特集:超特急
●UVERworld/東方神起/DISH///SKY-HI/ナオト・インティライミ/Aqua Timez/藤巻亮太/板野友美/LIFriends/BUMP OF CHICKEN/FLOWER FLOWER/HY/THE BAWDIES/スキマスイッチ/新山詩織/After Romeo/WAZZ UP/Blu-BiLLioN/Derailers/吉田山田/WEAVER/Aimer/他

B-PASS '15.2 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:DISH//
●GLAY/UVERworld×THE Hitch Lowke/GACKT/FTISLAND/Aqua Timez/家入レオ/URATA NAOYA/清木場俊介/西内まりや/Da-iCE/E-girls/防弾少年団/LEGO BIG MORL/木村カエラ/東京カランコロン/NIGHTMARE/ぼくだ/山崎あおい/Cyntia/「連載:SCREW/BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/D☆DATE/千葉雄大」他

B-PASS '15.5 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:EXILE
●巻末特集:miwa
●遊助/AAA/SKY-HI/OLDCODEX/THE TURTLES JAPAN/ナオト・インティライミ/剛力彩芽/風男塾/BugLug/SPYAIR/宮野真守/Da-iCE/LIFriends/the GazettE/NIGHTMARE/SCREW/MAGIC OF LiFE/koma'n/CODE-V/Blu-BiLLioN/go!go!vanillas/藤原さくら/荒木宏文/「連載:SCREW/BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/D☆DATE/千葉雄大」他

B-PASS '15.6 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:flumpool
●BUMP OF CHICKEN/東方神起/SUPER JUNIOR-D&E/『新宿スワン』SPECIAL LIVE/DISH///超特急/AAA/西内まりや/藤巻亮太/SCANDAL/Kalafina/FTISLAND/CNBLUE/坂本真綾/WEAVER/THE ORAL CIGARETTES/フレデリック/TRUSTRICK/heidi./「連載:SCREW/BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/D☆DATE/千葉雄大」他

B-PASS '15.7 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:UVERworld
●巻末特集:[Alexandros]
●AAA/ナオト・インティライミ/BBQ in つま恋 Photo Shooting Report/OLDCODEX/CNBLUE/超特急/家入レオ/藍井エイル/清木場俊介/アルスマグナ/ソナーポケット/高橋優/back number/UNISON SQUARE GARDEN/LEGO BIG MORL/黒木渚/新山詩織/東京カランコロン/あいみょん/BREAKERZ/GRANRODEO/Galileo Galilei/グッドモーニングアメリカ/「連載:SCREW/BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/D☆DATE/千葉雄大」他



コチラもチェック!

B-PASS '15.8 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:遊助
●巻末特集:SKY-HI
●GLAY/miwa/AAA/VAMPS/GACKT/DISH///板野友美/UNISON SQUARE GARDEN/DOBERMAN INFINITY/GRANRODEO/GRANRODEO×BREAKERZ/三浦大知/K/Mayday/HY/高橋 優/井上苑子/SUPER JUNIOR-K.R.Y./LILI LIMIT/LAMP IN TERREN/Mrs. GREEN APPLE/SPYAIR/SCREEN mode/カスタマイZ/他

B-PASS '15.9 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:ポルノグラフィティ
●巻末特集:BREAKERZ
●LUNATIC FEST./SCANDAL/SPYAIR/GENERATIONS from EXILE TRIBE/flumpool/AAA/Dream Ami/OLDCODEX/家入レオ/ファンキー加藤/ソナーポケット/Aqua Timez/LIFriends/Blu-BiLLioN/androp/ORANGE RANGE/REVALCY/清木場俊介/古川雄大/アンティック-珈琲店-/桐嶋ノドカ/lol/I Don't Like Mondays./Kalafina/Aimer/SCREW/Da-iCE/他

B-PASS '15.10 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:AAA
●巻末特集:宮野真守
●BUMP OF CHICKEN/Acid Black Cherry/UVERworld/BBQ in つま恋/flumpool/SPYAIR/SCANDAL/清木場俊介/UNISON SQUARE GARDEN/FTISLAND/超特急/剛力彩芽/三浦大知/蒼井翔太/Aqua Timez/仙台貨物/DOG inThePWO/go!go!vanillas/Czecho No Republic/lynch./J/Suck a Stew Dry/INORAN/アルスマグナ/Kalafina/他

B-PASS '15.11 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:EXILE TAKAHIRO
●福山雅治/VAMPS/UVERworld/GENERATIONS from EXILE TRIBE/AAA/SPYAIR/DOBERMAN INFINITY/坂本真綾/堂珍嘉邦/金子ノブアキ/lynch./黒木渚/ソナーポケット/CNBLUE/ROOT FIVE/風男塾/Mayday/WEAVER/吉澤嘉代子/X4/「連載:SCREW/BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/Kalafina/D☆DATE/千葉雄大」他

B-PASS '15.12 ¥860(税込)

●Wカバー巻頭特集1:EXILE SHOKICHI
●Wカバー巻頭特集2:SPYAIR
●バックカバー&巻末特集:DISH//
●AAA/遊助/ファンキー加藤/大原櫻子/家入レオ&大原櫻子/Dream/アルスマグナ/BREAKERZ/小室哲哉/スキマスイッチ/NIGHTMARE/BugLug/Blu-BiLLioN/the GazettE/グッドモーニングアメリカ/THE ORAL CIGARETTES/井上苑子/04 Limited Sazabys/UMI☆KUUN/ダウト/SOLIDEMO/Da-iCE/カスタマイZ/他

B-PASS '16.2 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:miwa
●バックカバー&巻末特集:SKY-HI
●三代目 J Soul Brothers from EXILE TRIBE/ポルノグラフィティ/Acid Black Cherry/CNBLUE/KEITA/ソナーポケット/Little Glee Monster/グッドモーニングアメリカ/THE ORAL CIGARETTES/植田真梨恵/Da-iCE/ダウト/lol/東京カランコロン/山本陽介/X4/「連載:BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/Kalafina/SCREW/D☆DATE/千葉雄大」他

B-PASS '16.3 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:遊助
●バックカバー&巻末特集:E-girls
●UVERworld/SCANDAL/flumpool/SPAYAIR/宮野真守/家入レオ/超特急/DISH///アルスマグナ/WEAVER/KANA-BOON/Mrs. GREEN APPLE/黒猫チェルシー/Fo'xTails/SCREEN mode/Blu-BiLLioN/荒木宏文/go!go!vanillas/小野賢章/藤原さくら/I Don't Like Mondays./LIFriends/吉澤嘉代子/iKON/BOYS AND MEN/N.Flying/他

B-PASS '16.5 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:flumpool
●バックカバー&巻末特集:Da-iCE
●miwa/SPYAIR/GRANRODEO/the GazettE/GACKT/三浦大知/板野友美/風男塾/SOLIDEMO/X4/anderlust/小野賢章/入野自由/藤巻亮太/The BONEZ/NIGHTMARE/黒木渚/KANIKAPILA/BugLug/SCREW/Leola/Anly/「連載:Kalafina/BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/D☆DATE/千葉雄大」他

B-PASS '16.6 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:AAA
●SKY-HI/BUMP OF CHICKEN/遊助/宮野真守/家入レオ/the GazettE/Aimer/LAMP IN TERREN/EXILE SHOKICHI/Galileo Galilei/ソナーポケット/西内まりや/カスタマイZ/ZYUN./DAMIJAW/MUSCLE ATTACK/Ivy to Fraudulent Game/ラックライフ/Czecho No Republic/ハッカドロップス/「連載:高橋 優/MAGIC OF LiFE/D☆DATE/千葉雄大」他

B-PASS '16.7 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:OLDCODEX
●バックカバー&巻末特集:LEGO BIG MORL
●BUMP OF CHICKEN/SCANDAL/DISH///大原櫻子/BOYS AND MEN/ファンキー加藤/Galileo Galilei/宮野真守/X4/黒猫チェルシー/04 Limited Sazabys/フレデリック/Suck a Stew Dry/chay/Anly/LACCO TOWER/SHE'S/FAKY/Kalafina/「連載:BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/D☆DATE/千葉雄大」他

B-PASS '16.8 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:AKIRA&岩田剛典 HiGH&LOW THE MOVIE
●バックカバー&巻末特集:大原櫻子
●miwa/ナオト・インティライミ/UNISON SQUARE GARDEN/SPYAIR/GIRLS SPECIAL/家入レオ/植田真梨恵/新山詩織/井上苑子/塩ノ谷早耶香/家入レオ/高橋 優/ソナーポケット/Da-iCE/Mrs. GREEN APPLE/BLUE ENCOUNT/ORANGE RANGE/THE BAWDIES×go!go!vanillas/HY+BIGMAMA/ZAQ/阪本奨悟/他

B-PASS '16.9 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:UVERworld
●バックカバー&巻末特集:SKY-HI
●THE YELLOW MONKEY/GACKT/OLDCODEX/SCANDAL/AAA/BOYS AND MEN/EXILE THE SECOND/蒼井翔太/浦井健治/BUMP OF CHICKEN/FTISLAND/Crossfaith/flumpool/THE ORAL CIGARETTES/Czecho No Republic/Lenny code fiction/Fo'xTails/HOWL BE QUIET/ラックライフ/THE BEAT GARDEN/吉澤嘉代子/ReaL/Kalafina/Aimer/黒木渚/「連載:BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/千葉雄大/The Super Ball」他

コチラもチェック!



B-PASS '16.10 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:ナオト・インティライミ
●THE YELLOW MONKEY/BUMP OF CHICKEN/GRANRODEO/the GazettE/風男塾/w-inds./高橋 優/Aimer/Goose house/SOLIDEMO/MAGIC OF LiFE/anderlust/lynch./中田裕二/Xmas Eileen/Lenny code fiction/アルスマグナ/アンティック-珈琲店-/「連載:BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/千葉雄大/The Super Ball/阪本奨悟」他

B-PASS '16.11 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:THE YELLOW MONKEY
●バックカバー&巻末特集:宮野真守
●ポルノグラフィティ/miwa/SCANDAL/遊助/青柳 翔/フレデリック/ONE OK ROCK/植田真理恵/04 Limited Sazabys/グッドモーニングアメリカ/WEAVER/Blu-BiLLioN/ベリーグッドマン/Happiness/I Don't Like Mondays./DAOKO/MOSHIMO/Age Factory/ハシグチカナデリヤ hugs The Super Ball/ORANGE POST REASON/他

B-PASS '16.12 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:GACKT
●バックカバー&巻末特集:超特急
●遊助/flumpool/SPYAIR/大原櫻子/Aimer/Dream Ami/板野友美/山本 彩/Galileo Galilei/高橋 優/BLUE ENCOUNT/Da-iCE/Block B/the GazettE/THE ORAL CIGARETTES/NIGHTMARE/浦井健治/DOG inTheパラレルワールドオーケストラ/Lenny code fiction/BABYMETAL/ZYUN./瀧川ありさ/焚吐/DOBERMAN INFINITY/GRANRODEO/他

B-PASS '17.1 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:DISH//
●GENERATIONS from EXILE TRIBE/OLDCODEX/ORANGE RANGE/アルスマグナ/Mrs. GREEN APPLE/植田真梨恵/Kalafina/Fo'xTails/YURI!!! on ICE feat.w.hatano/B.A.P/RADWIMPS/AAA/SE7EN/新山詩織/HOWL BE QUIET/96猫/THE BEAT GARDEN/三浦大知/Leola/lol/KANIKAPILA/SCREW/THE Hitch Lowke/他

B-PASS '17.2 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:SKI-HY
●バックカバー&巻末特集:BLUE ENCOUNT
●THE YELLOW MONKEY/UVERworld/SPYAIR/E-girls/w-inds./BOYS AND MEN/BREAKERZ/家入レオ/Little Glee Monster/Anly/入野自由/チャラン・ポ・ランタン/羽多野渉/藤原さくら/The Super Ball/SUPER★DRAGON/グッドモーニングアメリカ/SHE'S/go!go!vanillas/早見沙織/SOLIDEMO/「連載:BUMP OF CHICKEN/高橋 優/MAGIC OF LiFE/千葉雄大/The Super Ball/阪本奨悟」他



B-PASS '17.3 ¥860(税込)

●表紙・巻頭:miwa
●バックカバー&巻末特集:Da-iCE
●UVERworld/SCANDAL/GRANRODEO/宮野真守/阿部真央/家入レオ/超特急/DISH///BOYS AND MEN/Mrs. GREEN APPLE/黒猫チェルシー/上坂すみれ/DANCE EARTH PARTY/The Super Ball/THE BAWDIES/THE ORAL CIGARETTES/イトラカシ/Kalafina/Little Glee Monster/塩ノ谷早耶香/コアラモード./ナノ/THE RAMPAGE from EXILE TRIBE/「連載:高橋 優/MAGIC OF LiFE/BUMP OF CHICKEN/千葉雄大/The Super Ball/阪本奨悟」他



編集部月間ダイアリー (Jan21－Feb22)

今年もいろいろ騒がしいですね
そうこうしてたら、
なんだかもうあったかい？

潜入！B-PASS 24時

B-PASS STAFFS >>> (よ)→吉崎 (は)→高橋 (す)→鈴木 (さ)→佐藤

mon	tue	wed	thu	fri	sat	sun
23 ●よ→Kalafina@渋谷O-EAST●す→ぼくりり取材(as19用)●	24 ●よ→黒猫チェルシー@渋谷WWW●さ→映画『無限の住人』試写●	25 ●よ→B.A.P@豊洲PIT●さ→Blu-BiLLioN取材●	26 ●編集会議●	27 ●よ→リスアニ!ライヴ@武道館●さ→映画『サクラダリセット』試写●	28	29 ●は→Age Factory@渋谷O-Crest●
30 ●よ&さ→表紙巻頭UVERworld撮影●す→映画『ひるなかの流星』試写●	31 ●さ→杉咲花取材(次号分)～『足跡姫』観劇●す→w-inds.取材●	1 ●さ→DP取材●す→映画『探偵はBARにいる3』会見●	2 ●は→flumpool取材～阪本奨悟撮影●す→三浦翔平×白濱亜嵐取材(as19用)●	3 ●よ→Fo'xTails@青山RizM●さ→大澤誉志幸取材(AA)●す→村上虹郎～松岡広大(as19)～lol取材●	4 ●は→Mayday@武道館●す→浦井健治インタビュー(as19)●	5 ●は→大原櫻子取材～バニラズ@ゼップ東京●す→EXILE THE SECOND取材●
6	7 ●よ→LiSA取材●す→「アルジャーノンに花束を」会見●	8 ●は→アンカフェ取材●さ→風男塾取材●す&よ→宮野真守取材(as19)●	9 ●さ→野村周平取材(as19)～エレファントカシマシ取材(AA用)●す→浦井健治撮影(as19)●	10 ●は→雨のパレード取材●よ→the GazettE取材～UVERworld@さいたまスーパーアリーナ●	11 ●さ→フォーリミ@武道館●	12 ●さ→蒼井翔太@代々木第一体育館●す→矢田悠祐取材●
13 ●は→Ivy to Fraudulent Game取材～遊助取材●よ→OLDCODEX取材●さ→瀧川ありさ取材●す→スカパラ取材(AA用)●	14 ●は→96猫～ベリグ取材～ビクターライヴ●よ→KenKen取材●さ→吉沢亮取材(as19)～フォーリミ取材●す→平埜生成取材●	15 ●は→竹原ピストル取材(AA用)●よ→GRANRODEO密着取材(次号用)●す→中村倫也～萩原利久取材(as19)●	16	17 ●さ→吉澤嘉代子取材～ЯeaL取材●	18	19 ●校了その1●
20 ●校了その2●す→GENERATIONS取材(次号用)●	21 ●さ→斎藤工取材(as19)●	22 ●さ→中川大志・千葉雄大取材(as19)●す→映画『3月のライオン』取材～GACKT取材(次号用)●	B-PASS ツイッター http://twitter.com/BP_30th			

EDITOR'S COLUMN >>>

真冬のヘリポートでのオールナイトロケという、あらゆる面ですごすぎる撮影現場にお邪魔してきましたよ。詳しくは次号で!　(よ)



結局、あんまり行けなかったが、今年は去年よりかは。ただちょっと他のものは控えて、気をつけようと思ったり。あとはあれか。(は)



花粉との闘いですが、早く春になってほしいな●ただいまawesome!最新号、続々と取材中♪ よろしくお願いします!（す）



今月もまた、よい初武道館公演を観せていただきました。しかしあっという間に2月が去って行ってつらい。来月頑張ります。(さ)



〈次号予告〉 B-PASS 5月号は3月27日(月)発売

表紙巻頭特集 **GRANRODEO**

登場予定アーティスト **SPYAIR　GACKT　三浦大知　遊助**

ORANGE RANGE　GENERATIONS from EXILE TRIBE

and more

※こちらは“予定”です。変更になることもありますので、ご了承下さい。

BACKSTAGE B-PASS
2017 APRIL No.374
定価 860 円（本体価格 796 円）

発行人／草野夏矢　編集人／吉崎美也子　発行日／2017 年 2 月 27 日（第 33 第 4 号通巻 467 号）
発行／株式会社シンコーミュージック・エンタテイメント
〒101-8475　東京都千代田区神田小川町 2-1　HP ● http://www.shinko-music.co.jp
営業部　☎ 03（3295）4191
B-PASS 編集部　〒101-8450　東京都千代田区神田錦町 1-14　☎ 03（3292）2868　FAX 03（3292）3283
●編集長／吉崎美也子　●副編集長／高橋波奈子　●編集スタッフ／鈴木明日香　佐藤 恵
広告のお問い合わせは （株）シンコーミュージック・エンタテイメント広告部　☎ 03（3293）3791

BACKSTAGE B-PASS

New Era®
Bags & Packs

Direction & Text ⇒ 曽根原興史 (KONA)
Photo ⇒ 薮内努 (TAKIBI)
Styling ⇒ 黒川慎太郎
Design ⇒ FLAG GRAPHIC DESIGN Inc.



雨にも負けない最新モデル

多彩なバリエーションも魅力的な、New Era®のバッグ・コレクション。豊富な新色の中で、今季特に大きな注目を集めているのがターポリン素材をフィーチャーしたモデルたち。ナイロンに軟質塩化ビニールの合成樹脂で作られた薄いフィルムを挟み込んだことで生み出される耐水性は、雨の日の強い味方になってくれるはずだ。



New Era®のバックパック［Light Pack］¥10,000、同キャップ［9TWENTY™］¥4,200、同フーディ［Sweat Pullover Hoodie］¥12,000（税別／すべてニューエラ）、その他・スタッフ私物

Light Pack

Size　*W300 x H460 x D230mm (24L)*
Color　*Tarpaulin*
Fabric　*Nylon*
Price　*¥10,000+Tax*

耐水性の強い止水ジップを採用

タウンユース向けのバックパックとして今季デビューした［Light Pack］は、外側に大きなポケットのあるカジュアルなルックスだが、ラップトップPCを保護してくれるクッション性の高いインナー・ポケットを装備するなど機能性は確か。メイン収納部には止水ジップを採用。ターポリンとのコンビネーションで、より耐水性が高められた。



Rucksack

Size W320 x H670 x D240mm (28L)
Color Tarpaulin
Fabric Nylon
Price ¥12,000+Tax

アウトドアシーンでも活躍必至

ひと際目を引く大きなカバー・ポケットに、型崩れを気にせず[59FIFTY®]を収納するためのキャップ・プロテクターが標準装備されるなど、ヘッドウェアの携帯性も意識された[Rucksack]。快適な背負い心地を実現するアウトドア・テイストの強いルックスにターポリンを採用したことで、New Era®らしい機能美にさらなる磨きがかかった。



New Era®のバックパック[Rucksack]¥12,000、同ハット[Adventure]¥5,500、同シャツ[Baseball Shirt]¥12,000、同フーディ[Sweat Pullover Hoodie]¥9,000(税別/すべてニューエラ)、その他・スタッフ私物



New Era®のトート・バッグ［Tote Bag］¥13,000、同ショルダー・バッグ［Shoulder Bag］¥8,000、同キャップ［9THIRTY™］¥3,800、同コーチ・ジャケット［Coach Jacket］¥12,000、同シャツ［S/S Button Down］¥11,000（税別／すべてニューエラ）、その他・スタッフ私物



Tote Bag

Size *W380 x H350 x D170mm (22L)*
Color *Tarpaulin*
Fabric *Nylon*
Price *¥13,000+Tax*

悪天候にも対応するトートモデル

ショルダー・バッグとしても活用できる2-Way仕様の［Tote Bag］は、内部にポケットやフックを配備するなど、収納物の整理整頓にも配慮がなされたディテールを持ち、ビジネスからアウトドアまで、あらゆるシーンで活躍してくれる。ファスナー式の上蓋が採用されており、耐水性の高いターポリン素材とともに雨の侵入を防いでくれる。

Shoulder Bag

Size *W270 x H245 x D140mm (9L)*
Color *Tarpaulin*
Fabric *Nylon*
Price *¥8,000+Tax*

ちょっとした外出のお供に最適

コンパクトなデザインが魅力の［Shoulder Bag］は、［Cap Clip］用のクリップ・ループをはじめ、小ぶりながら内部に多機能ポケットやフックを配備するなどNew Era®らしい気の利いたディテールが数多く搭載されている。旅行時のサブ・バッグとしても人気のこのバッグも、ターポリンなら天候を気にせず気軽に持ち出せるはずだ。



Smart Pack

Size *W330 x H480 x D160mm (22L)*
Color *Tarpaulin*
Fabric *Nylon*
Price *¥13,000+Tax*

シーンを問わず活躍する機能派

箱型のシルエットで有効的にスペースを確保した[Smart Pack]は、お馴染みのクリップ・ループやクッション性のあるインナー・ポケットなど、New Era®のバッグ・コレクションにおける標準的な機能を備えた定番。ターポリンならではのマットな質感に仕上げられた本作は、カジュアルからビジネスまで、あらゆるシーンにマッチする。



New Era®のバックパック[Smart Pack]¥13,000、同キャップ[59FIFTY®]¥7,000、同スウェット[Sweat Crew Neck]¥8,000(税別/すべてニューエラ)、その他・スタッフ私物

●問い合わせ　ニューエラ　tel.03-5773-6733　neweracap.jp



Anly+スキマスイッチ=3人で生み出した光

世代もキャリアも違う2組がコラボレーション。Anly+スキマスイッチ=として、シングルをリリース。
ドラマ『視覚探偵日暮旅人』エンディングテーマとしてオンエア中の「この闇を照らす光りのむこうに」。
ちょっと意外なこの顔合わせ、お互いの出会いから、曲作り、REC、完成に至るまでを3人に聞いた。

Text ⇒ 伊藤博伸

スキマスイッチで僕らがやっているのと似ていましたね。そこにアイデアマンがひとり増えたみたいな感じで、おもしろかったです

■Anlyはスキマスイッチの音楽を伊江島で暮らしていた頃から聴いていましたか?

Anly「聴いていました。ラジオから流れてきたり、知り合いの方が聴かせてくれたり、ピアノの教室で弾いている人がいたり。いろんなところで聴いていたので、私にとっては憧れの人です。ドラえもんの主題歌(「ボクノート」)はよく聴いていましたね」

■「ボクノート」は2006年の曲だから、Anlyが9歳の時?

Anly「9歳になったばかりの頃ですね。ランドセル背負って歌っていました」

常田「10年前に、小学生って。僕らには、ついこの間という感覚だけどね(笑)」

■スキマスイッチはAnlyのことを知っていましたか?

大橋「正直僕らは知らなくて。今回のコラボのお話をいただいた時に、どんなアーティストさんなんだろうなと思ってリサーチしてみたりはしましたね。19歳、若いね!と。あとは資料のCDを聴いて」

■CDを聴かれた時の感想は?

大橋「今の音楽シーンの中で、本格派という言葉がぴったりなアーティストだなと思いましたね。真正面から音楽と向き合ってやっている。CDを聴いた時もそうだけれど、いろいろ調べて、ライヴのスタイルを見ても、芯のあるアーティストだなという印象でしたね」

常田「若いのに、すごいポテンシャルを持っているなというのが最初の感想でした。ただそれを自分がやりたくてやっているのか、やらされているのかで、僕たちの関わり方も変わると思って。Anlyちゃんとやるんだけど、いろんな人が入ってきちゃうことも考えられるなと。でもライヴ映像でルーパー(ギターのフレーズを繰り返し重ねて録音／再生し、ループすることで、ひとりで様々なパフォーマンスを実現するエフェクター)を使いながら、自分のサウンドを構築しているのを見て、彼女は本当に音楽が好きでやっているんだな。それを周りのみんなが温かく見守りながら一緒に音楽を作っているんだなと感じたんですね。それは、実際に会ってみて再確認したというか。すごい芯が強くて、自分の意見を持っているなと思いました」

■17歳の時にルーツミュージックがブルースやトラディショナルなロックだという話を聞いて、この若さで!?と思ったと同時に、彼女自身のやりたい音楽スタイルにブレがなくて、それが今に繋がっていると思うんですね。

常田「流行りがどうこうじゃなくて、自分が好きになる音楽ってありますよね。育った環境も影響すると思いますし」

Anly「そうですね。伊江島も、お父さんの影響も大きかったです」

■という2組の今回のコラボレーションについて、きっかけから聞かせてください。

大橋「最初にこの話をいただいた時の情報では、プロデュースというよりも、ダブルネームで楽曲を共作するということだったので、まずはAnlyちゃんに会って、何がやりたいのかを話したいと思ったんです。共作から話が始まったとしても、もしかしたらプロデュースということになってもいいし。会社レベルで決まっていることがあるかもしれないけれど、それよりもアーティスト同士が話をして決めたいと思ったので、一度会って話をしようというところから始まりましたね」

■Anlyはスキマスイッチのおふたりに初めて会った時はどんな感じでした?

Anly「会議室で初めてお会いしたんですけれど、面接みたいな不思議な感じで(笑)」

大橋「そうだったね。楽器があるスタジオみたいなところでざっくばらんにやればよかったなと、後から思ったけどね。会議室で大人たちがたくさんいて。どうして僕らと一緒にやりたいと思ったんですか?とか、単純に聞きたいことを質問しているだけでも、きっと威圧感があったんじゃないかな」

Anly「なぜこの会社に入社したいと思ったんですか?みたいな(笑)」

常田「そんなつもりもなく、ざっくばらんにどうですか?と聞いたつもりなんだけどね」

■その時、Anlyはどう答えたんですか?

Anly「今まではロックな曲も多いんですけれど、私の中には柔らかい曲もあって。そういう曲をたくさんの人に届けたいなという部分もあるんですね。柔らかい中にもまっすぐな強さみたいなものを感じるアーティストさんって誰かな?と考えた時に、スキマスイッチさんだ!と思って。スキマスイッチさんのピアノの音色も私はすごく好きなので、ピアノの音に触れられて、一緒に曲作りができるなら、スキマスイッチさんがいいです!という話をさせてもらったんです」

■制作はかなりタイトなスケジュールで行なわれたのではないかと想像できます。スキマスイッチはリアレンジ・アルバム『re:Action』(2月15日発売)と同時進行だと思いますし。どのように進められたのでしょうか?

常田「最初に確認したのは、伊江島から東京に来ることはあるのかということでしたね。1回だけ、となったらちょっと状況は違ったかもしれないです。僕らとしては、やっぱりデモ音源も歌詞も、たたき台ができるまでは複数回会った上で、一緒に作っていかなきゃいいものはできないぐらいの気持ちだったので。結果的には3、4回、僕らがいつも使っているスタジオまで来てくれて作業もできたし。それ以外にも、他のスタジオで偶然会って話せたよね。僕らが下のスタジオで、Anlyちゃんが上のスタジオを使っていたんですよ」

Anly「スタジオのドアのガラスのところから、ずっとのぞき込んでいる人がいて。出前の人かなと思っちゃって(笑)。そうしたら〝スキマスイッチさんが来ているよ〟と言われて、えーっ! 出前の人じゃなかったんだって(笑)」

常田「出前の人って(笑)。そこで歌詞の話ができたり。あと卓弥がAnlyちゃんに会いに行ってくれて、そこでも顔を突き合わせて歌詞をつめられたので。時間はタイトながらも、そうやって作れたのは大きかったと思いま



すね」

■実際に顔を合わせて曲作りをすると、どんなところが違ってきますか？

常田「温度感が違いますね。特に僕らはそこを大事に考えているので。僕ら2人でもなるべく会って作るようにしています。昔は完全に分担作業で作っていた時期もあったけれど、その時のものと、今できるものはやっぱり温度感が違いますね。今は僕らも会って作るほうがおもしろいなと思っているところなので、今回は絶対にそうしたいと思いました」

大橋「プロデュースはありますけど、今回のようなダブルネームでのコラボは初めてなんですよ。せっかくやるからには一緒に向き合って作ったほうが人の温もりみたいなものが作品に出るだろうし、化学反応も楽しめると思ったんですね。そこで最初に会った時に話したのは、不健全に、もやっとしたものが残らないようにしようということでした。Anlyちゃんとは、お互いアーティスト同士、一生懸命音楽に向き合っている姿勢は同じだから、もしも不健康になりそうだったら、勇気をもって今回は諦めようというところまで話していたので。だから逆に、すごく温度感のあるものができたんじゃないかと思います」

■そうして完成した1曲「この闇を照らす光のむこうに」。取っ掛かりは、どなたかがたたき台を作って、それをベースに曲にしていったのですか？

大橋「彼女が先陣をきってくれました」

Anly「ちゃんとメロディがあったわけではなくて。めずらしくピアノに触った時に出てきたフレーズの断片を3つ、スタジオに持っていって、これどうですか？と聴いてもらって。私は前奏にどうかなと思って弾いたんですけど、それがサビのメロディに広がっていったり。曲作りはそこからスタートしました」

■ピアノでメロディを作るのはめずらしいですよね？

Anly「今までなかったですね。ドラマ（『視覚探偵日暮旅人』）のあらすじを読んだ時に、ギターだと思い描いている感じじゃないなと思ったんです。イメージとしては、ずしっと重みのある音がほしい。もの哀しさみたいなものがほしいなと思ったので、ピアノでその感じをピロピロっと弾いてみたんです（笑）」

■大橋さんは、そのピロピロ（笑）を聴いてどう思われましたか？

大橋「すごくアーティスティックだなと思いましたね。ほんとにワンフレーズだったんですよ。思いついたメロディの断片というか、それを聴かせる時って、けっこう勇気がいると思うんですよね。それでも彼女は、その断片から広がる可能性を伝えたくて聴かせてくれたと思うんです。1曲丸々できていて、こんな曲はどうですか？ということだったら、また違うけど、このフレーズを思いついたんです！という出し方がすごくアーティスティックだなと思って。その後のレコーディング中にも、そういう部分を垣間見る瞬間が何度もありましたね。思いついたイメージを瞬間的に自分の中で整理して、それが伝わるか伝わらないかよりも、私はこういうイメージがあるんです！とまっすぐに伝えるところが」

■なるほど。

大橋「ピアノのイントロのメロディとして作ってきたというワンフレーズ。でもそれがあるのとないのとでは、全然違っていて。なるほど、





彼女はこういうイメージを持っているんだなというのが伝わっただけでも、曲を作っていく走りだしとしては、僕らにとっては大きな意味のあるワンフレーズでしたね」

■そのフレーズの断片からインスピレーションが湧いてきたということですね。

常田「そこからは早かったです。それまではどういうふうに進めていこうかと思っていましたから。その重い空気を破ったのは、〝ちょっと3人にしてもらっていいですか!?〟というAnlyちゃんのひと言でした。人払い的な（笑）。そこにいた全員がばーっとスタジオから出ていって、フレーズを聴かせてくれたんですけど、その空気の作り方がすごいなと思いましたね。そこで一挙に集中する空間になるじゃないですか。出てくる1音1音すべてを聴き逃すまいと、僕も卓弥もなるわけで。そこで出てきたフレーズを聴いて、なるほど！と思いましたね。Anlyちゃんは、そういうところを大事にしているんだなと」

■持ってきたフレーズは3つとも聴かれたんですか？

常田「聴きました。2つ目を聴かせてもらったら、さらによくて。それはここに使えるねという感じで曲を構築していく感じが、いつもスキマスイッチで僕らがやっているのと似ていましたね。さらにそこにアイデアマンがひとり増えたみたいな感じで、おもしろかったですね」

Anly「メロディは2日ぐらいでできましたよね」

常田「1日目で、ほぼ決まってきていて。2日目にコーラスのデモができるところまでいったからね」

大橋「理想的な作り方でしたよ。僕らが先に、こういうのでどう？と提示しちゃったら、同じ目線にならないというか。たぶんコラボとして成立しないと思うんですけど、彼女と一緒にギターを弾きながら、ピアノも加わって、意見のやりとりをしながら、最後まで続きましたから。3人で作った感じが、最後まで続きましたから」

■Anlyは、一緒に曲作りをして感じたこと、学んだことはどういうところですか？

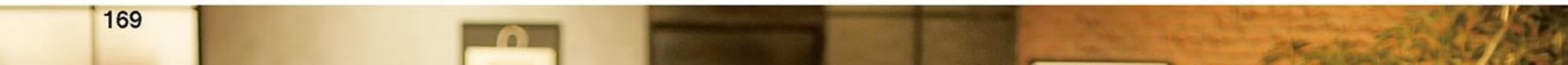
Anly「ひとりで曲を作っている時って、悩んでいて、ずっとしかめっ面しているんですけど、今回は最初から最後までずっと笑っていたなと思って（笑）。もちろん歌詞で悩んだり、このメロディはどうかな？と言いながらも、笑いながら作れたのは初めてでしたね。すごく楽しかったです。曲は暗めなのに、なぜか気持ちはすごく明るくて。Aメロを作っている時が一番楽しかったですね」

■AメロはAnlyの匂いがしますけれど？

Anly「Aメロの前半は自分で、後半がスキマスイッチさん。その混ざり具合が好きなんですよね。いつもひとりでやっていると、曲に関して、これが答えだというものが見えなくなることがあって。でも今回は導いてくださる方が2人もいたので、すごく心強くて。いろんな人の意見を聞きながら曲を作るっていいなと思いました。主観じゃなくて、俯瞰で物事を見るというのも、今回学んだことですね。特に歌詞に関して、今までは自分の目で見ているものばかりだったけれど、俯瞰で自分を見るという書き方を学びました」

■歌詞については、はじめにテーマを決めてから書き始めたのですか？

大橋「そうですね。はじめにワンコーラスの中で、Anlyちゃんと僕が歌うみたいな作り



方よりも、1番、2番をそれぞれが歌うという分け方にしようと話していて。だったら自分が歌うパートは、自分で書こうということになったんです。たたき台を作るにあたって、キーワードがあるほうが歌詞に一本筋が通ると思ったので、ドラマのテーマでもある〝目〟をキーワードに書いていこうというのは最初に決めましたね。歌詞はけっこう時間がかかりました。書き分けた時に、Anlyちゃんがずっと気にしていたのが温度感で。それで1回緊急会議を開いたよね」

Anly「真夜中に」

大橋「僕は違う現場でスキマスイッチの作業をしながら、この歌詞も同時進行しなければいけなくて。このままだとちゃんと着地せずに、路頭に迷ったままになると思ったので、深夜0時近かったかな、〝Anlyちゃん、今どこにいるの？　可能だったら、会って話をしたほうがいいと思うんだ〟と言ったら、今、作業部屋にいるということだったので、そこで急きょ話し合ったんですよ。歌詞にしたいことを図解にして（笑）」

■ずいぶんアナログですね（笑）。

大橋「そう（笑）。このへんの目線から見ている歌詞にしようよ、って言いながら図にして」

Anly「それまで私は主観的に見ていたんですよ。それを神様目線にして」

大橋「神様目線にすることで統一感が出るんじゃないかという話になってからは、方向性も固まって、温度感も同じくらいになっていって。そこから3人で集まって、すりあわせて、ブラッシュアップしていったんですよね」

■そうやって完成した歌詞をみて、今、客観的にどう思いますか？

Anly「やっぱりスキマスイッチさんのサビの歌詞はすごいなって思います。画が見えるというか。歌詞の中に出てくる〝輪郭〟という、私が使いたいなと思いながらも使えなかった言葉もあったり。あとは1曲全部自分で歌ってみたんですけど、大橋さんが歌っているところが、自然と大橋さんみたいな歌い方になっちゃってて（笑）」

大橋「へぇ、自分で歌ってみたんだ！」

Anly「大橋さんの歌が耳に残っていて。影響力がすごいなって（笑）。あと大サビで声が混じり合うところがすごく良くて。ここでやっと差し伸べられた手をつかむ感じというか、光のむこうに抜け出しそうだぞ！みたいな感じがすごく出ていて、好きです」

■そこに出てくる〝やさしさは「許す」ということ〟という歌詞はどなたから出てきたアイデアですか？

大橋「これはAnlyちゃんから出てきたワードです。この曲の肝になっていますよね」

Anly「私のまわりにいる人たちを、なんでやさしく感じるんだろうと思った時に、自分がやったことを許してくれて、次にまた頑張りなさいと言ってくれたりとか。許しということで私を包み込んでくれるから、私は好きなことができているし、自分も穏やかでいられると思ったので。それと自分を許すことも必要だと思ったんですね。なんであんなことを言っちゃったんだろうとか、いつまでも自分を責めたりしないで、許すことも必要だよっ



自分を愛することは他人を愛することへの始まりだと思うので、そこは最後のサビに入る前に一番伝えたかったことでした

て。自分を愛することは他人を愛することへの始まりだと思うので、そこは最後のサビに入る前に一番伝えたかったことでしたね」

■アレンジに関して大事にしたのはどんなところでしょうか？

大橋「実際にスキマスイッチのアレンジを形にするのはシンタくんですけど、いつものスキマスイッチの作業にAnlyちゃんも加わってやったような感じでした。3人で話し合う中でも最初から、洋楽のテイストがなくならないようにできたらお互いの良さが出るんじゃないかとは言っていましたね。音を重ねていく時に、Anlyちゃんもはっきり意見を言ってくれて。特にストリングスを入れる時は」

常田「〝こんなに明るくなると、ちょっと違うと思うんです！〟って言ってたよね」

大橋「Anlyちゃんが一番気にしていたのは、明るくなりたくないってことでしたね」

■闇を照らす光、ですからね？

Anly「はい。最後の最後に、光が見える感じでいきたかったので。こういうピアノの音がいいなとか、やっぱり明るくなりたくないなというイメージが強くあったので、はっきりと言っちゃってました（笑）」

大橋「Anlyちゃんが言ってることもわかるんですよ。ただパソコン上で擬似的に入れたストリングスなんで、〝最終的には生ストリングスに差し替えるから大丈夫だよ〟と言っても、〝ほんとに？〟という顔をしますから（笑）」

Anly「できあがったら、私のイメージ以上になっていました。思っていたような明るさはなくて、壮大さというか包み込むようなイメージになっていたので、あぁ良かったって。素敵な音、ありがとうございます！（笑）」

常田「僕らもそうやって言ってもらったほうがやりやすいですし。イメージを作る上でも、3人いたらブレブレになってもおかしくないじゃないですか。でもそこはずっとイメージを伝えてくれていたので。Anlyちゃんは、すべての楽器の音色もずっと気にしていましたから」

大橋「さっき今回はずっと笑顔で作っていたと言っていましたけど、けっこう、しかめっ面の時もあったよ（笑）」

Anly「ありました？　あったとしても、いつもとは笑顔の割合が違うんですよ（笑）」

大橋「ほんとAnlyちゃんはわかりやすい（笑）。明らかにイメージと違っていると、それをどう伝えるのか迷っている時の顔が、しかめっ面になるんだよね（笑）。でもこのまま進まれちゃマズイから、〝ちょっと待って〟って」

常田「たまにウソついて、〝いいです、いいです〟って言うんだよね。でもそれ、ほんとは絶対よくないんだよね」

Anly「エンジニアさんにも、〝ほんとにいいの？〟って言われてました（笑）。〝じゃ、やり直します！〟みたいな（笑）」

■歌入れはいかがでしたか？　最後のフェイクは同じブースで一緒に？

大橋「もちろん一緒に。最初に歌った瞬間、一発目でよくそんなに声が出るなと思うくらいに出ていて。僕の歌の1億倍くらい出てましたね（笑）。僕の1本目は、これで今日歌を録れるの？ぐらい声が出ないですから（笑）」

常田「しきりにブースの中で、〝俺はAnlyちゃんと違うから、徐々に上がっていくタイプだから〟って言ってました（笑）」

Anly「大橋さんは歌っていて、今、来た！っていう時がありますよね」

大橋「そう、喉が開いた時がね。自分でも自分の喉がいつ開いていくのかわからないんだよね。2、3本目の早い段階で開いてくれる時もあれば、全然開かないまま録らずに終わる日もあったりして。そういう時はシンタくんが止めるんだけどね。けっこう残酷な感じで、〝今日は録れないよ！〟って言われる。Anlyちゃんには、そういう心配は一切ないだろうな。それはただの若さではなくて、ヴォーカリストとしてのポテンシャルの部分だと思いましたね」

常田「プリプロ作業の時に、Anlyちゃんが歌いだした第一声で、これはちゃんとやらないとヤベーなというのを僕は感じました」

大橋「もっと適当にやろうと思っていたんですけどね。冗談ですけど」

Anly「ははは（笑）。ほんと、すごく楽しいレコーディングでした。私にとって10代最後のレコーディング、20歳になって初めての作品でもあるので、すごく思い入れが強いんです。きっと今後はいろんなことが起きるんだろうなと思っていて。楽しいことも、うれしいことも、悲しいこともあるだろうけど、そういう時に手を引っ張ってくれるような素敵な曲ができたなと思っています。おふたりと、こんなに壮大な曲を作ることができて、とっても誇りです！」

New Single
この闇を照らす光のむこうに
2017.03.01 Release
初回盤 CD+DVD ¥1,574（tax out）
通常盤 CD ¥1,111（tax out）



01. この闇を照らす光のむこうに
02. イギリス / Anly
03. カラノココロ Acoustic Version / Anly
04. この闇を照らす光のむこうに Instrumental

Anly ⇒
アンリィ。1997年1月、沖縄・伊江島生まれ。高校進学のために転居した那覇市内で弾き語りライヴをスタート。'15年11月25日に1stシングル「太陽に笑え」でメジャー・デビュー。'17年1月18日に4thシングル「カラノココロ」をリリースした。

スキマスイッチ ⇒
大橋卓弥（おおはしたくや）、常田真太郎（ときたしんたろう）のソングライター二人からなるユニット。'99年結成。'03年7月、シングル「view」でメジャー・デビュー。敬愛する12組のアーティストをプロデューサーに迎えたリアレンジ・アルバム『re:Action』を'17年2月15日にリリースしたばかり。





風男塾

My dear soul mate

新たな伝説を作った中野サンプラザ公演を終えて、虎次郎・浦正のラストシングル「証-soul mate-」のリリース……着実に迫る別れも、今は前向きに受け止めることができる。そんなネクストレベルへの助走段階の彼らに話を聞きました。同志の絆は永遠です。

Text ⇒ 吉田可奈　Photo ⇒ 森崎純子





■「証-soul mate-」のリリースイベントは、すごく盛りあがりましたね。

仮屋世「ウィークリーチャートは2位という結果だったんですが、ファンのみなさんが一緒になって〝テッペン(1位)を獲ろう〟という気持ちになり、一つになった感覚をしっかりと味わえたんです。ファンのみんなとも一緒に戦っているという絆を感じることができたんですよね。俺達がテーマにしてきた〝With You!〟ってこういうことなんだって、あらためて感じました」

青明寺「中野サンプラザの公演で、俺が〝テッペン獲れよ〟と言ったことで、みんながすごくひとつになったんですよね。過去に俺と虎次、光黄しか、デイリーの1位を経験したことがないから、他のメンバーにも経験してほしかったし、できるなら、ウィークリー1位も経験してほしかったんです。でも結果は2位。俺らとしては悔しいけれど、本当に満足しているんです。結果も大事だけど、この高揚感や、一体感をみんなに伝えるプロセスが伝えられたことが、大事だと思っていたので」

瀬斗「〝テッペン獲れよ〟はグッときたよね」

青明寺「過去のライヴの〝いい男〟で、俺が〝テッペン獲るぞ〟と曲中で叫んでから、そこで俺が何かを言うようになっていたんです。今回は前々から言うことを考えていたのではなく、瞬発的に〝テッペン獲れよ〟って出てきたんですよ。そしたら、来音が飛びついて来て、ステージから落ちそうになって(笑)」

仮屋世「もう飛びつきたくなっちゃって!」

愛刃「それを見たら勝手に涙が流れてきたんです。このメンバーでツアーを廻るのが最後だと思ったらボロボロ泣いちゃって……」

瀬斗「俺もダメだと思って、逃げたの!」

青明寺「あはは! 逃げてた! 1人だけ違うほうに走って行ったよね。それは発売されるライヴ映像で確認してください(笑)」

瀬斗「これから、あの一言は誰が言うの?」

赤園「もう最初から録音して入れとけば? SEのボタンを押したら出てくるみたいな」

愛刃「それいいね! LINEスタンプにしたい! 〝テッペン獲れよ!〟って(笑)」

赤園「使いどころが限られるけどね(笑)。それにしても、今回のツアーは、俺と浦正が卒業を発表してはいたんですが、それを忘れるくらい楽しかったです。中野サンプラザはもちろん、最後のリリースイベントでの声援は、一生忘れないと思う。すごく濃い期間でしたね」

瀬斗「今回、デイリー1位を獲ったのは6年振り。アイドルグループを10年もやれていることがすごいことなのに、ちゃんと記録も出せるということは、あらためてファンのおかげだなって思うんです。二人が卒業したら、俺が最古参になるので、どんな風男塾を作っていけばいいのかを毎日考えています」

青明寺「最古参って、ファンみたいだね(笑)」

瀬斗「そうです。俺が最古参です(笑)。あまり引っ張っていける自信はないんですが、また新しい風男塾になるとは思います」

青明寺「ある意味、楽しみじゃない?」

瀬斗「そうなりますように!」

青明寺「〝星に願いを〟じゃないんだから(笑)」

愛刃「でも、願いを口にするのはすごく大事。今回、ファンの人たちも、泣きながら1位を獲ってほしいって握手に来てくれたんです。俺らもその分、ランキングにすごく敏感になっていたし、みんなで叶えたいって心から思ったん

ですよ。これから先も、また俺らでファンの人たちを願う場所に連れていってあげたいという気持ちが大きくなりました」

青明寺「ここまで2位を悔しがれるのは、1位が見えていたから。すごくいい経験だったね」

藤守「最初に虎次くんと浦正くんが居なくなると知った時はすごく寂しかったし、どうしていいかわからなかったんです。でも、今回みんなと一緒にテッペンを目指したことによって、次にどうしたいかというのが明確に見えたんですよ。こんなに悔しいと思うなら、いつか風男塾は1位を獲るという目標を俺らが引き継いでいかなくちゃいけないと思いました」

青明寺「怜生がそう言ってくれるのが、一番嬉しい。いま、そう思ってくれているなら、すごく安心するよ」

■ちなみに、今回のツアーでは、健水くんが仕切っていましたよね。

愛刃「そうなんです。きっと、ファンの人たちも心配だったと思うんですけど、なんとか乗り切れました（笑）。中野サンプラザのときは、虎次くんが仕切ってくれたけど、これまでだったら緊張でしゃがみこむようなところでも、しゃがまなくてもできるんじゃないかと思えたんです。しゃがんだけど（笑）」

赤園「すごく成長したよね。ここまでになれば、きっと、これからうまくバトンタッチできると思うんです」

愛刃「が、がんばります（笑）」

■1月リリースのシングル「証-soul mate-」についてあらためてお聞きしたいのですが、本当に素敵な曲になりましたよね。

仮屋世「もう、大好きです！　ファンの人は、歌詞を読んで、メンバーが気持ちを込めた歌を聴いてくれたら絶対にわかってもらえると思うんです。でも、まだ風男塾を聴いたことがないという人にも聴いてもらいたいんです。渋谷の街頭ビジョンで流れてたら、〝渋谷の街の人！　聴いてくれ！〟って思うくらい、多くの人に聴いてもらいたい曲なんですよ。それぞれ家族や恋人など大事な人と重なる歌詞があると思うので、何度も聴いてもらいたいです」

■どんな風景を思い浮かべましたか？

仮屋世「メンバーみんなが目を合わせて円になって歌っている姿が目に浮かびました。このメンバーで歌えて本当に良かったですね」

青明寺「正直なところ、僕たちの卒業ソングにもなるので、（プロデューサーの）はなわさんに作ってもらいたかったという気持ちはあったんです。でも、最初にこの曲を聴いたときに、なんて失礼なことを考えたんだろうって思い直したんですよ。今作を作ってくださったElements Gardenのみなさんは、風男塾を心から愛してくれて、思ってくれたからこんなに素敵な曲ができたんだと思うんですよね。その素敵な曲を、より素敵に伝えるためにパフォーマンスをしなくちゃいけないと思ったんです。〝イノセント・ラバー〟も、俺らのことをわかってくれているからこそ書けた曲。いまの風男塾の曲として愛してもらえたら嬉しいですね」

瀬斗「〝星屑の雫〟のレコーディングはすごく難しかったんですが、ライヴで歌うと感情移入がすごくしやすかったんです。実はこの曲は、〝残るメンバーから二人に向けた曲です〟と言われていたんですよね。そう考えて歌ったら、さらに泣きそうになることが多くて……。でも泣いたら歌えなくなるから、こら







えながら歌っていました」

青明寺「泣いてもいいのに！」

瀬斗「ううん、こらえた！　いろんな感情がつまった1枚になったよね。でも3月の卒業公演は泣いちゃうんだろうな……」

愛刃「ダメダメダメダメ！　考えちゃダメ！　当日は目を取って洗うくらいの勢いだから」

赤園「あはは。じゃばじゃば洗わないとね（笑）」

愛刃「そういえば、俺の誕生日に友達とゲームセンターにいったんですよ」

青明寺「高校生かよ！」

愛刃「高校生みたいなことをしようってなったんです（笑）。そこでこの〝証-soul mate-〟が流れてきてすごく驚いて！　メッチャええ曲やんって再確認しながらも、周りにいた学生たちに重ねて聴いてみたんです。そしたらすっごく良かったんですよ。これは風男塾関係なく、いい曲だなって思ったんです。さらに曲の後半に、変化球みたいな音が入っていて、それがまたドラマティックで泣けるんです。もう、ダメでした。ダメな曲です」

仮屋世「いい意味でね（笑）」

赤園「このシングルは、〝イノセント・ラバー〟で始まって、時が経つにつれて〝証-soul mate-〟のような関係になって、一致団結したなかで〝星屑の雫〟のようになる、ドラマを見ているような1枚になっているんです」

藤守「すごくドラマティックですよね」

愛刃「だから泣いちゃうんだよなぁ！」

藤守「俺もイベントでは結構泣いてました。〝証-soul mate-〟は、ハイファイブ（ハイタッチ）という歌詞があるんですが、それができるような結果が出てから、まだ実行に移せていないので早くやりたいんです。これからもそんな姿を見せ続けていきたいですね」

仮屋世「そうだね。俺らが引き継いでいかないとね」

藤守「自分にとっては、このメンバーの風男塾がいまのところすべて。先輩にもらったものがすべてこのシングルに詰まっているんで、しっかりとその想いを歌い続けていきたいです」

■頼もしいですね。さて、ついに3月で浦正くんと虎次郎くんは卒業になりますが、残るメンバーにメッセージをお願いします。

赤園「風男塾に入ったきっかけは、歌とダンスをしたいという想いだけだったんです。それから10年という間、小さな悔いはもちろんあるけど、全体的にみると、やりたいことはたくさんできたし、一人だったらできなかったこともたくさんできました。もっと見たかった景色は、他のメンバーに託していきたいと思います。あとは、メンバー一人ひとりが〝幸せな活動だ〟って思えるような活動をしてほしいですね。きっと、俺達が卒業したら、その分変わってくることはでてくるけど、絶対に順応していくから心配はしていないんですよ」

青明寺「みんなには、風男塾の楽曲さえ受け継いでくれれば、あとは壊してもいいって言っていて。俺と虎次が、10年でどんどん役割が変わっていったように、形が変われば新しい風男塾が完成していくんです。だからこそ、新しい風男塾の道を、楽しみながら歩いていてほしいですね。俺、もう孫を見ているような気持ちなんだよ！　何してもいい！　かわいい！」

藤守「俺、優しい子になります！」

仮屋世「おじいちゃん、大好き～！」

一同「（爆笑）」

Ⓑ



労いプラン No.1 決定戦

卒業の二人を一番喜ばせるのは!?

■虎次郎くんと浦正くんを労うなら、他のメンバーはそれぞれ何をしてあげますか?

愛刃「すっごい広い部屋を借りて、料理やシャンパンタワーも用意して、リムジンでお迎えする!　それで、ゲストは浦正くんが大好きな100人の女子アイドルと、虎次くん憧れのオーランド・ブルームがいるってどう!?」

青明寺「お持ち帰りはありですか!(笑)」

愛刃「双方の合意があれば!(笑)」

藤守「俺は、二人の家に温泉を引く!　引っ越したら新しい家にも温泉を引く!　一生温泉に入れるから痔になりません!」

赤園「すごいな……!　一生はすごいよ」

瀬斗「俺は現実的に、『モンスターハンター』の10万ゴールドと、はちみつ500個をプレゼントしちゃう!」

青明寺「もうちょい欲しいな〜」

仮屋世「二人を海外旅行に連れて行く!」

赤園&青明寺「どこに?」

仮屋世「飛行機で!」

赤園&青明寺「そりゃそうだろう!(笑)」

仮屋世「浦正くんは、世界中のエナジードリンクを飲み比べてもらうんです」

愛刃「それ、しんどいわ!」

赤園「逆に体調悪くなりそう(笑)」

仮屋世「虎次くんは、世界中のポテトチップスを食べ比べてもらいます!」

赤園「塩分すごそう……(笑)」

仮屋世「最後の目的地のハワイについたら、虎次くんは海辺でリラックスしてマッサージを受けてもらうんです」

愛刃「最後の目的地はハワイなの?(笑)」

赤園「その頃には、俺はポテチを食べ過ぎて、完全にワガママボディだよね(笑)」

仮屋世「浦正くんは、観光地が好きなので、勝手に廻ってもらいます!」

青明寺「待って、俺が観光地好きっていう情報はどこから手に入れたの?　言った覚えもなければ好きでもないし!(笑)　ていうか、俺もマッサージ受けたいよ!」

仮屋世「いや、エナジードリンクを飲んで、シャキッとしてるので大丈夫です」

青明寺「大丈夫……なのかな……」

仮屋世「最後は俺が連れて帰ります!」

藤守「自分で帰れなさそうだもんね(笑)」

赤園「絶対に来音のプランは嫌だな……。一位は怜生の温泉で!」

藤守「やったぁ!　うれしい!!」

愛刃「オーランド・ブルームはいいの!?」

赤園「それもいいけど、温泉が家にあったら商売できちゃうもん!」

青明寺「商売できるのはいいね!　俺も温泉にしよう」

■まさかの商売ができるが決め手(笑)。二人からプランを考えた怜生くんへのお礼は?

赤園「入浴券をただであげるよ」

青明寺「自分で温泉引いたのに(笑)」

赤園「いつでも入りに来ていいからね」

藤守「わ〜い!　毎日入りに行きます!」 Ⓑ

18th Single
証—soul mate—
2017.01.18 Release
初回限定盤A CD+DVD ¥1,435(tax out)
初回限定盤B CD+DVD ¥1,435(tax out)
初回限定盤C CD ¥1,213(tax out)
初回限定盤D CD ¥1,213(tax out)
通常盤 CD ¥1,000(tax out)



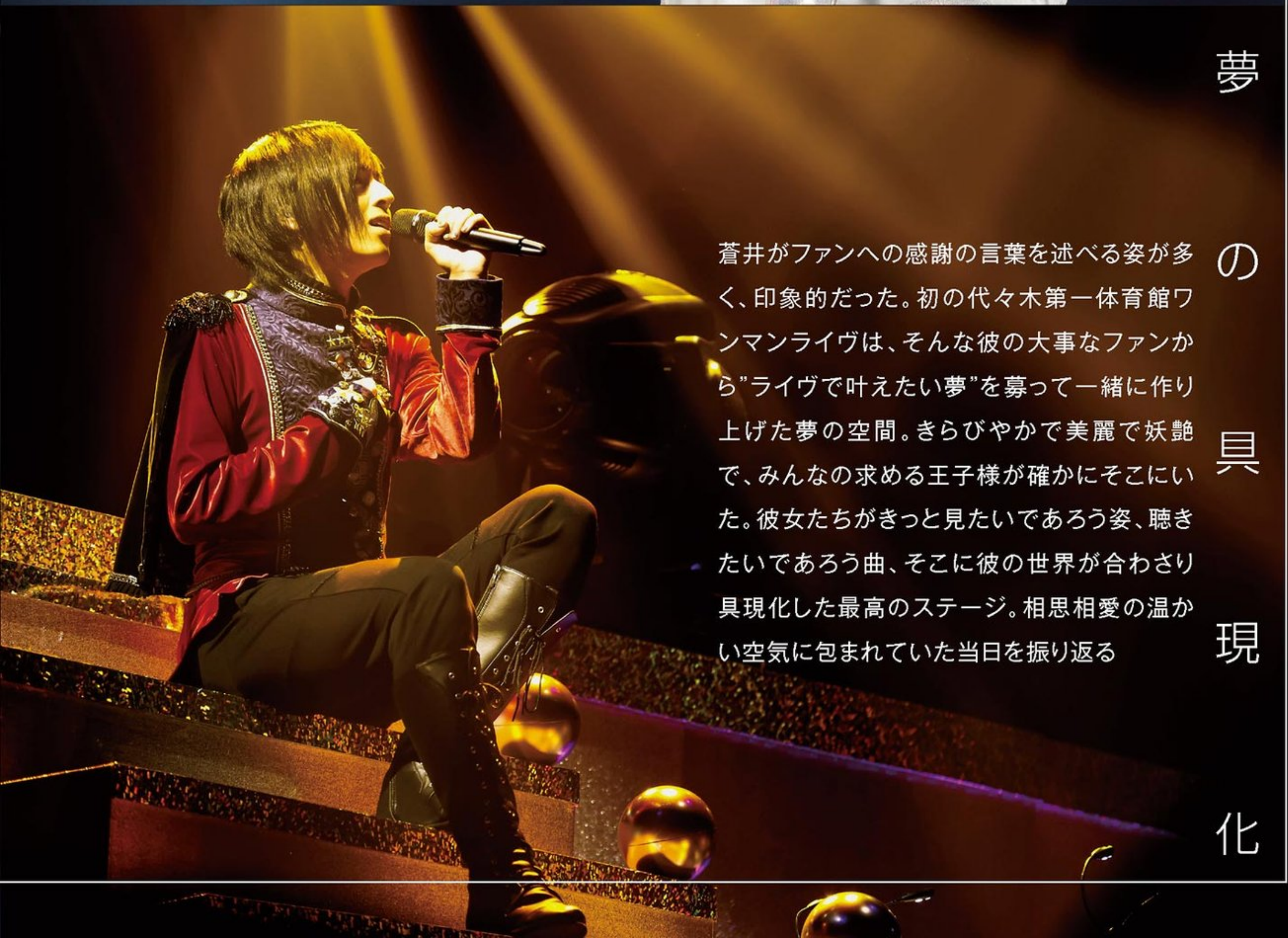
通常盤

[初回盤A·B CD]
01. 証—soul mate—
02. イノセント・ラバー

[初回盤C·D、通常盤 CD]
01. 証—soul mate—
02. イノセント・ラバー
03. 星屑の雫
04. 証—soul mate—(Instrumental)
05. イノセント・ラバー(Instrumental)
06. 星屑の雫(Instrumental)

風男塾 ⇒
ふだんじゅく。'08年シングル「男坂」でデビュー。6人組男装ユニット。'16年4月より新メンバー・藤守怜生が加入。初期メンバーの赤園虎次郎、青明寺浦正が3月17日の公演をもって卒業しネクストステージへ。3月22日に「風男塾ライブツアー2016-2017〜WITH+〜 FINAL 中野サンプラザホール」Blu-ray & DVDが発売される。





夢の具現化

蒼井がファンへの感謝の言葉を述べる姿が多く、印象的だった。初の代々木第一体育館ワンマンライヴは、そんな彼の大事なファンから"ライヴで叶えたい夢"を募って一緒に作り上げた夢の空間。きらびやかで美麗で妖艶で、みんなの求める王子様が確かにそこにいた。彼女たちがきっと見たいであろう姿、聴きたいであろう曲、そこに彼の世界が合わさり具現化した最高のステージ。相思相愛の温かい空気に包まれていた当日を振り返る

蒼井翔太 SHOUTA AOI

蒼井翔太LIVE 2017 WONDER lab. ~prism~
2017.02.12@国立代々木競技場 第一体育館

Text ⇒ 斉藤碧　Photo ⇒ 上飯坂 一













蒼井翔太

昨年5月に自身初となるベストアルバム『S』をリリース。今年1月には最新シングル「flower」をリリースし、ますます人気を加速させている蒼井翔太が、2月12日、国立代々木競技場第一体育館にてワンマンライヴ『蒼井翔太 LIVE 2017 WONDER lab. ～prism～』を開催した。今回のワンマンは、2月4日の大阪・オリックス劇場と東京の2ヵ所で実施され、2日間でトータル約1万2400人を動員。代々木競技場第一体育館には、約1万人もの観客が駆けつけていた。

定刻を少し過ぎた頃、オープニングムービーとして、絵描きに扮した蒼井翔太が自身の衣装をデザインしている映像が流れ始めると、客席がにわかにざわめき出した。そして、自分がデザインした衣装を満足そうに眺める蒼井の姿に早くも興奮の声が上がる中、そのデザイン通りの真っ白な衣装を身に纏った彼が、メインステージの中央に設置されたスノードームの中から登場。「みんな行くぞー!」そう声高らかに叫び、「north star」でライヴは幕を開けた。持ち味である透明感のあるハイトーンヴォイスでロックに攻め立てると、客席を埋め尽くしているブルーのペンライトの光りがリズミカルに波打つ。その光景はとても幻想的で、そのままの勢いで「DDD」と「絶世スターゲイト」を立て続けに披露した蒼井は、「全体がブルーでとても綺麗です。ありがとう!」とキラキラとした笑顔で客席を見渡した。

「今回のライヴのテーマは〝夢の具現化〟です。このライヴに対するみなさんの夢やお願いごとをおハガキで募集しましたが、このライヴでは僕がみなさんとこんな時間を過ごせたらいいなということをやっていきたいと思います!」最初のMCでそう語っていた通り、実験的ともいえる演出がたくさん用意されていた本公演。それゆえ、ステージの端から端まで移動しながら歌い上げた「イノセント」、6人の男性ダンサーと共にキレのあるダンスを見せつけた「UNLIMITED」……と、ここまでにも曲ごとに変わりゆく歌声やパフォーマンスに驚かされていたのだが、「Endless Song」(主演舞台『スマイルマーメイド』テーマソング)では、着物風の美しい衣装を身に纏った蒼井が観客の頭上をフライングしながら熱唱するという演出がなされ、ひときわ客席を沸かせた。その姿は、深い海を泳ぐ人魚のようにも、天高く舞う天女のようにも見え、妖艶な微笑みを浮かべながら袖をはためかせる蒼井の麗しさに、観客はうっとり。彼自身も、スクリーンに映る自分の姿を確認しては、「改めて、良い衣装(笑)」と自分で考案した衣装に見惚れ、笑いを誘っていた。

この日起こった機材トラブル中のMCでは、ステージにてんとう虫が乱入するという珍ハプニングが勃発した。大勢の観客に見守られる中、急に膝をつき「虫苦手なんですけど、このままだと踏んでしまいかねないので!」と一生懸命にてんとう虫を避難させようとする姿は、実に蒼井らしい一面だった。と思えば、「最近、(舞台で人魚姫の役などをやっていたので)〝蒼井翔太はそういえば男だった〟と言われますが(笑)。みなさんの中でいつまでも王子様であり続けたいと思います」と話す









と、「参ります！」の掛け声から、凛々しく「MURASAKI」に突入。「そいや！」と男らしい一面も覗かせるのだから、本当に多彩（多才）だ。さらに、続く「哀唄」では、センターステージの中央に横たわった蒼井の周りを男性ダンサーが舞い踊るという、万華鏡をイメージしたパフォーマンスも披露され、和風のサウンドと幻想的な演出のコンビネーションで観客を魅了。こういった和の世界観、女性目線の歌や中性的な見せ方というのも、やはり彼の大きな魅力なのだろう。

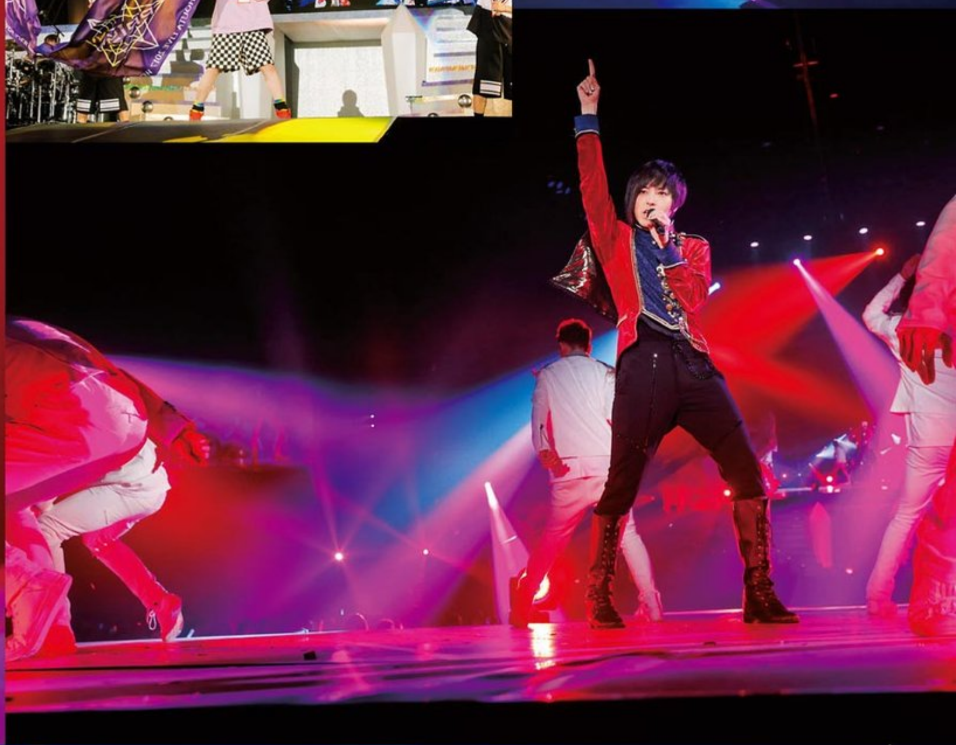
バンドメンバー&ダンサー紹介を挟んで迎えた後半戦。格好良く、麗しく、勇ましく……と次々に変化を遂げてきた蒼井だが、ここからはスポーティーな衣装にチェンジ！ 男性ダンサーと共に、チアリーダーのごとく、ポンポンやフラッグを使って元気を振りまいた「RUN!!RUN!!」、♪WOW WOW～の大合唱で一つになった「START!!」など、フレッシュなメッセージソングを届けていく。その胸には蒼井の年齢である〝29〟が大きく刻まれており、今年の8月11日には30歳の節目を迎えることを明かすと「30になったらより男子力を磨いていこうと思います！」と宣言。「いつも女子力が高いと言われていますけど……意外と男なんだよ?」とイケボで投げかける蒼井に、絶叫ともとれる歓声が上がっていた。

最初のMCで話していたように、本公演は観客から〝皆さんが『蒼井翔太 LIVE 2017 WONDER lab. ～prism～』に描く夢〟を募集した上で行なわれていたのだが、アンコール時にステージスクリーンに映し出されたたくさんのハガキ達を見ていると、寄せられた〝夢〟の中でも特に〝近くに来てください〟という願いがたくさんあったように思う。それを受けてか、後半戦中盤には、ファンのことを思って自ら作詞作曲したという「ずっと…」で、まるでメールのやりとりをしているようなハートフルなコール&レスポンスをしたり、トロッコでアリーナの周りを廻りながら「タッチ ツー テイク トリコ」を披露したりと、心も体もグッと近づく演出を連発。その様子からは、代々木競技場第一体育館という規模が生み出す距離感を飛び越えた、心の繋がりがたしかに感じられていた。観客の熱狂度はもちろんのこと、一人一人に手を振る勢いで笑顔を向ける蒼井の様子がとても印象的で、実にアットホームなひととき……。この会場にいる全員で夢の空間を創り上げているのだと、再認識した瞬間でもあった。

再びヴィジョンから絵描きに扮した蒼井の映像が流れ始めた。映像内で描いていたデザイン画を受けて、今度は赤いジャケットが凛々しい王子様スタイルの蒼井が姿を現わした。メインステージ中央にある階段にそっと腰を下ろし、「汝の言霊」をバラードバージョンで歌い始める。オレンジ色のライトが柔らかく照らすステージ、客席を埋め尽くす赤いペンライトの光、寄り添うようなピアノの音色……そこに丁寧に言葉を紡ぐ歌声が重なり、後方の席までまっすぐに想いを届けていく。その歌声は、〝圧倒的な歌唱力〟という言葉では言い表わせない、唯一無二の輝きを放っていた。また、客席からの凄まじい掛け声を全身に浴びながら、セクシーなロックチューン





蒼井翔太

「秘密のクチヅケ」に突入すれば、男らしくシャウトをしたり、艶のある歌声で色っぽく聴かせたりと、さまざまな表情で観客を惑わせていく蒼井。歌い終わり、口元にそっと指を当てキスすると、さらに荒々しく「S」へ。自ら拳を突き上げながらエモーショナルに歌い上げ、ラストスパートをかけていった。

「王子になってまいりました！」という一声で始まった本編最後のMCでは、「男の子（のファン）が増えて嬉しいです。お姫様にはなれないんだけど……え？　お姫様になってくれるの？（笑）」と観客と自然に会話するようにトークを展開。「いつまでもみんなの王子様でいさせてください」と優しく語りかけ、改めて「この時間を次の夢に繋げられるように、これからも頑張っていきたいと思います」と宣言すると、ラストは、最新シングルから「Checkmate」と「flower」を立て続けに披露した。

鳴りやまない〝しょーたん〟コールに呼び戻され、迎えたアンコール。突然鳴り始めたバンドサウンドと噴射された銀テープに驚かされたのもつかの間、「もっとみんなの近くへ行くよー！」という声が会場に響き渡る。だが、本人の姿はなぜか見えず……。皆がキョロキョロと会場を見渡していると、なんと今度は2階スタンド席の通路をトロッコに乗って移動する彼の姿が！　〝近くに来てください〟という観客の想いを受け止めた彼ならではのサプライズに、客席の至るところから歓声が沸き起こった。隅々まで通路を廻りながら、ライヴでおなじみの「SHOT A LOVE！」をはじめ「TRUE HEARTS」「Summer Dr











eam-in'」の3曲をメドレーで披露した蒼井は、「なんとかみんなの近くに行きたくて、2階席もトロッコで廻っちゃった！」とおちゃめににっこり。ステージへ戻り、2ndアルバムの制作決定や本公演のテレビ放送決定、ファンクラブイベントの開催といったお知らせを告げると、会場は温かい拍手で包まれた。「こうして喜んでくれる人がいないとお知らせもできないんです。本当にありがとう！」と感謝を述べ、アンコールのラストには、ミディアムバラード「Melodia」を。ライヴ中、幾度となくファンへの感謝を口にしていた蒼井だが、最後にもマイクを通さずに「誠にありがとうございました！」と生の声を届けると、深々とお辞儀をし、ステージを後にした。

声優としても活躍しながら、役者・歌手としても着実に進化し続ける蒼井翔太の1つの集大成となった、『蒼井翔太 LIVE 2017WONDER lab. ～prism～』。ここでのさまざまな実験を踏まえ、この先にどんな進化を遂げるのか？ 今後の展開も期待せずにはいられない。 B

Set List

01.north star
02.DDD
03.絶世スターゲイト
04.イノセント
05.UNLIMITED
06.Endless Song
07.愛のささめきごと
08.空は透明な誓い
09.MURASAKI
10.哀唄
11.RUN!!RUN!!
12.START!!
13.ずっと…
14.タッチ ツー テイク トリコ
15.汝の言霊（バラードバージョン）
16.秘密のクチヅケ
17.S
18.Checkmate
19.flower
Encore
20.メドレー
SHOT A LOVE!～TRUE HEARTS～
Summer Dreamin'～SHOT A LOVE!
21.Melodia

蒼井翔太 ⇒
あおいしょうた。8月11日生まれ。福井県出身。2013年6月ミニアルバム『ブルーバード』でデビュー。2016年初の武道館公演を成功させ、ベストアルバム『S』を発売。最新シングル「flower」を1月25日にリリースした。アーティスト、声優、役者など幅広く活躍している。

今、気になる人や作品の最新情報を紹介するこのコーナー。今月は、フレッシュなインタビューをお届け!

矢田悠祐 >>>

Text ⇒ 花倉有紀子



矢田悠祐 ⇒
やたゆうすけ、'90年11月16日生まれ。'12年に俳優デビュー。4月～5月には、ミュージカル『王家の紋章』(帝国劇場/梅田芸術劇場)再演に、前回に続きルカ役で出演する。

『テニスの王子様』『黒執事』『王家の紋章』といった話題のミュージカルに出演し、芯のある佇まいと心に響く歌声で注目される俳優・矢田悠祐。ダニエル・キイスの同名小説が原作のミュージカル『アルジャーノンに花束を』では、幼児並みの知能しか持たない青年チャーリィが手術によって人生を一変させる様を演じる。前任の浦井健治からバトンを渡されて挑む本作への並々ならぬ想いを聞いた。

■現在は舞台の稽古中だそうですが、手応えは?

「2週間ほど本読みと歌稽古をやって、芝居の細かい注文を受けてから立ち稽古に入ることができたので、しっかり下準備ができたと思います。ただ実際に立ち稽古に入ると想像とは違う部分もあって、日々難しさを感じてます」

■ご自身にとって初主演になるそうですね。

「演出の荻田(浩一)さんは"そこまで意識しないでいい"と言ってくださるんですけど、意識しちゃいます(笑)。そもそも初演、再演と高い評価を受けているこの作品を受け継ぐ責任もありますし、真ん中に立つ責任と両方を負うことになるので背水の陣というか(笑)、プレッシャーを集中力にしていきたいです」

最終的に悲劇だと思うかは人それぞれでしょうけど 僕はチャーリィは幸せだったと思います

■前任の浦井さんとは話をされましたか?

「配役が発表される時に連絡したら"矢田くんのチャーリィを作り上げてください"とおっしゃってくださいました。浦井さんのコンサートでも"次は矢田がチャーリィをやるのでよろしくお願いします"と言ってくださったそうで、ありがたいですね」

■役作りについてはいかがですか?

「浦井さんが出演した時の舞台の映像を観たんですが、初めの頃のチャーリィは子どものようだけどその中でもいろいろ考えていて、それがどんどん知能が高くなって周りのレベルを追い越していくんですけど、その変化の演じ分けが難しいなと思いました。荻田さんは"1人の人間が子どもから老人になるまで"と説明してくださったのですが、チャーリィの身体は大人のままだし、知能は上がるけど情緒面は追いつかないし、恋の仕方もいびつで。その辺りのアンバランスさも丁寧に演じたいです。ただ演じていても幼い時代はすべての芝居が全力なので大変です(笑)。子供は大人みたいにパワーをセーブできないから汗をかきます(笑)」

■歌に関してはいかがですか?

「30曲近くあってそのほとんどを歌うんですけど一生分の半音を歌ってるんじゃないかってぐらい難しい曲ばかりで、音取りに苦労してます(苦笑)。低音が弱いので歌唱指導の先生に出し方のコツを教えていただき、その通りにやってみたら低音が出やすくなって驚きました」

■物語の中で音楽にも変化があるそうですね。

「始めは童謡みたいな、ピアノで言うと白い鍵盤だけで作られたようなわかりやすい曲なんですけど、それがどんどん難しくなって後半のストラウス博士役の戸井(勝海)さんが歌う曲は2小節ごとに転調するんです。僕が一番好きな一幕の最後に歌う曲もキャッチーなんですが、歌うと思いの外難しくて……。でも斉藤(恒芳)さんの作る音楽は、物語の世界観を作ってお芝居を手助けしてくれるいい曲ばかりなのでやりがいがあります。荻田さんの歌詞も覚えやすくて、いつの間にかスッと頭に入っていました。いい歌詞が多くて、例えばチャーリィが賢くなる中で自分の過去の記憶が色付くことを"思い出に光が降り注ぐ"って表現していたり、素敵だなあって」

■この作品の魅力は何だと思いますか?

「人間のピュアな部分から嫌な部分まで包み隠さず描かれているところですね。SF的な要素も合わさってすごく考えさせられますよね。これを最終的に悲劇だと思うかは人それぞれでしょうけど僕はチャーリィは幸せだったと思います。賢くなりたくて手術をしてもらえて、一時的とは言えすごく頭が良くなって恋もして、嫌な想いもしたけど学ぶ楽しさを知れたのは彼にとって良かったのかなと」

■では作品に寄せて読者へメッセージを。

「稽古をしていても、魅力的な原作に素晴らしい曲が合わさった素晴らしい作品だと日々感じています。それを100%伝えるのが僕らの仕事なので、ぜひ劇場にお越しください」

■最後に2月8日にリリースされたばかりの2ndシングル「晴レ色メロディー」についても一言。

「表題曲はアニメ『SUPER LOVERS 2』の主題歌で、そのイメージにあった爽やかで背中を押すような明るい曲なんですけど、カップリングはまた違う雰囲気になりました。自作の"Baby don't cry"はバラードで、自分が歌いたいメロディに合う歌詞を付けながら楽しんで作れましたし、"till the morning comes"は僕がR&Bが好きなのでお願いして作っていただいた曲。僕の趣味がたくさん盛り込まれました。メインは役者ですが、今後も歌手活動を通して違う自分を見せていきたいです」 B

ミュージカル『アルジャーノンに花束を』⇒ 2017年3月2日(木)～3月12日(日) 東京・天王洲 銀河劇場、3月16日(木) 兵庫・兵庫県立芸術文化センター 阪急中ホール/原案・原作:ダニエル・キイス/劇作・脚本・作詞・演出:荻田浩一/音楽:斉藤恒芳/出演:矢田悠祐、蒼乃夕妃、皆本麻帆、吉田萌美、小林遼介、和田泰右、長澤風海、戸井勝海、水夏希/問い合わせ先:公演事務局 TEL 03-3492-5300

映画『探偵はＢＡＲにいる 3』製作発表会見

2月1日 東京・時事通信ホール



[L to R]松田龍平　大泉 洋　北川景子



映画『探偵はBARにいる3』の製作発表会見が東京・時事通信ホールにて行なわれ、キャストの大泉 洋、松田龍平、北川景子が登壇した。東直己の小説「ススキノ探偵」シリーズをもとに、北海道・札幌のススキノを拠点とする探偵（大泉 洋）と相棒である高田（松田龍平）の活躍をハードボイルドに描く本作は、第1作『探偵はBARにいる』（2011年公開）、第2作『探偵はBARにいる2 ススキノ大交差点』（2013年公開）と大ヒットを記録した人気シリーズ。前作から約4年ぶりとなる待望の最新作では、新ヒロインに北川を迎え、原作の要素を散りばめつつのオリジナルストーリーが展開される。会見では、撮影に向けての意気込みやアクションシーンを含む現時点での見どころなどをおおいに語っていた3人。さらには、ブランクを感じさせない大泉と松田の軽妙なやり取りでも会場を沸かせていた。

探偵はBARにいる3

2017年冬、全国ロードショー
原作：東直己「ススキノ探偵」シリーズ
監督：吉田照幸
脚本：古沢良太
キャスト：大泉 洋　松田龍平　北川景子
配給：東映







連載
千葉雄大のドレミファソラシどろん♪

Vol.75 RADWIMPS 編

■プロフィール■
千葉雄大⇒ちばゆうだい。'89年3月9日生まれ。宮城県出身。今後は、4月期ドラマ「ファイナルファンタジーXIV 光のお父さん」(MBS毎週月曜0:50～／TBS毎週水曜1:28～)、映画『暗黒女子』(4月1日公開)、『ReLIFE』(4月15日公開)、『帝一の國』(4月29日公開)、『兄に愛されすぎて困ってます』(6月30日公開)、『亜人』(9月30日公開)など、多数控えている。



宮城から東京に来てから
10年が経ちました。
地元に帰るとあー帰って来たなあ。
と思うけれど、
ぼくの生活が宮城にはないので、
所在無さげでソワソワしたりもします。
東京の家に帰ると
ちょっとホッとする自分もいたり。
いまの仕事を始めて8年が経ちました。
早いものです。
たくさんの人と出会ったり、
少しのお別れもあったり。
街を歩くと声をかけていただくことも
まあまあ出てきました。自分はあんまり
変わってないかなあとも思いますが、
環境は変わってきたかなあと思います。
そんなときどっかにピューっと飛んで、
おいしいもの食べたり、
ぼーっと海をみたり、
誰もぼくを知らないところに身を置くと
顔が緩んでいい感じです。
そうしてまた東京に戻って
顔をシュッとさせて
緩急つけて生きていきたいです。
だからおうちにいるより
もう少し外に出てみようと思います。
ひとり旅もいいかもね。
寂しいと思っていたけど、
外国に行ってみようと思います。
英語勉強しよ。
やりたいことがたくさん！





RADWIMPS
New Album
『人間開花』
2016.11.23 Release

☆連載ポラプレゼント☆
連載で使用したポラを読者1名様にプレゼント。希望の方は、官製ハガキに〒&住所、氏名、年齢、電話番号、連載の感想を明記の上、〈〒101-8450 B-PASS連載 千葉雄大の「ドレミファソラシどろん♪」係〉までご応募ください（'17年3月26日当日消印有効）。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

The Super Ball Academy

スパボアカデミー

2人組ユニットThe Super Ballに詳しくなれる、スパボアカデミー！ 9時間目は、音楽。彼らの愛用の楽器を紹介してもらいました。こだわりポイントも注目です！



The Super Ball
ザ・スーパーボール。佐々木陽吾(G.／Vo)、吉田理幹(Pf.／Vo.)からなる2人組音楽ユニット。'16年7月にメジャー・デビュー。現在1stアルバム『スパボ! スパボ! スパボ!』発売中! 東名阪ツアーが4月よりスタートする。

9時間目
音楽Ⅰ
担当
佐々木
吉田

佐々木陽吾





PICK UP!
この真ん中の穴の中に機械が入っていて中で響いている音を拾っています！ ここにちゃっかり音量やトーンをいじるところもあるのだ！！

僕が紹介するのはこいつ！ **yairi k-13** です！

22歳の夏に手に入れました！ 岐阜県にあるヤイリギター本社兼工場に伺って、約500本ある中からいろんなタイプを弾いた中で、この子の音はこんなふうに育っていきそう！というビジョンがはっきり見えた一本です！ 職人さんが丁寧に魂込めて作業している工程を見学させていただき、ギターの各部分に音楽を聴かせる部屋があったりと、強いこだわりを感じました。僕にとって"3人目のメンバー"というくらいスパボに大切な存在ですね。

吉田理幹





PICK UP!
高音の部分がお気に入り。ピアノソロを華やかにしてくれますし、連打するだけで形になります（笑）

nord piano2と
nord electro5です！

nord piano2は'15年の春、nord electro5は去年の末に手に入れました。2年前、ただ漠然とテレビで観るプロのキーボーディストが使っている赤いピアノがすごくかっこいい、自分も使ってみたい、そんな気持ちを抱いて、その後、楽器屋で完全に一目惚れ。楽器屋さんの説明がまったく耳に入らないほどに惹かれて、鍵盤に触れてみると自分がいきなり上手く弾けるような感覚になりました。思い込みかもしれませんが、そういう感覚、直感ってすごく大事だと思うんです。ずっと眺めていられるくらい大好き。どこでも必ず連れていく、絶対欠かせない大切な存在です。



スタジオでライヴのリハーサルをしました！

連載
阪本奨悟

SHOGO'S FILTER

No.7



今夜も電波に想いをのせる
どんなに顔が見えなくても
君の笑顔を信じて声を届けよう
また会える日まで
僕ら交信する木曜日







渋谷のラジオ (周波数:87.6MHz 出力:20W) **阪本奨悟パーソナリティー「渋谷のラジオの学校」 毎週木曜 22時～23時** 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-22-11 **info@shiburadi.com**

阪本奨悟 ⇒ さかもとしょうご。'93年6月13日生まれ。兵庫県出身。'16年6月29日にミニアルバム『Fly』をリリースした。

Photo ⇒ **早坂直人** (Y's C)

表紙への道 UVERworld 編

今回の表紙巻頭の撮影は、都内の白ホリスタジオで行ないました。
アナログカメラとデジタルカメラの二刀流で彼らの魅力をフォーカス!










1 ソロカットはデジカメで。まずは真太郎くん。ロングコートがお似合い

2 ソロは白ホリと白×黒の背景バックの2パターン。2番手は彰くん

3 TAKUYA∞くんは、シャッターごとに手で動きを付けてくれました

4 前号とはロングコートが色柄違いの誠果くん。全身黒は珍しいかな

5 髪が鮮やかなブルーだった信人くん。お手入れ方法が知りたい……

6 克っちゃんは、背景によって、ジャケットを脱いだり着たりのバリエを

7 誠果くんは、カメラマン氏がどうやって撮っているのか、に興味津々

8 ラストは集合カット。ここでアナログカメラが登場して、みんなざわつく

B PLUS FILE

まだまだ冷えますが春はすぐそこだと信じたい。今月はメイキング、グルメ、持ち物紹介、バレンタイン話など盛りだくさんでお届けします!

グルメレコメンド



ほうれん草好きGENくんがハマったカレーを紹介

今月のおすすめ人

04 Limited Sazabys

行列必至、人気店の一品

ヨゴロウ(YOGORO)

チキンほうれん草カレー ¥950

半熟卵トッピング ¥100


半熟卵がとろり


ペッパーたっぷりでピリ辛のチキン


ごはん大盛り無料ですって


看板がないので見落としそうです

GEN「最近カレーにすごくハマっていて、カレーが食べたくなっていろいろカレー屋さんに行くんですけど。10卓もないくらいの小さい店で、食べたのはほうれん草と半熟卵ので、色は緑。チキンは煮込んでるだけじゃなくてカリカリに焼いてあって、すごく美味しかったです。店内の雰囲気もイケてて。2回行って、2回とも同じの食べて。すごい美味しいんですよ。普通の茶色いカレーはなかったかな、見た目はあんまり良い色じゃないかもしれない(笑)。ほうれん草かトマトが選べるんです。これです(写メを見せる)」

■ライスは普通の白ご飯じゃないんですね。

GEN「違いますね。僕、すごいほうれん草好きなんですよ!」

RYU-TA「俺も好きです」

HIROKAZ「俺も」

■みんな好きなんですね(笑)。

GEN「いつもほうれん草のバニーニみたいなのを食べてるんですけど」

■じゃあカレーにハマってる今、最高の組み合わせ。

GEN「確かに、最高の組み合わせ」

■みなさんは行ったことないんですか?

KOUHEI「ないっす。最近はおしゃぶり昆布しか食べてないんで」

■それしか食べてないんですか?(笑)

KOUHEI「気づくと食べてて、体に気をつけます」

■昆布だから体にいいのでは?

KOUHEI「梅味なんですけど、ファミマが一番塩分が強くていいんです。それを2〜3袋食べてるんで」

一同「それはヤバい(笑)」

編集部コメント

お昼時をちょっと避けたものの行列が! 15分ほど待って入店。男性客が多い印象です。見た目はあまり量がなさそうですが、もったりしたルーとゴロゴロ入っているチキンでけっこうお腹にたまります。口当たりはまろやか〜でほうれん草の風味も良い感じ。そこにペッパーがたっぷり付いてカリッと焼かれたチキンを挟むと丁度いいピリ辛具合です。半熟卵のとろりも絶妙で、ハマるのも納得の美味しさ!

making check!!

爽やかな面々が揃ったメイキングコーナー
ライトや撮影小道具を工夫したり
外ロケもあったりな、撮影風景を!

check 1

LiSA

2.7 都内スタジオ













3
めっちゃ笑顔ですね♪たぶんこれは巻末特集の扉ページのカットを撮っている時かな

2
自然光がキレイに入る窓際で椅子カット。レンズをのぞきこむ瞳の表情にドキドキ

1
カラーフィルターに囲まれてるLiSAさん。上手に隙間を縫ってポーズを付けてくれました

6
最後は読者プレゼント用のポラを撮影。笑顔+ピースサインがカワイイです!

5
ビニールをカーテンのように吊るして、合間からシューティング。ゆらぐ光がいい感じ

4
遠くの白ホリで自由演技をお願いして、雰囲気カットを撮影。楽しそうにクルクル動く

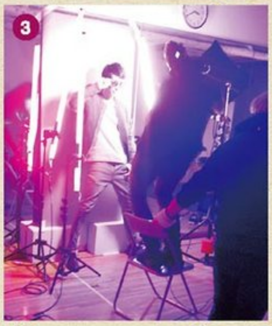
check 2

w-inds.

1.31 都内スタジオ











1
3人ショットはネイビーバックで。ギュッと寄ってもらいつつ、強い目線をカメラにいただきました!

2
ポージングや手の位置などを少しずつ変えていただきながら、ヨリ→全身カットとおさえていきます

3
ソロカットは、撮影用のカラーライトと共に。サングラスに手をかける仕草がクールだった慶太さん

4
龍一さんは、自分の撮影後も他メンバーの撮影を眺めたり、側でスタッフさんと談笑してました〜

5
ライトの位置も少しずつ変えつつ、軽く煽り気味の角度で。アンニュイな表情の涼平さんも素敵!

check 3

lol

2.3 都内ロケ

1
会う度に印象が違うhibikiさん。今回はキュートかつコケテイッシュな雰囲気でした♪

2
待機中はニコニコ笑顔でも、カメラを向けると凛々しい表情を見せてくれた友祐くん

3
リップとシャツの赤が映えて、麗しさを醸し出していたhonokaさん。サラサラヘアも素敵!

4
お次は場所を変えて全員カットを。下から煽られつつ、みんなクールな視線でキメてます

5
合間にカメラを向けると全員ピースサインでパチリ☆ サービス精神旺盛な5人です











St. Valentine's day

2月14日に彼らに会いまして。
そりゃもう、この話を聞くしかないですよね!

ベリーグッドマン



MOCA「毎年、おかんはギャグ的なのくれますね。去年はワンダイレクションのCDをパロッた、豚4匹のジャケットのCD型のチョコレートもらいましたね」
Rover「仲ええなぁ。MOCAのお姉ちゃんの娘さんが小学生なんですけど、いつもくれるな。この前は手作りで」
MOCA「食ってへんやろ?」
Rover「食ったわい! 目の前で食ったわ。ラスクかなんか、くれたわ。そういう身近な人がくれるのはやっぱり嬉しいですね」
HiDEX「僕が覚えてるのは、幼稚園の時に初恋の女の子がいて、お互い好きで、"バレンタインあげるな"ってもらったチョコが、家帰っておかんに見せたら、"あんたこれ、お酒入ってるやんか!"って。その子は高いチョコを買ってくれて。もらったけど食べられなかったんですよ。お返しにハンカチ買いに行ったの覚えてますね」
MOCA「僕は小学校2年ぐらいの時に、僕より20cmぐらい身長高くて、賢くて足も速くて美女で、その好きだった子にもらえて。ホワイトデーにあまりの緊張で一人で行くのが恥ずかしくて、おかんといっしょに行きました」
HiDEX「(笑)ほんま、仲ええなぁ。逆におかんと行きたないやろ」
Rover「俺、エピソードないなぁ〜。……あ、昔、後輩の女の子から、"チョコレート渡したいので、この日、何してますか?"って連絡が来て、"あの辺におるから、どこそこ来てくれたら、行くわ"って返事したんですよ。その日、連絡が来て、"ごめんなさい、インフルエンザになってしまいました。また改めてもらってください"ってことになったんですけど、インフルエンザになった子のチョコレートをもらうと、自分がインフルエンザになるんじゃないかって」
一同「ハハハハハ!」
Rover「っていう怖さで、防塵マスクみたいな、ピタっとしたマスク付けて行きました(笑)」
MOCA「酷い男やな(笑)。今の絶対使ってください!」

check 4 大原櫻子

2.5 レコード会社









2 そして水色側で。次々とポーズや表情を付けてくれます。顔アップを狙ってるところ

1 壁に白と水色のペーパーを貼りまして。まずは真ん中に立ってもって、2トーンで

4 最後に白バックで全身を。撮影時間は20分弱ぐらい。そして彼女はまた次の取材へ〜

3 壁に寄りかかってもらい、角度を変えて背景に奥行きを。白、水色、ピンク、爽やか!

持ち歩く物はやや少なめ?
瀧川さんの持ち物チェック!

持ち物拝見



瀧川ありさ

「ほんとは手ぶらでいたいんですけど、女子で手ぶらはマズいので」という瀧川さん(笑)。スマホ広角レンズは「雑誌の付録で、3人以上での自撮りに便利ですよ」とのこと。スヌーピー好きだそうです。ネイルオイルは「友達が誕生日プレゼントにくれたもので、ライヴ前に塗ってます」。デジタルハリネズミは「8ミリ風に撮れるデジカメです。カメラが好きなのでライヴ遠征先で撮ったりしています」とのことで、寂しげな画になるそう(笑)。化粧ポーチは柔らかいものが決め手、中に入っていた赤リップはメイクさんが使っていたものを買ったそうです。鏡はいかに軽いか!とチプデが好きだからがセレクト理由。長財布は直感で好きな色合いを選んだとのことでした。


バッグ


財布


鏡


ネイルオイル


スマホ広角レンズ


デジタルハリネズミ

check 5 風男塾

2.8 レコード会社











1 繋がりや絆を連想するような赤い糸などを用意。小道具のセレクトは早いもの順でした

2 どうしたら毛糸がかわいく見えるか試行錯誤。メイクさんにも手伝って頂き、ありがたや

3 「手を重ねるのと絡めるのどっちがいいかな!?」と相談しつつ。どうですかね?

4 徐々に輪に人が増えてわちゃわちゃする様は、コラム横の通りです。ドキュメント

5 「電車ごっこ!」と言いながら整列。ずっと笑いが絶えず。いつもにぎやかな風男塾です

春一番も吹きまして、季節は春に向かっているようです。
花粉が怖いなぁと思いつつ、Bプレスでほっこり先取り春気分を

アーティストなんでもベスト5 vol.183

ストレス社会の癒しに緑はマスト。大きさも様々で、育てるのが難しいものから、お手軽な物まで種類も豊富な観葉植物。そんな観葉植物に名前をつけたり、話しかけたり、マメに水やりはもちろん、やりすぎにも注意して大事に育てていそうなアーティストとは!?

今月のお題　観葉植物を大事に育てていそうなアーティスト

今月の1位は、miwaさん。「毎日“おはよう”とか話しかけていそう」「すべてのものに愛を注いでそうだから」「親友と花の写真を送り合ってるらしい」など、笑顔で植物に語りかけている姿が想像できます。実際はどうなのでしょう？　2位は、星野源さん。「マメに世話しそう」「“逃げ恥”のイメージが強い」「几帳面そうだから」ドラマのイメージ強し。3位は家入レオさん。「こまめに水をあげていそう」「サボテンに話しかけたりするらしい」多肉植物の面倒をみていそうという意見も。4位の岩田さんは「『植物図鑑』のイメージ」。優しい雰囲気を持つ方と、世話をきちんとできるマメそうな人というのが共通認識のようですね。植物は癒しと空気清浄にもなるので家で育てているアーティストさんは多そうです。

5月号のお題　シェアハウスで一緒に暮らしているのに、ほとんど姿を見なさそうなアーティスト

そろそろ新生活の準備を始める方もいるのでは？　近年、シェアハウスで生活する人も多いそうで。名優たちのシェアハウスドラマ『バイプレイヤーズ』も話題ですよね。今回は、そんなシェアハウスに暮らしているのに、ほとんど姿を見なさそうなアーティストをランキング！　生活リズムが独特で、朝帰ってきて夜起きるや、自室に籠ってそう、まったく何をしてるかわからないなどなど……理由もぜひ書いてくださいね。

投票方法　P.160にあるプレゼント応募ハガキの記入欄に記入して投票してください。グループ名ではなく、個人名で投票を。3月15日到着分までOK!　あなたがランキングしてみたいお題も大募集中ですっ!!

1位 miwa ―― 432pt


2位 星野源 ―― 426pt


3位 家入レオ ―― 419pt


4位 岩田剛典（三代目 J Soul Brothers／EXILE） ―― 410pt


5位 藤原基央（BUMP OF CHICKEN） ―― 390pt


6位 高橋優 ― 329pt ／7位 GACKT ― 280pt ／
8位 克哉（UVERworld） ― 270pt／
9位 福山雅治 ― 266pt ／10位 和田颯（Da-iCE） ― 250pt

少数票　城島茂（TOKIO）、GReeeeN、草野マサムネ（スピッツ）
SKY-HI、山崎育三郎

B・PASS用語解説48時

今月は、アーティストにとって大事な作業であるレコーディングの用語を解説。インタビューにもよく出てくるので、要チェックです

1●プリプロ
プリプロダクションの略。「プリ」は事前、「プロダクション」は生産という意味です。映画だったり、様々な分野で行なわれるものですが、音楽の現場におけるプリプロは、レコーディングをスムーズに行なうために、事前にギターの音色や曲のアレンジなどを、細かく詰める作業のことを言います。

2●ミキサー
キッチン家電を思い浮かべたかもしれませんが、音楽における「ミキサー」とは、ざっくり言うと「音を混ぜる機械」のこと。なので、意味合い的には結構近いですね。たとえば、ライヴとかで同時に音を出すときに、PAさんが、どの音をどれぐらいの音量で出すのか細かく調整するのですが、そのときに使っているのがミキサーです。レコーディングやライヴに密着した写真や映像などを見ていると、ツマミがずら〜っと並んでいる機械みたいなものがたまにうつってたりすると思うんですけど、あれがミキサーです。ミキサーのサイズは大小さまざまですが、中型〜大型のものに関しては「コンソール（操作卓）」とか「卓」と呼ばれたりもします。

3●コントロール・ルーム
レコーディングスタジオで、コンソールが置いてある部屋のことを「コントロール・ルーム」といいます。その文字のごとく、レコーディングした音を制御したり、調整したりするための部屋です。再びレコーディングの密着写真、もしくは映像の話なのですが、ミュージシャンがスタジオのソファに座って談笑していたり、それこそコンソールを触っていたりするものを見かけたことはありませんか？　もしかしたら違う可能性もありますが、あれはだいたいコントロール・ルームで撮影したものが多いです。

4●レコーディング・ブース
通称：ブース（booth）。日本語に訳すと「小部屋」という意味。マイクを立てて、歌や楽器を録音するための部屋のことです。室内は完全防音で、ヴォーカルを録音するためのやや小さめの部屋（ヴォーカル・ブース）や、ドラムのためのやや大きめなもの、バンドが一発録り

◆初詣、昨年に引き続きおみくじで〝大凶〟の私。毎年8人くらいで引くのですが、今回8人中……4人が大凶、1人が凶!! 楽しいと思うしかない!

（大阪府／大凶がどーした!!）

B これだけ大凶が揃うこともないだろうしね。残り3人は何だったのかな?

◆本格的なカレー屋さんでカレーを頼んだらスプーンがついてこなくて、本格的だなと思って手で食べたらインド人の店員さんがすごく申し訳なさそうな顔でスプーンを持ってきた。

（京都府／しろくま）

B 察しが良すぎたね。時すでに遅しだけど、せっかくなのでスプーンで食べてください。

◆車で駅に送ってもらおうとしたとき、母が車の鍵と間違えて冷蔵庫にあった**マーガリン**を持ってきた。

（千葉県／よっしー）

B まったく似てない! 近しいサイズならまだしも……焦って混乱したにもほどがある。

◆なくしたと思っていた小物が、飼い猫の小屋の中で大切に保管されていた。大事にしてくれているっぽいのでそのままあげることにした。

（大阪府／ぶーちゃん）

B まさかの犯人は身内だった的な。まあ、大事にしてくれる人が持つのがいいよ。あ、猫か。

◆年明けに、バリ島ホテルへ行ってきました。実はバリではなく大阪にあるのですが、実際にバリへ行った気分になれるぐらいに素敵なところでした。

（大阪府／Mさん）

B ややこしいけど、リゾート気分に浸れるならば、なにわのバリ島でもオーケー。

エキセントリックおたより

探してたメガネを頭にかけてたり、トンビに食べ物とられたり、意外とみんなしてるんですね

◆授業中シャープペンが壊れてしまって、とっさにシャープペンの芯でノートに字を書いた。芯が折れて折れて大変でした……。

（神奈川県／レオぽん）

B そりゃそうだ。どれくらいちゃんと書けたのか、努力は伝わるけど解読できるかな。

◆京都の劇団四季に行ったとき、左側には見知らぬおばさまが。感動的なミュージカルも佳境へ、ふと隣りを見るとおばさまはコロコロローラーを手に**フェイスマッサージ**をしていました。何しに来たの。

（大阪府／ぽよ）

B 時間の有効活用～って、家でテレビ観てるんじゃないんだから。くつろぎすぎですよ。

◆私の住んでいるところはめったに雪が積もらないので、積もった雪で小さい雪だるまを10体作って玄関の前に並べた! それを見た小学生大喜び（笑）。

（大阪府／あつみかん）

B 結構な数作ったね! 家の守り神のようにずらりと並ぶ雪だるまたちは圧巻そう。

◆カラオケに行き、一緒に行っていた人が座りながら寝たので、頭の上にデンモクを置いたらずっと落ちなかった。

（神奈川県／マーちゃん）

B すごくいい姿勢で寝ていたのね。うるさい場所で寝れてしまう感じなんなんだろうね。

◆デスソースを入れたシュークリームでロシアンゲームをやったら、12個中10個デスソース入りでみんな水道でうがいしまくった。

（愛知県／はりけん）

B 確率がひどい。逃れた人の強運さよ。その後の地獄絵図が浮かびますわ……。

◆飲み会で、店「しめのおじやになります!」我々「まだ鍋が来てませんけど……」店「……」。

（東京都／?）

B 始まる前に勝手にしめてくるとは。おじやスタートで、野菜を足してくスタイルはどう?

◆風邪引くのが怖すぎて2重マスクで過ごしていたある日、昼食にカレーが。2枚目のマスクを外し忘れ、マスクにカレーがべったりついた。

（千葉県／おまめさん）

B 風邪におびえすぎでしょ。痛恨のミスだけど、厳重すぎる気がする2重マスク。

◆小中高と陰キャラだった人間が、久しぶりに同窓会で再会するとラッパーになっていた。

（千葉県／WWW）

B フリースタイルバトルとかやる感じ? 何がラッパーデビューさせたんでしょ。

◆大きめのカットソーを買ったのですが、洗濯したら縮んでちょうどいいサイズになった。

（東京都／にるず）

B それを見通しての洗濯でしたから!とは言えないけど、ラッキーだったね。

◆歌番組を観ていた私が、「ゆずは歌がうまいし好きだ」と言ったら祖母が「私も好きや、うまいし体にもいいからね」と返された。

（石川県／てふ）

B 絶妙に噛み合ない会話。たしかに、どっちのゆずもいいですよね～。

◆Twitterで実の兄を見つけてしまった。私は美少女の妹という設定でした。

（千葉県／めろんぱん）

B ライトノベルによくある設定ね。実際に美少女だと思ってもらえてると思っとこう。

をするための大きなものまで、ブースのサイズはいろいろあります。また、レコーディング・ブースは、ガラス窓を通してコントロール・ルームから丸見えになっていることが多いことから、「金魚鉢」とも呼ばれていたりもします。

5●マイキング

ギターやドラムなど、音をレコーディングするときにはマイクを設置するわけですが、そういった楽器や声など音が出ているところ（＝音源）に向けてマイクを立てることを「マイキング」と言います。このマイキング、かなり奥が深いです。なぜならば、マイクの種類や、設置した位置や角度によって録音された音が変わるからです。位置だけの話で言えば、「オンマイク（＝音源の近いところにマイクを設置すること）」でクリアな音を録音してみたり、「オフマイク＝（音源から遠いところにマイクを置く）」にして、周りの空気感も合わせて録音してみたり、その楽曲をどのように表現したいのか?を考えつつ、ベストなマイキングをしていきます。

6●ライン録音

先ほどの「マイキング」は、マイクを使ったレコーディングの場合にする行為なわけですが、マイクを使わずに音を録音することもあります。それが「ライン録音」。これは、例えばギターやベースを録音するときに、アンプで鳴っている音をマイクで拾うのではなく、楽器とミキサーを直接接続して音を録る方法。マイクやアンプの種類、録音環境に左右されることがないため、キレイな音が録音できます。

7●一発録り

楽曲をレコーディングするときは、ドラム→ベース→ギター→ヴォーカルの順に、それぞれをパートごとに分けて別々に録音して行くことがほとんどですが、複数の楽器を同時にレコーディングする方法のことを「一発録り」と言います。ライヴやスタジオで演奏するように、全員で一緒にやったほうがノリやグルーヴが出しやすいということで、楽曲の基本となるリズムパート（ドラムとベース、場合によってはリズムギターも含む）を、この方法で録ることは多いですね。

イラスト帝國民志願者へ

★画材・紙質はなんでもOK ★封筒に入れて送るとなお良し! ★サイズも自由!(書記長はハガキサイズを好みます)★イラストの裏面に住所・氏名をお忘れなく! ★採用・不採用に関わらず、ご返却はできません。★毎月10日ごろまでに送ると、その月に出る号へ間に合う確率が高し。★送り先は197ページの応募要項をチェック!

イラスト帝國 PLUS + 4コマSHOW

春をきっかけに新しいことにチャレンジするのははどうでしょう? まずは帝國民になってみるとか……? いつでも待ってますよ～



L'Arc～en～Ciel 兵庫県／イコ

今年は屋内なので問題ありません!



現メンバーラストのインタビュー必見です

風男塾 埼玉県／青菜のおひたし

ぎゅぎゅっとなった風男塾。ほんとにいつもこんな感じで仲良しなので、リアルです! ソウルメイトは離れても心はひとつですよね



大原櫻子
山形県／ゆ

さくらんぼや桜の花びらに囲まれて春らしい櫻子さん



Da-iCE
大阪府／みなみ

ワン○ース風・想太くん。デビュー日が懸賞金!



SHAKALABBITS
岩手県／須藤

活動休止を発表されましたが、いつかまた会えると信じて!



CHEMISTRY
大阪府／さよ

待望のおかえり! ライヴが楽しみな爽やかなお二人



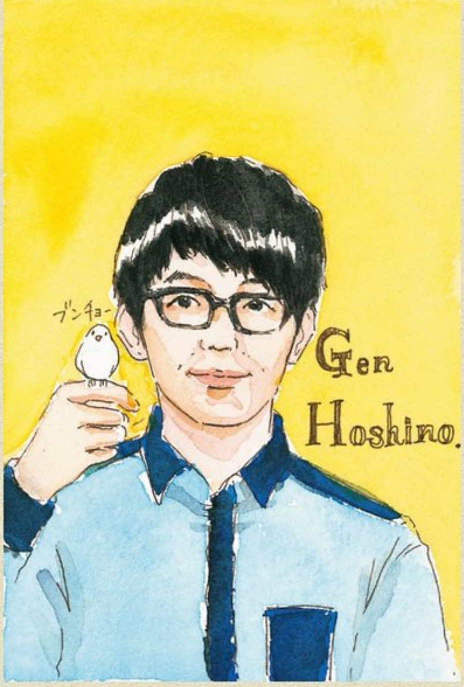
THE YELLOW MONKEY
東京都／和江

髪の毛が細かい! 美しい! お顔がキュートです



SEKAI NO OWARI 愛知県／ピックリ

そうとらえてしまうとちょっとショックです(笑)



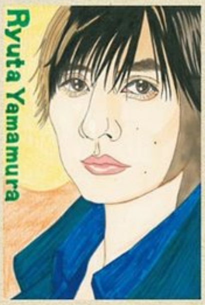
なんでもランキングでも上位にランクイン

星野源
福岡県／S-arrow

"逃げ恥"な微笑みをたたえる星野源さん。すっかり時の人ですね。ちんまり乗ってる文鳥もかわいいです

flumpool
石川県／しほ

憂いある表情の隆太さん。毎週月9、目が離せません!



◆職場の先輩が走っている車を見て「あれかっこいい！　ああいう車に乗りたい！」と言うから見てみたら霊柩車だった。（岡山県／ナッツ）

B 確かに黒塗りでシュッとしているけれど、できればお世話になるのは当分先でありたいね。

◆テストで90点と思ったら、先生の渡し間違いで1つ後ろの席の子のだった。（大阪府／？）

B ぬか喜びさせおって！！　で、実際にテストの点数はどうだったの？

◆テスト期間中、友達がコートを着ているにも関わらず、人のコートをさらに着て帰った。（宮城県／ちゃま）

B 相当の厚着のようだけど、気づかないほど寒いのかあえて着て行ったのか。

◆引き出しに入っていたゼリーを食べたらクワガタ用でした。（東京都／aNo）

B パッと見わからなそうだし罠にもほどがあるけど、なんでもうっかり食べないの！

◆毎日年齢の分だけスキップをして、明日は絶対にお菓子を食べないとか言いながら食べ続けるお母さんでした。（京都府／きよみわ）

B スキップが運動になっているかは不明だから、せめてお菓子をヘルシーなのにして。

◆近くの建設中の建物の前に「2170年○月×日完成予定」と書かれた札が立っていた。（長野県／めろこ）

B サグラダファミリア的な。作業員達は未来を見据えて作業しているわけじゃないよね。

◆友達の誕生日に、生エリンギ2パックをあげました。（大阪府／ねむお）

B 「欲しかったの～。よくわかったね！」っていうリアクションだったのだろうか。絶対違う。

◆エジプトで柔道の前回り受け身をしている夢を見た！　暑い暑い言いながら……。（埼玉県／のっち）

B 状況が謎すぎるけど、それは暑いでしょうよ。ツタンカーメンに技かけられてるの？

◆友人から誕生日にもらった物をずっと箸置きだと思っていたが、実はリングホルダーで、指輪を飾る置物だと知らされた。（山口県／あめ）

B 何か物体を置くものという意味では、間違ってない使用方法だったかもしれないね。

◆友達と初めてオールして語り合ったあげく、好きな人が一緒だった。（群馬県／moya）

B 衝撃の事実がここで発覚。ピリッとせずに、仲良くやっていってくださいよ、できれば。

◆初詣で、絵馬に「ドブネズミみたいに美しくなりたい」と書いてあるのを見つけた。（大阪府／すかいはい）

B ブルーハーツリスペクトですか。叶ったとしたらどんな姿になるのだろう……。

◆私が遠征をするたびに吹雪になる。“雪女か!?”と嘆きかけたが、“雨女”よりは何かかっこいいので良しとした。（秋田県／遊澤玄守）

B かっこよさげだけど、天災だからね!?　できれば普通の女子に戻って欲しい。

エキセントリックおたより Eccentric letters

◆1週間で8人に体操の白井健三選手似ていると言われた。（愛知県／たかちょん）

B 1日1健三の騒ぎじゃないっていうことは、もうほぼ白井選手なのでは？

◆2月3日に家族と豆まきをしていたらおじいちゃんが勢いよく投げた豆が1m先の障子に刺さり、みんなで大爆笑した。（兵庫県／moco）

B 豪速球が障子に炸裂したままにして、豆を見るたびほっこりしたい。

◆友達が映画開始5分で泣いた。（富山県／Yu）

B 速っ。どんなストーリーか知らないけど、感動ものだった場合友人のその後が心配です。

◆地元のパン屋さんから数歩進んだところに、そのお店のパンが落ちていた。（大阪府／しおりん）

B パンを拾ったら紐がついていて、辿って行くとそのパン屋に着くっていう呼び込み法？

◆朝から体育の授業だったので、体操服を着て登校してブラウスを忘れ、体育以降の授業も体操服で受けるはめに。（岡山県／あきゃー）

B 1回のラクのために、1日の恥となる……。小学生的なミスだけど、ドンマイ！

◆自転車の鍵をスペアキー合わせて3本ともなくしてしまい、家から駅まで徒歩で歩く間、野良猫10匹以上に遭遇して遊んでいる。（大阪府／みなみ）

B まずなんでそんなに鍵をなくしたのか聞きたいよ。野良猫と遊んでる場合じゃないよ。

◆友達に「ハロー」と言ったらびっくりしていた。別に驚かせたつもりはないので、次の日ももう一度「ハロー」と言ったらまたびっくりしていた。（三重県／えだまめ）

B それはどういうタイプの驚きなんだろ。3日目も驚いたら、諦めて「こんにちは」にして。

◆サイゼリヤでバイトしていて、おばあちゃん2人組のお客さんが「納豆と茶碗蒸しあるかしら」と言われて思わず笑ってしまった。サイゼリヤはイタリアンの店です……。（神奈川県／S.K）

B 菜ぜり屋とかのつもりでいらっしゃったかな。しかし、なかなか茶碗蒸しはハードル高いで。

◆歯科医院で働いている私。患者さんを呼びに行くと、元気よく返事をしてくれたおばあちゃんの口から入れ歯が飛び出した。（岩手県／aika）

B おばあちゃん接着が甘い！　歯医者でよかった。ってか、そのために来たのか。

今月のB-PRESSいかがでしたでしょうか？　Bプレスは皆さまからのお便り命！　イラストは「イラスト帝國」、ストーリーができたりライヴレポートは「4コマSHOW」へ。「なんでもベスト5」の投票や、エキおた用のとっておきの小ネタはプレゼント応募ハガキにたっぷり記入してくださいね。その他、要望などもなんなりとお待ちしております!!

すべての宛先は
〒101-8450
東京都千代田区神田錦町1-14-4F
B-PASS ④『○○○○○』係

(MEE audio)



ワイヤレススポーツイヤホン
X8

オープン価格(市場実勢価格9,720円／税込)

アメリカのMEE audio社から好評発売中のスポーツイヤホンに続き、より良い装着性を追求したニューモデルX8の登場です。何と言っても特徴的なのは、ピボットノズル付ハウジングが採用されている点で、ノズルの角度が自由に調整でき、様々な耳の形にフィットする様にできています。Bluetooth4.1を採用し、クリアでダイナミックなサウンドを感じさせてくれます。さらに大容量のバッテリーが、音楽再生可能時間が7.5時間、充電時間2時間を約束。これで、ランニングや長時間の外出でも好きな音楽をずっと聴いていられますね。

●問い合わせ先／宮地商会　http://www.miyaji.co.jp/meeaudio/contact.php

(ambie)



イヤホン
ambie sound earcuffs

カラー:Asphalt Black、Cactus Green、Stamp Orange、Pop Sky、Toypu Brown、My Heart White
価格 5,940円(税込)

ambie(アンビー)という新しい会社からの新感覚「ながら」イヤホンです。"耳を塞がないため周りの音や声を聞き取れ、会話もできる""鼓膜への負担が少なく長時間使用しても疲れにくい"というコンセプト通りとても気持ち良さそうです。音質面は、ソニーの技術を活かした音響性能がベースなので安心。これまでにない不思議な音楽体験をぜひ!

【取り扱い】RHCロンハーマンみなとみらい店、RHCロンハーマン大阪店、チャーリー・バイス(新宿伊勢丹8F)、二子玉川 蔦屋家電、ロンハーマン千駄ヶ谷店、ロンハーマン京都店、ロンハーマン福岡店　https://ambie.co.jp/

●問い合わせ先／ambie　https://ambie.co.jp/contact/

(Let's Sing! カラオケで盛り上がろう!)

今号のバックカバーを飾ってくれたLiSAのカラオケ人気曲をランキングでご紹介。あなたの十八番は入っていますか?



JOYSOUNDでよく歌われているLiSAの曲は?

①Rising Hope
②crossing field
③oath sign
④シルシ
⑤Brave Freak Out
⑥Rally Go Round
⑦traumerei
⑧AxxxiS
⑨THIS ILLUSION
⑩ROCK-mode
⑪say my nameの片想い
⑫DOCTOR
⑬Empty MERMAiD
⑭Hi FiVE!
⑮Psychedelic Drive
⑯ジェットロケット
⑰アコガレ望遠鏡
⑱L.Miranic
⑲EGOiSTiC SHOOTER
⑳No More Time Machine

JOYSOUND調べ
集計期間:2017年1月





初回生産限定盤


期間生産限定盤



通常盤

New Single
Catch the Moment
2017.02.15 Release
初回生産限定盤 CD+DVD ¥1,800（tax out）
期間生産限定盤　CD ¥1,300（tax out）
通常盤 CD ¥1,200（tax out）

［CD］
01. Catch the Moment
02. リングアベル
03. Merry Hurry Berry（初回生産限定盤／通常盤のみ収録）
03. Catch the Moment -Instrumental-（期間生産限定盤のみ収録）

LiSA ⇒
リサ。岐阜県出身、6月24日生まれ。'10年、TVアニメ『Angel Beats!』の劇中バンド「Girls Dead Monster（通称ガルデモ）」2代目ヴォーカル・ユイ役の歌い手に抜擢される。'11年、ミニ・アルバム『Letters to U』でソロ・デビュー。'14年1月3日に、自身初となる日本武道館ワンマンライヴを開催。'17年6月からは、さいたまスーパーアリーナ2デイズを含むアリーナツアー が決定。

LiSA
巻末特集はP.216からスタート

Q02 リングアベル

■“僕のヒミツ　教えちゃおうかな”という歌詞にちなんで、LiSAさんの小さなヒミツ教えてください。
「なんだろう……小さなヒミツだらけかもしれない、それが私のヒミツです（笑）」



Q03 Merry Hurry Berry

■ずばり、好きな果物を!
「苺!（笑）　と言っても果物は全部好きです。“Merry Hurry Berry”の制作時は旬だった苺をずっと食べていて（笑）。“リングアベル”の時はぶどうのグミを食べていたので、“僕の最終兵器”が“ぶどうのグミ”なんです（笑）。そうやってその時々で自分がハマっているものが結構歌の中に出てきますよ」

SINGLE SONG Q&A03

LiSAの素顔をキャッチ!?
ニュー・シングル「Catch the Moment」収録の
3曲にちなんだミニ・クエスチョン!



Q 01
Catch the Moment

■最近、"この瞬間に時が止まればいいのに"と思ったことは?

「仕事とプライベートでどちらもありますよ。仕事ではライヴでステージを去る瞬間はいつもそう感じています。ずっとここでみんなと遊んでたい!ってね。それまでは夢中なので、その時間を楽しんでいるんですけど、最後に"ありがとう"って去る時に、この時間もうちょっと、って。だから、スタッフさんにライヴの去り際が長い、って言われたりするんです(笑)。スタイリッシュに去るってことを勉強しなきゃって。プライベートでは、この前のお正月。好きなものをずーっと食べてたんですよ。ほら、"お正月だからいいや"っていう"お正月補正"ってありますよね? "お正月くらい4食ご飯食べてもいいよ!"みたいな(笑)。自分に甘えられる理由がいっぱいあるから。お正月がずっと続いていたら、すっごい体型になるだろうけど、幸せだったから、止まればいいのに!と思いました」





毎日自分に花丸をあげます（笑）。いろんなことがあったけれど、
“今日もいい日だった!”って無理矢理でも、
心にハンコを打っています

さ、リズムのウキウキ感……すべてが楽しい。その中で、寝過ごして慌てて下車する姿が描かれていたり、身近感もあります。

「日常が楽しくなればいいですよね、音楽ってそういうものなのかな、って思うんです。日常に色を添えたり自分の気持ちとリンクさせて答えを見つけたり、“Merry Hurry Berry”のようにただただ、楽しくなったり」

■こういう曲をレコーディングする時は、テンションをアゲめで臨むんですか?

「アゲめです（笑）。しかも“Merry Hurry Berry”は自分で書いた歌詞じゃないから、いい意味で人のせいにして（笑）、難しいことは考えず全部解放して歌いました。あと、コーラスの“イチ ゴー イチ ゴー ゴロゴロ イチ ゴー”とか“EXCELLENT!”を、レコーディング当日に、ここに何か入れたい、って作詞家さんにお伝えしたり。私のライヴでは、（指で、1と5を出しながら）“1、5”で踊ってほしい!」

■Bメロのビートは、ストンプとかクラップにピッタリだし、ライヴで化けていきそうな曲ですね。こうして、2017年が始まりました。夏にはさいたまスーパーアリーナ2daysを含むツアーも控えていますが、どういう年にしたいですか?

「よりこの瞬間を真面目に生きたいと思います。というのも、今本当に幸せなので、これを続ける不安ではなくて、大事にしていきたいんですよ。自分の感情がコントロールできなくて後悔することを減らしたいし。それはライヴをしていてもね。後悔しない一瞬を増やして1年過ごしたいですね」

■後悔しない、って難しいですよね。

「自分だけの世界ならコントロールしながら生きていけるんですけど。外から情報が入ってきたり、それこそ電車に乗ったらいろんな人と出会うし。そうすると乱される。でもいい影響も受けますからね。外からの刺激があるこの世界で、自分のペースでいつつ、優しくできたらいいですね」

■素敵な考え方です。

「ホントは不安で、毎日家を掃除しながら沢山後悔するんです（笑）。ほとんどお家にいないから、舞っていたホコリが、家が静かなうちに落ちるんだろうなと思いながら、1日を振り返って、あの時もっといい言い方あったな、とか反省して」

■「Catch the Moment」に、“次の朝日が顔だしてる”とあるけれど、夜ってそういう時間で。

「そうなんです、で、寝たら忘れるから、今のうちに後悔しておこう、って（笑）」

■前向きなのか、後ろ向きなのか（笑）。

「ホントだ!（笑）」

■でも思い起こすのもいい時間ですよね。つい嫌なことが強く残りがちだけれど、インタビューの前半で言っていたように、いいことも思い返したり。

「そうそう、そして毎日自分に花丸をあげます（笑）。いろんなことがあったけれど、“今日もいい日だった!”って無理矢理でも、心にハンコを打っていますよ」

■その習慣を見習いたいと思います!

「はい、ぜひ!（笑）」 B



なに受け取ってもらうためにあえてひらがなを使ったり。"とっても" "ちょっと"とか丸い印象の言葉を使うことを意識的にやっています」

■視覚から伝わる印象ってありますよね。そして、この曲の歌は、丁寧で柔らかさがあるように感じました。

「ヴォーカルレコーディングで一番大切にしたのは"優しさ"です。最後のサビは、感情的で、ちょっとわがままも添えているんですけど、それ以外は、優しさとか健気さを込めたかったんですよ」

■わがままという最後のサビも"寂しい"という言葉がありながら、"少しだけ 少しだけ"って繰り返してから"寂しい"と言っているところに、優しさが表われていますよ。

「ちょっとだけ言っていい? みたいな(笑)」

■その素直さが本当に幸福を願っている。で、また、ピアノの力強さもよくて。

「子供たちの身近にある楽器ってピアノかな、ということで使いました」

■そして、3曲目の「Merry Hurry Berry」、これは詳細に解説しながら聴く曲ではないような気もしますが……(笑)。

「そうかも(笑)。とにかく、大人から子供まで音楽を楽しんでほしいな、って。言葉を使って音を楽しむ曲です!」

■ピアノのスウィング感、ホーンの賑やか



聴いてくれた子供たちの中で、
歌を通じて"リングアベル"っていう言葉が記憶に残ったら素敵だな。
子供たちが口ずさむなら幸せな言葉がいいな、って

LiSA

葉、アタックのある言葉を沢山並べるところを、"Catch the Moment"に関しては、しゃべり言葉というか、伝えたい気持ちのまんまを詞にしました。だから歌も、言葉を大切にしようという意識で歌っています」

■例えば、サビの1ライン目"僕の声が〜心臓がカウントしている"とか、このメロディの箇所は、文節ごとに休符が入ってるくらい、短いフレーズが続きますが。

「はい、そのメロディは大切にしたかったので、言葉を大切に選びましたし、歌も意識的に、休符直前の言葉尻を上げる、というか、グッと押し上げることにトライしました」

■そのニュアンスが言葉にある想いを後押していますね。あと、1番のBメロの"運命を" "ナイフで"という箇所は、言葉の頭に強いアタックがありますが、同じBメロでも、2番はアタックで表情をつけるというよりは、スムーズな歌ですよね。

「Bメロのオケが1番はアタックがあって、2番は少しジャズっぽいというか、どちらかというと"グルーヴ"という印象だったんです。だから詞を書く段階から、それに合う言葉を選んでいたんですよ」

■オケの強さや雰囲気と、歌詞の言葉のマッチングも意識して書かれているんですね。そこに言葉の意味も加わってきますし、ご自身で作詞して歌う意味もより深まるように感じます。

「はい。バンドをやっていた時は、歌うことだけが役割だったんです。それから、自分で作詞をするようになって、人が作ってくれたメロディに寄り添って言葉をつける、そしてそれを歌い手として表現する。そうすると、それぞれの視点に立って欲しいものを自分で表現するようになってきたんです。それは、自分がステージに立ってないと、例えば次はエロい曲ほしいな、とか思わないし(笑)。自分が表現したいもの、欲しいものが制作にダイレクトに繋がって。逆に制作している時は制作側として、こういうふうに歌ってほしいな、という気持ちが生まれてきますし。どちらもやることで成長してこれた部分が沢山あります」

■そうなったことで、伝えるということの意味は変わってきましたか?

「一番の軸は何も変わってないと思います。でもステージに立ったり、お手紙をもらったり、そういういろんな刺激を受ける中で、LiSAとして何を発信していくべきなのか、というひとつの軸がどんどん太くなったし、それが貫けている気がしますね」

たくさんの幸せと少しの切なさが優しくにじむ「リングアベル」

■では、2曲目の「リングアベル」についても聞かせてください。この曲は、NHKの『みんなのうた』のために書き下ろした新曲ということで。

「"リングアベル"も先に、『みんなのうた』というお話をいただいて。そこで自分に何ができるかな、と考えたんですよ。思い返すと自分も子供の頃、『みんなのうた』を見て意味もわからずに、"♪コンピューターおばあちゃん〜"ってメロディだけを繰り返し歌っていたんです。でも大人になって歌詞を読むと、おばあちゃんはコンピューターのように物知りだっていうお話だとわかって。一層この楽曲が好きになったんですね(笑)。そういうふうに、聴いてくれた子供たちの中で、歌を通じて"リングアベル"っていう言葉が記憶に残ったら素敵だな。そして後々、歌詞を見ることがあったらちょっと甘酸っぱいお話だったんだ、と感じてもらえたらいいな、と思ったんですよ。それに、子供たちが口ずさむなら幸せな言葉がいいな、って。そこから膨らませていく中で、大人の人たちが聴いても、"私にもそういうことあったな"って思い出してグッとくるお話を綴りたい、と考えていました」

■近くに住む親しい人が結婚する時の歌。そして、主人公は年下、ですよね。

「はい。誰かが結婚するってことを、自分の気持ちで書く時に、女性だし、地元が田舎ということもあって(笑)、友達みんな結婚しているんですよ」

■地方出身ですので、わかります(笑)。

「ねっ(笑)。さらに、先に出産されると自分の未知なところに友達は進んでいるから、大人な感じがするでしょ? そういうこともあって、年下の感覚で書いてたんです。ほら、一緒に遊んでいた友達が彼氏ができたり結婚すると遊んでくれなくなる、それが悔しくて。一番一緒に遊んでたのは私のだったのに!って(笑)。そういう友達と遊べなくなるの寂しいな、という気持ちと、彼女が彼と話をしている姿を見て素敵だな、好きな人が幸せになるのって嬉しいな、と思う気持ちがある、そんな想いと向き合っている時に、子供の頃ってお母さんが悲しそうだと、ちょっとわがままを言えない、って空気で感じるし、その気持ちって今も私に変わらずにあるな、とも思ったんです」

■幸せになってくれるのは嬉しい、だけれど、心の底にある寂しい、という気持ちは空気を読んで大きな声では言えないな、みたいな。

「はい、その感情が近いなと思ったんです。だから、聴いてくれてた子たちが大きくなった時に答え合わせできたらいいですね」

■あと、歌詞の中で"つよく""ゆうき""ねがい"……こういったワードがひらがなで書かれていますね。字面からも優しい気持ちになりました。

「そう! 本当は、"最終兵器"もひらがなにしたいな、とかいろいろ考えたんですよ! 子供って"一生のお願い"と"最終兵器"ってよく言うでしょ?(笑)」

■確かに子供の頃、連発してました(笑)。

「そんな子供が、"さいしゅ〜へーきー"とか言ってる感じをイメージして詞を書いていたから、一度ひらがなにしてみたんですけど、伝わりづらかった(笑)……今、お話していて思ったんですけど、私はTwitterでもそういうことをしていますね。大人になると難しい言葉、漢字の言葉を使いたくなっちゃう。でもその武器を捨てる感覚で、優しい言葉を選んで、ニュアンスを誤解なく、みん





かる、みたいな(笑)」

■確かにそれは嬉しい!(笑)　で、“心臓”というワードは、“汗をかいて走った”というフレーズにも重なって。走って鼓動も速くなっているんだろうな、とか。それは気持ちの高まりにも想像が広がっていくだろうし。

「そうですね。あと、その幸せを逃さないように、必死に掴んでいく姿、もっともっと続いていくようにっていう気持ちの焦り。でも自然に壊れていってしまったり、なくなっていってしまったりする儚さだったりも含めて“汗をかいて走った”では表現したかったんです」

■“世界の秒針”はいつか“僕を置いていく”、ともあるけれど、地球の時間の中では、ひとりが生きているのは瞬間でもあって、だから大切な人と何回笑えるのかが大切に思える。そういう終わりがあって、やり直しがきかないからこそ愛おしい……そんな想いが描かれていますね。

「そういうことを私はずっと考えているんです。お友達、家族……大好きな人とずっと一緒にいたいけど、先に死んじゃうかもしれない、とか。それは、LiSAという今の立ち位置もそうですし。先程“怖い”と言ったように、なくなってしまう恐怖は大きいです。後悔をしないためにどうしたらいい?と考えても何も見つからないんですよ。誰かがいなくなる時がくれば、絶対にもっとできたな、と自分を責めるだろうし。その自身に答えを差し伸べるとすると、今を一生懸命生きなきゃ、だったんですよね」

■そういう終わりがある刹那の時間をどう過ごすか?が曲の1番で描かれていて、2番では“育む”という視点になりますね。

「はい。私はLiSAとして活動を6年続けてきて。初めの頃はなくなることばかり考えて、だったら最初から手を伸ばさないほうがいいな、と思っていたんです。それから、夢見ていた日本武道館でのワンマンが叶った、その時点で、ここから先は自分の夢にはない景色だったんですよ。そんな中を、一つひとつ大切に生きて、みんなと一緒に作ってきたら、いつの間にか横浜アリーナに着き、次はさいたまスーパーアリーナ





が決まって、という。想像以上の現実に今自分が立っていると思うと、未来に希望があるな、と考えられるようになってきたんです。そうやって大事に一個ずつ育てていったら大きな木になって、もっともっとすごいものが見れるんですよね」

■歌詞についてもうひとつ。1番のサビで“世界の秒針は”と描かれてたものが、同じ言葉を繰り返す最後のサビでは、一箇所“世界の秒針が”になっていて、“が”だけ違ってます。

「同じ言葉でも、助詞が変わるだけで意味が変わるんですよね。“が”のほうが強いというか、“世界の秒針”が指すものをグッと狭めた感じをイメージしていたんです」

■そういうリアルな想いが入った歌詞ですが、歌う時に大切にしたのはどんなところでしたか?

「私って、テンポの速い曲では言葉数が多いことが多々あるんです。でも今回、テンポは速いけれど、メロディはちょっと大きくて。特にサビはそうですよね。こういう楽曲に向き合った時に、私の使命として言葉を伝えることが一番大切だな、と感じたんですよ。だから作詞する時も、いつものテンポのいい曲の時は、音乗りの良い言



大きな会場で、こんなに沢山の人の前でライヴができることが幸せで。で、その幸せが怖いんですよね」

■怖い、ですか?

「なくなることが、ね。いろんな方が歌にされていますよね、こんな想いをするなら出会わなければよかった、とか」

■ありますね。

「なくなった時に、こんな幸せを手にしなかったら、自分はずっと普通に幸せでいられたのに、って。でも、結果としてそういうことが起きてしまうかもしれないけど、今のことを愛せたり、過去のことを否定しないようにするにはどうしたらいいか、って考えた時に、後悔しない1秒1秒を重ねて、いつの間にか"60歳になったね!"なんて笑ってられるのが、私には幸せだな、と思ったんです。"時"って過ぎていくものだし、それで何かを忘れることもできるし、越えていくこともできるもの。そこで自分は一瞬、一瞬を摑んでいきたいな、と」

■先を考えて失うことを怖れるより、一瞬を全力で摑んでいく先に未来がある、ということですね。イントロの強いピアノや、リムショットぽいカチカチとしたリズムから、時計の秒針を彷彿とさせますが、『劇場版 ソードアート・オンライン -オーディナル・スケール-』の主題歌でもあります。詞で描いた想いは、どこからインスパイアされたんでしょうか?

「主題歌の話をいただいて、それをイメージした音楽ができて、歌詞をつけました」

■"命のリミットを心臓がカウントしている"という内容のラインがありますが、これは、哺乳類が生涯で打つ鼓動の数は、だいたい同じ回数になる、という説を知っていたから出てきたフレーズだったり? 例えば、象もネズミもだいたい生涯で15億回鼓動を打って、ネズミは鼓動が速い分寿命が短いとか……。

「知っていました(笑)」

■そういう言葉のアプローチが、生の不思議さに繋がったり、曲世界を拡げてますね。

「そうですね。あと、"心臓"という言葉は、時を感じるものでみんなと同じモノサシを探した時に浮かんだんですよ。誰でも持ち合わせているものですしね。それは、例えば"嬉しい"という言葉だけだと表現し切れない時に、私が世界で一番とんこつラーメンが好きだとして、"何も伝えてないのに好きな人がとんこつラーメンを出してくれた瞬間くらい嬉しいの"って言われたらなんとなくわ

LiSA

LiSA

今日を愛すること、世界を愛することを諦めないでいる



私の音楽が、みんなの中で、今を好きになれるキッカケになれたら

■ライヴを観た時、歌がズバッと心に入ってきたんですね。そこで音楽を通して人と繋がろうとしてる人だなと感じたんです。

「そうですね、私には"音楽を通してみんなと遊ぶ空間を作りたい"という想いがあるんです。特にライヴでは、せっかく一緒に生きてるみんなと共に過ごせる時間だから、同じことを感じる瞬間であれば素敵だし、それを大事にしたいんです」

■人って幸せな時間だけならいいんだけど、気分が落ちてる時もあるし、それこそ、初対面の人に向かう時は躊躇する気持ちがあったりする。それを越えてポジティブなほうへ向かうための力が音楽にはあると思います?

「私自身がみんなと楽しみたいという気持ちで歌を歌っていて。その中には落ち込む時に聴く曲があってもいいと思うし、悲しい時に聴く曲があってもいい。悲しい時は自分ひとりだけがこういう気持ちを抱えてるんじゃないんだな、って……こうして言葉にすると少し軽くなってしまうんですけど、同じ気持ちの誰かがいる、と歌を通して思ってもらえたらいいですよね。あとは、"行くぞ"って歌ったことで、一緒にそういう気持ちになれたり。私はうまく言葉にできない気持ちを音楽で吐き出したりしていて。そんな私が作る音楽や歌詞、空間を通して今を楽しく生きる理由になればいいなと思うんです。そういう、みんなの生活、気持ちに寄り添える歌を歌いたいんですよ」

■それって、届ける先がハッキリ見えているからこそ、ですね。

「そうですね」

■もっと根っこにあるものというか、多くの受け手を意識する前って音楽はどんな存在でした?　例えばデビュー前のバンドをやっていた頃は、お客さんが今より少ないライヴも経験したでしょうし。

「バンドをやっていた頃は、自分が好きなものを貫いてやることが正義だと思っていました。そこにいろんな人が集まってくれたらいいな、って。今振り返れば、自分のためだけに音楽をやっていたんですね。でも、必要としてくれる誰かのために歌を歌って、何かを届けたい、自分の経験が誰かに届けば素敵だな、って思うようになったんです。私は"今日もいい日だ!"という言葉をテーマに毎日を生きているんです。どんな日の中にも楽しいこと救いのあること、好きなものをひとつでも見つけて、それに夢中になれる時間を作ることを徹底しながら日々をここまで繋げてこれたから、今が好きでいられるんですね。そんな私の音楽が、みんなの中で、今を好きになれるキッカケになれたらいいですね」

■素敵な言葉ですね。辛い日にも、意識して探せば、いいことはひとつでもある。

「母からもらった言葉なんです。元々の私は、ポジティブなほうではなくて、自身を責めがちな性格なんですよ。でも自分のことを好きになるために、より今日を好きになるために見つけた答えなんです」

■お母様もいい生き方をされてるんですね。

「はい。母はいつもポジティブで。なんでそんなに元気なんだろうな、と感じていたんです。今日を愛すること、世界を愛することを諦めないでいるんだろうな、と今は思えるんですよ」

■素敵な背中を見てきたから、その言葉がより強く刺さったんでしょうね。歌詞を書くこと、ものを作り出すことは、自分と向き合う時間でもありますね。"今日もいい日だ"という考え方でいると、いい面と向き合うことが増えますか?

「いい面に限らず一つひとつのことを考えるようになりました。自分が今なんで嬉しいのか、悲しいのか。それには相手がいて、何かが起きている。そこまで考えると、気づくことがあるんです。だから、制作を始めたことで、今までの自分は無意識に生きてきたんだな、と感じるんですよ。で、これまでの経験から自分が感じてきたことと改めて向き合ったら、そこからもいろんなことが見えてくるんです」

■流れていく感情や時間は、大量にあって。それらを意識して止めて、向き合う。

「はい。ちょっと立ち止まって向き合うことで、その時の自分にしっかりと答えをあげられる。それを音楽にすることで、悲しい気持ちになっている人の答え合わせになったり、こういう考え方もできるな、とかそれぞれの答えに辿り着くキッカケになれば嬉しいですね」

"時"って過ぎていくもの その一瞬、一瞬を掴んでいきたい

■新曲「Catch the Moment」は、"時"とそこに繋がっている"感情"を、様々な角度から捉えた曲だと感じました。

「今まで周りの人を見ていて羨ましい、と感じたことが沢山あったんですね。それこそ、ずっとデビューをしたいと思ってきたからこそ、叶った時にとてつもなく嬉しかったり。誰にも認めてもらえなかったからこそ、今、





LiSA

Catch the Moment

数々のアニメ主題歌・劇中歌を歌い、
その歌唱力やパワフルなライヴ・パフォーマンスで
シーンを牽引するアーティスト・LiSA。
その実力に加え、ナチュラルでチャーミングなキャラクターも相まって、
アニメファンだけではなく、ロックファンからも愛されている彼女が
ついにB-PASSに初登場！
ニュー・シングル「Catch the Moment」の制作エピソードはもちろん
LiSAにとっての"音楽"やそこから見えてくる生き方に触れる
ロング・インタビューをお届けします。

Text ⇒ **大西智之**
Photo ⇒ **平野タカシ** (MEMENT)
Styling ⇒ **久芳俊夫** (BEAMS)
Hair & Make-Up ⇒ **田端千夏**




LiSA
Catch the Moment



UVERworld表紙巻頭38P特集＋全員サービス企画!

音楽、人間マガジン バックステージ・パス

BACKSTAGE B-PASS

2017 4

付録
両面ポスター
UVERworld
LiSA

バックカバー
&
巻末特集

LiSA
Catch the Moment

シーンを切り拓き突き進むロックアイコン・LiSA、本誌初登場!
ニュー・シングル「Catch the Moment」を軸に彼女の魅力を探る

表紙巻頭
38P特集

UVERworld

史上最高23,000人動員の“男祭り”に密着! 撮り下ろし&ソロ・インタビューも

EXILE THE SECOND
SPYAIR
flumpool
大原櫻子
遊助
w-inds.
OLDCODEX
RIZE
the GazettE
Anly+スキマスイッチ
04 Limited Sazabys
lol
風男塾
蒼井翔太
and more

バックステージ・パス4月号 ２０１７年２月27日発行・発売（毎月27日発行・発売） 第33巻第4号通巻４６７号 昭和61年8月2日第3種郵便物認可
発行人 草野夏矢
編集人 吉崎美也子
シンコーミュージック・エンタテイメント